

第V章 古墳時代中期

第1節 F遺跡中期古墳の概要

本章はF遺跡で検出された古墳と、その出土遺物について述べていくものである。

F遺跡は、第Ⅱ章第2節のなかでも述べられているとおり、丘陵の南端部、遺跡群の中でも上八里町に迫り出す尾根筋上にある。このF遺跡の尾根は高低差をもってT字状に連結し、高く南北方向にのびる尾根をA尾根、低く東西方向にのびる尾根をB尾根と呼んでいる（第9図参照）。B尾根には1~4号墳、A尾根には5~10号墳がある。いずれも円墳であるが、尾根は地滑りによってかなり変形した痩せ尾根となっており、A尾根にある5~9号墳の墳域はかなり想定に近い。とくに、7号墳の2基の主体部は墳丘と矛盾する位置で検出されており、7号墳さらには8号墳の墳域の想定には誤認を含んでいるものと思われる。

主体部は1・2・5・7・10号墳で検出されている。3・4号墳では主体部と思われるものを検出したが、出土遺物がなく、主体部としての認定には自信がない。6・8号墳は検出されず不明。9号墳では墳丘の中央に意味不明の土坑があり、これによって主体部は検出されなかった。主体部の状況などは第2節以降で報告していくが、出土遺物については、鉄製品が1・2・5・7・10号墳で、玉類が2・10号墳で出土している。とくに7号墳で検出された2基の主体部のうち、東側の第1主体部で横矧板鉢留の漆塗りの短甲が出土している点が特筆される。

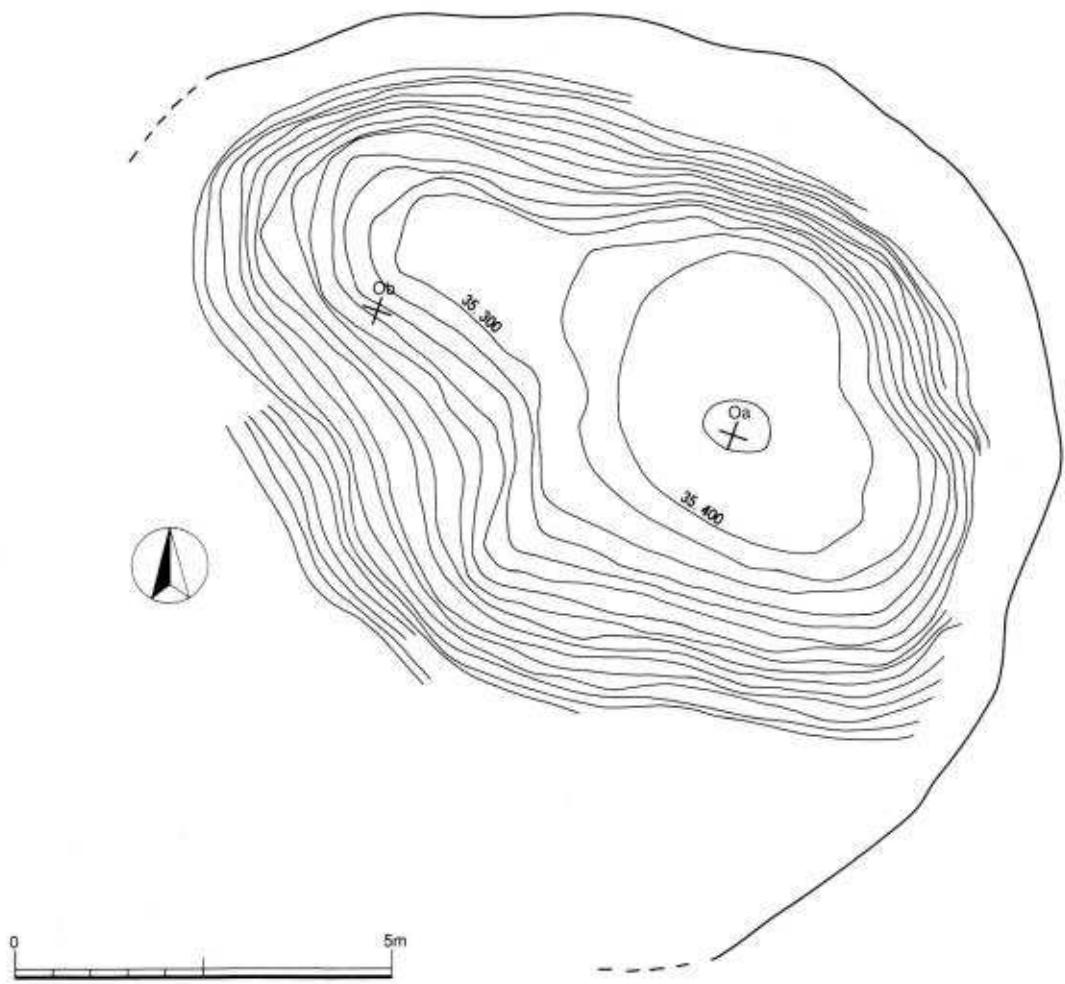
時期については、まず土器から見た場合、1・2・8・9号墳から時期が判断できる土器が出土している。1号墳では、墳丘から西へやや離れた箇所から比較的まとまって土師器が出土しており（第148図参照）、これらは地滑り等により墳丘・周溝から流れ出たものと思われる。これらの土器から判断すれば田嶋明人氏の漆町編年12・13群期ごろ（陶邑田辺編年TK216ないしはTK208～TK23型式期）と考えられる。2号墳については、墳丘北側の周溝内から供獻土器が出土しており、陶邑田辺編年TK47型式期ごろと思われる口径が比較的小さい須恵器坏身（第185図13）も出土しているが、その他の須恵器等を加味すれば、TK208～TK23型式期ごろではないかと考えている。8号墳については、墳丘北側（7号墳側）の裾部より供獻土器が出土しており、土師器碗から判断して漆町編年13群期ごろ（陶邑田辺編年TK208～TK23型式期ごろ）と考えられるが、比較的新しい時期の特徴が見られる須恵器ハソウを加味すれば、TK23型式期ごろで妥当ではないかと考えている。ただし、これらの供獻土器については7号墳に付く可能性もある。9号墳については、墳丘北側の裾部からほぼ完形に接合される須恵器坏身1点が出土しており、この土器から判断すれば、陶邑田辺編年TK216型式期ごろと考えられる。このほか、4号墳では墳丘南側の周溝から土師器壺の口縁部片が出土しているが、詳細な時期は決め難い。また、10号墳については、墳丘西側の周溝から詳細な時期を決め難い土師器高坏片が出土しているが、漆町編年12・13群期ごろではないかと考えている。なお、1号墳の出土地点不明として取り上げた土器片のなかに陶邑田辺編年MT15型式期ごろと考えられる須恵器坏身の破片（第185図7）がある（これについては、1号墳墳丘より北西へやや離れた箇所から出土した土器片と同一個体と思われ、その墳丘から離れた箇所から出土したものと思われる）。

次に、1・2・5・7・10号墳の主体部出土の鉄製品から見た時期についてであるが、本章第4節「鉄製品」を担当していただいた林大智氏によると、F遺跡内出土の鉄製品は概ね陶邑田辺編年TK23型式期前後の時期に位置付けられ、2・7号墳についてはほぼTK23型式期。10号墳はその7号墳に比べてやや新しい時期で、5号墳はさらに新しい時期（TK47型式期）。そして、1号墳はF遺跡のなかでも比較的古い時期（TK208～TK23型式期）に位置付けられるとのことである。

以上、時期について見てきたが、土器から判断すれば、F遺跡の古墳群は概ねTK216型式期～MT15型式期に位置付けられると思われる。ただし、MT15型式期については、単にその時期の土器がF遺跡内から出土したことによるものであり、不安が残る。また、TK216型式期ごろの土器が出土した9号墳をそのTK216型式期ごろに位置付けると、林氏が鉄製品から想定した古墳群の変遷（本章第4節参照）との矛盾が生じる。

周溝の切り合い関係については、1号墳と2号墳との間で見られ、1号墳の周溝が2号墳の周溝に切られている。その他については、明確な切り合い関係は確認されていない。

なお、10号墳の南側、A尾根とB尾根との連結部分からA尾根が南側に張り出す箇所では鉄斧1点が採集さ



第144図 F遺跡1号墳現況コンタ図 (S=1/100)

れており、この箇所にも古墳が存在するものと想定されている。この想定される古墳は調査時に11号墳と名付けられたが、墳丘規模や主体部などは全く不明である。よって、本報告ではこの11号墳の遺構の報告は省略する。

また、本章第2節の遺物出土状況図・ドットマップ図において、遺物・ドットに番号が付されているが、単なる番号は第3節の土器の番号、番号の頭に「鉄」とあるものは第4節の鉄製品の番号を示している。

引用・参考文献

- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店
- 中村 浩 1981 「和泉陶邑窯の研究」 柏書房
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」「漆町遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1987 「V遺構・遺物（古墳時代～平安時代）」「永町ガマノマガリ遺跡」
石川県立埋蔵文化財センター
- 櫻田 誠 1997 「八里向山遺跡」「発掘された北陸の古墳報告会資料集」
まつおか古代フェスティバル実行委員会

第2節 遺構

1号墳（第144図～第149図）



第145図 F遺跡 1号墳平面図 (S=1/100)

A. 立地・墳丘規模等 (第144図～第148図)

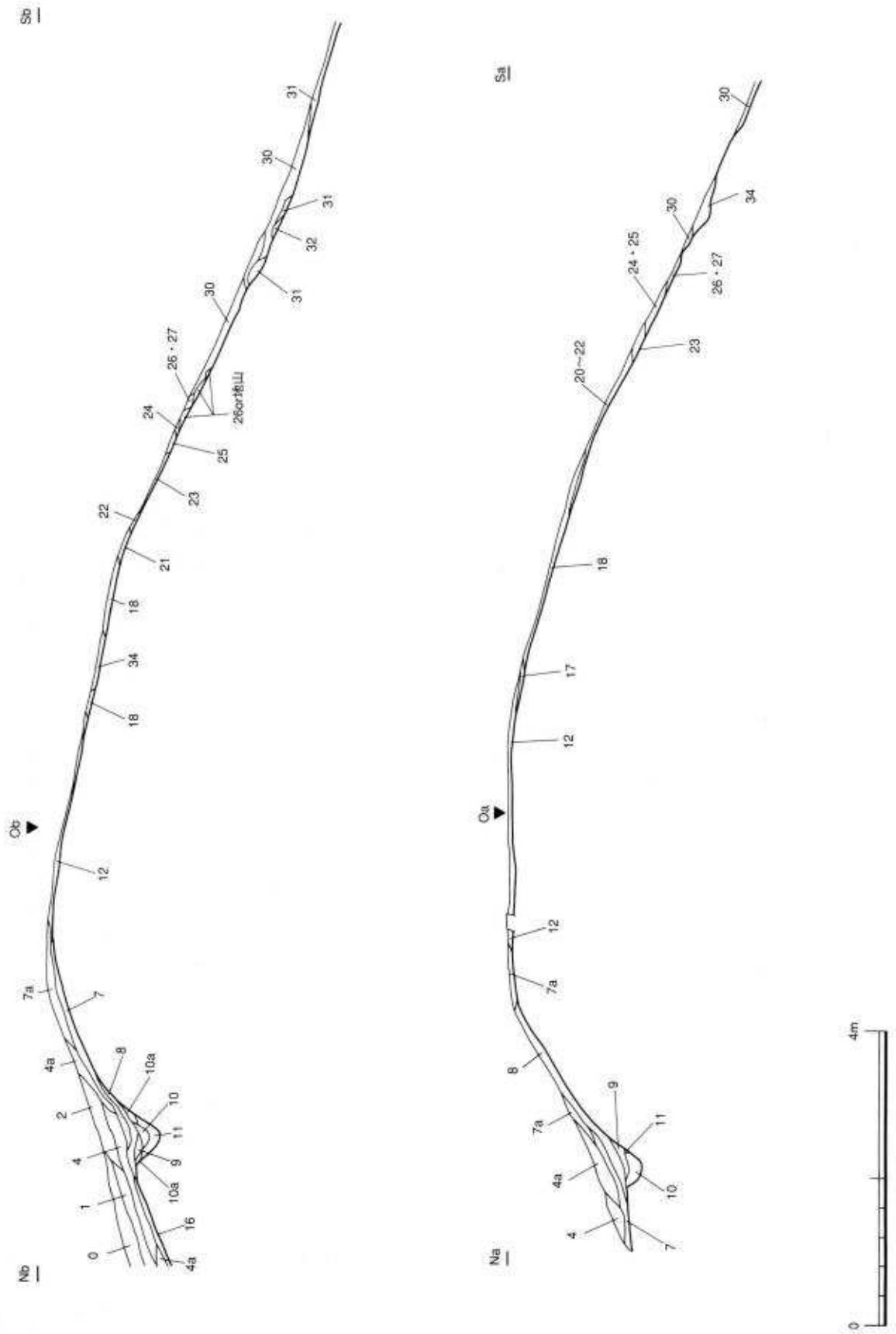
東西方向にのびるB尾根の西端に位置する。

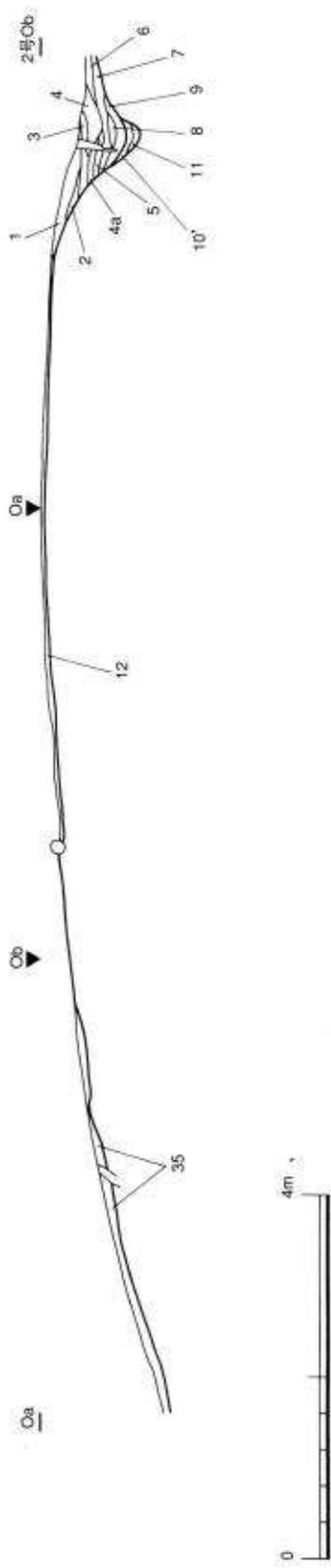
墳丘流出と地滑りによる変形によって、周溝を伴う墳裾の検出は全体の約1/2に留まり、西および南西側では周溝が確認されなかった。よって、墳丘規模については、明確な数値を示すことができないが、周溝内側の立ち上がりからの数値で直径約12～13mの円墳と想定され、F遺跡内では比較的大型の墳丘をもつ。

堆積土層については、第146図および第147図の土層断面図を参照していただきたいが、周溝内で10・10'・11・11'層が堆積しており、0c-2号Ob土層断面の東側（第147図の土層断面図の右側）では、その上に7・8・9層が堆積している。これら7・8・9層は、それぞれ2号墳の3・4・5層に対比し、1号墳の周溝は、2号墳の周溝に切られているものと考えられる。

墳丘・周溝における遺物の出土状況については、第148図にあるように墳丘から西へ若干離れた箇所から土師

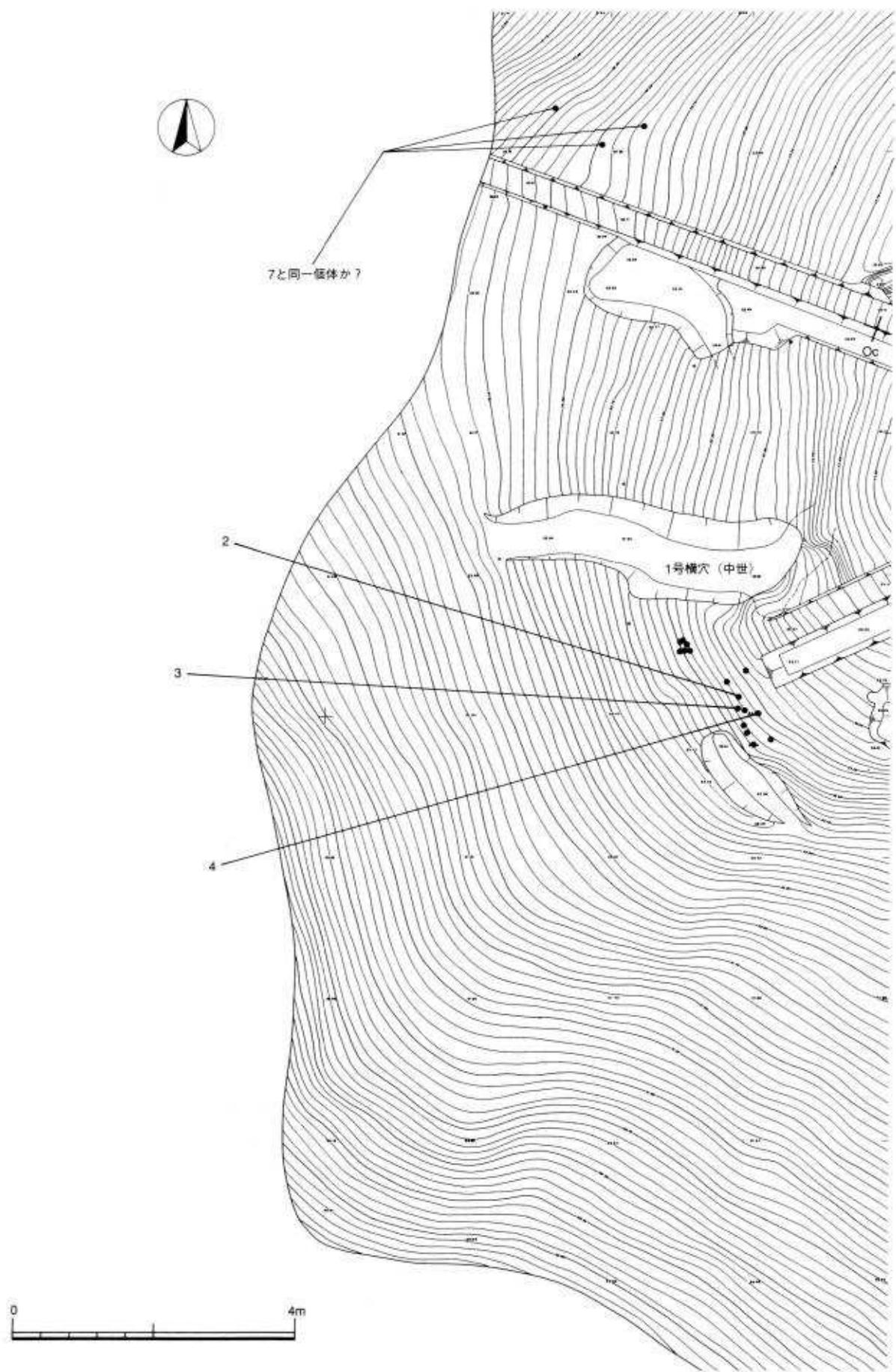
第146図 F遺跡1号墳墳丘土層断面図（その1）（S=1/80）(H=35.500m)



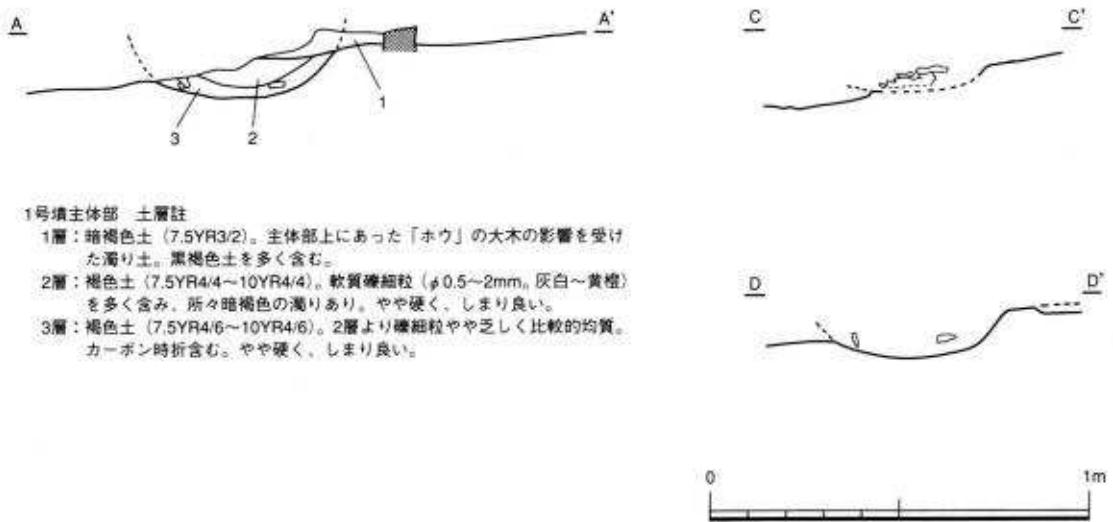
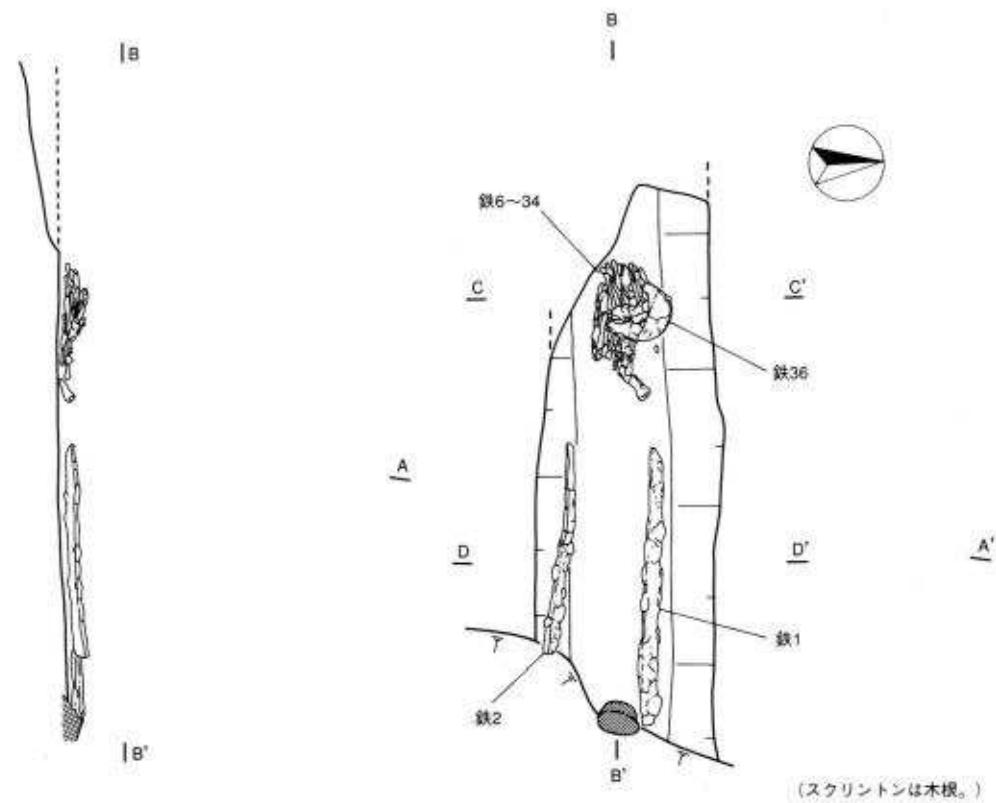


1号堆積丘 土層注

- 0層：褐色土 (10YR4-3～2-4)。表層土。にぶく赤褐色土ブロックをやや多く含み、薄りがある。柔らかくしまり劣る。
- 1層：赤褐色土 (5YR4-4～4-6)。2層より赤褐色地山土を鉛錠に主体とする崩壊土層で薄りは少ない。
- 2層：にぶい赤褐色土 (5YR4-4)。地山（盛土）で崩壊土層で、赤褐色 (2.5YR4-6) 岩質土ブロックを主体とする赤い層。
- No.の斜面下方では、褐色土ブロック混在で崩壊土層で薄りを増す。2号堆との共通部では、堅くしまりが良いが、他の岩質土ブロックの集合体で、堅くしまり劣る。
- 3層：にぶい（黄）褐色土 (10YR4-3～5-4)。黒色土粒をやや多く含む。4層上位の褐色層。やや堅く、しまり良い。
- 4層：黒（褐）色土 (7.5YR2-1～2-2)。4a層はやや淡く灰褐色 (7.5YR4-2)。4b層は4層と連続的連続層。やや柔らかく、しまり劣る。
- 5層：明褐色土 (7.5YR5-8)。4層と黒土をもつ7層の間に折れ込みする赤味のやや温じる昧るい層。堅くしまり良い。
- 6層：灰褐色土 (7.5YR-10YR5-2～4-2)。7a層の連続層でお比できるが、軟質細砂粒をやや多く含む。
- 7層：にぶい褐色土 (7.5YR-10YR5-4)。黒～暗褐色土粒子を少量含みやや堅い。やや堅く、しまり良い。カーボン少層含む。（2号堆の3層対比）7a層は、黒～暗褐色土粒がより多く、灰褐色 (7.5YR5-2～4-2) で、岩質地山土（7層の構成土）を主体としながら、4層との連続性あるにぶい薄り土。赤褐色ブロックもややほじる。比較的堅く、しまり良い。
- 8層：（明）褐色土 (7.5YR5-6～4-6)。7層より黒味弱く、赤味をおびげる。9層との中間的層。やや堅く、しまり良い。（2号堆の4層対比）
- 9層：（明）赤褐色土 (7.5YR-5YR4-8)。7層から漸次赤味を増し。8層より赤味をおびる層。均質でやや堅く、しまり良い。カーボン少層含む。（2号堆の5層対比）
- 10層：にぶい褐色シルト土質 (7.5YR5-3～5-4)。灰褐色をあびてくすむ赤味のやや強いた状態あり。均質で堅く、しまり非常に良い。10a層は、赤褐色粘質土粒を多く含み堅い。
- 10' 層：黃褐色土 (2.5Y5-4)。地山土（明黃褐色～浅黃～淡黃～灰白）の影響を受けた地山土で、画面上を地山より少し含む。
- 11層：灰褐色土 (7.5YR5-6)。灰色～褪灰色シルト土を砂漠またはブロック状にやや多く含む。やや堅く、しまり良い。
- 11' 層：黃褐色砂質土 (2.5Y5-4)。11層対比。黃褐色 (2.5Y5-4) 地山土（明黃褐色～浅黃～淡黃～灰白）の影響を受けた堆積土で、面有隙を地山より少しく含む。
- 12層：にぶい赤褐色土 (5YR4-4～4-6)。赤褐色粘土ブロックや褐色土、黑色土の混在する上面被覆の薄い層。地盤する厚さが薄いため、一括して表層とした。
- 13層：にぶい赤褐色土 (5YR4-4)。赤褐色地山粘土の前段土。



第148図 1号墳墳丘西侧遺物出土ドットマップ図 (S=1/80)

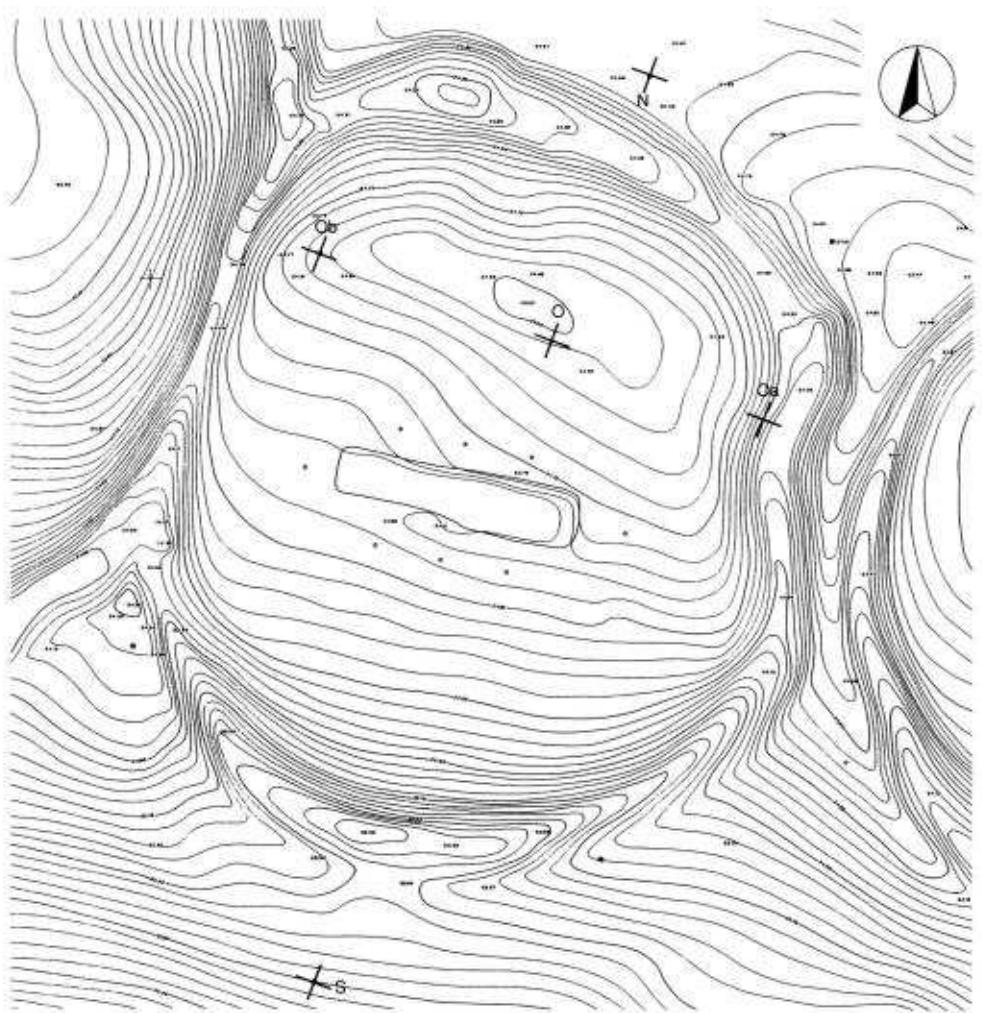
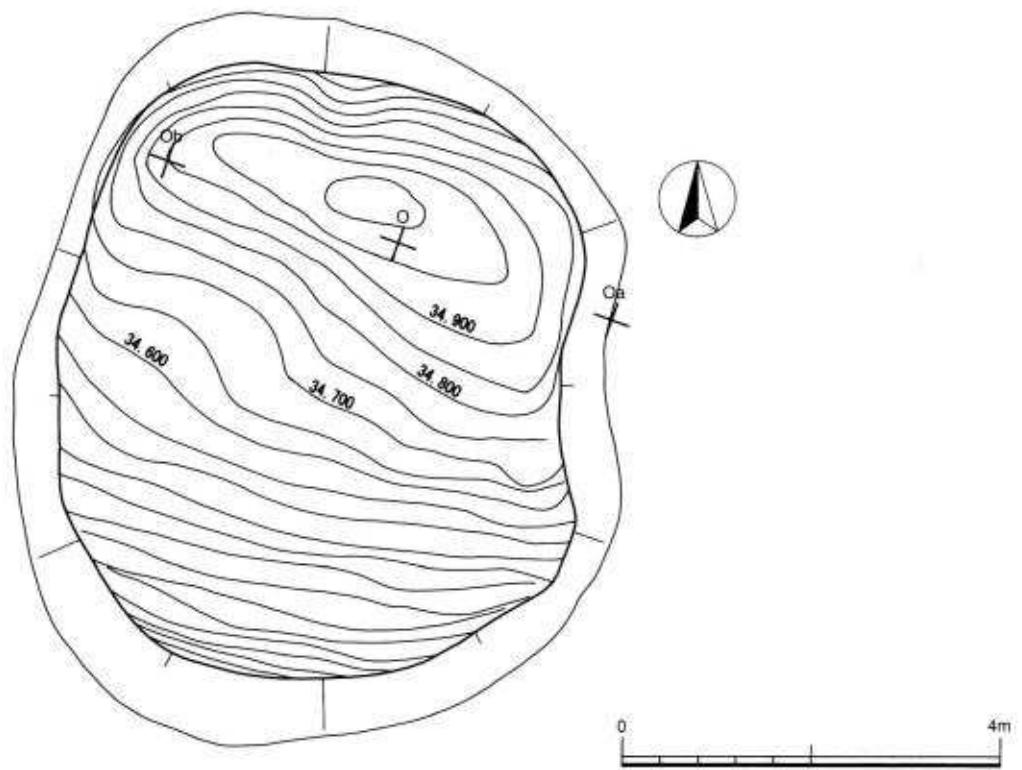


第149図 F遺跡 1号墳主体部平面図・断面図 (S=1/20) (H=35.300m)

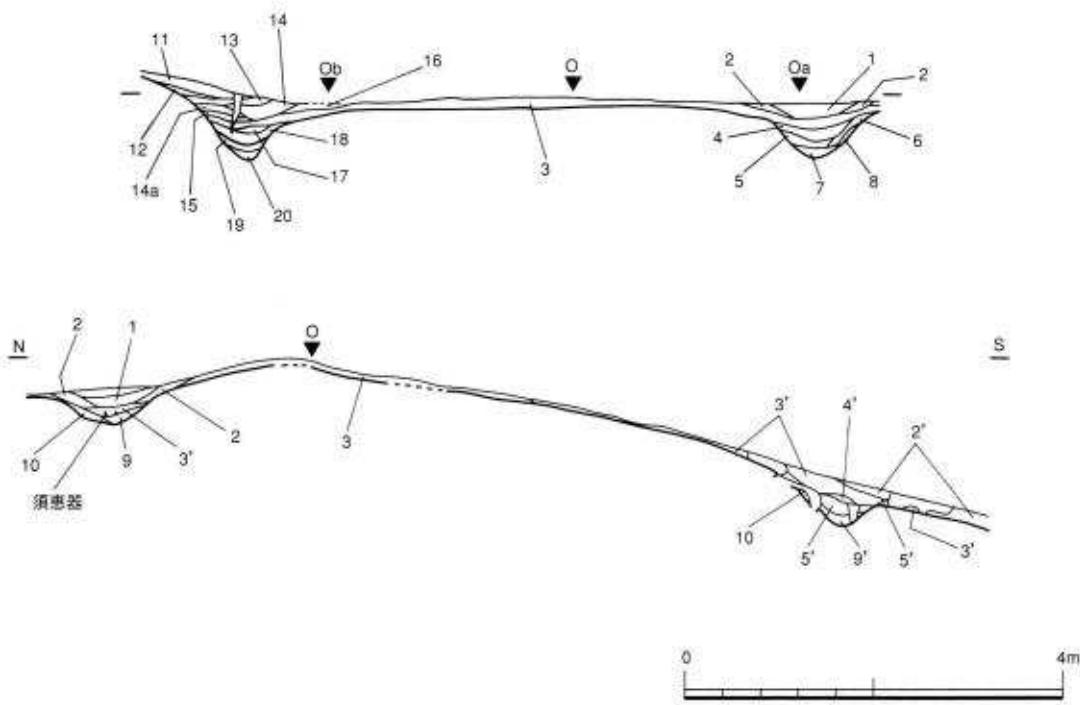
器片が比較的まとまって出土しており、これらは地滑り等により1号墳から流れ出てしまったものと考えられる。これらの土師器のうち図化できたものが第185図の2~4であり、田嶋明人氏の漆町編年12・13群期ごろに位置付けられるものと考えられる。なお、墳丘から北西へ離れた箇所からは、上述の土師器とは時期が異なる須恵器坏身片が出土している(第185図7と同一個体と思われるもので、陶邑田辺編年MT15型式期ごろのもの)。

B. 主体部 (第149図)

想定される墳丘の中央より若干北寄りの位置において主体部1基が検出されている。地滑り等による流出が著



第150図 F遺跡 2号墳現況コンタ図（上段）・平面図（下段）（S=1/80）



1号墳墳丘 土層註

1層：黒褐色土（7.5YR2/2）。やや粘質で極めて堅緻。軟質礫（φ最大2mm）を所々に含む。

2層：（暗）褐色土（7.5YR4/3～3/3）。3層土と1層土の漸移的色調で濃淡あり。1層と同質で堅緻。

2' 層：（にぶい暗）褐色土（10YR4/3～4/4）。クサリ礫（1～5cm）多量混在。カーボンやや多く含む。須恵器含む。やや堅く、しまり良い。

3層：褐色土（10YR4/6）。明褐色土基調に黑色土粒を全体にやや多く含む。カーボンを中量含む。堅く緻密でしまり良い。軟質礫（φ5mm～1cm）を全体に含む。

3' 層：褐色土（10YR4/6）。3層と対比されるが、壤質土で、軟質礫（φ5～20mm）・砂粒を多量に含む。やや柔らかくしまり普通。

4層：明褐色土（7.5YR5/6～10YR5/6～5/4）。黑色土粒を微量含み、5層よりややにぶく暗い。やや粘質堅緻で、カーボン時折含む。軟質礫（φ5mm～1cm）を少量含む。

5層：黄褐色土（10YR5/6）。4層よりやや明るい。堅緻で、カーボン時折含む。礫等はあまり含まない。

6層：にぶい褐色土を主体として、明赤褐色地山粘質土をブロック状（φ3～5cm）で含み、均質ではない。堅緻。

7層：赤褐色土（5YR4/6）。比較的均質で軟質礫（φ1cm）を時折含む。やや柔らかく、しまり良い。

8層：6層と同じ。明赤褐色地山粘質土ブロックがより多く、灰黄色粘土ブロックも混在する。堅くずれ土。やや堅く、しまり良い。

9層：褐色土（10YR4/6）。色調は3'層とほぼ同じであるが、礫が乏しく、小粒（2～5mm）の地山土の影響で、シルト質でやや柔らかく、しまり普通。

10層：明褐色土（7.5YR5/6）。この面の地山土の影響で、軟質クサリ礫（φ1～3cm）を多量に含む。堅くしまり良い。

11層：赤褐色土（5YR4/4～4/6）。12層より赤褐色地山土を純粹に主体とする崩壊土層で濁りは少ない。1号墳墳丘の1層。

12層：にぶい赤褐色土（5YR4/4）。地山（盛土？）崩壊土層で赤褐色（2.5YR4/6）粘質土ブロックを主体とする赤い層。

2号墳との共有部では堅くしまり良い。1号墳丘の2層。

13層：にぶい（黄）褐色土（10YR4/3～5/4）。黒色土粒をやや多く含む。14層上位の薄色層。やや堅く、しまり良い。1号墳丘の3層。

14層：黒（褐）色土（7.5YR2/1～2/2）。14a層はやや淡く灰褐色（7.5YR4/2）に近い層で、4～4aは漸移的連続層。やや柔らかく、しまり劣る。1号墳丘の4～4a層。

15層：明褐色土（7.5YR5/8）。14層と黒味をもつ1号墳墳丘の7層（2号墳の3層に対比）の間に時折嵌入する赤味のやや混じる明るい層。堅くしまり良い。1号墳丘の5層。

16層：灰褐色土（7.5YR・10YR5/2～4/2）。1号墳墳丘の7a層の連続層で対比できるが、軟質粗砂粒をやや多く含む。1号墳墳丘の6層。

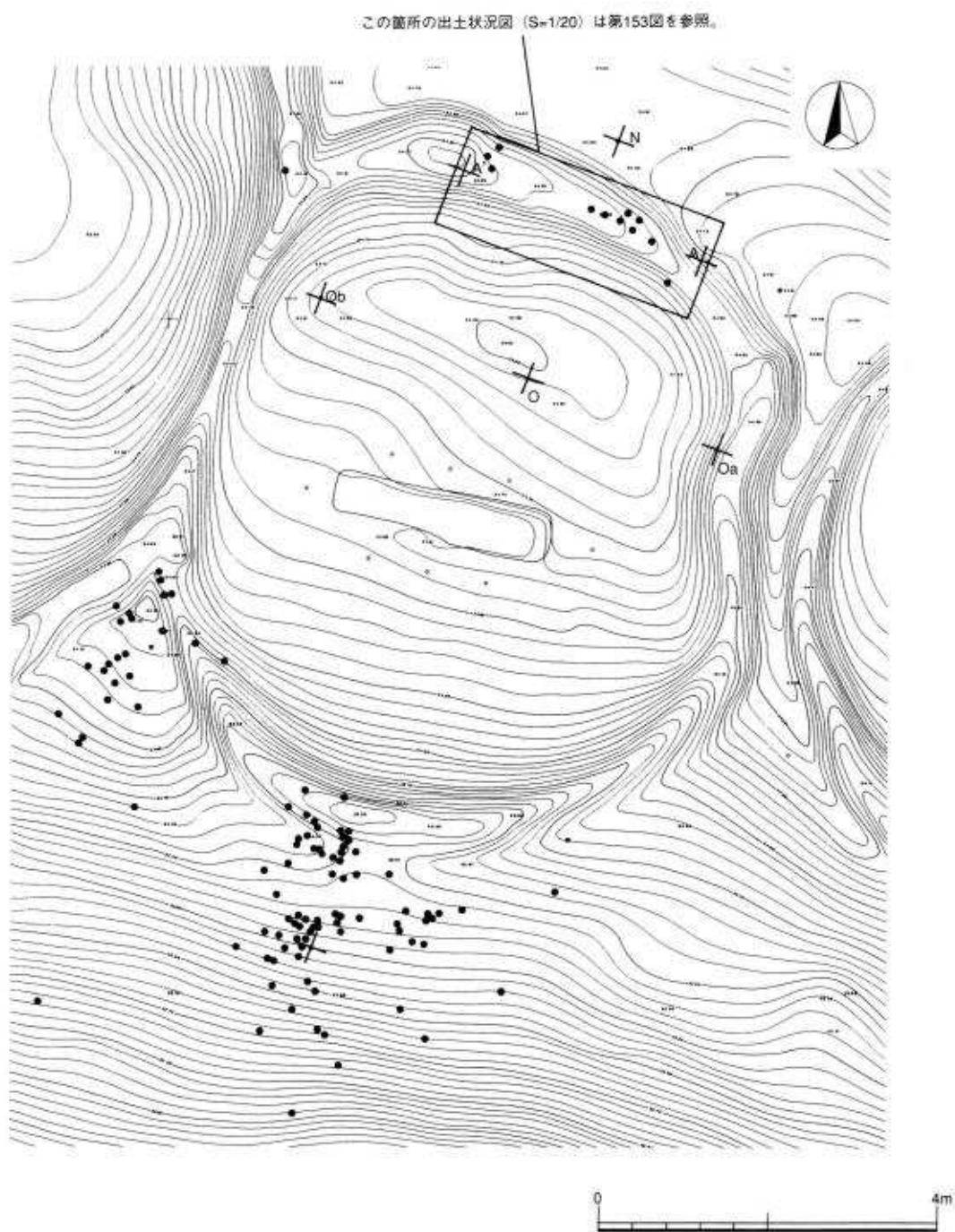
17層：（明）褐色土（7.5YR5/6～4/6）。1号墳墳丘の7層（2号墳の3層に対比）より黒味弱く、赤味をあげる。18層との中間層。やや堅く、しまり良い。1号墳墳丘の8層で、2号墳の4層に対比。

18層：明（赤）褐色土（7.5YR5/6～4/6）。1号墳墳丘の7層（2号墳の3層に対比）から漸次赤味を増し、17層より赤味をあげる層。均質でやや堅く、しまり良い。カーボン少量含む。1号墳墳丘の9層で、2号墳の5層に対比。

19層：黄褐色土（2.5Y5/3）。黄褐色（2.5Y5/4）地山土（明黃褐色・浅黄～淡黄～灰白の小粒質礫（φ2～10mm）を多量に含むシルト質層）の影響を受けた堆積土で、含有礫を地山より少なく含む。1号墳墳丘の10'層で、1号墳の10層に対比。

20層：灰褐色土（7.5YR5/6）。灰白～褐灰色シルト土を粒状またはブロック状にやや多く含む。やや堅く、しまり良い。1号墳墳丘の11層。

第151図 F遺跡 2号墳墳丘土層断面図 (S=1/80) (H=35.100m)



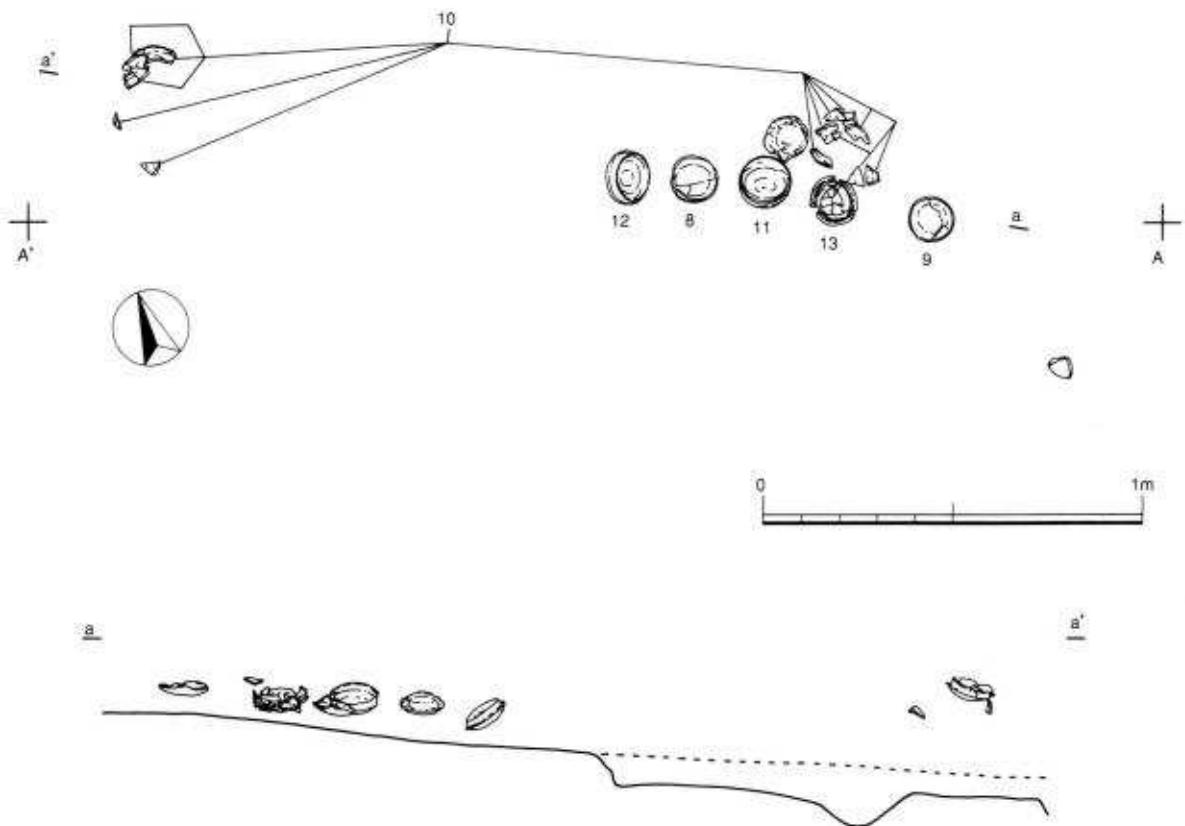
第152図 F遺跡 2号墳墳丘・周溝遺物出土ドットマップ図 (S=1/80)

しく、表土を除去した段階すでに副葬品が露出し、さらに、主体部の東側は、中世の横穴と見られる3号横穴によって破壊されていた。床面から残存する高さは10cm程度で、棺床の一部のみの検出であるが、割竹形木棺と考えられる。主軸はほぼ東西方向を向く。棺内の出土遺物については、長頸鎌約30点、直刀2点、鉄斧（有肩）1点、U字形刃先1点の各鉄製品が出土している。

2号墳（第150図～第155図）

A. 立地・墳丘規模等（第150図～第153図）

東西方向にのびるB尾根上、前述の1号墳の東側に位置し、墳丘西側では1号墳と周溝を共有する。墳丘規



第153図 F遺跡2号墳墳丘北側周溝内遺物出土状況図 (S=1/20) (H=34.700m)

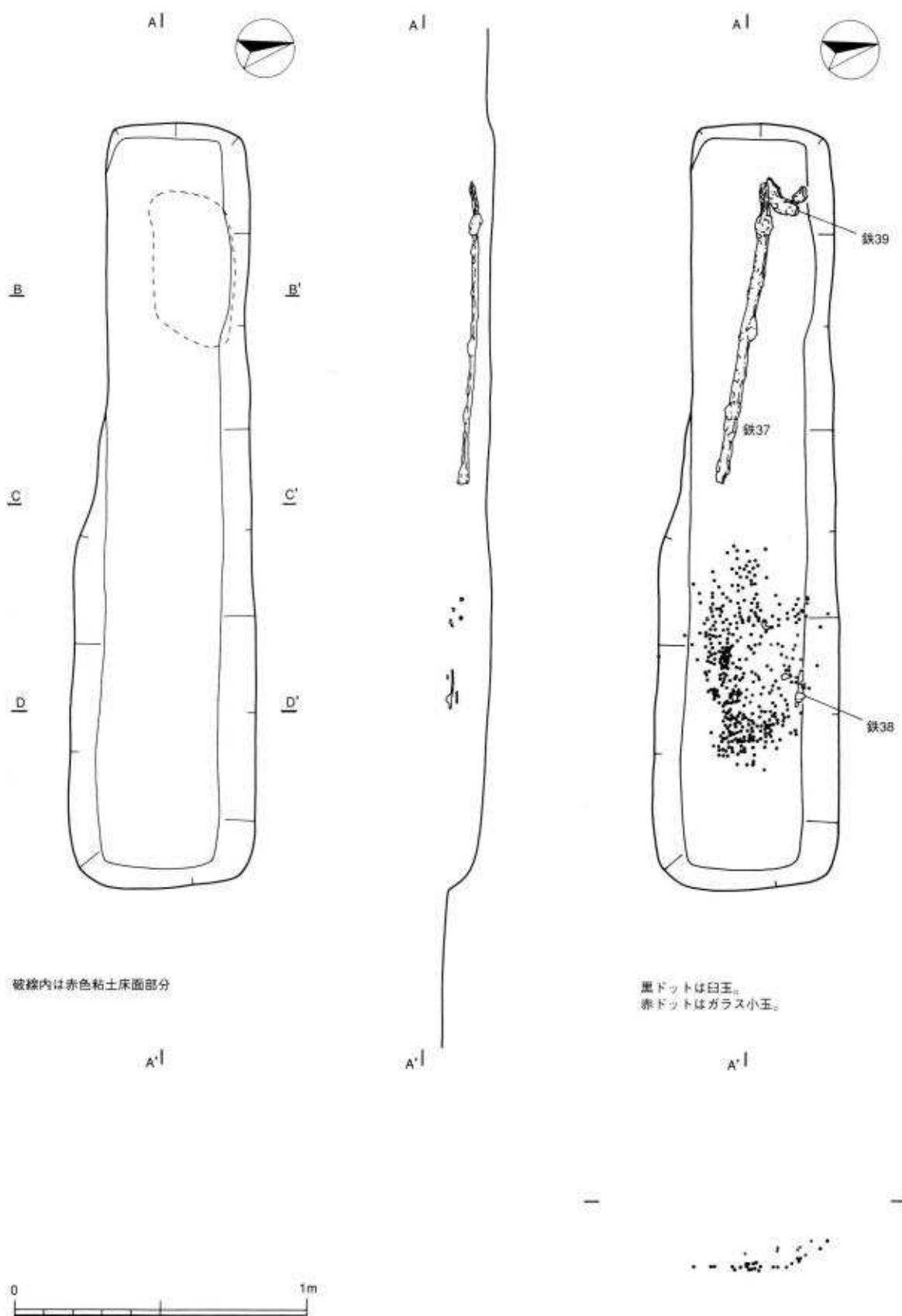
模については、周溝内側の立ち上がりからの数値で、長軸約7m、短軸約6mの橢円形状の平面を呈するが、地滑りの影響も考えられる。

墳丘および周溝における遺物の出土状況については、第152図の遺物出土ドットマップ図のとおりであるが、墳丘北側と南～南西側の周溝で土器の出土が見られる。南～南西側の周溝の出土土器については、そのほとんどすべてが須恵器甕の破片であり、周溝外の南側にあるものは、地滑りにより周溝から流れ出たものと考えられる。一方、墳丘北側の周溝内の一画では、供献土器が並べられたように出土した。第153図に出土状況図があるが、須恵器坏蓋2点、須恵器坏身2点、土師器碗3点が出土した。須恵器坏蓋11、須恵器坏身12は完形の状態で出土。須恵器坏蓋10、須恵器坏身13は割れた状態で出土しているが、完形に接合される。とくに須恵器坏蓋10については、その概ね半分が、供献土器が出土した周溝内一画の東側で、残りのほぼ半分が西側で出土しており（第153図参照）、東側については、その10の破片の上に大型碟が1個乗っていた。何らかの意図があったのではないかと思わせる興味深い出土状況である。なお、第151図にあるN-S土層断面の北側周溝部分において、須恵器坏身12が、3'層の下底面、9層の直上面から出土していることが確認された。これらの供献土器のうち土師器碗1点については図化できなかったのであるが、その他のものは第185図(8～13)に掲載してある。須恵器坏身13は陶邑田辺編年TK47型式期ごろと思われるような口径が比較的小さいものであるが、他の須恵器等を加味すれば、これら供献土器は概ねTK208～TK23型式期ごろのものではないかと考えている。

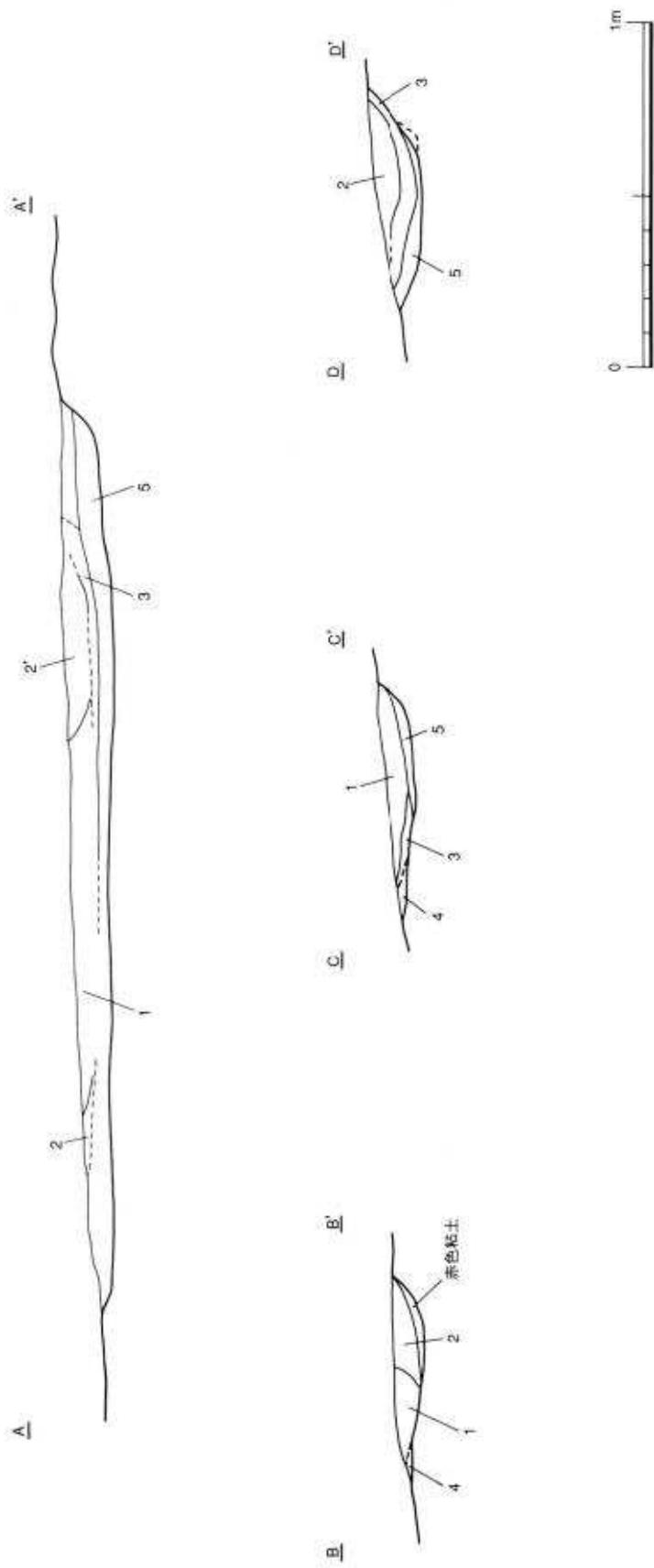
B. 主体部（第154図・第155図）

2号墳墳丘のはば中央で主体部1基が検出されている。確認規模は、幅が約0.6m、長さが約2.6mで、主軸は北から西へ約78°振る。地滑り等による流出が著しく、表土除去の段階で玉類が散乱し、結局、棺床部分のみを検出したものと思われ、床面から残存する高さは、最も深いところでも15cm程度である。

棺形態については、割竹形か箱形か判然としない。覆土が薄いため、全体的にしまりが良く、堅さの違いによる床面や立ち上がりの把握は難しかった。最も残りの良いD-D'ライン（第154図平面図および第155図土層



第154図 F遺跡 2号墳主体部平面図・遺物出土状況図 (S=1/20) (H=34.800m)



2号墳主体部 土層注
 1層：褐色～にぶい赤褐色土 (SYRH43・44～7.5YR4/6)。乳白・黄白色軟質礫片・礫粒子多量含有、更円礫を時折含有。
 ケたぐ、しまり良い。カーボン (<φ1～3mm) を比較的多く含む。
 2層：赤褐色土 (2.5YR4/6)。砂礫の含率はほとんどなく、比較的均質。灰褐色土ブロック (<φ1～2cm) を時折含む。
 やややわらかく、しまり良い。非常に赤味が強く、円礫を少量化す。
 3層：にぶい（赤）褐色土。1層土にややにぶい赤褐色土ブロック・粒子を多く含み、赤味ある。
 4層：赤褐色土 (<φ1～5cm) 混入地山土。部分的に見られる地山土で、B-B'～C-C' ラインの西側壁間に分布。
 5層：明褐色土 (7.5YR5/6)。やや3層土の混入あり。（玉の出土が上部で見られる。）

第155図 F遺跡 2号墳主体部土層断面図 (S=1/20) (H=34.800m)

断面図参照）についても、北側（D'側）の立ち上がりを箱形様にしたが（第155図D-D'土層断面図の破線）、土層断面から見れば、割竹形のラインを見ることができる。しかし、その他の北側の立ち上がりは、箱形様の在り方を示す。ただし、南側は削平により判然としないが、立ち上がりの傾斜が緩やかで、全体的には割竹形の可能性も強いと見られる。また、覆土の硬化が見られるため、実際の棺床と掘り方のどちらを検出したのかは、明確に言えない。

なお、当初捉えた床面は第155図土層断面図にある3層の中途付近で、東側に高い棺床であったが、玉の分布が下がるに従い、その3層の赤味ある土を除去し、やや白っぽいシルト質地山土面を床として捉えることとなつた。ただし、この床面は玉の分布域を中心とした東半部であり、西側では明確に検出していない。西側の床面については赤色粘土面（第154図平面図の破線範囲にある赤色粘土面）を床面として東側の床面とつなげている。

主体部からの出土遺物については、直刀1点、刀子1点、U字形刃先1点の各鉄製品、勾玉1点、丸玉3点、ガラス小玉17点、白玉約1,550点の各玉類を検出した。鉄器の出土状況については、東側の赤色粘土床面部を除いて、西へ行くに従い床面から浮いてしまう状況にある。刀子も床面からかなり浮くが、反面、玉の検出については、完掘下底面近くまで、少量ではあるが、認めることができる。

3号墳（第156図～第158図）

A. 立地・墳丘規模等（第156図・第157図）

東西方向にのびるB尾根上、2号墳の東側に位置。墳丘の東側では4号墳と周溝を共有する。墳丘規模については、周溝内側の立ち上がりからの数値で、南北方向で約8m、東西方向で約7.5mを測り、直径約8mの円が、4号墳と接するところで凹んだような平面を呈する。

墳丘および周溝の土層堆積については第157図に示したとおりである。東側で4号墳と周溝を共有するが、第157図の2号Oa-4号Wの土層断面、N-4号Bの土層断面において、3号墳周溝と4号墳周溝との切り合い関係は見られなかった。

また、墳丘・周溝からの出土遺物はなかった。

B. 主体部（第158図）

墳丘のはば中央、若干東寄りの位置で主体部ではないかと思われるものを検出した。第158図に示したもので、長さ約1.95m、幅約0.7mを測る。床面から残存する高さは35cmほどで、逆台形状の断面を呈する。主軸は北から東へ約15°振る。出土遺物はなく、主体部としての認定には自信がない。

4号墳（第159図～第162図）

A. 立地・墳丘規模等（第159図～第161図）

B尾根上に並ぶ4基の古墳の東端に位置。西側は3号墳と周溝を共有する。墳丘規模については、周溝内側の立ち上がりからの数値で、南北方向約8m、東西方向約6.5mを測り、南北方向を長軸、東西方向を短軸とする楕円形状の平面を呈する。

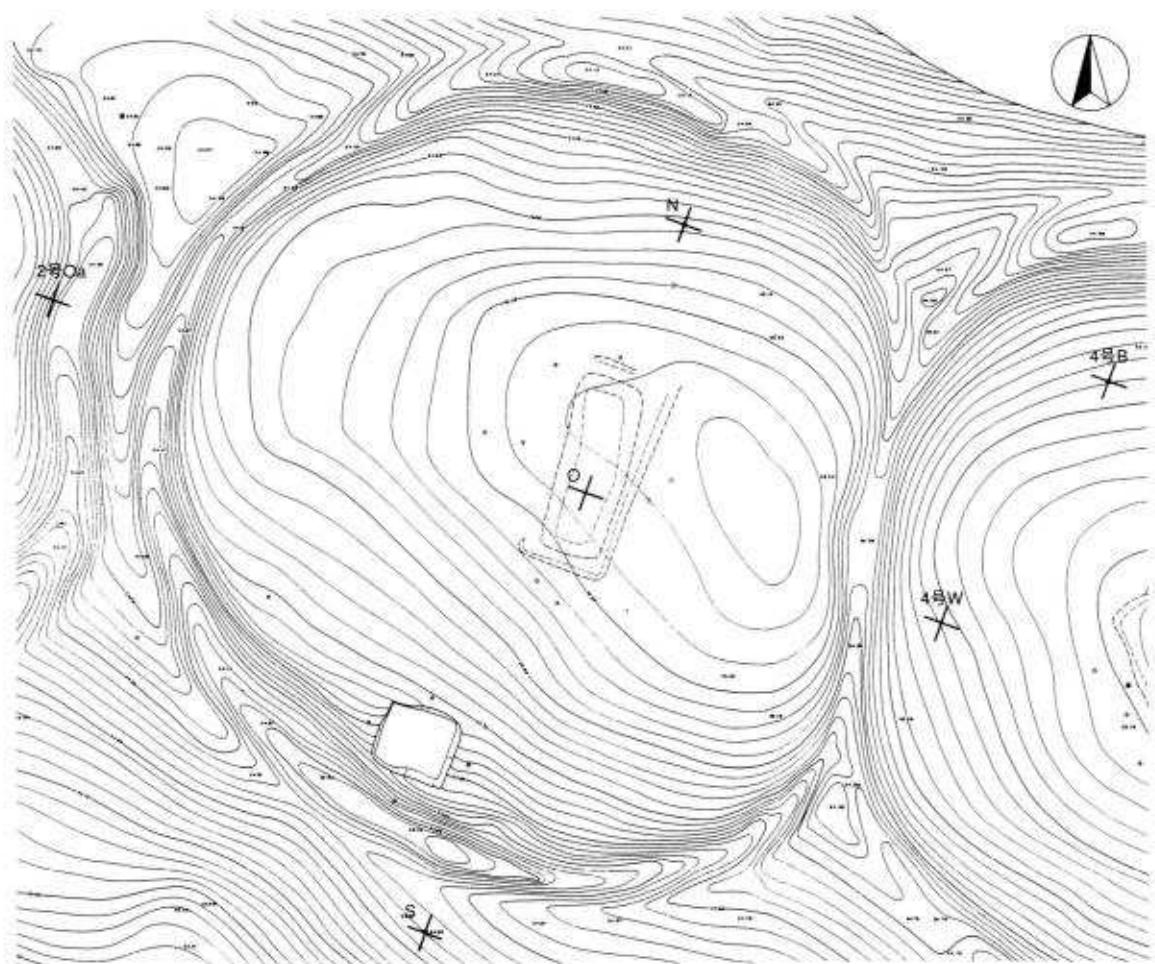
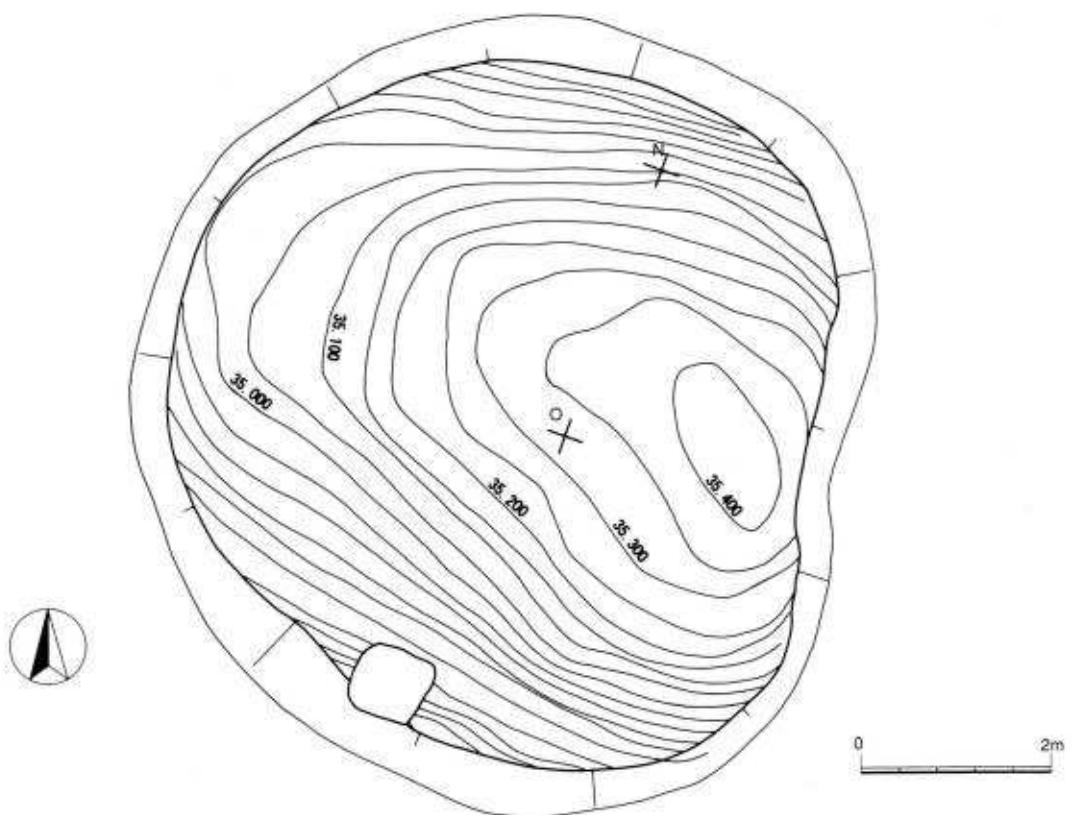
墳丘・周溝の土層堆積については第160図に示したとおりである。墳丘西側で3号墳と周溝を共有するが、3号墳のところでも述べたとおり、3号墳周溝と4号墳周溝との明確な切り合い関係は確認されなかった。

墳丘および周溝における遺物の出土状況については、第161図に掲載してある遺物出土ドットマップ図を参照していただきたい。墳丘北側の周溝で比較的の遺物がまとまっているが、これらは器種不明の土師器片で、復元・図化等はできないものばかりである。墳丘南側の周溝では土師器甕の口縁部片が出土している。この土師器甕の口縁部片は第187図(17)に掲載してあるが、詳細な時期は判断し難い。

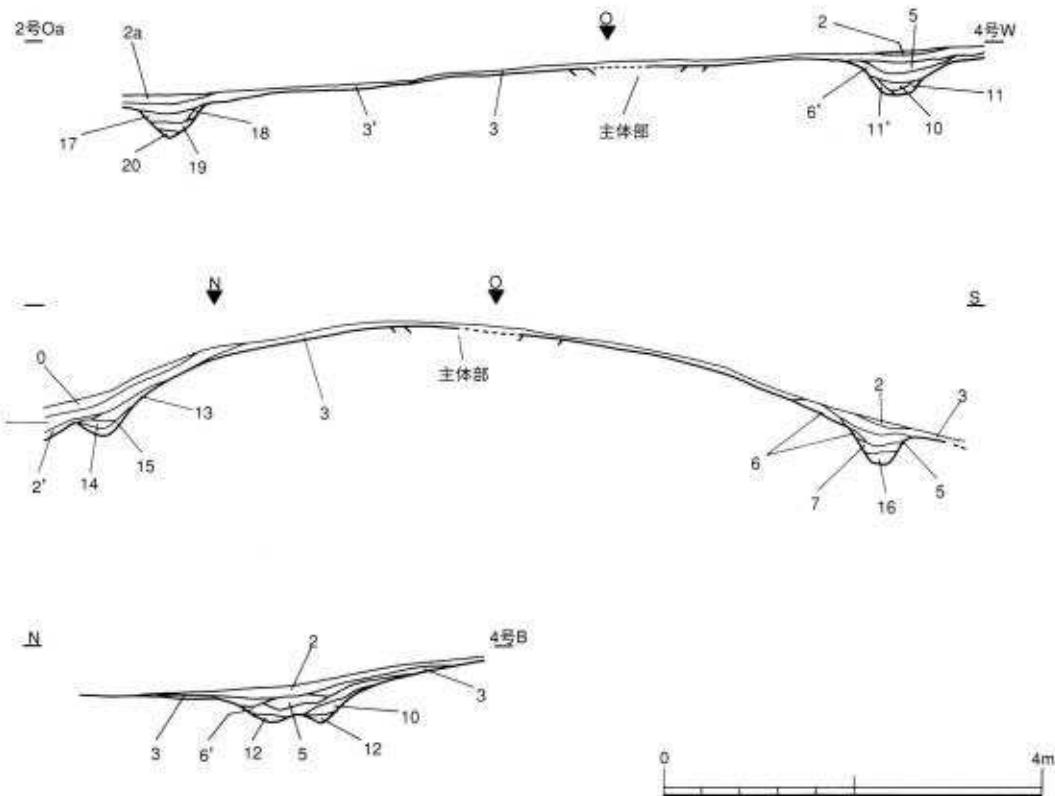
B. 主体部（第162図）

墳丘のはば中央部で主体部と思われるものが検出されている。第162図に示したもので、長さ約2.35m、幅約0.8mを測る。なお、1段目の掘り込みラインはあまり信憑性はない。床面から残存する高さは30～35cmほどあり、主軸については北から西へ約7°振る。しかし、3号墳の主体部と同様、出土遺物がなく、主体部としての認定には自信がない。

なお、この主体部と思われるものが位置する箇所の地山は、明褐色（10YR7/6・6/6・6/8）の濃淡あるやや砂



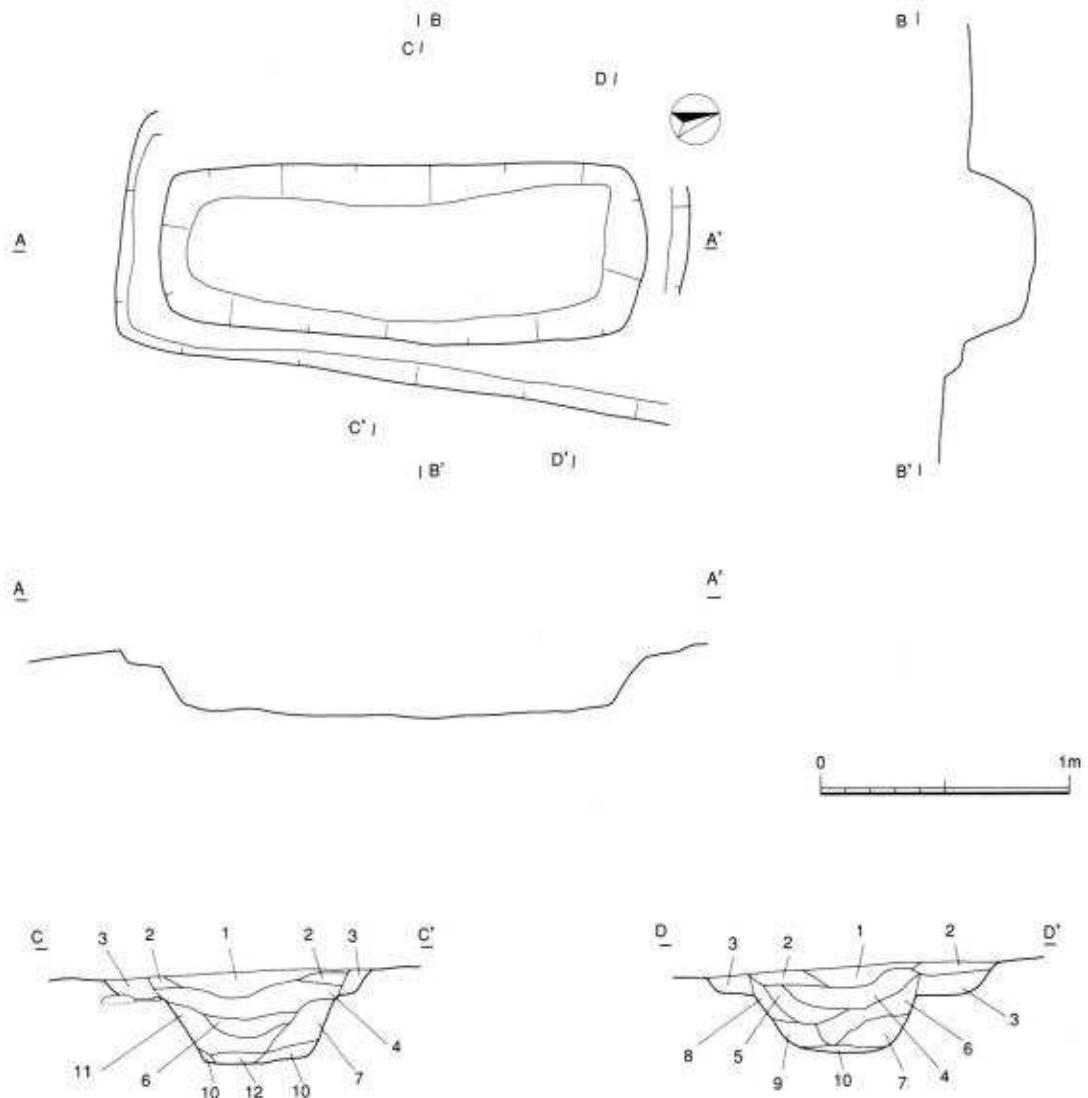
第156図 F遺跡 3号墳現況コンタ図（上段）・平面図（下段）（S=1/80）



3号墳塙丘 土層註 (※土層番号は4号墳と通番。)

- 0層：灰黄褐色土 (10YR4/2)。にぶい色調。とてもやわらかく、しまり劣る表土層。やや粗砂質。黒味はやや強く。1層より暗い。
- 1層：にぶい黄褐色土 (10YR5/4~5/3~4/3)。全体にくすんで淡い。やややわらかく、しまり普通。
- 2層：灰黄褐色～黒褐色土 (10YR4/2~3/2)。黒色土粒の多寡により濃淡あり。周溝プラン確認key層。やわらかく、しまり劣る。2' 層はシルト～弱砂質度を増す。
- 2a層：黒褐色～暗褐色土 (10YR3/2~3/4)。2層より粘質土で、極めて堅く、しまり良い。
- 3層：褐色土 (10YR4/4)。やや赤味の強い明褐色土 (7.5YR4/6) と砂質黒褐色土粒とがほぼ同等に混在。軟質クサリ礫、硬円礫が多量混入。堅くしまり良い。
- 3' 層：褐色土 (10YR4/4)。礫をほとんど含まない粘質土で、極めて堅くしまり良い。カーボン少量含む。
- 5層：(黄)褐色土 (10YR5/6~4/6)。赤味やや強い。全体に黒褐色土粒をほぼ均等にやや多く含む。やわらかく、しまり劣る。炭化物 ($\phi 2\sim 5mm$) をやや含む。
- 6層：明褐色土 (7.5YR5/6)。軟質クサリ礫 (大型礫含む) をやや多く含む。比較的堅くしまり良い。炭化物時折含む。
- 6' 層：黄褐色土 (10YR5/6)。6層対比。砂質強く、やややわらかく、しまり普通。
- 7層：明褐色土 (7.5YR5/6)。6層よりやや赤味を増し、明るい。6層と同様に軟質クサリ礫を多く含む。また、その隙間に粗砂多く含む。堅くしまり良い。
- 10層：黄褐色砂質土 (10YR5/6)。7層対比。6' 層より明るく、軟質礫 ($\phi 5mm$) を多く含む。やや堅くしまり良い。
- 11層：黄褐色砂質土 (10YR5/8)。4号墳の8層対比。10層より明るく、疊の混入はやや少ない。やや堅くしまり良い。
- 11' 層：黄褐色砂質土 (10YR5/8)。4号墳の8層対比。11層より黄色味強く、砂質の度合い強い。堅くしまり良い。
- 12層：褐色土 (10YR4/6)。4号墳の8層対比。混入物少なく均質。やや堅くしまり良い。
- 13層：にぶい黄褐色土 (10YR4/3~5/4)。5層対比。全体にややシルト質。黒褐色土粒を比較的多く含む。カーボンを時折混入。やや堅くしまり普通。
- 14層：にぶい黄褐色土 (10YR5/3)。6層対比。全体にややシルト質。13層より黒褐色土粒が乏しく、白味が増す。堅くしまり良い。カーボンを時折混入。
- 15層：黄褐色土 (10YR5/6)。7層と4号墳の8層対比。シルト質。ややにふくすむ。カーボンを時折混入。やや堅くしまり良い。
- 16層：にぶい褐色土 (7.5YR5/4)。4号墳の8層対比。明褐色土を主体ににぶい黄褐色土 (10YR6/3) 粒が疊密をもつて混入。クサリ礫 ($\phi 5mm$) を多く含む。やわらかくしまり劣る。
- 17層：褐色土 (10YR4/6)。5層対比。3' 層より赤味おびて明るく淡い。礫等を含まず。やや粘質土で極めて堅く、しまり良い。
- 18層：にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。17層より暗く、3' 層に似る。黒褐色土粒をやや多く含む。堅くしまり良い。
- 19層：にぶい黄褐色土 (10YR5/4~5/6)。6層対比。17層より暗いが、赤味乏しく黄色味あり、淡くすむ。にぶい黄褐色地山土粒を多く含む。極めて堅くしまり良い。カーボン少量含む。粘質～ややシルト質に近くなる。
- 20層：にぶい黄褐色土 (10YR4/2~4/3)。壁面地山土の影響で、白色細粒を多く含有し、シルト質褐色土をやや多く含む。

第157図 F遺跡 3号墳塙丘・周溝土層断面図 (S=1/80) (H=35.600m)

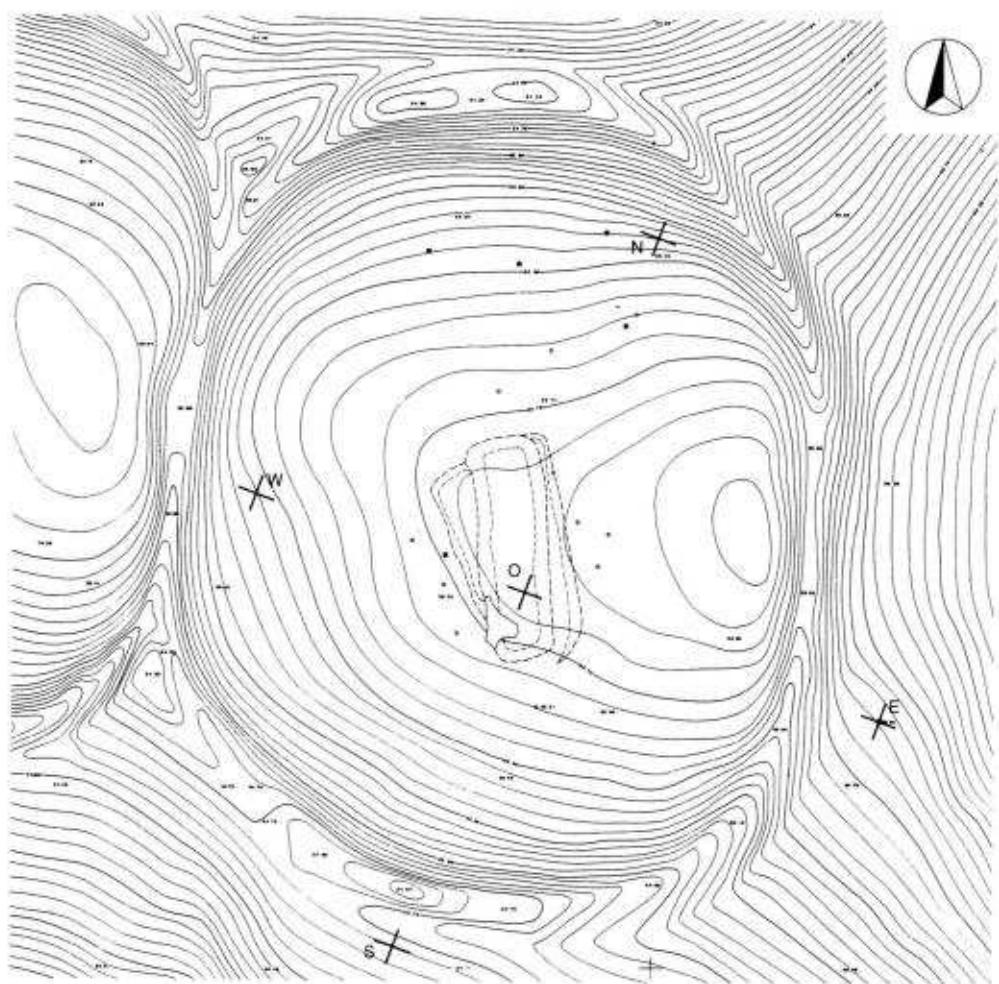
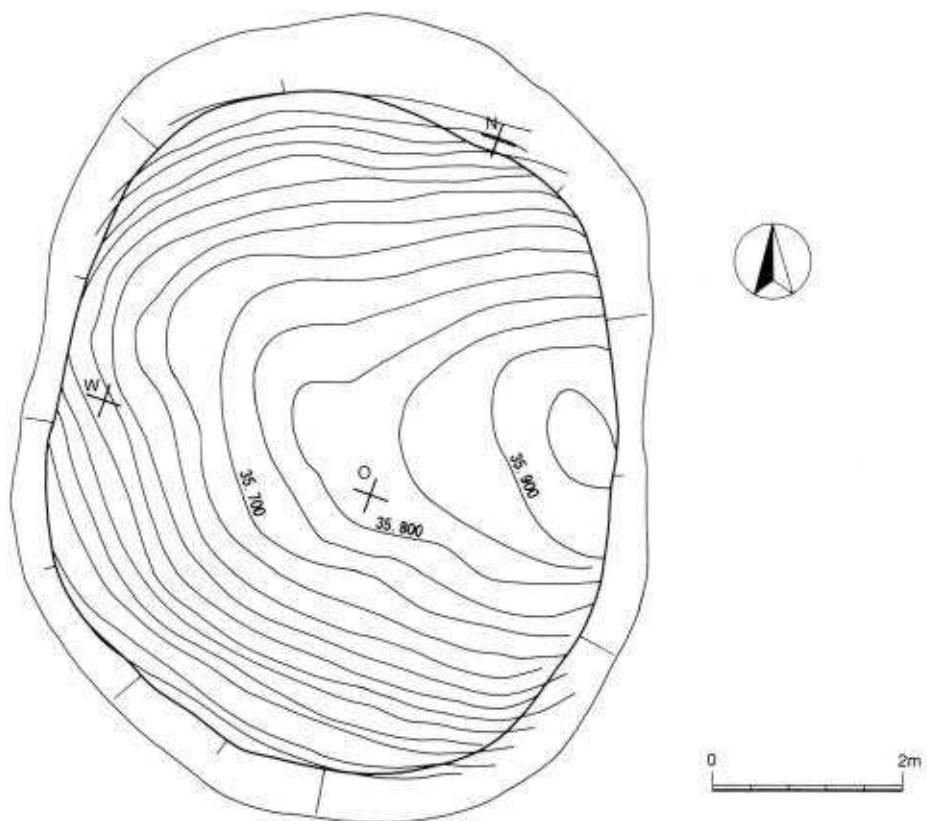


3号墳主体部 土層註

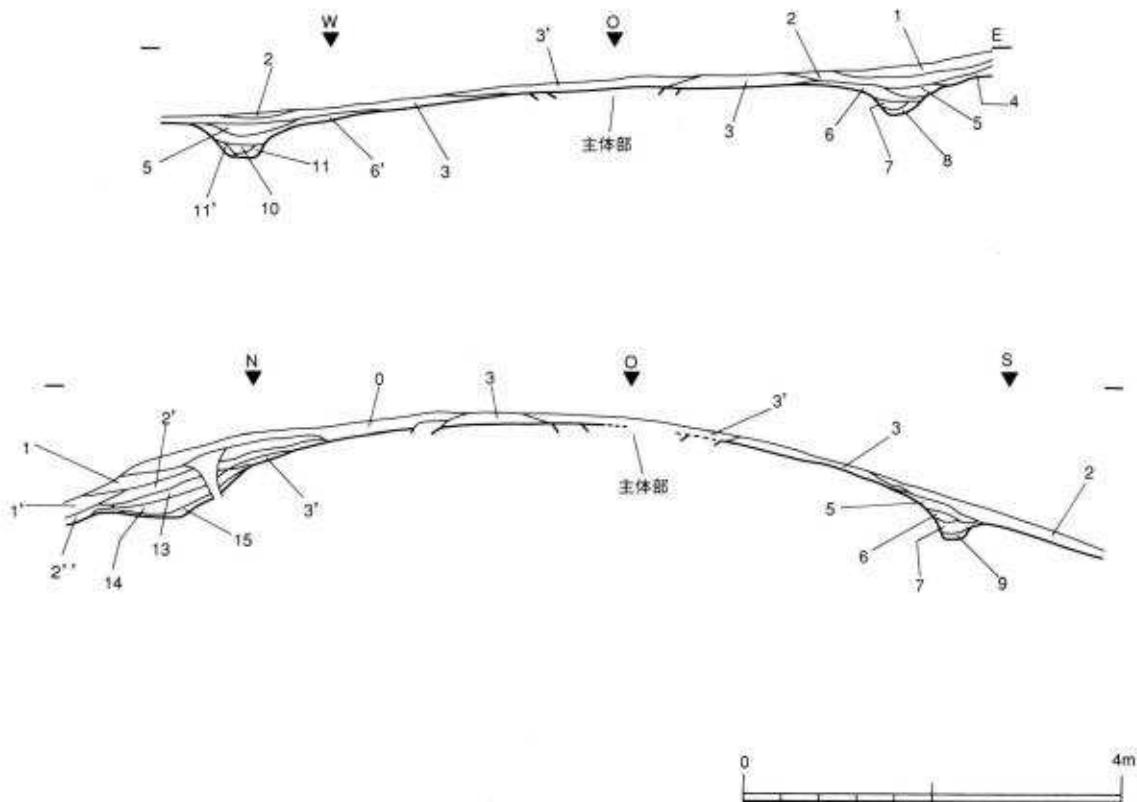
1層：褐色土（7.5YR4/4）。明赤褐～明褐色土を基調に黒～暗褐色土粒を全体にやや多く含み、暗い。軟質鱗片を多量含有。やや堅くしまり良い。
 2層：褐色土（7.5YR4/4）。1層より黒～暗褐色土粒やや少なく、明るい。
 3層：（にぶい）明褐色土（7.5YR5/6）。全体にややにふく、緻密でしまり良く堅い。ややシルト質っぽい微細白色粒を多く含む。
 4層：明褐色土（7.5YR5/6）。暗褐色土粒を全体に少量含み、やや濁りあり。カーボンやや多く含む。軟質鱗片（#2~3cm）をやや多く含む。やや堅くしまり良い。
 5層：明褐色～黄褐色土（7.5YR~10YR5/6）。比較的均質なシルト質で、シャリッとしており、礫片少なし。やや堅くしまり良い。
 6層：明褐色土（7.5YR5/6）。4層よりやわらかく、ややしまり劣る。硬軟のムラがあり、また濃淡もある。4層より大陸は乏しい。
 7層：明（赤）褐色土（5YR4/8~7.5YR5/8）。赤味が比較的強い。4層と同じく軟質鱗片を多量含有。比較的堅く、しまり良い。

8層：（にぶい）黄褐色土（10YR5/4~5/6）。5層とはほぼ同じシルト質であるが、赤味やや暗くにぶい。しまり良く緻密。
 9層：にぶい黄褐色土（10YR5/3~5/4）。全体として2.5Y色調に近く、シルト～砂質のシャリッとした土。礫は時折含むが乏しい。やややわらかく、しまり良い。
 10層：にぶい褐色～黄褐色土（7.5YR5/4~10YR5/4）。赤味の強弱らしく2.5Yに近い色のムラあり。非常にやわらかく、しまり劣る。シルト質土の含有多い。
 11層：褐色土（7.5YR4/3~4/6）。黒ずんだ濁りの強い、非常に軟弱な層。しまり劣り。礫中量含む。
 12層：にぶい赤褐色土（5YR4/4~7.5YR4/6）。赤味が強く、カーボンやや多く含む。非常に軟質で、しまりない。

第158図 F遺跡 3号墳主体部平面図・土層断面図 (S=1/30) (H=35.400m)



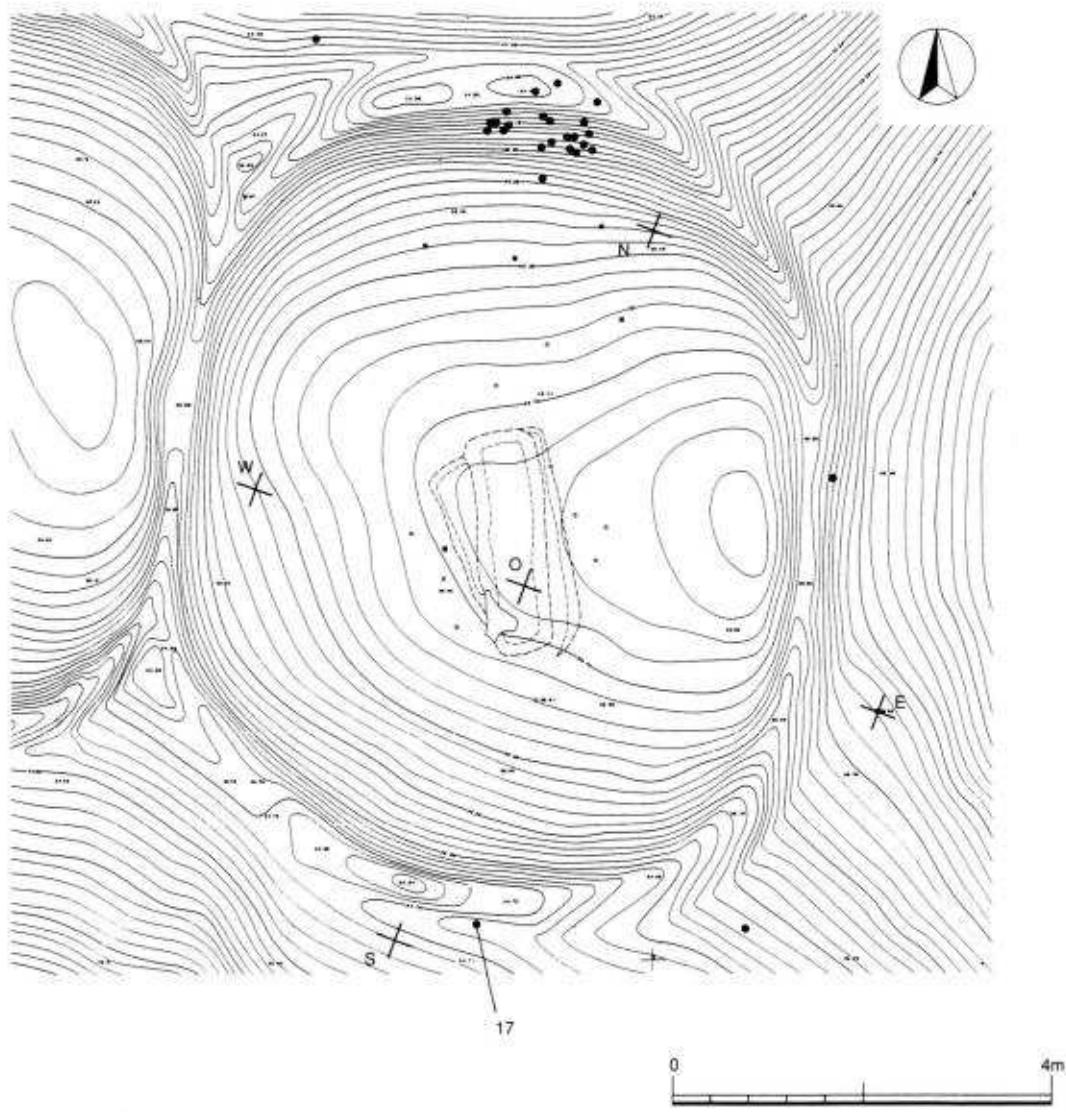
第159図 F遺跡 4号墳現況コンタ図（上段）・平面図（下段）（S=1/80）



4号墳墳丘 土層註 (※土層番号は3号墳と通番。)

- 0層：灰青褐色土 (10YR4/2)。にぶい色調。とてもやわらかく。しまり劣る表土層。やや粗砂質。黒味はやや強く、1層より暗い。
- 1層：にぶい黄褐色土 (10YR5/4～5/3～4/3)。全体にくすんで淡い。やややわらかく。しまり普通。
- 1' 層：暗褐色土 (10YR3/3)。炭化物やや多く含む。やわらかく。しまり悪い。
- 2層：灰黃褐色～黒褐色土 (10YR4/2～3/2)。黒色土粒の多寡により濃淡あり。周溝プラン確認key層。やわらかく。しまり劣る。2' 層はシルト～弱砂質土を増す。
- 2'' 層：灰黃褐色 (10YR4/2)。2' 層下方の斜面下層土層。
- 3層：褐色土 (10YR4/4)。やや赤味の強い明褐色土 (7.5YR4/6) と砂質黒褐色土粒とがほぼ同等に混在。軟質クサリ礫、硬質円礫が多量混入。堅くしまり良い。
- 3' 層：褐色土 (10YR4/4)。礫をほとんど含まない粘質土で、極めて堅くしまり良い。カーボン少量含む。
- 4層：褐色土 (10YR4/4)。3層よりくすみ。赤味弱い。比較的均質で、やわらかく。しまり普通。
- 5層：(黄)褐色土 (10YR5/6～4/6)。赤味やや強め。全体に黒褐色土粒をほぼ均等にやや多く含む。やわらかく。しまり劣る。炭化物 (ϕ 2～5mm) をやや含む。
- 6層：明褐色土 (7.5YR5/6)。軟質クサリ礫 (大型礫含む) をやや多く含む。比較的堅くしまり良い。炭化物時折含む。
- 6' 層：黄褐色土 (10YR5/6)。6層対比。砂質強く、やややわらかく。しまり普通。
- 7層：明褐色土 (7.5YR5/6)。6層よりやや赤味を増し、明るい。6層と同様に軟質クサリ礫を多く含む。また、その礫の崩壊粗砂多く含む。堅くしまり良い。
- 8層：明褐色土 (7.5YR5/8)。7層よりやや赤味を増し、明るい。地山とほぼ同質で、やや潤りをもつ。クサリ礫および崩壊粗砂多く含む。
- 9層：灰褐色粘質土 (7.5YR4/2)。灰褐色をベースににぶい赤褐色粘質土が斑状ブロックで混在。堅くしまりあり。(粘質は下底地山層の影響。)
- 10層：黄褐色砂質土 (10YR5/6)。7層対比。6' 層より明るく、軟質礫 (ϕ 5mm) を多く含む。やや堅くしまり良い。
- 11層：黄褐色砂質土 (10YR5/8)。8層対比。10層より明るく、礫の混入はやや少ない。やや堅くしまり良い。
- 11' 層：黄褐色砂質土 (10YR5/8)。8層対比。11層より黄色味強く。砂質の度合い強い。堅くしまり良い。
- 13層：にぶい黄褐色土 (10YR4/3～5/4)。5層対比。全体にややシルト質。黒褐色土粒を比較的多く含む。カーボンを時折混入。やや堅くしまり普通。
- 14層：にぶい黄褐色土 (10YR5/3)。6層対比。全体にややシルト質。13層より黒褐色土粒が乏しく、白味が増す。堅くしまり良い。カーボンを時折混入。
- 15層：黄褐色土 (10YR5/6)。7層と8層対比。シルト質。ややにぶくすむ。カーボンを時折混入。やや堅くしまり良い。

第160図 F遺跡 4号墳墳丘土層断面図 (S=1/80) (H=36.200m)



第161図 F遺跡 4号墳墳丘・周溝遺物出土ドットマップ図 (S=1/80)

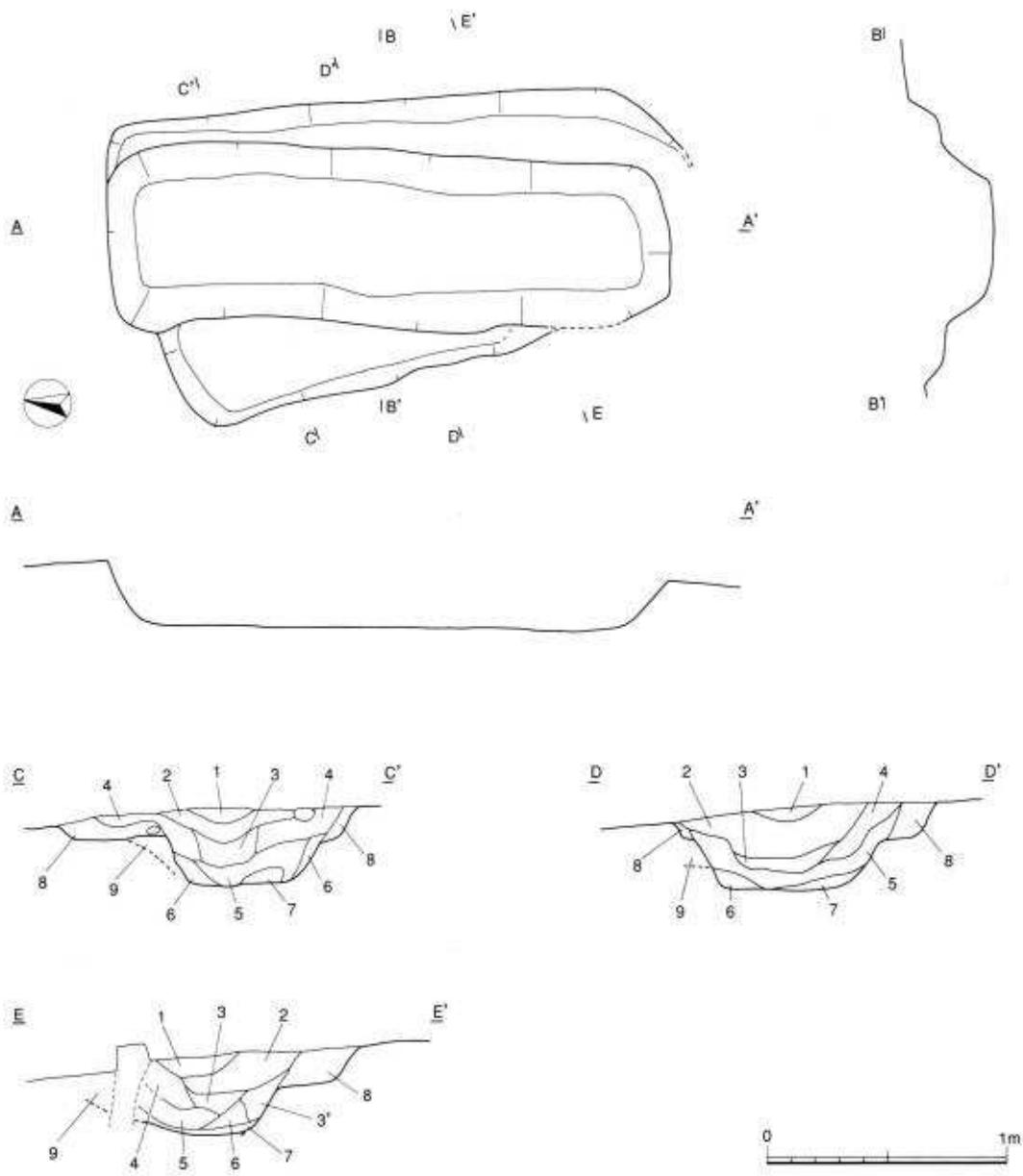
質の土（クサリ礫の崩壊土）を主体として大型クサリ礫を大量に含む層であるが、この主体部の床面は、一時的にその主体である弱い砂質土とにぶい黄～明黄褐（2.5Y6/4・6/6程度）の砂質土が面的にあり、礫などが見られない面となっている。そして、この砂質土面をわずかに除去したりすると、大型礫が現れる状況であった。床面砂質土は均一に敷いてあるわけではないが、一応、棺床安定のため、礫含有地山掘り込み面を均一にするための整地面として把握される。

また、この主体部と思われるものの土層断面図を第162図に掲載してあるが、その図のなかの9層（掘り方埋土ではないかと考えられる層）は巨大軟質礫を地山と同等に含み、9層と地山との明瞭な掘り方様の境界は見出し難かった。また、この主体部と思われるものの断ち割りの結果においても、断面で掘り方のラインを矛盾なく把握することは困難であった。墳丘として利用したマウンド面が礫層面であったため、当時の抜根・整地の過程で、複雑な土移動が伴っていた可能性も考えられる（「あまり信憑性がない」と前述した1段目の掘り込みは、この複雑な土移動の影響によるものか）。

5号墳（第163図～第165図）

A. 立地・墳丘規模等（第163図・第164図）

南北方向にのびるA尾根の北端に位置。墳丘規模については、周溝内側の立ち上がりからの数値で径約6mの



4号墳主体部 土層註

1層：灰褐色土（7.5YR4/2）。腐植土層。礫等は乏しい。やや堅く、しまり普通。
 2層：褐色土（10YR4/4）。暗褐色土～灰褐色土を主体に明黃褐色土（10YR6/8）を全体に多く含む。また、その母体の明黃褐色風化軟質礫（Φ0.5～5mm）や白色・淡黃橙色・赤色軟質礫（1～5mm）をやや多く含む。やや堅く、しまり良い。
 3層：（にぶい黄）褐色土（10YR4/3）。2層土に似るが、明黃褐色土粒は乏しく、全体に黒味を増す。また、2層や4層とは硬度が異なり、やわらかく、しまり劣るため、比較的明瞭に区分できる。殆の路泥没跡か。3'はさらに軟質しまりない。木痕か。
 4層：黄褐色土。にぶい黄褐色部との溝りあり。淡黃橙～白～明黃褐色軟質礫（Φ1～3mm）・同礫（最大3cmか5cm）を多く含む。比較的堅く、しまり良い。カーボン少量含む。

5層：褐色土（10YR4/6）。明黃褐色土粒を全体に多量含有。2層と異なり黒褐色土を含まないが、4層に対し黒味はある。クサリ礫（Φ1cm～2cm）をやや多く含む。3層と同じく、やわらやく、しまり劣る。カーボン時折含む。

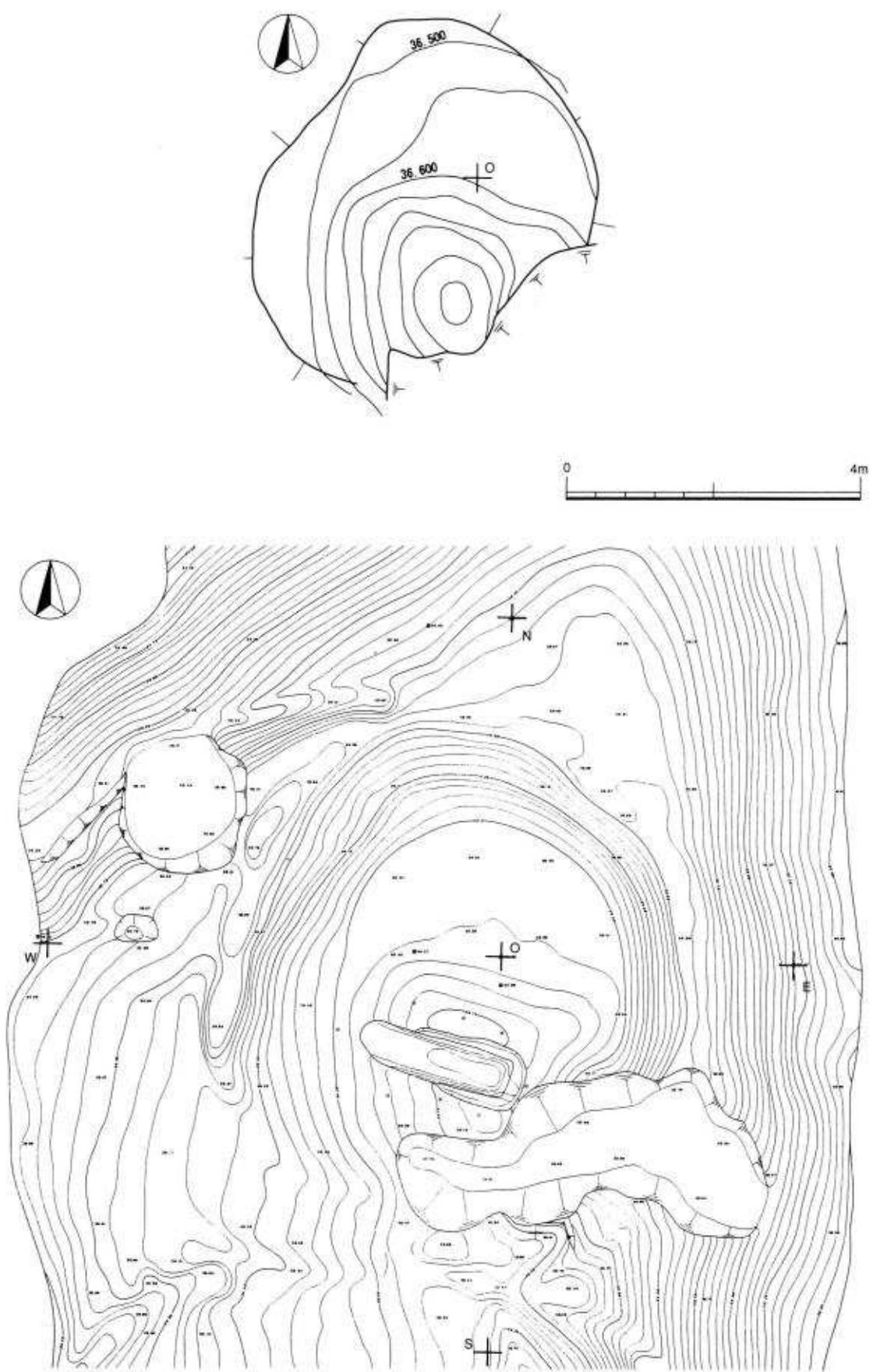
6層：にぶい褐色土（7.5YR5/4）。4層に似るが、赤味がやや強い。やや堅く、しまり良い。カーボン少量含む。

7層：にぶい黄橙～明黃褐色土（10YR6/4～6/6）。床面砂質土に近く弱砂質土で、ややシャリッとしている。クサリ礫（Φ1～3cm）を時折含む。やややわらかく、しまり普通。

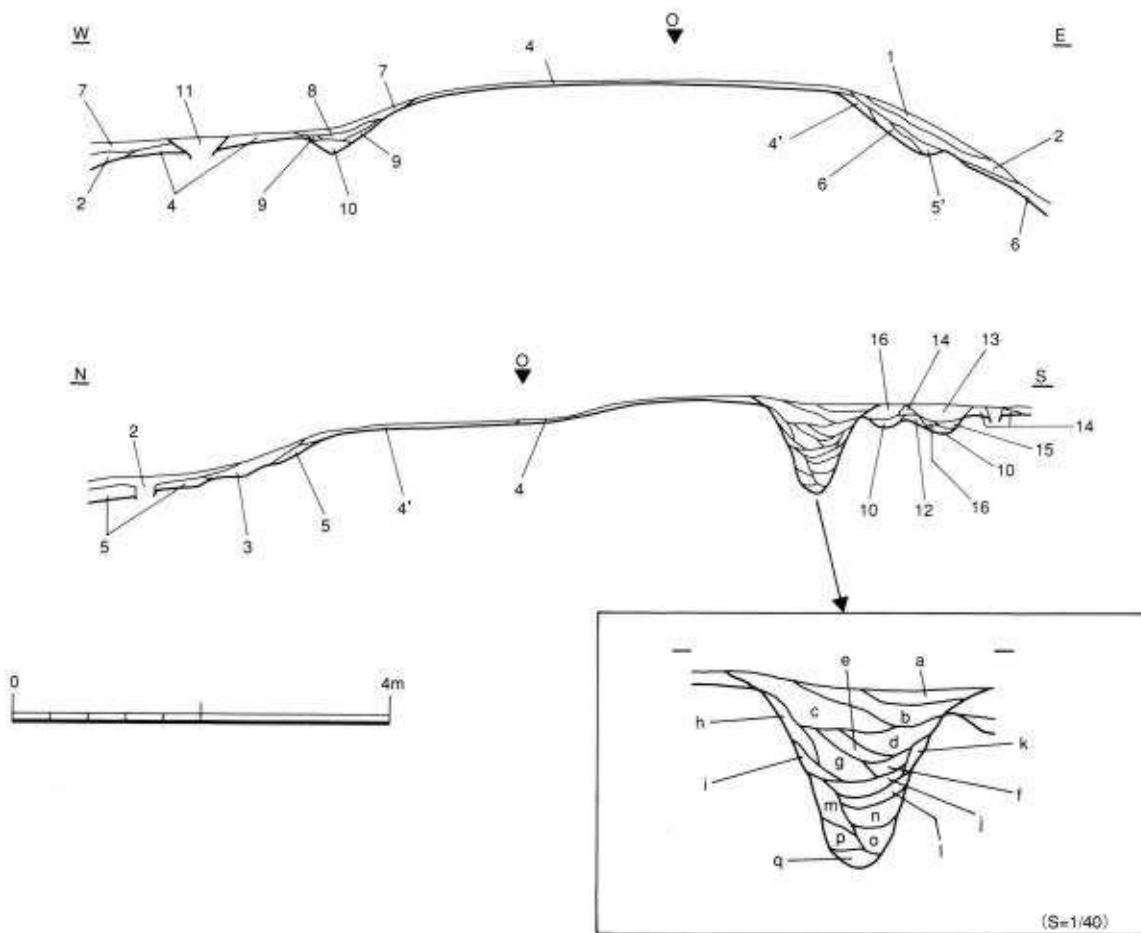
8層：明褐色土（7.5YR5/6）。軟質礫片をやや多く含む。暗褐色土粒を全体に少量含む。カーボン少量含有。堅くしまり良い。

9層：明褐色土（7.5YR5/6）。8層より暗褐色土が少ないとほぼ同じ。カーボンを時折含む。堀り方埋土か。

第162図 F遺跡 4号墳主体部平面図・土層断面図 (S=1/30) (H=35.900m)



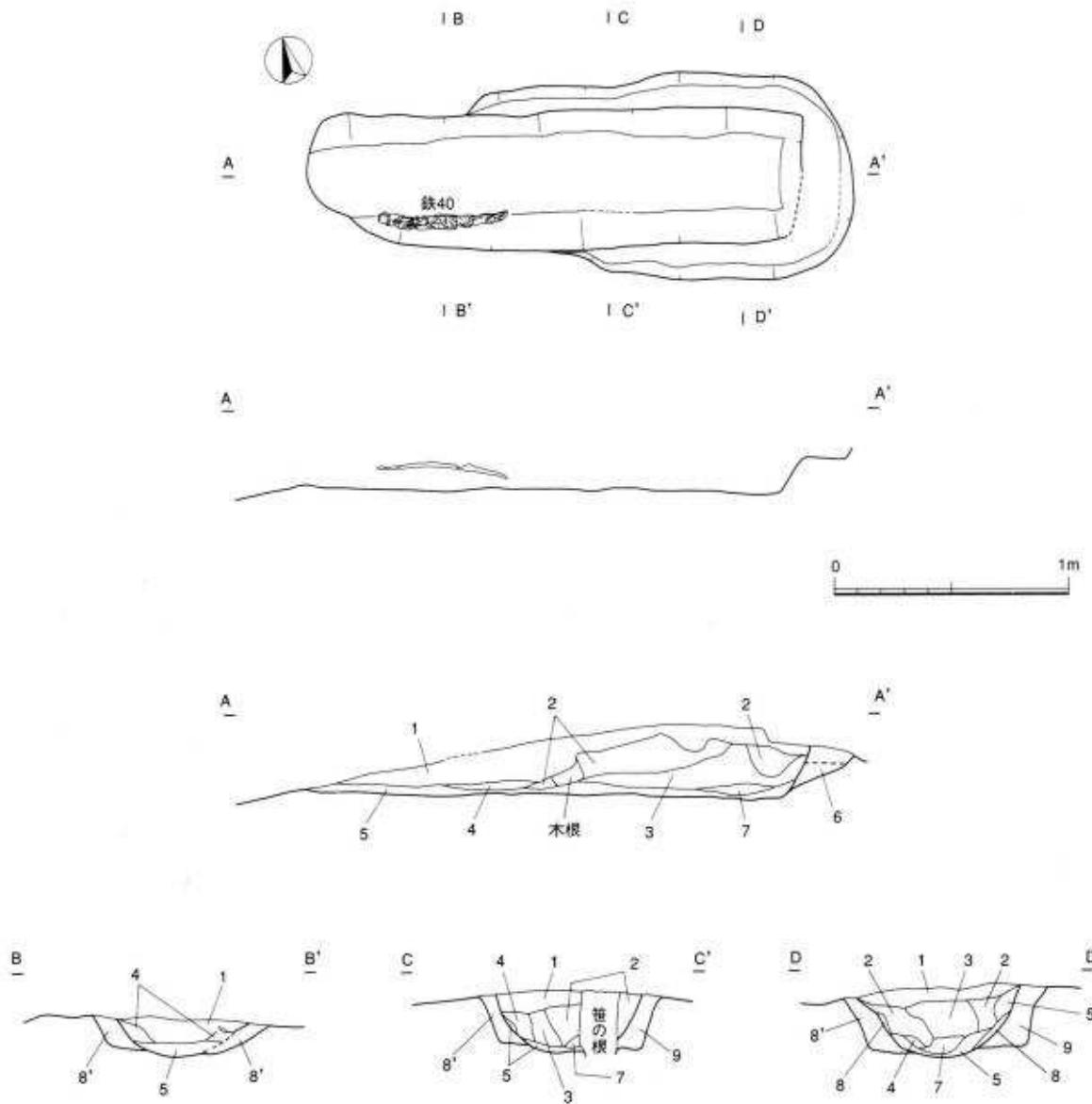
第163図 F遺跡 5号墳現況コンタ図（上段）・平面図（下段）(S=1/20)



5号墳墳丘 土層図

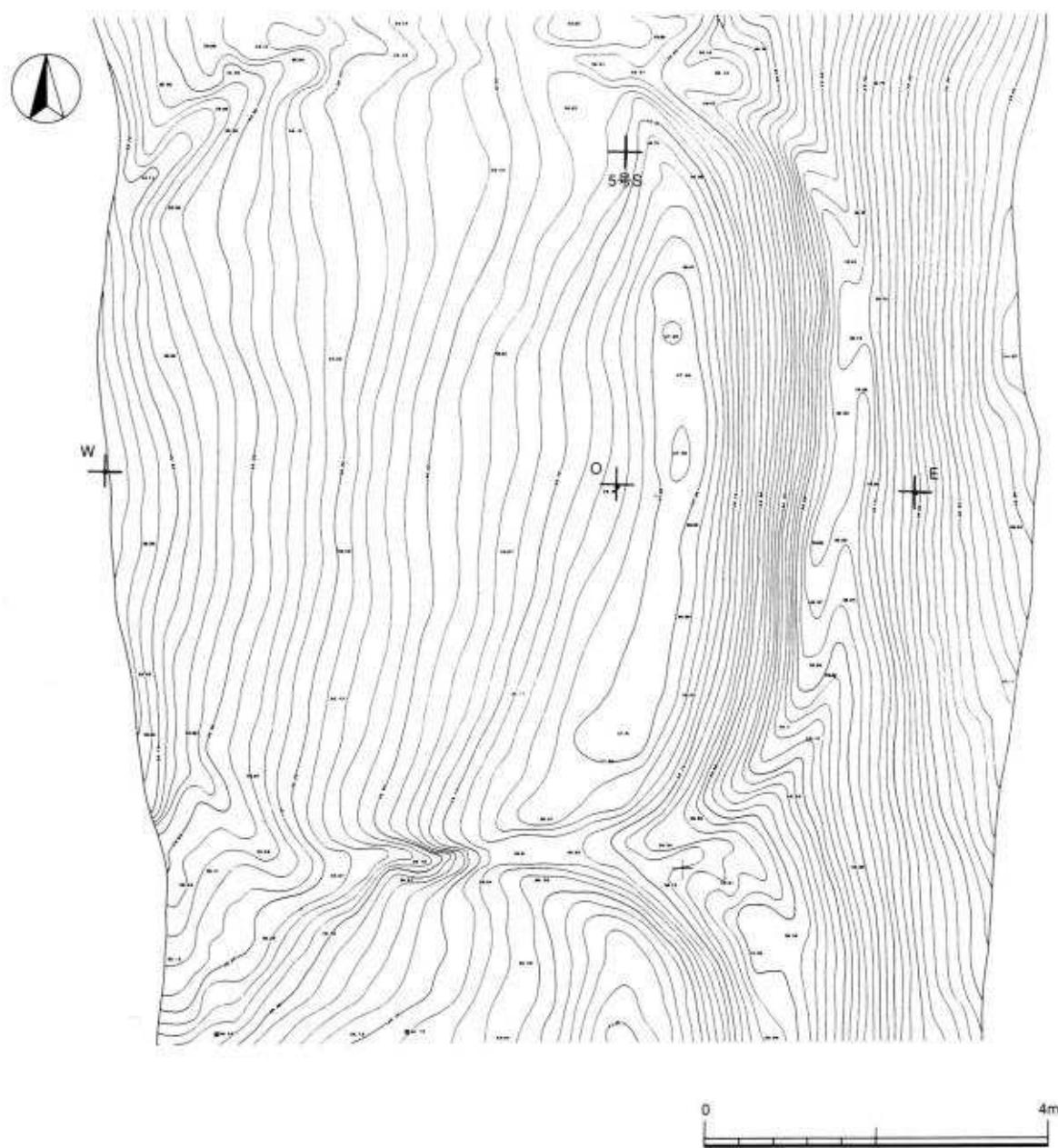
- 1層：(明) 赤褐色土 (5YR5/8~4/8)。赤味強い。盛土の流出土と考えられる。カーボン含む。
- 2層：黒褐～褐灰色土 (5YR4/1~3/1)。最も黒味の強い凹溝の存在を示すプラン上層土。塊質で細礫を含む。カーボン含む。
- 3層：にぶい赤褐～灰褐色土 (5YR4/4~7.5YR4/2~4/3)。黒色土粒を全体に多く含む。地山含有の軟質灰白～浅黄褐色細礫 ($\phi 1\sim 5mm$) を多く含み。ガリガリする。カーボン含む。
- 4層：濁赤褐色土 (5YR4/8)。濁った埴丘上面層で、埴丘面の土質により、粘質 (4層) から砂礫を含む土 (4' 層) と変化する。
- 5層：(明) 褐色土 (7.5YR5/6~4/6)。地山の細粒繊 (粗砂) を多く含む。くずんで、やや暗い地山流出土層。5' 是粗砂やや乏しく粘質。カーボン含む。
- 6層：にぶい黄褐色～灰黃褐色土 (10YR4/2~4/3)。2層近似層で、黒味やや強い。淡く、やや粘質で砂礫含有は乏しい。
- 7層：濁灰褐色粘質土 (7.5YR4/2)。赤褐色土粒・ブロックを少量含む。
- 8層：にぶい赤褐色粘質土 (5YR4/4)。赤褐色弱粘質土と同等に灰褐～褐色土粒・ブロックを含む。
- 9層：にぶい赤褐色土 (5YR4/4)。8層よりやや赤く、赤褐色粘土ブロックが多く混在する。
- 10層：(薄) にぶい黄褐色土 (10YR5/4)。赤褐色土粒少量。にぶい黄褐色粘質～シルト質土主体に、灰白色シルト質土粒・ブロックが混じる。カーボン含む。
- 11層：灰黃褐色土 (10YR4/2~5/2)。新しい不整落ち込み。
- 12層：灰白粘土。地山か。
- 13層：明赤褐色土 (5YR5/6)。シルト～器砂質土。灰褐色土粒を全体に含む。カーボン含む。
- 14層：にぶい褐色土 (7.5YR5/2~5/4)。灰白色地山粘土粒と灰褐色土粒を多量含有。
- 15層：明褐色土 (7.5YR5/6)。13層土と灰褐色土粒と赤褐色粘土ブロックを少量含有。
- 16層：黄褐色土 (10YR5/6)。明褐色シルト質土主体に、灰白色粘土粒・ブロック、にぶい黄褐色粘質土粒・ブロックを含んで、灰褐色土粒もブロック状に含む。
- a層：灰褐色土 (7.5YR5/2)。
- b層：褐色土 (7.5YR4/4)。やや赤味帯びて均質。
- c層：(明) 赤褐色粘質土 (5YR5/6~4/8)。盛土流出土に似る。カーボン多く含む。
- d層：灰褐色シルト質土 (7.5YR5/2~4/2)。くすむ黑色土粒多く含む。カーボン含む。
- e層：赤褐色粘質土 (5YR4/8~2.5YR4/8)。明るい灰褐色土ブロック少々含む。カーボン多量含有 (材大 $\phi 1cm$) 黒色土粒少量含む。
- f層：灰褐色シルト質土 (7.5YR4/2)。黒色灰・カーボン粒極多く含有。
- g層：e層と同じだが、灰褐色土ブロック、黑色土粒乏しい。やや粘質。
- h層：にぶい赤褐色土 (5YR4/4)。にぶい黄褐色地山粘土粒をやや多く含む。
- i層：にぶい赤褐色土 (5YR4/4)。h層より暗く。黑色土粒を少量含む。
- j層：g層と同じ。
- k層：(にぶい) 褐色土 (7.5YR4/3)。黑色土粒をやや多く含む。
- l層：明赤褐色シルト質土 (5YR5/6)。明褐色地山粘土粒を全体に多く含み、にぶい。
- m層：黄褐色弱砂質土 (10YR5/8)。灰白色～明褐色粘土ブロック・粒を含む。
- n層：にぶい赤褐色土 (5YR4/4)。(明) 赤褐色土粒・ブロックに灰褐色土混在。しまりなく。やわらかい。
- o層：にぶい赤褐色土 (5YR4/4)。にぶい黄色砂と赤褐色粘質土ブロック混在。しまりなく、やわらかい。
- p層：濁にぶい黄褐色土 (10YR5/4)。にぶい黄色砂に赤褐色粘土・灰白色粘土の粒・ブロック多く混じる。
- q層：暗灰黄色土 (2.5YR5/2)。にぶい黄色砂に灰黄色粘質土混じる。とてもやわらかく。しまりない。

第164図 F遺跡 5号墳墳丘土層断面図 (S=1/80) (H=37.000m)



- 5号墳主体部 土層註**
- 1層：(明)赤褐色土 (2.5YR4/6~5YR4/8)。全体に灰褐色土粒をやや多く含んで暗い。堅くしまり善い。
- 2層：明赤褐色土 (2.5YR5/6~5YR5/8)。灰褐色土は乏しく、赤味が強く明るい。純粹な地山土に近い。
- 3層：(にぶい)赤褐色土 (2.5YR4/4~4/6)。灰褐色土粒がやや多く、明黃褐色砂質土粒を少量含む。暗く、非常にやわらかい。しまりのない層。
- 4層：暗赤褐色土 (2.5YR5/6~5YR5/8)。2層に似るが、ややシルト質で、堅くしまり良い。
- 5層：にぶい黃褐色土 (10YR5/4~2.5Y5/4)。明褐～にぶい黄色砂質土主体に、赤褐色土粒を少量含む。やわらかく、しまりない。5'は同質で、堅くしまり良い。
- 6層：にぶい赤褐色土 (5YR5/4)。全体に全体に淡く、灰褐色に満る斑状部あり。非常に堅くしまり良い。握り方埋土か。
- 7層：(オリーブ)褐色土 (10YR4/4~4/6・2.5Y4/4)。5層土と4層土との中間的層。明黄褐色～にぶい黄色砂質土がやや多い。やわらかく、しまり劣る。
- 8層：淡にぶい赤褐色土。にぶい黄色砂土を基盤に、明赤褐・灰白粘質土ブロックを主体とする。8'は8層と同じ色。堅さがやや違う。
- 9層：5'層と同じ。砂土を主体とし、粘土ブロックは少ない。
- * 8'層・9層は握り方埋土。類似の8層・5'層はその崩壊土

第165図 F遺跡 5号墳主体部平面図・土層断面図 (S=1/30) (H=36.900m)



第166図 F遺跡 6号墳平面図 (S=1/80)

円墳を想定している。墳丘の南東側では意味不明の土坑（風倒木痕か）によって破壊されていた（第164図掲載の墳丘土層断面図におけるa～q層は、その意味不明の土坑に伴う土層である）。墳丘および周溝からの出土遺物については、器種不明の土師器細片が数点出土した程度で、ほとんどなかった。

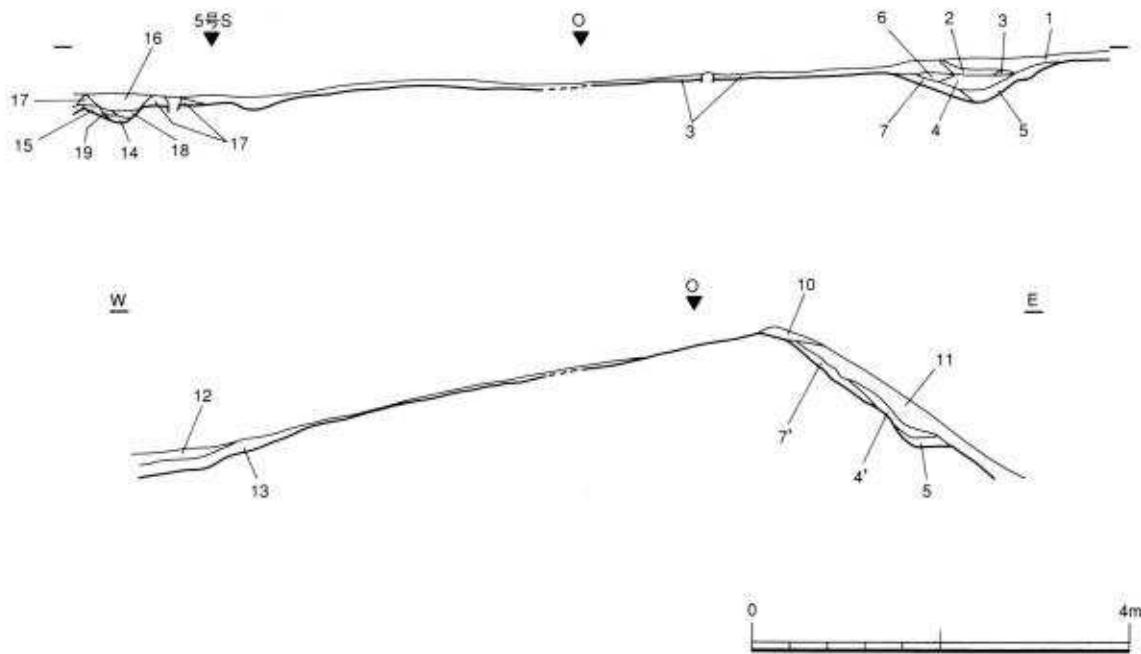
B. 主体部（第165図）

想定される墳丘の中央より若干南寄りの位置で主体部1基が検出された。約半分が流出していて長さは不明であるが、幅は、墓壙の確認面で最大0.9m、2段掘りで設けられた棺部は0.6mを測る。主軸は北から西へ約74°振る。出土遺物については、表土下で鉄剣が露出し、その鉄剣1点のみが残存していた。

6号墳（第166図・第167図）

A. 立地・墳丘規模等（第166図・第167図）

南北方向にのびるA尾根上、前述の5号墳の南側に位置する。墳丘規模については、墳丘の西側が地滑り等の影響によって変形しており不明であるが、周溝内側の立ち上がりからの数値で径約9mの円墳を想定してい



6号墳墳丘 土層註（土層番号は7号墳墳丘と通番。8層・9層は欠番。）
 1層：にぶい（暗）黄褐色土（10YR4/3）。明黄褐色土粒を多量含んで明るい。軟弱。
 2層：黒褐色土（10YR3/2）。軟弱。
 3層：褐色土（10YR4/4）。明黄褐色砂質土に黒褐色土粒・灰褐色土粒をやや多く含有。やわらかい。
 4層：明褐色砂質土（10YR5/8）。黒褐・灰褐色土粒を全体に少量含む。軟弱。4' 層は地山土の影響で砂質少なくやや軟質で。赤味ある。
 5層：明褐色砂質土（10YR6/6）。4層よりRにぶい。カーボンをわずかに含み、やや暗いため、地山と区別。やや軟質。
 6層：にぶい黄褐色土（10YR4/4）。4層土で、灰褐色土粒をやや多く含有。軟弱。
 7層：にぶい黄褐色土（10YR4/4）。砂質地山土が若干薄った程度で暗い。軟弱。カーボンまれに含む。7' 層は地山土の影響で砂質少なくやや軟質で。赤味ある。
 10層：褐色土（7.5YR4/6）。赤褐色年賀土粒を多く含有するが、同時に黒褐・灰褐色土粒を含み、暗い。
 11層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）。灰褐・黒褐色土粒を全体に多く含み、暗い。周溝プランはカーボンやや多く含む。
 12層：暗黄灰～黒褐色土（2.5Y4/1～3/1）。砂質土層で、極めて軟弱。
 13層：暗黄灰～にぶい黄褐色土（2.5Y4/1～3/1）。褐色味の強い砂質土層で、極めて軟弱。
 14層：（薄）にぶい黄褐色土（10YR4/4）。赤褐色土粒少量にぶい黄褐色年賀～シルト質土主体に、灰白色シルト土粒・ブロックが混じる。
 カーボン含む。5号墳墳丘の10層。
 15層：灰白粘土・地山か。5号墳墳丘の12層。
 16層：明赤褐色土（5YR5/6）。シルト～弱軟質土。灰褐色土粒を全体に含む。カーボン含む。5号墳墳丘の13層。
 17層：にぶい褐色土（7.5YR5/2～5/4）。灰白色地山粘土粒と灰褐色土粒を多量含有。5号墳墳丘の14層。
 18層：明褐色土（7.5YR5/6）。16層土と灰褐色土粒と赤褐色粘土ブロックを少量含有。5号墳墳丘の15層。
 19層：黄褐色土（10YR5/6）。明褐色シルト質土主体に、灰白色粘土粒・ブロック、にぶい黄褐色粘土粒・ブロックを含んで、灰褐色土粒もブロック状に含む。5号墳墳丘の16層。

第167図 F遺跡 6号墳墳丘土層断面図 (S=1/80) (H=37.000m)

る。墳丘南側では7号墳と周溝を共有しているが、第167図の墳丘および周溝の土層断面図に示してあるとおり、切り合い関係は確認されていない。なお、墳丘および周溝からの出土遺物はなかった。

B. 主体部

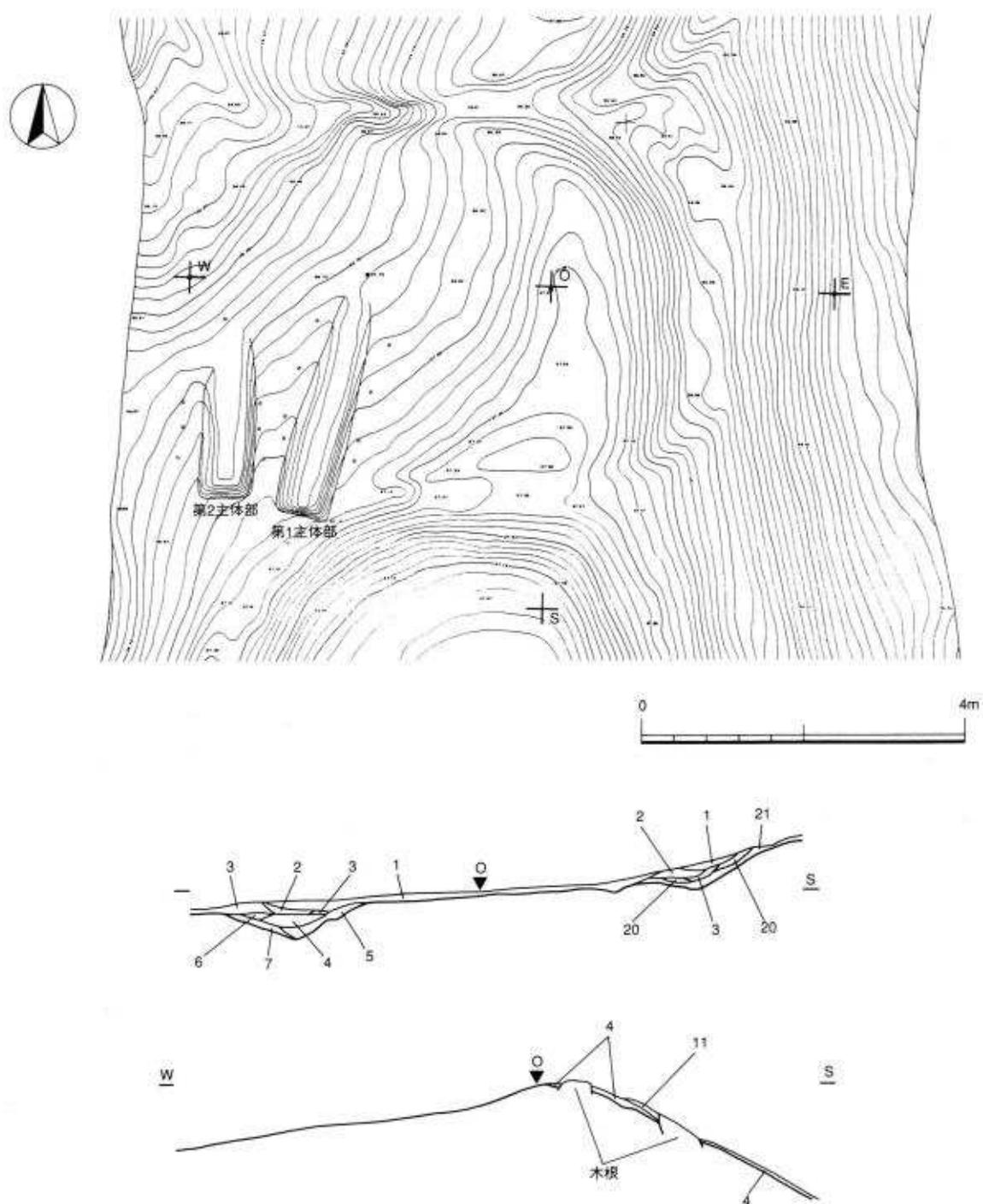
主体部については、検出されておらず、不明である。

7号墳（第168図～第173図）

A. 立地・墳丘規模等（第168図）

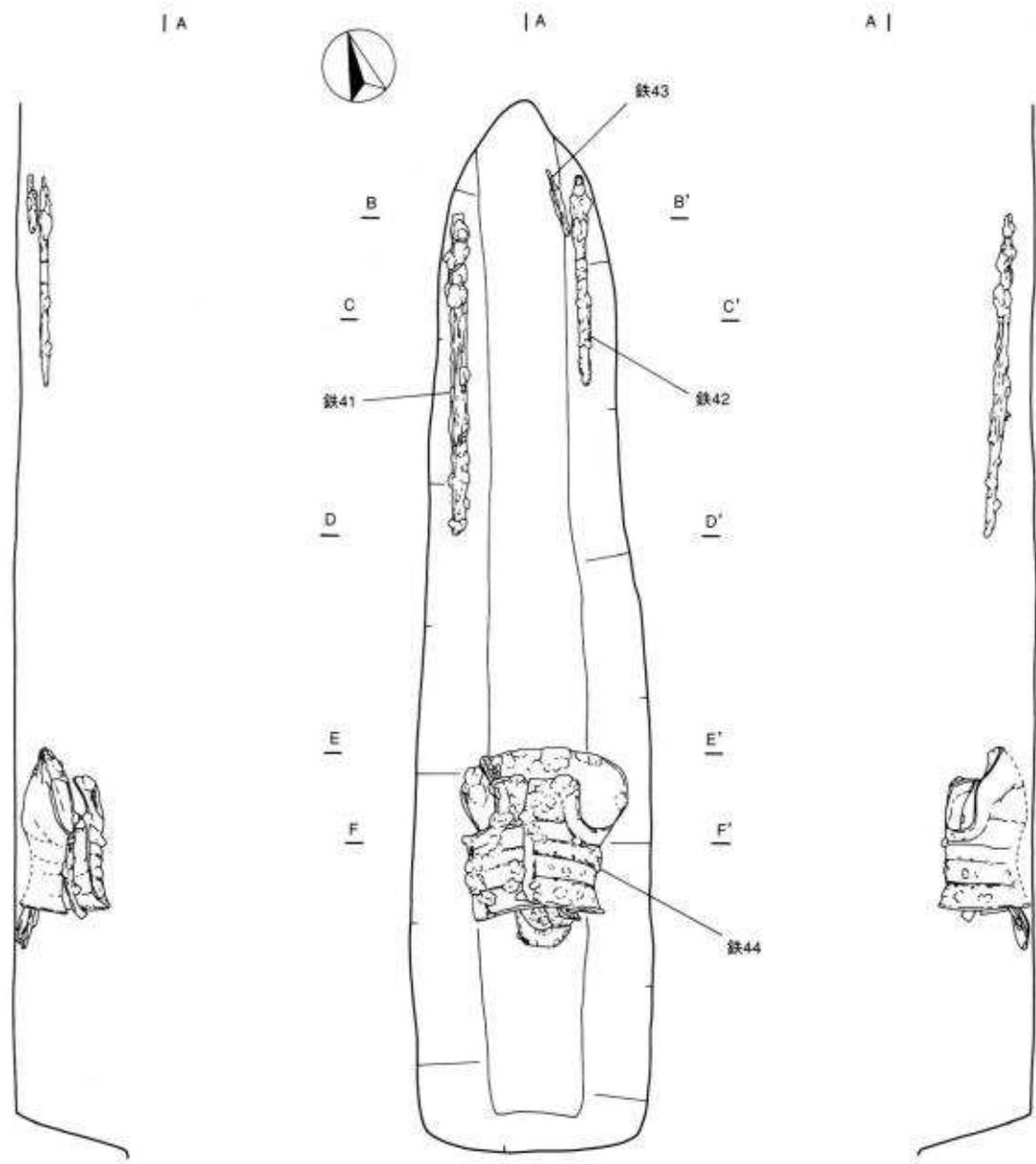
A尾根上、前述の6号墳の南側に位置。7号墳南側の8号墳とは、現況地形で1mほどの段差を有することから、8号墳と区切り、6号墳と8号墳との間に想定した。

墳丘規模については、径約5mの円墳を想定していたが、想定される墳丘とはかなり矛盾する位置で2基の主



- 7号墳埴丘 土層註（土層番号は6号墳埴丘と通番。）
- 1層：にぶい（暗）黄褐色土（10YR4/3）。明黄褐色土粒を多量含んで明るい。軟弱。8号墳埴丘1層。
 - 2層：黒褐色土（10YR3/2）。周溝上・中層プランを示す層。軟弱。8号墳埴丘2層。
 - 3層：褐色土（10YR4/4）。明黄褐色砂質土に黒褐色土粒・灰褐色土粒をやや多く含有。やわらかい。8号墳埴丘3層。
 - 4層：明褐色砂質土（10YR5/8）。黒褐・灰褐色土粒を全体に少量含む。軟弱。
 - 5層：明褐色砂質土（10YR6/6）。4層よりにぶい。カーボンをわずかに含み、やや暗いため、地山と区別。やや軟弱。
 - 6層：（にぶい）黄褐色土（10YR5/4）。4層土で。灰褐色土粒をやや多く含有。軟弱。
 - 7層：（にぶい）黄褐色土（10YR5/4）。砂質地山土が若干濁った程度で暗い。軟弱。カーボンまれに含む。
 - 11層：（にぶい）黄褐色土（10YR4/3）。灰褐・黒褐色土粒を全体に多く含み、暗い。周溝プランはカーボンやや多く含む。
 - 20層：（にぶい）黄褐色土（10YR5/4）。明黄褐色砂質土主体に灰褐色土粒やや多く含有。灰白色シルト岩少量含む。やや堅い。8号墳埴丘4層。
 - 21層：黄褐色土（10YR5/8）。明黄褐色砂質土と明（赤）褐色土粒の地山土混合に灰褐色土粒少量含有してやや暗い。やや堅い。須恵器を上部に包含。8号墳埴丘5層。

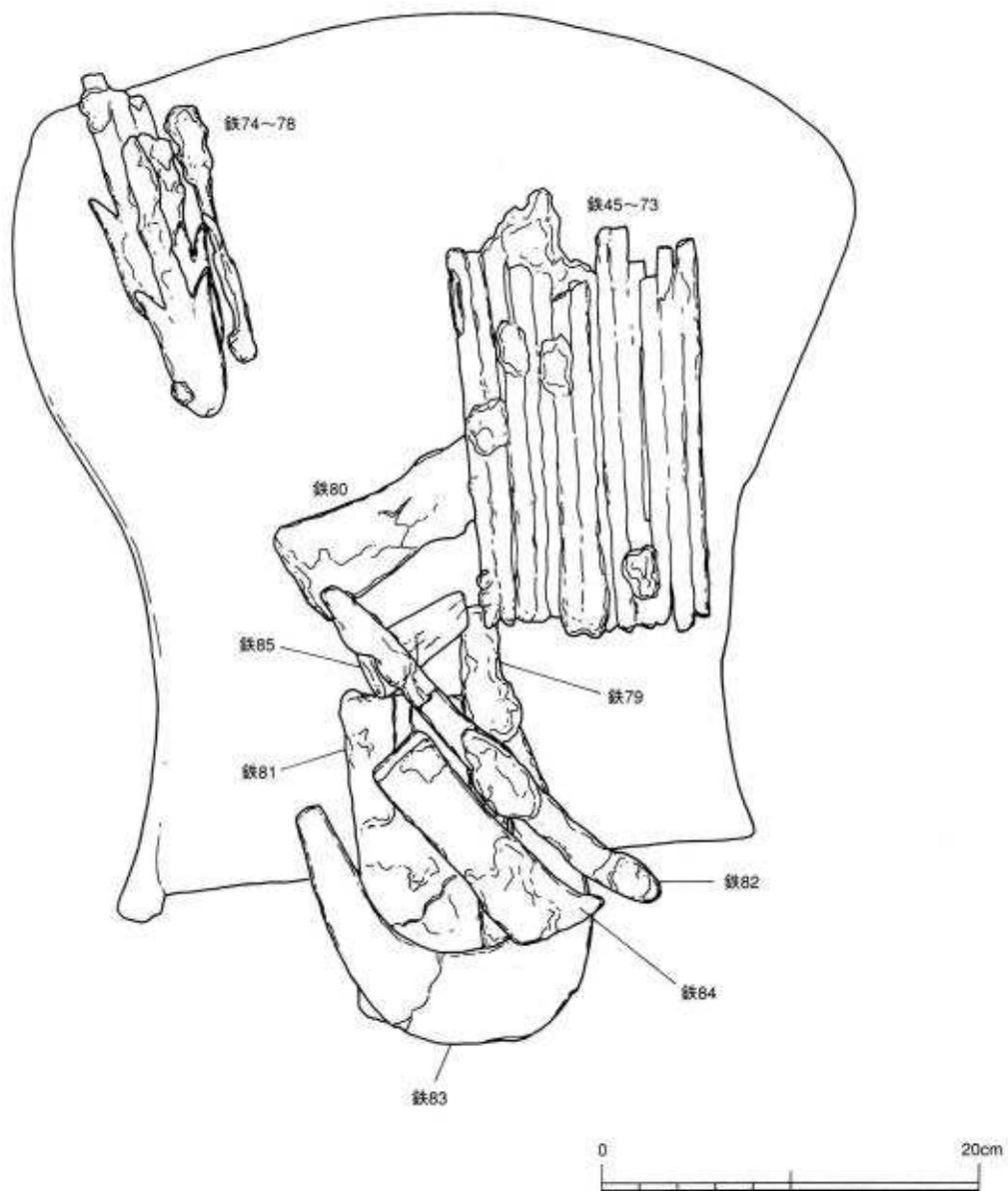
第168図 F遺跡 7号墳平面図・埴丘土層断面図 (S=1/80) (H=37.300m)



短甲出土状況見通し図(南から)



第169図 F遺跡7号墳 第1主体部平面図・遺物出土状況図 (S=1/20) (H=37.200m)



第170図 F遺跡 7号墳第1主体部短甲内遺物出土状況図 (S=1/4)

体部を検出し（第168図平面図参照）、しかも、そのうちの1基（東側の第1主体部）が短甲を伴う主体部ということで、状況は混乱した。7号墳と8号墳とを区切らず、これらを1基の古墳として扱うことも考えられたが、8号墳の墳丘北側（7号墳側）の裾部で、良好な一括供獻土器が出土しており（第176図参照）、実体不明としか言いようがない。

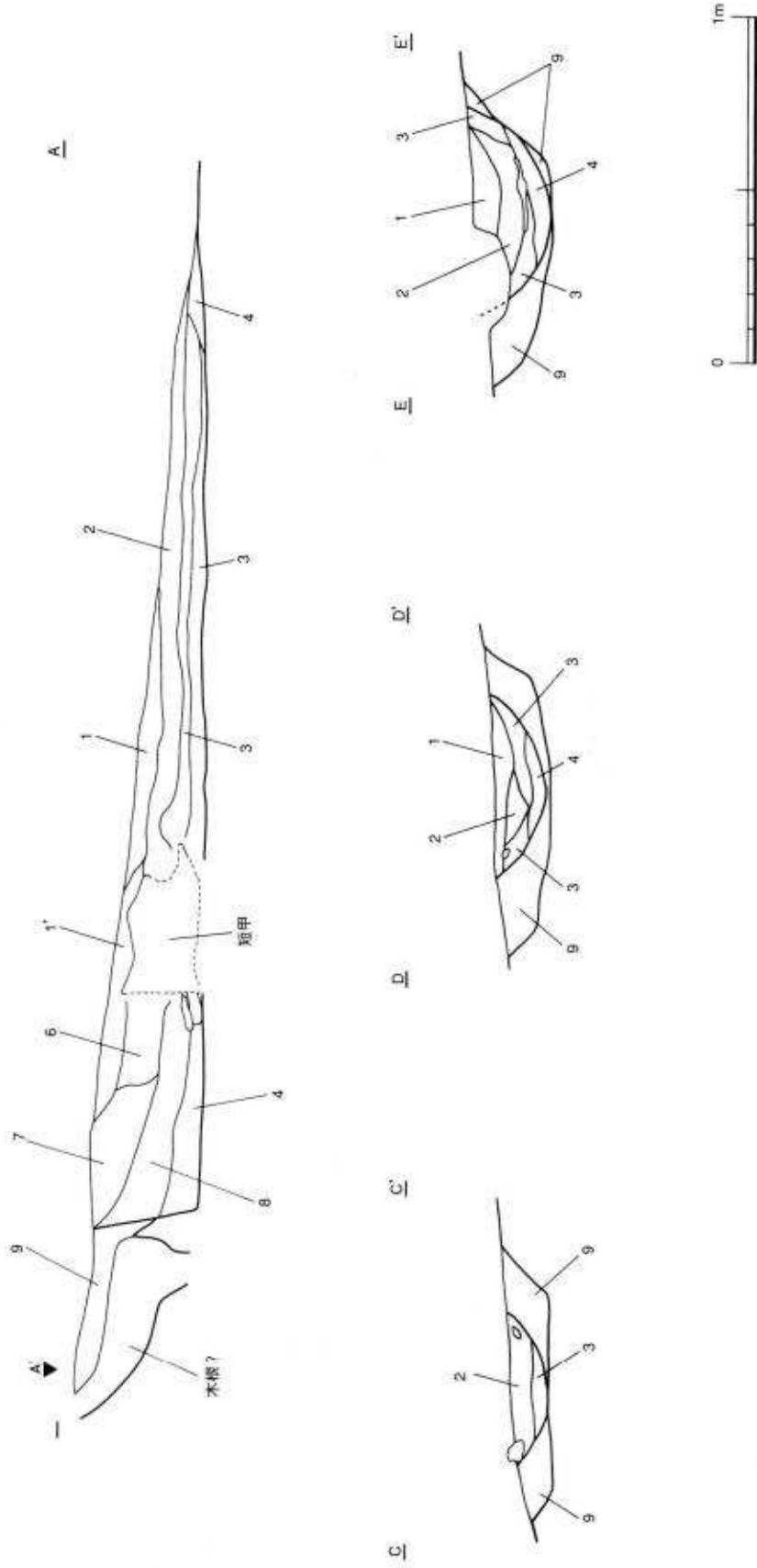
なお、上述の供獻土器については、本報告では後述の8号墳に伴うものとして報告しているが、この7号墳に付く可能性もある。なお、7号墳の墳丘上および周溝・裾部における出土遺物については、その供獻土器以外には、土師器細片が数点出土した程度で、ほとんどなかった。

B. 主体部

想定される墳丘の中央よりかなり西へ寄ったところで2基の主体部を確認した。東側の主体部を第1主体部、西側の主体部を第2主体部と呼んでいる。

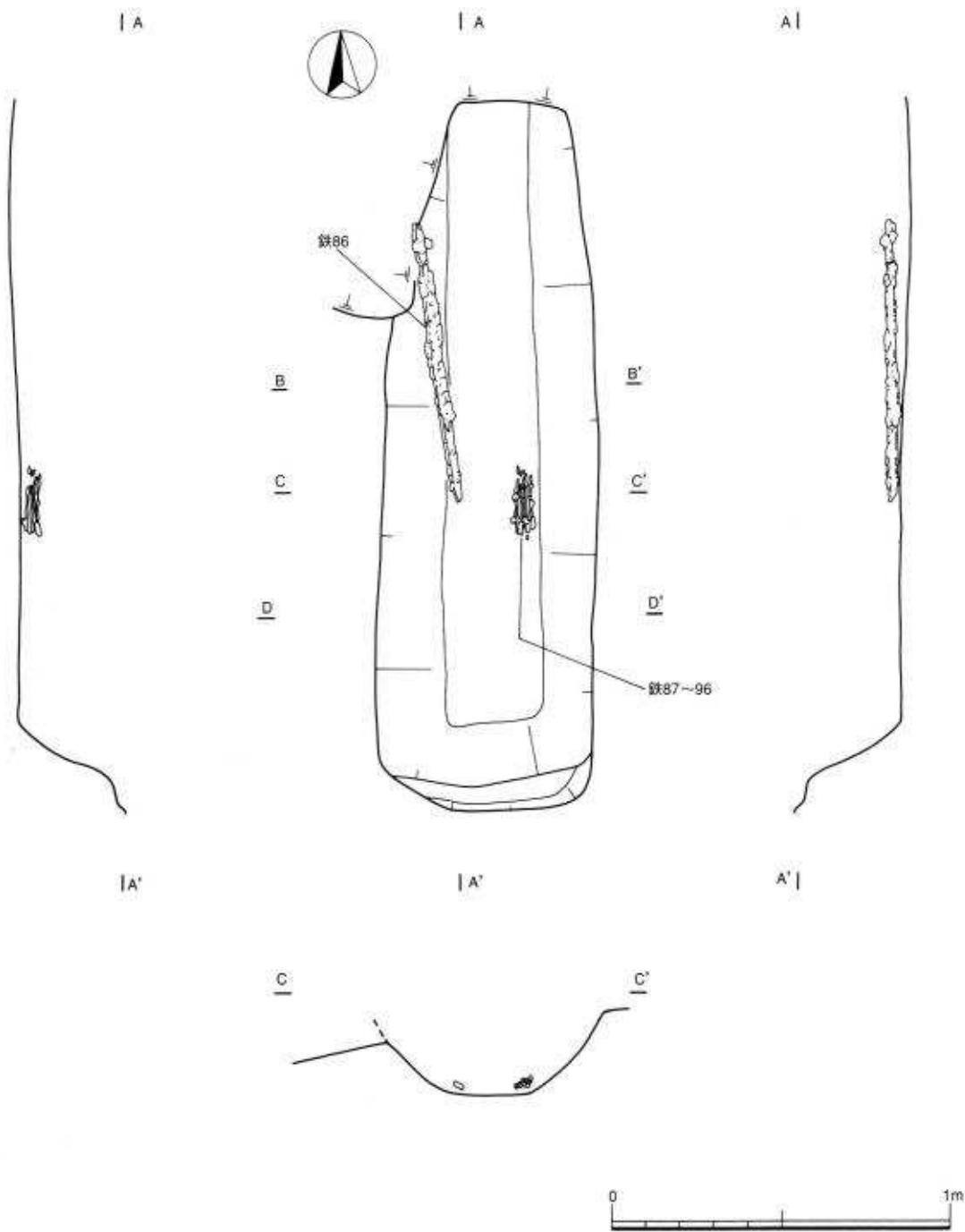
第1主体部（第169図～第171図）

地滑り等の影響により、北側の小口部が流出してしまっていたが、棺幅が約0.65mの割竹形木棺として検出



7号墳第1主体部 土層註
 1層：緑反褐色土 (10YR4/2~2.5Y4/2)。やや赤味のある黄褐色土 (7.5YR5/4~5/6) 粒と同等に黒褐色土粒をやや多
 量に含み、薄って黒い。液化物含む。軟質小礫をやや多く含む黄褐色地山土の世精層。1層は表土化して薄るが、
 1'層：同質の黄褐色土。木根による濁りのない層 (7.5YR5/4~5/6)。
 2層：(に) にぶい黄褐色土を主体として、木根によく含む。黄褐色シルト～泥砂質土を主体に、全体に黒
 褐色土粒を中量含んで、カーボンやや多く含む。しまり良い。
 3層：黄褐色土 (10YR5/6)。ややにぶい2層と同質の黄褐色シルト～泥砂質土主体で、黒褐色土粒は乏しい。ややしま
 り良い。
 4層：(に) にぶい黄褐色土 (10YR6/4~5/4)。にぶい黄褐色地山砂質土主体に、
 5層：(に) にぶい黄褐色～にぶい黄褐色土 (10YR6/4~5/4)。4層の硬化層。
 6層：(に) にぶい黄褐色土 (10YR5/4~5/6)。3層にはほぼ同じであるが、非常にやわらかく、やや粘質。
 7層：(に) にぶい黄褐色シルト層 (約1~2mm) を時折含む。
 8層：(に) にぶい黄褐色土 (10YR5/4~5/6)。3層・6層とはほぼ同じであるが、堅く、しまり良い。
 9層：緑反黄色～灰黃褐色土 (2.5Y4/2~4/3~10YR4/2)。振り方埋土。にぶい黄褐色地山砂質土主体に、
 細粒一時褐色土粒 (時折フロック状) をやや多く含む。ぬく、濁りあり。やわらかく、しまり劣る。

第171図 F遺跡7号墳第1主体部土層断面図 (S=1/20) (H=37.200m)



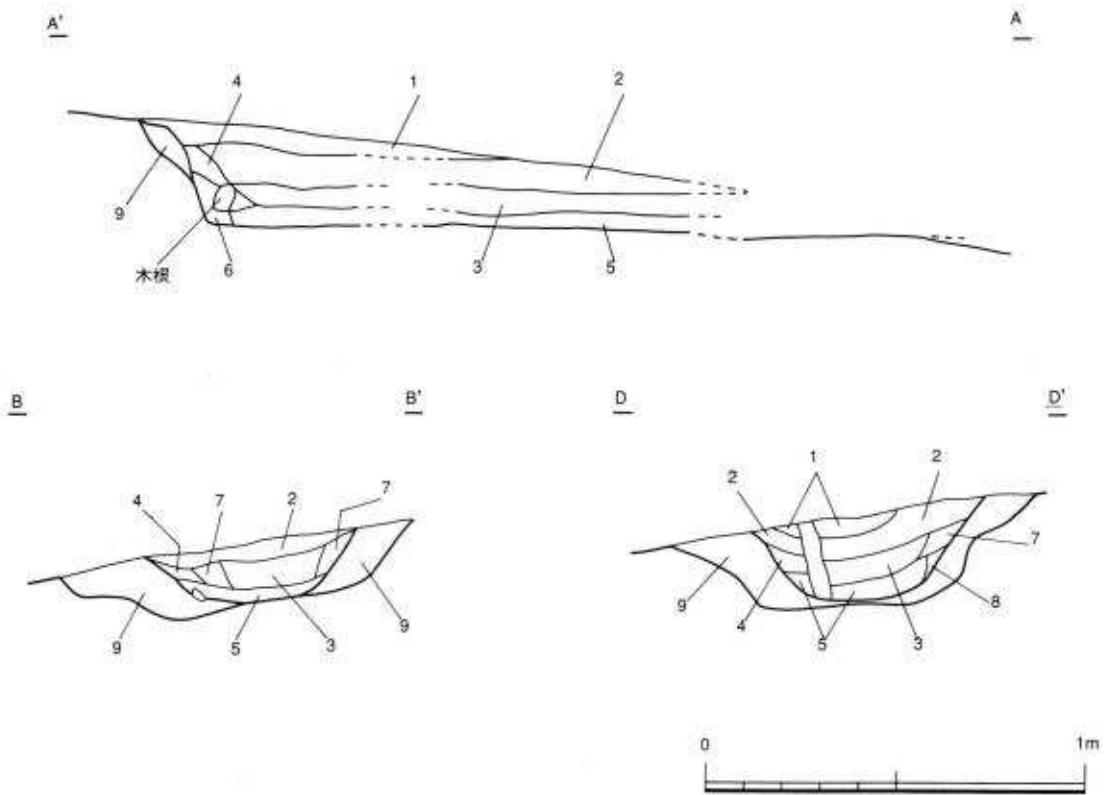
第172図 F遺跡7号墳第2主体部平面図・遺物出土状況図 (S=1/20) (H=37.000m)

した。主軸は北から東へ約19°振る。床面からの残存していた高さは、最も深いところで約30cmある。

棺内遺物については、主体部の北側で、直刀1点、鉄剣1点、刀子1点が、切っ先を南に向けて遺存し、主体部南側の小口部近くに、横矧板鋲留の漆塗りの短甲1点が置かれていた（第169図参照）。そして、短甲内部には、曲刀鎌1点、鉄斧2点、U字形刃先1点、鉈1点、鑿1点、鉄鎌34点（長頸鎌29点、平根鎌5点）の各鉄製品が納められていた（第170図参照）。

第2主体部（第172図・第173図）

地滑り等によって北側部分が流出してしまっていたが、棺幅や形態は第1主体部と同様で、棺幅が約0.65mの割竹形木棺として検出した。主軸は概ね南北方向を向く。床面からの残存していた高さは、最も深いところで約



7号墳第2主体部 土層註

- 1層：暗灰褐色土（10YR4/2）。にぶい黄褐色土（10YR5/4）との混濁はあるが、全体に黒色土粒をやや多く含む黒味ある層。やや堅く、しまり良い。
- 2層：にぶい黄褐色土（10YR5/4）。シルト岩（ ϕ 0.5~1cm）を少量含む。比較的堅く、しまり良い。カーボンを時折含む。
- 3層：黄褐色土（10YR5/6）。ややにぶい黄褐色を呈する部分もある。シルト岩（ ϕ 最大3cm）を時折含む。非常にやわらかく、しまりない。
- 4層：にぶい黄褐色土（10YR5/4）。2層に似て、3層より暗く土質も似るが、非常にやわらかく、しまり劣る。
- 5層：にぶい黄褐色土（10YR5/4~6/4）。全体に淡く、浅黄色味をもって白っぽい。非常にやわらかく、しまり劣る。
- 6層：にぶい黄褐色土（10YR5/4~6/4）。地山に近いが、やや濁る。堅く、しまり良い。小口面の埋土が。
- 7層：黄褐色土（10YR5/6）。3層と同じであるが、3層よりも堅く、しまり良い。
- 8層：にぶい黄褐色土（10YR5/4~6/4）。5層と同じであるが、5層よりも堅く、しまり良い。
- 9層：暗灰褐色～灰黃褐色土（2.5Y4/2~4/3~10YR4/2）。掘り方埋土。にぶい黄色地山砂質土主体に、褐灰～暗褐色土粒（時折ブロック状）をやや多く含む。暗く、濁りあり。やわらかく、しまり劣る。

第173図 F遺跡 7号墳第2主体部土層断面図 (S=1/20) (H=37.200m)

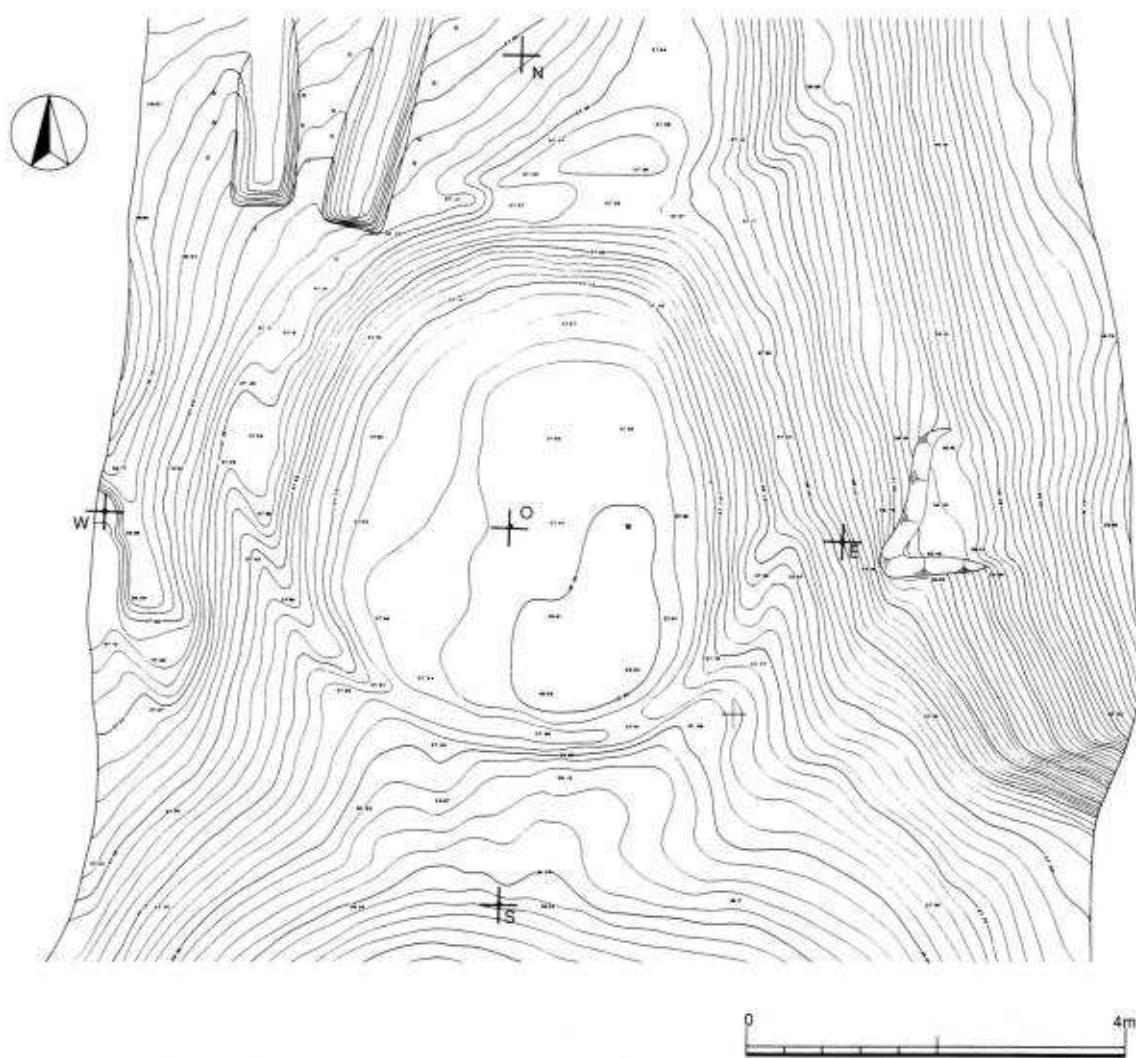
35 cmある。棺内遺物については、直刀1点、鉄族7点の各鉄製品が遺存していた（第172図参照）。

8号墳（第174図～第176図）

A. 立地・墳丘規模等（第174図～第176図）

A尾根上、前述の7号墳の南側に位置。7号墳とは現況で約1mの段差を有することから、7号墳と区切って、この8号墳を想定した。墳丘規模については径5.5mほどの円墳を想定している。

墳丘北側の裾部、7号墳と接するところでは、良好な一括供獻土器が出土しており、須恵器甕1点、須恵器ハソウ1点、土師器碗4点、土師器甕1点のほか、接合・復元ができた土師器壺1点が出土している（第176図参照）。土師器壺については土師器碗の20と21との間から出土）。本報告では、これらの供獻土器を8号墳に伴うものとして報告しているが、7号墳に付く可能性も考えられる。なお、土師器甕・碗については、第175図上段のO-N間土層断面において、3層と4・6層との層間にから出土していることが確認された。これら供獻土器のうち土師器壺については図化できなかったのであるが、その他のものについては第187図（18~24）に



第174図 F遺跡 8号墳平面図 (S=1/80)

掲載してある。土師器碗については、いずれも外面にハケ調整痕が見られる点などから、田嶋明人氏の漆町編年13群期ごろ（陶邑田辺編年TK208～TK23型式期ごろ）のものではないかと考えられたが、須恵器ハソウ（23）において、口径が体部最大径を上回る点など、比較的新しい時期（陶邑田辺編年TK47型式期ごろか）に位置付けられるような特徴が見られる。以上の点から、これら供獻土器はTK23型式期ごろに位置付けるのが妥当ではないかと考えている。なお、接合や図化ができなかった土師器壺については、胎土の色調が赤色土器ともいえる赤味の強いものであった。この点から、この土師器については、甕ではなく、壺と判断した。

B. 主体部

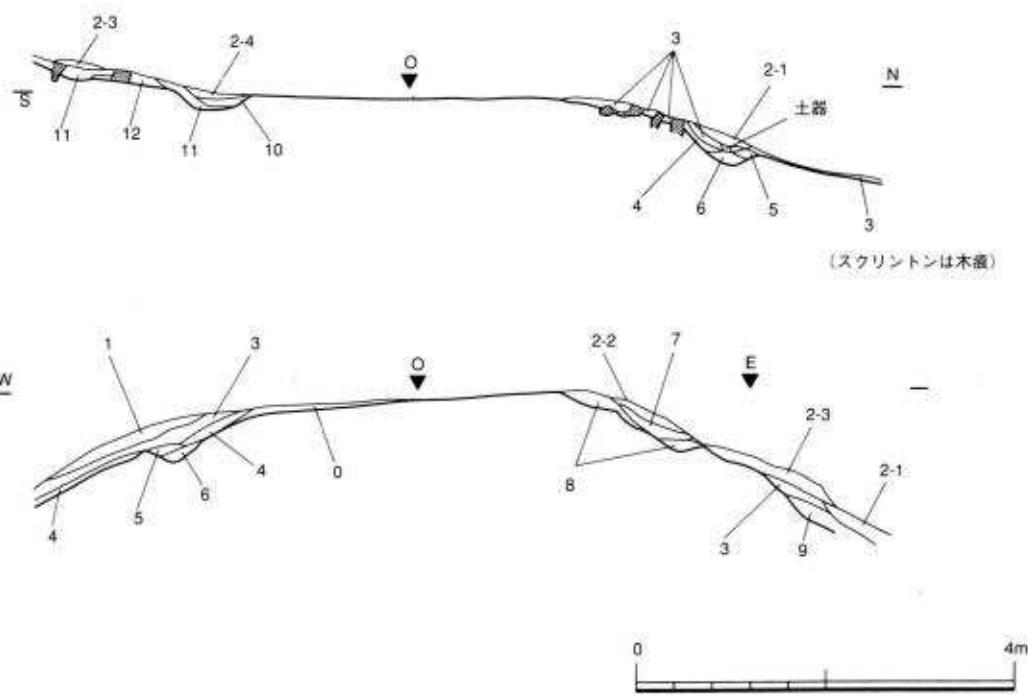
主体部については検出されておらず、不明である。

9号墳（第177図～第179図）

A. 立地・墳丘規模等（第177図～第179図）

A尾根上、前述の8号墳の南側、A尾根とB尾根との連結部に位置する10号墳の北側に位置する。墳丘規模については、南北方向で約8m、東西方向で約10mを測り、直径約10mの円が、10号墳と接する南側のところで凹んだような平面を呈する。

墳丘および周溝における土層堆積については、第178図の土層断面図に示したとおりである。墳丘南側で10号墳と周溝を共有しているが、その共有するところでは、9号墳の他の土層断面とは異なって、赤味のある層と粗砂質土を主体とした土が堆積しており、これは10号墳墳丘の影響を受けたものと考えられる。しかし、9号



8号墳 墳丘 土層註

- 0層：明（黄）褐色土。灰白色シルト岩を極めて多量に含む。地山土上部の薄り層。
- 1層：にぶい（暗）黄褐色土（10YR4/3）。明黄褐色土粒を多量に含んで明るい。軟弱。
- 2-1層：黒褐色土（10YR3/2）。軟弱。周溝上・中層プランを示す層。
- 2-2層：褐色土（7.5YR4/4～10YR4/4）。（赤）褐色土粒を主体に、地山のシルト岩を多量に含み、黒褐色土も多量に含む黒い層。極めてやわらかく、しまりない。
- 2-3層：2-2層と同じく礫を多量含有。黒色土を極めて多く含む黒褐色土層。
- 2-4層：暗灰黄（褐）色土（2.5Y4/2）。地山のにぶい黄褐色シルト土に黒褐色土を多量含有。
- 3層：褐色土（10TR4/4）。明黄褐色砂質土に黒褐色土粒・灰褐色土粒をやや多く含有。やわらかい。
- 4層：にぶい黄褐色土（10YR5/4）。明黄褐色砂質土を主体に、灰褐色土粒をやや多く含有。灰白色シルト岩を少量含む。やや堅い。
- 5層：黄褐色土（10YR5/8）。明黄褐色砂質土と明（赤）褐色土粒の地山土混合に、灰褐色土粒を少量含有して暗い。やや堅い。須恵器を上部に包含。
- 6層：明黄褐色土（10YR6/4～6/6）。ややにぶく。シルト質で、シルト岩～砂岩礫（φ2～3cm）を時折含む。均質で堅く、しまり良い。カーボンを時折含む。ほぼ地山そのものの土だが、墳丘立ち上がり面検出の過程で掘れた土。
- 7層：明褐色土（7.5YR5/8）。シルト岩を中量含有。極めてやわらかく、しまりない。ややにぶく。暗い。
- 8層：明褐色土（7.5YR5/8）。7層より明るく、シルト岩を極めて多量含有。地山土か。
- 9層：黄褐色砂土（2.5Y5/4～5/6）。カッカの砂質土。地山の砂層よりやや暗い。地山流出土。
- 10層：（明）黄褐色土（2.5Y5/6）。シルト岩を中量含有。全体に黒色土を少量含む。やや堅く、しまり良い。
- 11層：にぶい黄褐色土（10YR5/3）。10層よりわずかに赤味（褐色味）を帯びる。軟質小礫を多く含む。
- 12層：黄褐色土（10YR5/8）。やや濃る。赤味やや強く。シルト岩・細礫をやや多く含有。やや堅い。

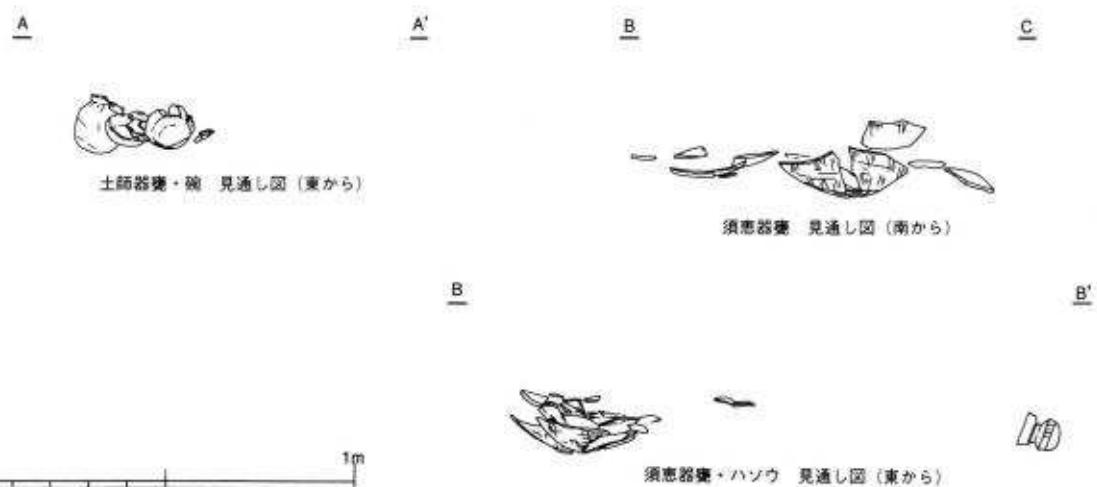
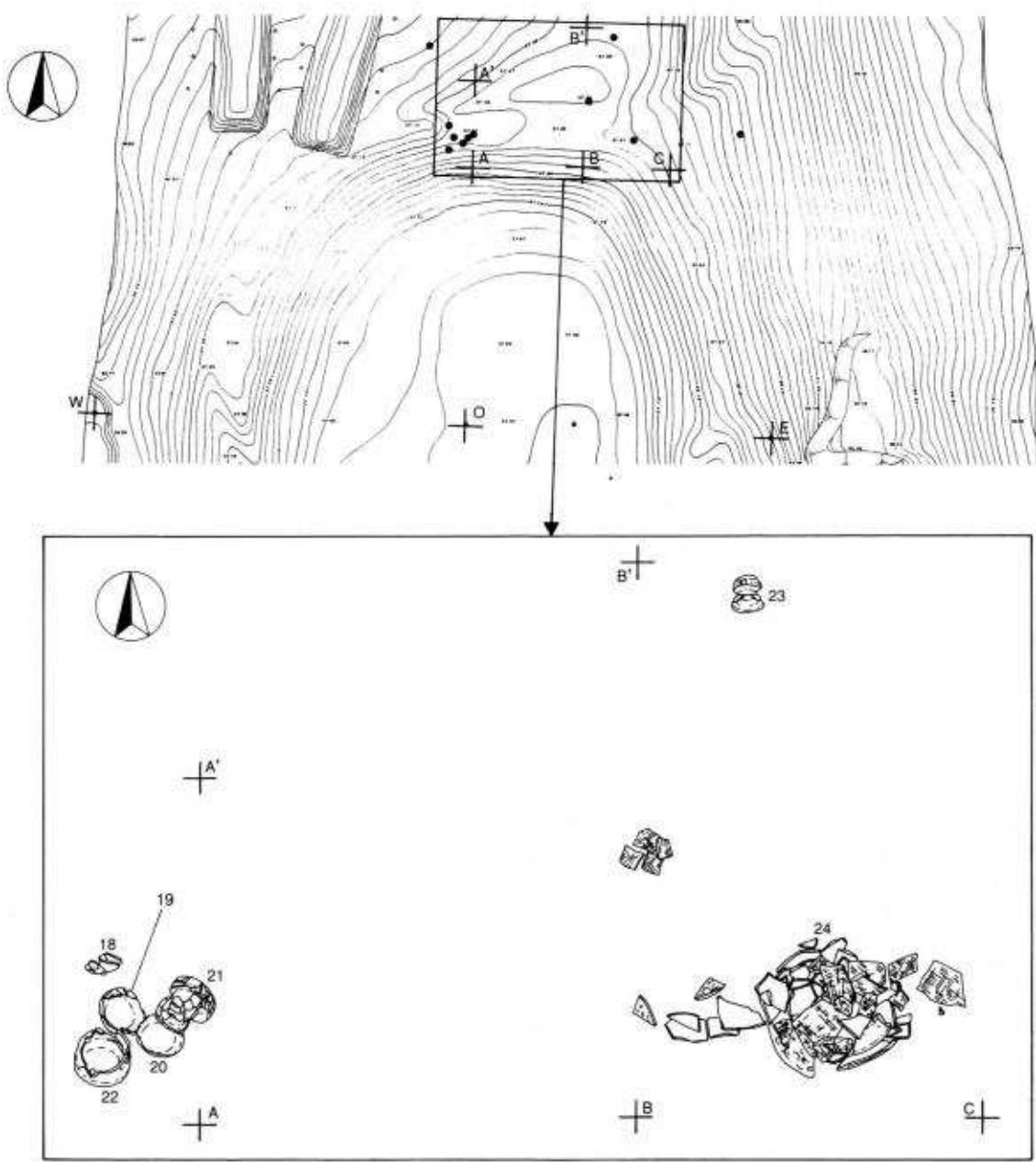
第175図 F遺跡 8号墳 墳丘土層断面図 (S=1/80) (H=38.100m)

墳の周溝と10号墳の周溝との明確な切り合い関係は確認されていない。

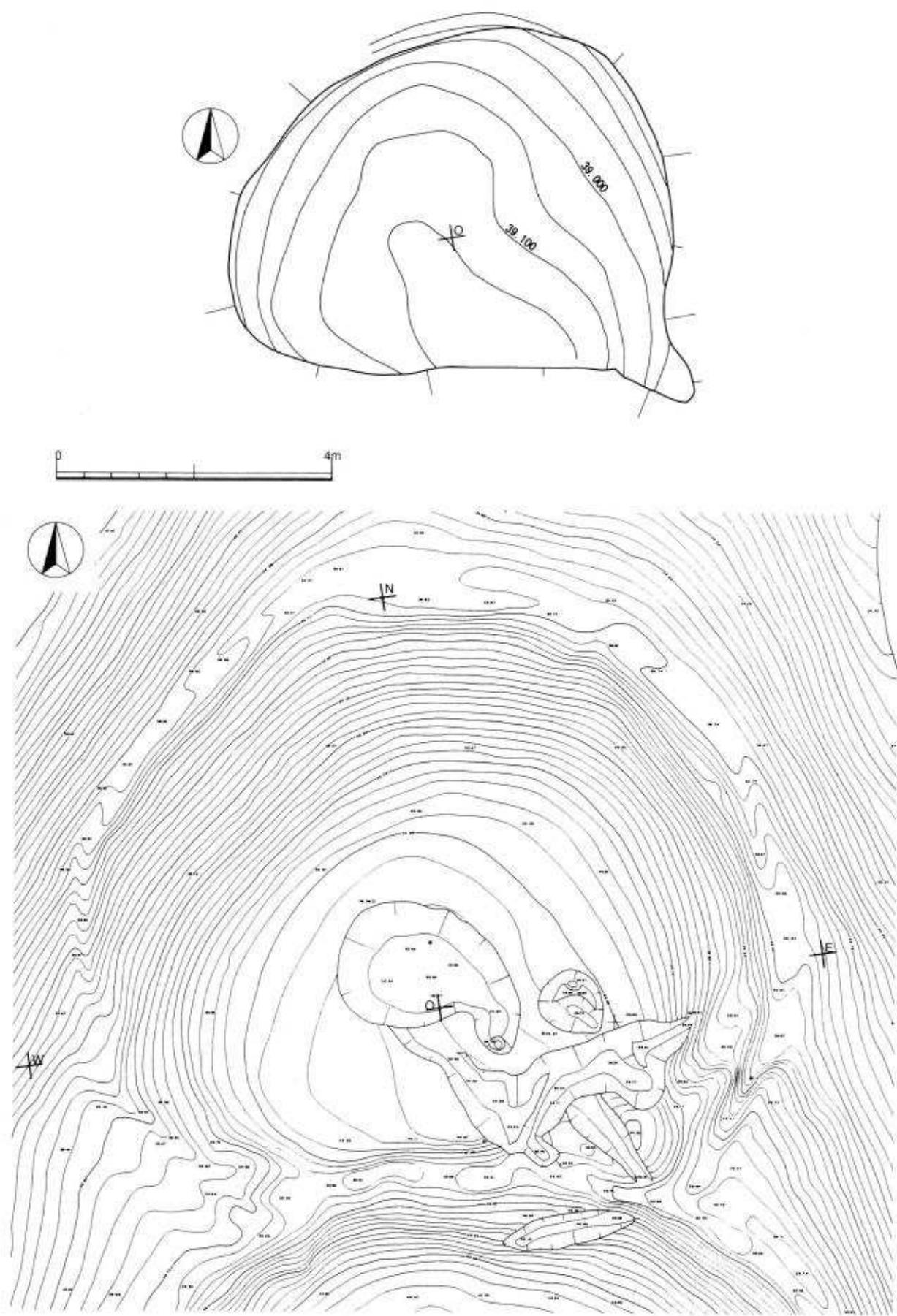
墳丘および周溝における遺物の出土状況については、第179図の遺物出土ドットマップ図・遺物出土状況図に示したように土器が出土している。墳丘南側の周溝で比較的まとまって土器片が出土しており、そのほとんどは土師器甕と思われるものの破片であるが、復元・図化が不可能なものばかりであった。一方、墳丘北側の裾部では須恵器壊身が割れた状態で1点出土しており、これについてはほぼ完形に接合できた。第187図の25がその須恵器壊身であるが、口縁端部が丸く仕上げられている点や、底部内面に不整方向のナデ調整痕が見られる点などから陶邑田辺編年のTK216型式期ごろに位置付けられるものと思われる。

B. 主体部

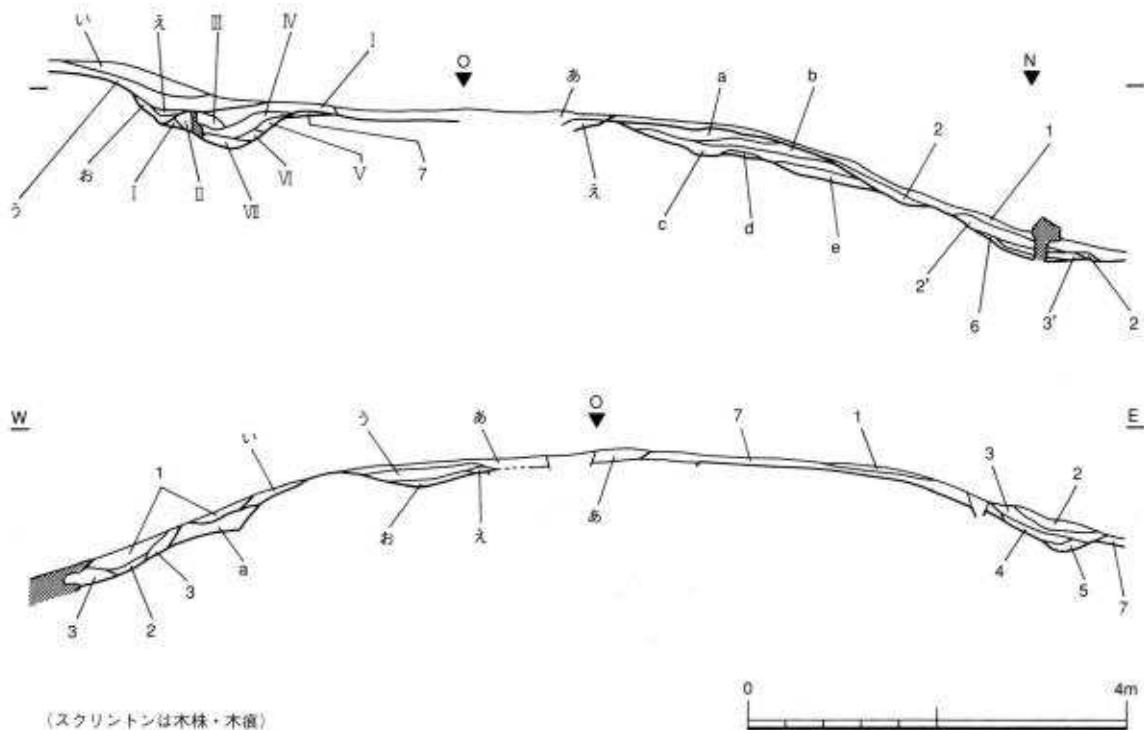
主体部については検出されていない。墳丘のほぼ中央に深さ1mほどの意味不明の土坑が1基存在しており、これによって主体部が確認できなかった。



第176図 F遺跡 8号墳墳丘北側裾部遺物出土ドットマップ図 (S=1/80)
および遺物出土状況図 (S=1/20) (H=37.700m)



第177図 F遺跡9号墳現況コンタ図（上段）・平面図（下段）（S=1/80）



(スクリントンは木株・木柵)

9号墳墳丘 土層註

1層：(にぶい) 棕褐色土 (7.5YR4/5~4/4)。表土層。木根多量含有。しまりなく、やわらかい。やや赤味をおびる。

2層：黒褐色土 (10YR3/2)。濃淡あり。黒色土粒を多く含む。やわらかく。しまり劣る。2' 層は、ややシルト～粘砂質の細粒、2層は粗砂質をやや多く含んで、ガリガリした部分がある。

3層：にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。全体やや粗砂質。黒色土粒子を全体に少量含む。カーボン少量含む。やややわらかく。しまり普通。3' 層は、粗砂礫の混入乏しく、シルト質～弱砂質で、シットとしている。

4層：(黄) 棕褐色土 (10YR4/6)。地山土の粗砂質でザラザラする。黒色土粒子をわずかに含み、カーボン少量含む。やや堅く。しまり普通。

5層：褐色土 (10YR5/6)。やや壤質。下部はにぶい黄褐色を呈する。地山土の灰白色シルト砂礫 ($\phi 1\sim 5mm$) を多く含有する。

6層：(にぶい) 黄褐色～黄褐色～明黃褐色土 (10YR5/4~6/4·10YR6/6)。地山土の濁り部分で、シルト質。やわらかい。

7層：明褐色土 (7.5YR5/6)。ややにぶく、橙色味をおびる。ザラザラの粗粒礫を全体にやや多く含む。地山あるいはa・b層に似る。

a層：にぶい褐色土 (7.5YR5/4)。粗砂礫を中量、シルト岩 ($\phi 1cm$) を少量含む。全体にやや赤味をおびて黒ずむ。堅く。しまり良い。カーボン少量含む。

b層：にぶい黄褐色土 (10YR5/4~5/6)。暗い。ガリガリの粗砂礫を多く含む。やわらかく。しまり劣る。

c層：褐灰色～灰黃褐色～(黒褐色) 土 (10YR4/1~4/2)。黒味強く。壤質で、炭化材 (最大 $\phi 3cm$) を極めて多量に含む。これを旧表土の扱いとしたため、a・b層を盛土としなければ墳丘と整合しない。しかし、中世の改変による可能性もある (カーボンの含まれ方が古墳的でないため)。

d層：灰黃褐色土 (10YR4/2)。c層よりやや明るい。カーボン中量含む。

e層：褐色土 (10YR4/4)。地山土とd層との間中漸移的層。カーボン少量含む。しまり劣る。

*a～e層は盛土層か？

I層：褐色土 (7.5YR4/4~4/6)。全体に赤味やや強い。灰褐色土粒を多く含み、暗い。やややわらかく。しまり普通。軟砂礫 ($\phi 0.5\sim 5mm$) をやや多く含む。カーボン少量含む。

II層：明褐色土 (7.5YR5/6)。弱砂質土で3層に近いが、若干明るく、また極めて軟質で、しまりない。木根に影響された層か。

III層：明(赤)褐色土 (7.5YR5/8)。2層に比しやや暗く、全体に赤味をおびる。弱砂質で軟砂礫をやや多く含む。比較的堅く。しまり良い。

IV層：明(黄)褐色土 (7.5YR5/8)。明黄褐色砂土地山土をやや多く含み、若干にぶい黄色味が強い。やわらかく。しまり劣る。

V層：(にぶい) 黄褐色土。地山の明黄褐色粗粒砂土を主体に。(赤)褐色土を少量含む。やわらかく。しまりない。

VI層：明(黄)褐色土 (7.5YR5/8)。IV層よりやや暗く、黄褐色～にぶい浅黄色砂土を多量に含む。やや堅く。しまりある。

VII層：黄褐色土 (2.5Y5/6)。明黄～浅黄～にぶい黄色の粗砂地山土を主体に。褐色土粒を極少量含む。やややわらかく。しまりない。

*I～VI層は10号墳の影響を受けた層。9号墳南側 (10号墳と接する箇所) の土層断面が、9号墳の他の土層断面と異なって、赤味のある層と粗砂質土を主体としており、10号墳の影響を受けていると考えられるので、I～VI層を9号墳の土層から分離した。しかし、10号墳の他の土層断面も、地山の相違により、このI～VI層とは、また異なる土相を示している。

あ層：褐灰～灰黃褐色土 (10YR4/1~4/2)。黒色土多量含有。表土層。やわらかく。しまりない。

い層：(にぶい) 明赤褐色土 (5YR5/4~5/6)。赤褐色粘土主体の流土層。10号墳～塚の土。

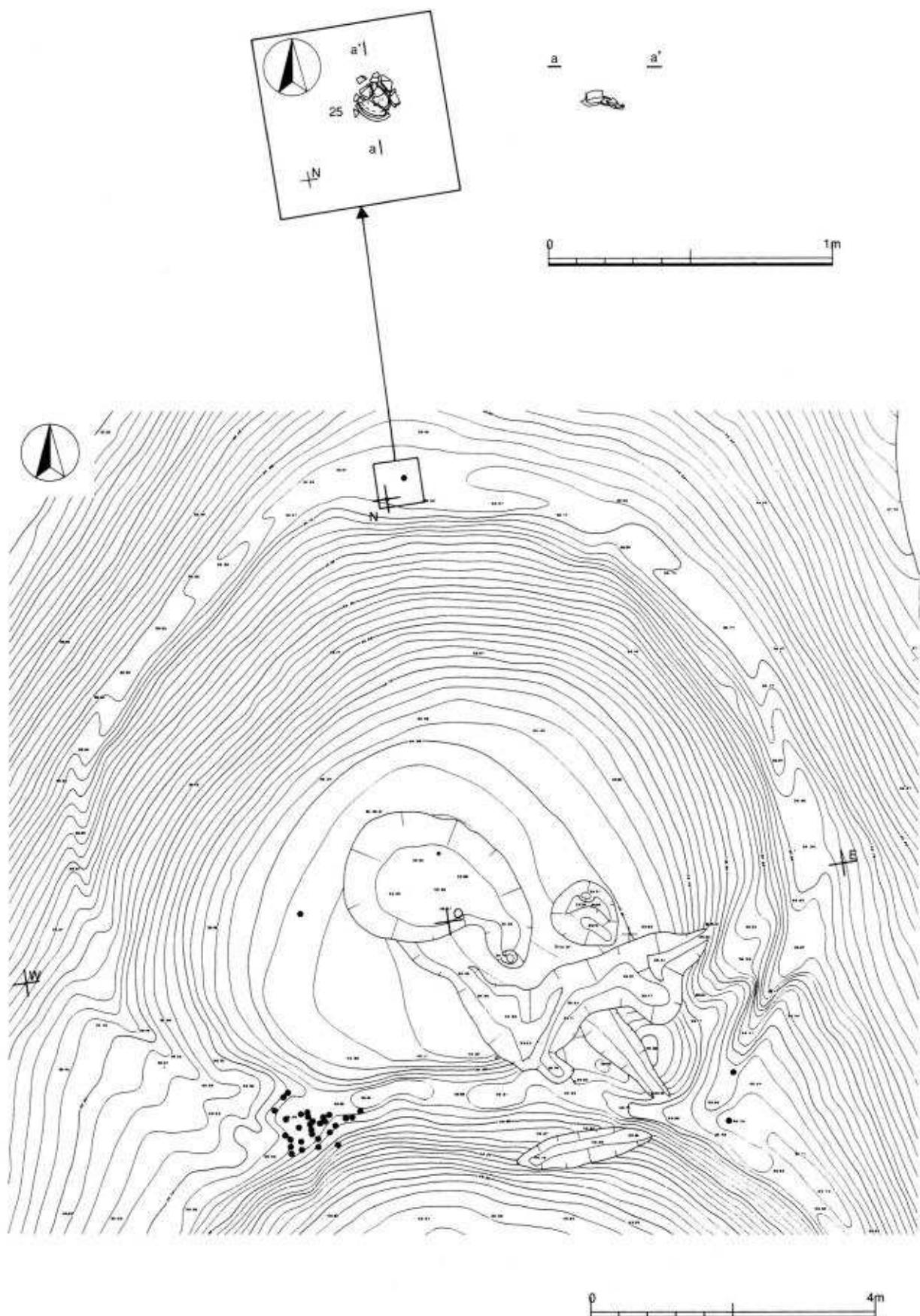
う層：黒色土。極めて黒く、灰層的。カーボン多量含有。やわらかく。しまり劣る。

え層：灰黃褐色土 (10YR4/2)。黒色土をやや多く含む。カーボンやや多く含有。やわらかい。

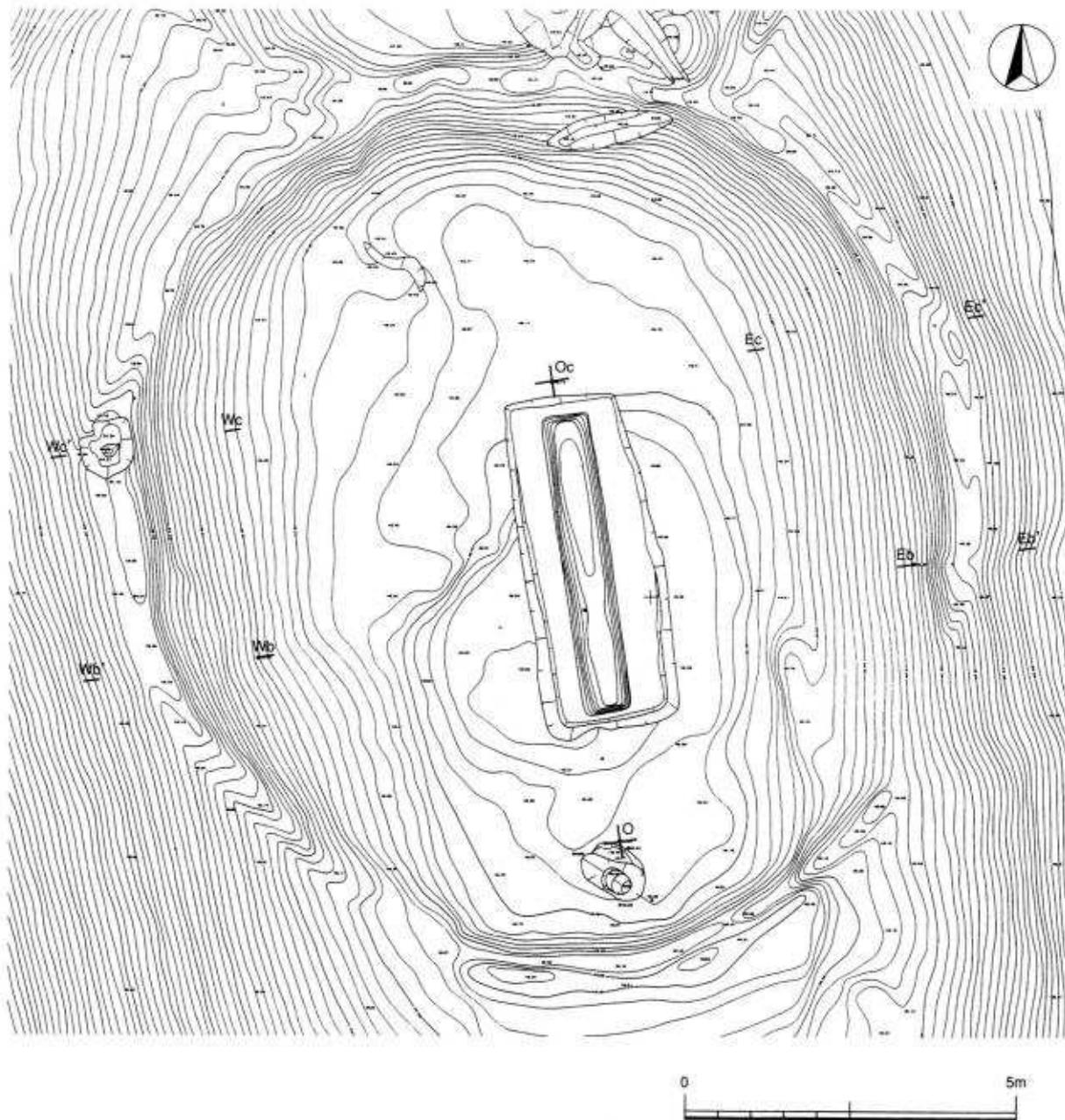
お層：にぶい褐色～明褐色土 (7.5YR5/4~5/6)。粗砂礫を多く含む地山土に黒色土粒を少量含み。灰褐色味をおびる。やや堅く。しまり良い。

*あ～お層は中世関連層か？

第178図 F遺跡 9号墳墳丘断面図 (S=1/80) (H=40.500m)



第179図 F遺跡 9号墳墳丘・周溝遺物出土ドットマップ図 (S=1/80)
および墳丘北側裾部遺物出土状況図 (S=1/20) (H=38.900m)



第180図 F遺跡10号墳平面図 (S=1/100)

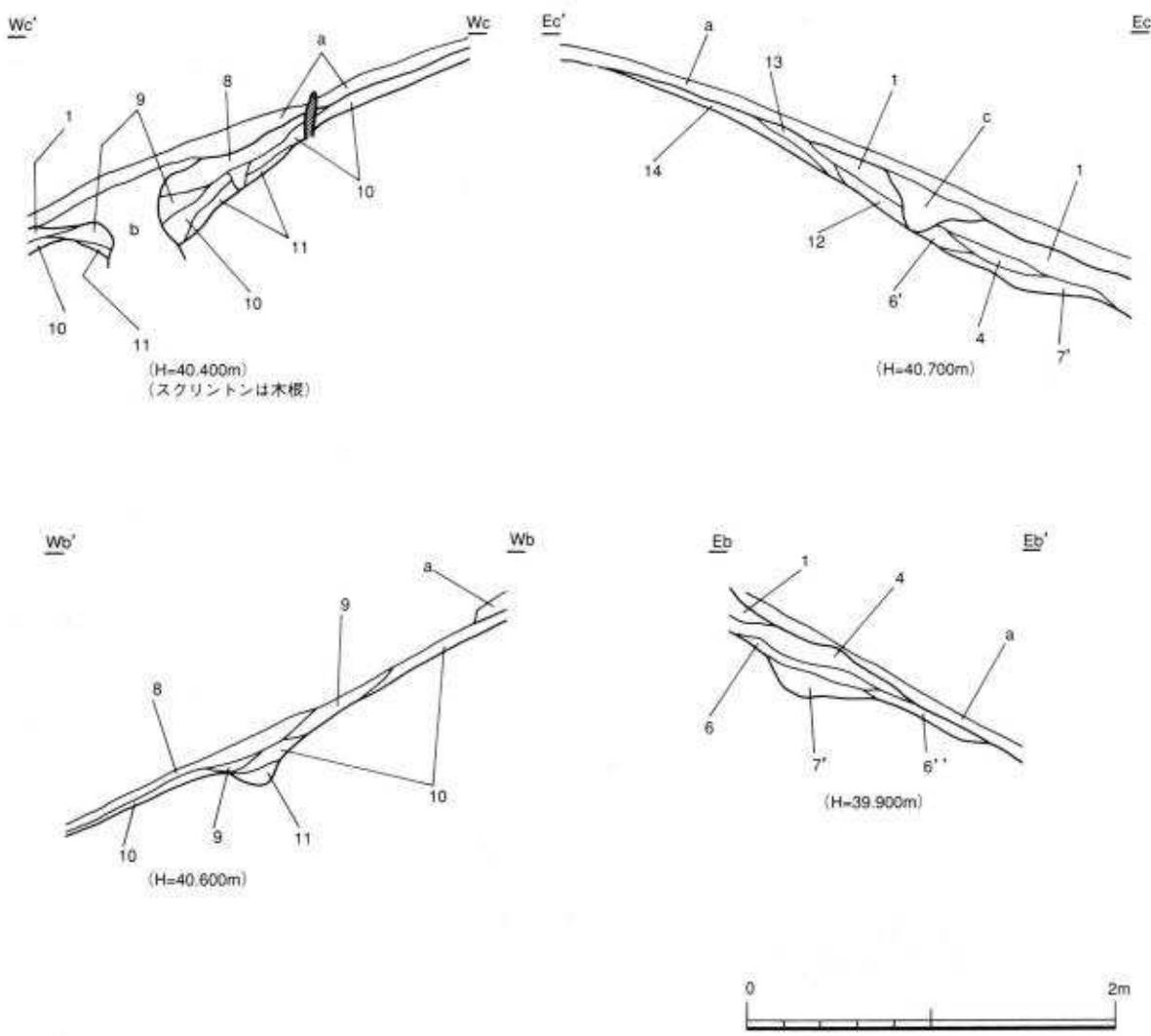
10号墳（第180図～第184図）

A. 立地・墳丘規模等（第180図・第181図）

T字状に連なるA尾根とB尾根との連結箇所、尾根の最高所に位置する。上部に中世の大型墳墓2基が構築されていたため、逆に墳丘が地滑り等による流出から守られ、F遺跡内では最も良好な遺存状態であった（第181図に周溝の土層断面図を掲載してあるが、墳丘上の土層断面図については、上部に構築されていた中世の大型墳墓のところを参照していただきたい）。墳丘規模については、周溝内側の立ち上がりからの数値で直径約12～13mを測る円墳であり、F遺跡内では比較的大型の墳丘をもつ。墳丘北側では前述の9号墳と周溝を共有する。なお、墳丘西側の周溝、第180図平面図にあるWcから概ね西へ160cm行ったところでは、周溝の上面から土師器高壙片1点（第187図26）が出土している。詳細な時期は定め難いが、概ね田嶋明人氏の漆町編年12・13群期ごろに位置付けられるものではないかと考えている。

B. 主体部（第182図～第184図）

墳丘の中央で整美な大型の墓壙を検出した。墓壙は2.1m×5mで、断面逆台形状の掘り方を成し、埋土で棺を



10号墳周溝 土層註

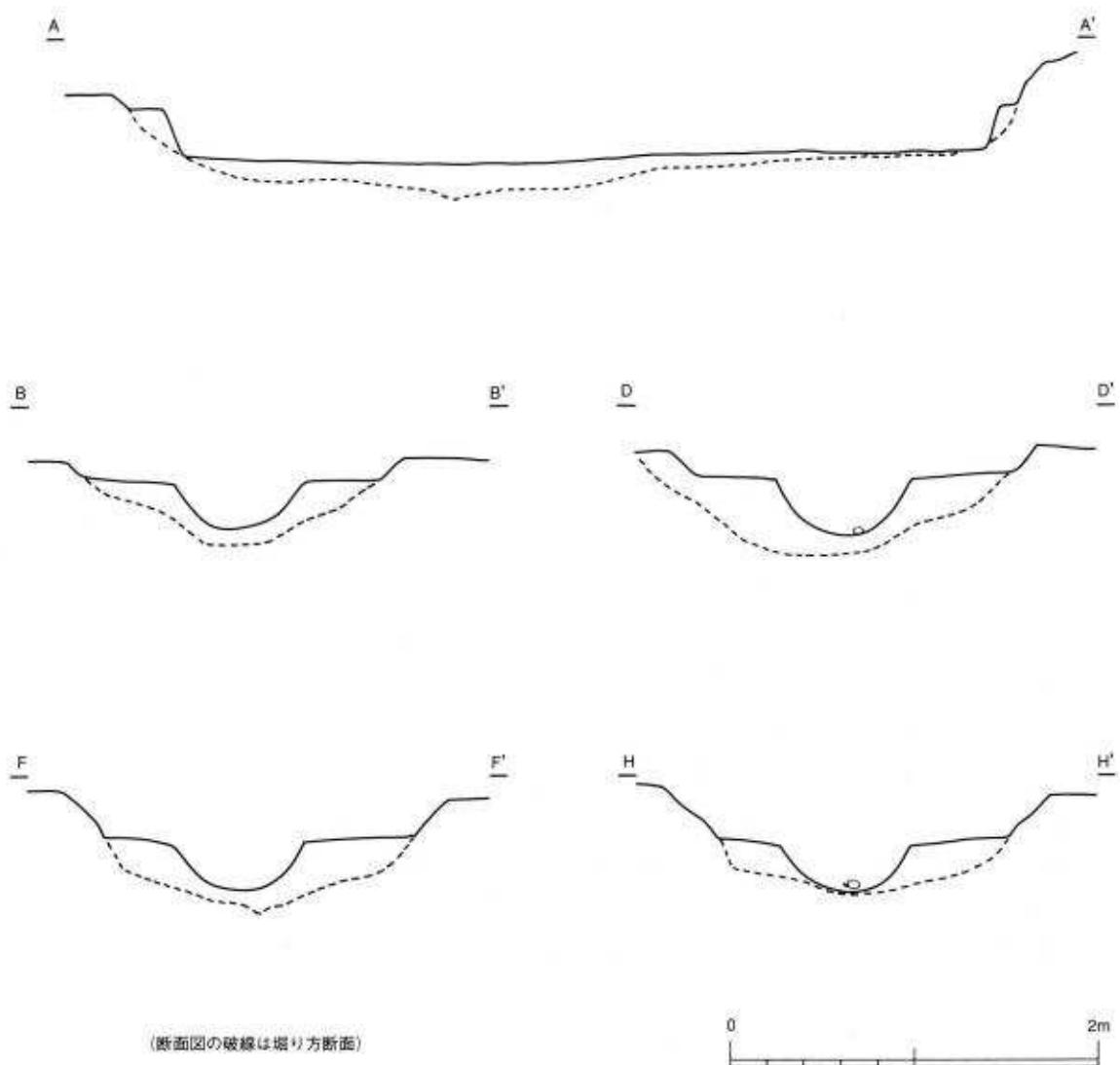
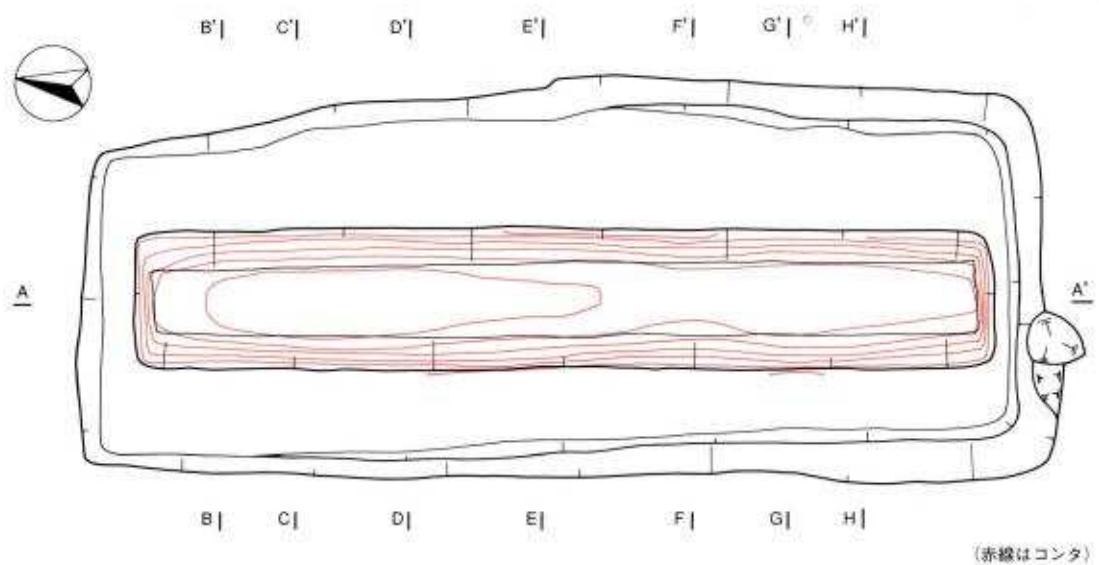
- 1層：褐色土 (7.5YR4/4~4/6)。全体に赤味やや強い。灰褐色土粒を多く含み、暗い。やややわらかく、しまり普通。軟砂礫 ($\phi 0.5\sim 5mm$) をやや多く含む。カーボン少量含む。
- 2層：明褐色土 (7.5YR5/6)。弱砂質土で3層に近いが、若干明るく、また極めて軟質で、しまりない。木根に影響された層か。
- 3層：明(赤)褐色土 (7.5YR5/8)。2層に比しやや暗く、全体に赤味をおびる。弱砂質で軟砂礫をやや多く含む。比較的堅く、しまり良い。
- 4層：明(黄)褐色土 (7.5YR5/8)。明黃褐色砂土地山土を全体にやや多く含み。若干にぶい黄色味が強い。やわらかく、しまり劣る。
- 5層：(にぶい) 黄褐色土。地山の明黃褐色粗粒砂土を主体に。(赤)褐色土を少量含む。やわらかく、しまりない。
- 6層：明(黄)褐色土 (7.5YR5/8)。4層よりやや暗く、黄褐色～にぶい浅黄色砂土を多量に含む。やや堅く、しまりある。6'は、地山が9号墳と10号墳との堀の周溝より細砂を含むことに起因し、やや細粒の砂を主体とし、褐色土を含む。6''は、6層に比し浅黄色砂土をより多く含む。6層と7層との中間的層。黒褐色土粒子をやや多く含み、暗い。
- 7層：黄褐色土 (2.5Y5/6)。明黄～浅黄～にぶい黄色の粗砂地山土を主体に褐色土粒を極少量含有。やややわらかく、しまりない。7'は、地山が9号墳と10号墳との堀の周溝より細砂を多く含むことに起因し、やや細粒の砂を主体とし、褐色土を含む。
- 8層：褐色土 (10YR4/6~4/4)。比較的墨(灰褐色)味のある暗い層で、周溝プラン確認層。小軟砂礫を全体に中量含む。
- 9層：(にぶい) 褐色土 (10YR5/3~4/3)。10層との中間的層で、淡く、灰褐色味をおびる。小軟砂礫を中量～やや多く含む。
- 10層：にぶい黄褐色土 (10YR5/4)。2.5Yの黄褐色味を増す。軟質砂礫を多く含み、全体がややシルト質～弱砂質で、ガリガリしている。
- 11層：黄褐色土 (10YR5/6)。やや薄りをもち、地山より若干しまりに欠ける地山土主体層。軟砂礫を極めて多量に含むガリガリ層。
- 12層：褐色土 (10YR4/4)。やや異質で、灰褐色味強く、しまりある暗い層。土器を伴う(土器は縄文土器か?)。土坑覆土の可能性あり。
- 13層：にぶい赤褐色土 (5Y4/3)。粘質地山土主体だが、全体に灰褐色土を多く含み、やや暗い。
- 14層：深赤褐色質土 (5YR4/6~4/4)。濁った地山土で、灰褐色土を含む。

a層：腐葉層

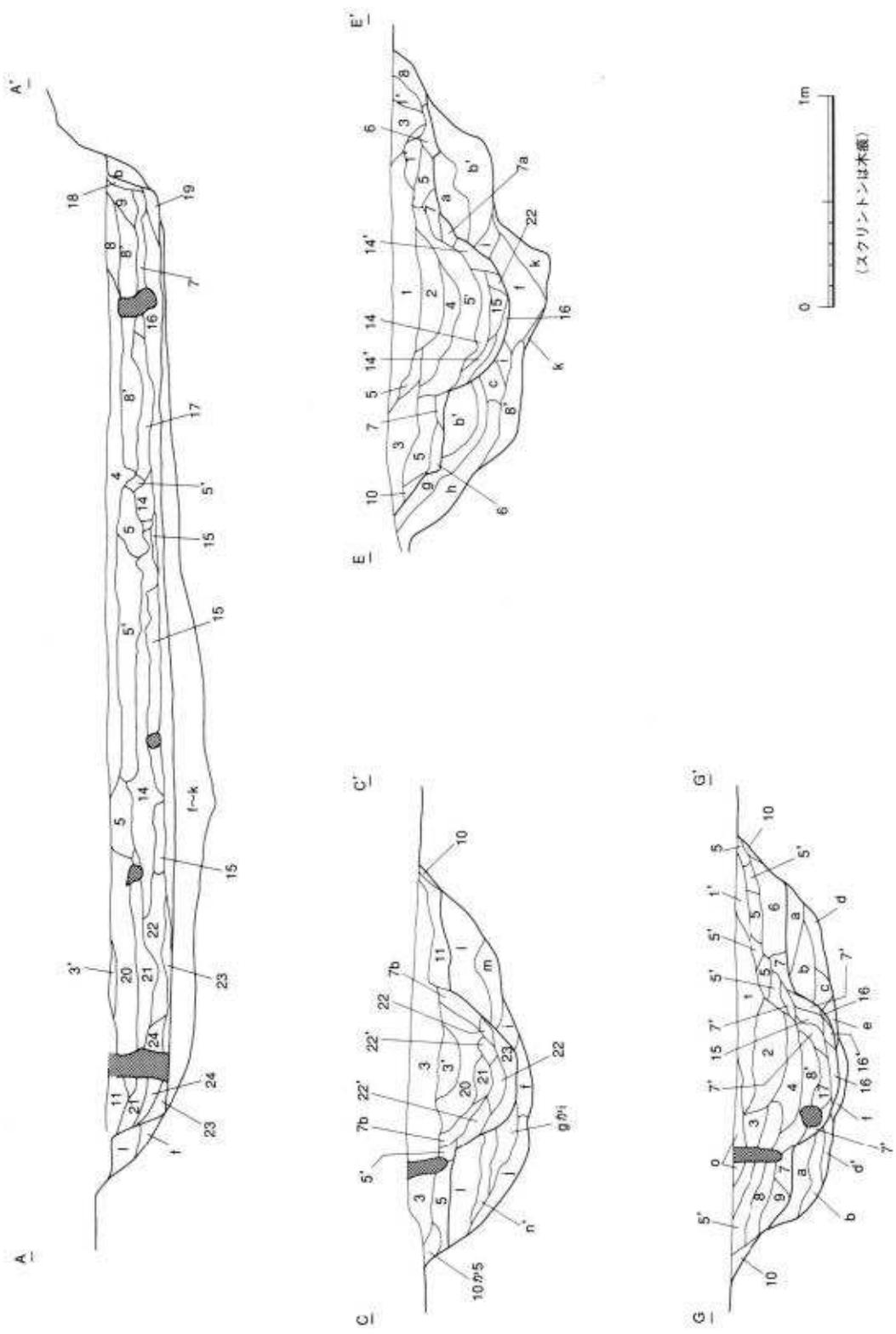
b層：カーボンを多く含むカクラン層。中世関連か?

c層：にぶい黄褐色土。やや暗い。しまり良く、やや堅い。

第181図 F遺跡10号墳周溝土層断面図 (S=1/40)



第182図 F遺跡10号墳主体部平面図・断面図 (S=1/40) (H=41.000m)



第183図 F遺跡10号墳主体部土層断面図 (S=1/30) (H=41.000m) (土層註は第11-1表・第11-2表)

第11-1表 10号墳主体部 土層註（その1）

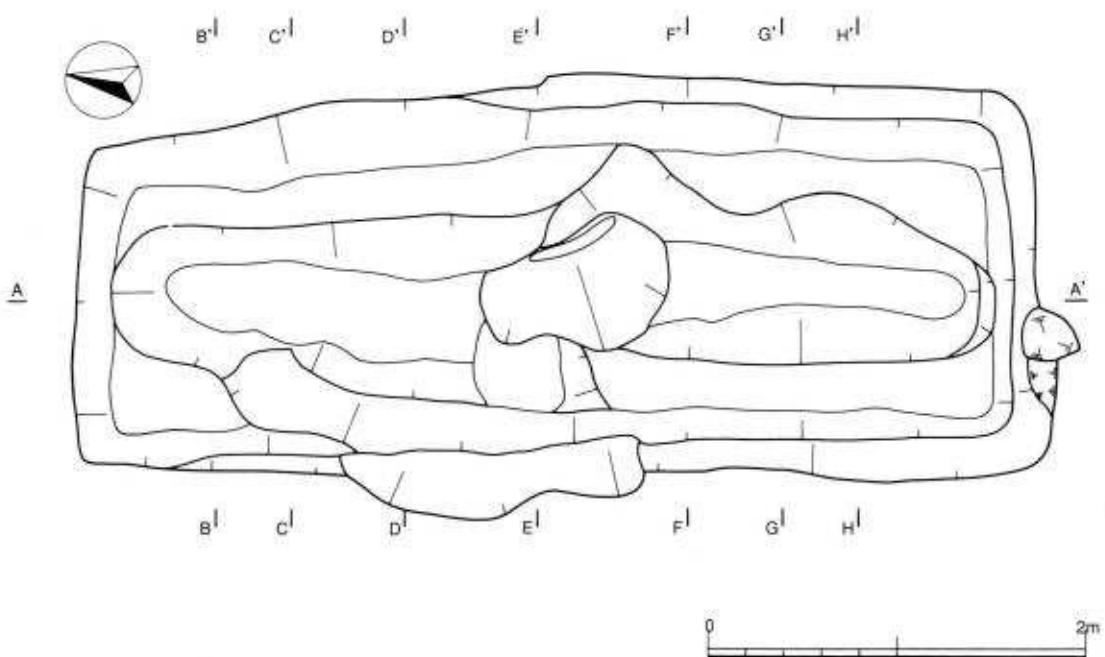
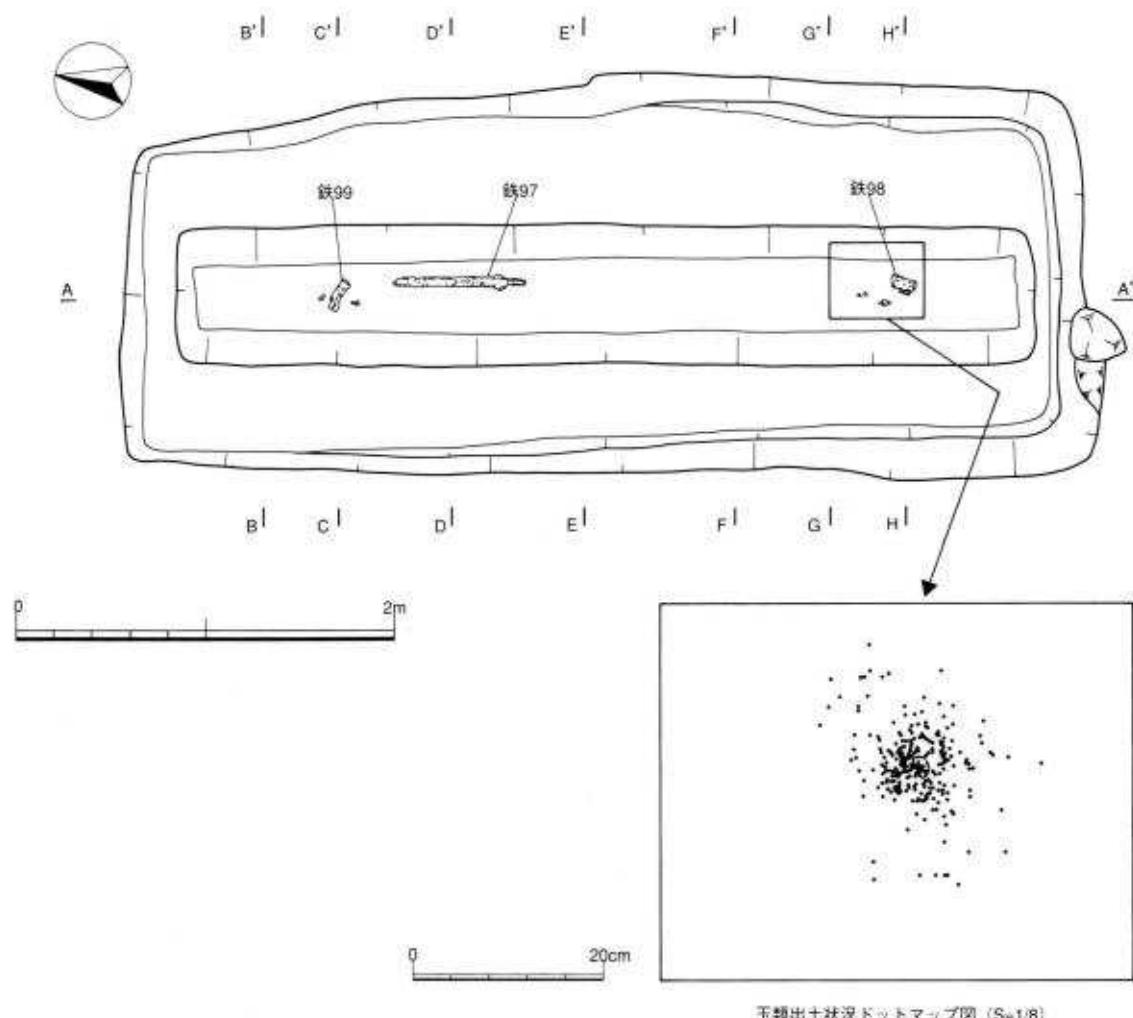
層名	土層註
0層	1層土に黒色土粒が多量混在。
1層	にぶい黄褐色土（10YR5/4～2.5Y5/6）。灰白～淡黄色軟質礫（0.5 mm～最大5 mm）を多く含む粗粒砂。全体に弱砂質でガリガリ～シャリシャリしている。やや粗粒。比較的やわらかく、しまりはやや劣る。1'層は、赤褐色土をやや多く含んで、赤味をもつ。やや堅い。
2層	にぶい（黄）褐色土（7.5YR5/4～10YR5/4）。1層土に赤褐色粘質土・壤質土がやや多く含まれ、全体に弱い赤味をおびる。ややしっとりする。しまりなく、非常にやわらかい。
3層	（赤）褐色土（7.5YR4/6）。赤味は強い。赤褐色土と1層土の同等混在で、赤褐色粘土ブロックをやや多く含む。軟質細礫を非常に多く含み、所々に暗褐色の渦りあり。1・2層に比し、堅く、しまり良い。サビ色岩も多く、全体にガリガリした感じ（白色粗砂粒多量の影響）。3'層は軟質部。
4層	にぶい（黄）褐色土（10YR5/4～7.5YR5/3）。弱砂質ではあるが、2層よりシルト質～壤質の細粒に近く、やわらかいが、しまりは2層に勝る。
5層	（淡）赤褐色土（5YR4/6）。同色粘質土・ブロック主体に、にぶい黄褐色土を少量含む。5'層は、ややにぶい黄褐色土を多く混入し、ややシャリシャリする。5'層は5層埋土が落ち込んで、2層土を多く含むことになったことを示す場合が多い。
6層	渦赤褐色土。赤褐色粘質土・淡黄褐色シルト～砂質土・灰白色粘質土（少量）と地山のサビ状岩片を多く含む。堅く、しまり良い。掘り方埋土か。
7層	にぶい黄褐色土（10YR・2.5Y5/4）。弱砂質で、棺のふちに認められる。また、埋土中に時折大きなブロックで含まれる。やわらかく、しまりやや劣る。7'層は、赤褐色土を少量含んで、やや渦る7層の流出土。7'層については、棺上端ふちの砂質土埋土である7層の崩壊土と、棺床壁地山砂土の崩壊土層との区分はあいまいで、G-G'ラインの壁際にある7'層などは、地山の流入土と考えられる。
7a層	灰黄～にぶい黄色土（2.5Y6/2～6/3）。にぶい黄色砂土と灰黄～にぶい橙色粘質土のブロックからなる棺のふちの土。7層と同じ性格。
7b層	7層と対比されるが、この付近の埋土に近く、粗粒の砂土主体で、赤褐色土をブロック状に少量含む。
8層	にぶい黄褐色土（10YR5/4）。細軟礫多量含有の弱砂質土で、シャリシャリする。硬化した4層土のようで、堅く、しまり良い。赤褐色土粒を少量含有。8'層は8層と同質で、やややわらかく、ややしまり劣る。8層→8'層→4層の連続流出土で、この順でしまりがなくなっていく。
9層	黄褐色土（2.5Y5/4）。7層とほぼ同じ。泥岩礫（最大3 cm）を多く含む。
10層	赤褐色土。5層に似る。赤褐色粘質土主体で、壁崩れの場合と5層対比の場合がある。堅く、しまり良い。1・2層土をブロック状で含む。
11層	渦赤褐色土（5YR5/4～4/4～4/6）。3層土に似たガリガリ質土（にぶい黄褐色粗砂質土）に赤褐色粘土ブロックが多く混在する埋土層で、両ブロックの混在で赤褐色粘土が多量混じる。
12層	欠番
13層	灰黄褐色土（10YR4/2）。白色礫を多量に含むガリガリした土。全体に暗く、黒味強い。
14層	にぶい褐色土（7.5YR5/4）。15層に似るが、粘質は弱く、にぶい黄褐色弱砂土を比較的多く含んで、シャリッとしている。しまり良い。14'層は、14層とほぼ同じ粘性の強い層でだが、やや軟質の15層や22層の存在により、14層より分離した。（14層・14'層・15層は一体的か。）
15層	渦にぶい（赤）褐色土（5YR5/4～7.5YR5/4）。16層にはほぼ同じ含有土の粘質土で、にぶい黄褐色弱砂土がやや多く、比較的やわらかい。a層に連続する棺被覆土の落下土か。しまり良い。
16層	にぶい（黄）褐色（7.5YR5/4～10YR5/4）～灰褐色土（7.5YR5/2）。棺床地山の黄褐色砂土を多く含むが、粘性あるにぶい褐色土を多く含み半粘質。砂質と粘質のムラがある。16'層は赤褐色粘土粒がやや多い16層内の嵌入層。
17層	にぶい褐色土（7.5YR5/4）。8'層に似るが、全体に赤褐色土を比較的多く含み、赤味強い。5'層よりは粘性に乏しいが、連続すると考えられる5"層か。

第11-2表 10号墳主体部 土層註（その2）

層名	土層註
18層	にぶい黄褐色土。小口壁の赤褐色粘質土を中量含むシャリッとした土で、淡く、若干黄橙に近い。非常に堅く、しまり良い。
19層	にぶい橙色土（5YR6/3）。2.5YRのにぶい橙色粘土、灰褐色粘土が多く、母体はにぶい黄色地山砂土。やややわらかい。
20層	にぶい褐色土（7.5YR5/4）。3層土と同じく白色粗砂礫を多量混入し、ガリガリしている。3層に比しにぶい黄褐色砂質土が多量混在する。赤褐色粘土ブロックは同様に比較的多い。堅く、しまり良い。3層・3'層・20層は埋土の11層に似ている。埋土の6層的な5層や5'層、14層などと同じ層。20層などは14層に対比。
21層	にぶい褐色土（7.5YR5/3）。20層に比し粗砂礫少なく、やや全体に粘性おびて、赤褐色粘土ブロック含有もやや劣り、暗い。
22層	黄褐色土（2.5Y5/4）。地山のにぶい黄色砂土を主体とし、にぶい褐色土、赤褐色土粒・ブロックを少量含む。とてもやわらかく、しまりない。23層よりはわずかに粘性あり。22'層は21層との中間的で、赤褐色土粒をやや多く含む。
23層	黄褐色土（2.5Y5/4）。にぶい黄色砂土を主体に粘質土をごくわずかに含む。16層に似るが、砂土主体で粘性がほとんどない。
24層	にぶい赤褐色土（5YR5/4）。にぶい黄色砂土を母体に赤褐色粘土ブロックを多く含む。
a層	湯にぶい明赤褐色土（5YR・2.5YR5/4～5/6）。明赤褐色粘土、明赤灰色粘土を主体に、灰白色粘土、にぶい黄褐色土のブロック、灰白色泥岩片を多く含む。この面でヌッタリした粘質面をなす。棺プラン確認面。
b層	にぶい褐色土（7.5YR5/4）。にぶい黄褐色砂質土を母体として多く、にぶい褐色～にぶい（赤）褐色粘質土ブロックを中量、灰白色粘質土ブロックを少量含む。
b'層	にぶい褐色土（7.5YR5/3）。母体となる砂質土は、にぶい黄褐色に加え、より明るいにぶい黄色砂土をブロック状で含む。赤褐色粘土ブロック（φ1～3cm）を中量、灰白色粘土ブロック（φ1～3cm）、にぶい橙色ブロックを少量含む。
c層	（にぶい）褐色土（7.5YR5/3～5/4）。にぶい褐色～にぶい赤褐色粘質土を主体に、にぶい黄褐色砂質土が少量混じる。
d層	湯にぶい黄褐色土（10YR5/4）。にぶい黄褐色粘質土ブロック、にぶい黄色砂質土、赤褐色粘土ブロック、灰白色粘土ブロックを同等含有。
d'層	にぶい橙色土（7.5YR6/4）。d層に灰白色粘質土・同シルト質土が多く混じり、白っぽい。
e層	明黄褐色土（10YR5/6）。にぶい黄色～黄橙色砂質土を主体に、にぶい褐色土粒、赤褐色粘土粒が少量混じる。
f層	黄褐色土（2.5YR5/4）。にぶい黄色（～明黄褐色）砂質土を主体に赤褐色粘土ブロック（φ1～3cm。最大10cm以上）が散在し、全体に赤褐色粘土粒も微量混じる。
g層	黄褐色土（2.5YR5/4）。f層と同じ。赤褐色粘土ブロックは、特大がなく、1～2cmを少量、粒子を含有。
h層	にぶい暗黄褐色土（10YR4/3）。暗褐色味の強いやや異質な層で、全体にやや粘質。赤褐色粘土粒を全体に含み、時折ブロック状で含む。
i層	黄褐色土（2.5Y5/4）。f層・g層と同じであるが、明赤褐色・灰白色の合体粘土ブロックをやや大きな塊で中量含む。
j層	にぶい赤褐色粘土（2.5YR4/4）。白色粘土ブロックを微量含む。貼り床土層。
k層	明黄褐色土（2.5YR4/6）。地山の可能性もあるが、同色の粗粒砂土に時折赤褐色粘土ブロックが少量混じる。
l層	11層と同じ。
m層	にぶい（赤）褐色土（5YR4/4）。同色の弱粘質～壤質土を主体に、にぶい黄～黄褐色砂土を少量含む。
n層	にぶい橙色土（5YR6/4～5/4）。同色粘質土を主体に黄褐色砂土が少量混じる。

※1～24層については、すべてカーボンを少量含む。

※a～n層は掘り方埋土。



第184図 F遺跡10号墳主体部遺物出土状況図・掘り方完掘後平面図 (S=1/40)

固定して2段掘り状とするものであった。棺は、幅0.75m、長さ4.3mの割竹形木棺である。主軸は北から西へ約9°振る。棺内遺物の出土状況図については第184図に掲載してあるが、鉄剣1点、鉄斧1点、U字形刃先1点、曲刃鎌1点の各鉄製品が出土、棺の南側では玉類が集中しており、勾玉1点、ガラス小玉1点、白玉約230点が出土している。その他、棺内掘削の段階で堅櫛1点の痕跡が認められたが、取り上げはできなかった。(なお、主体部上部から器種不明の土師器片数点も出土していた。)

引用・参考文献

- 田辺昭三 1981「須恵器大成」 角川書店
中村 浩 1981「和泉陶邑窯の研究」 柏書房
田嶋明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」「漆町遺跡Ⅰ」 石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人 1987「V遺構・遺物(古墳時代～平安時代)」「永町ガマノマガリ遺跡」
石川県立埋蔵文化財センター
桜田 誠 1997「八里向山遺跡」「発掘された北陸の古墳報告会資料集」
まつおか古代フェスティバル実行委員会

第3節 土器

F遺跡の出土土器は、10号墳主体部の上部で器種不明の土師器片数点が出土した以外は、いずれも周溝・墳丘裾部ないしは墳丘上からの出土であり、図化可能な土器が出土した古墳には1・2・4・8・9・10号墳がある。但し、10号墳については、主体部上部の細片以外は、墳丘西側の周溝上面から出土した土師器高坏片1点のみである。4号墳についても、周溝内から比較的定量の土師器片が出土したが、そのほとんどは復元・図化し得ない破片であり、図化できたものは土師器甕の口縁部片1点のみである。1号墳では、やや少量ではあるが、墳丘より西へ若干離れた箇所から比較的まとまって土師器片が出土しており、これらは地滑り等によって流れ出たものと考えられる。また、墳丘より北西へ離れた箇所からも須恵器坏身の破片が数点出土している。2号墳では、墳丘北側の周溝内の一画から供献土器(須恵器坏蓋2点、須恵器坏身2点、土師器碗3点)が並べられたように出土し、さらに南～南西側の周溝から須恵器甕の破片が出土していた。8号墳については、墳丘北側(7号墳側)の裾部より良好な一括供献土器(須恵器甕1点、須恵器ハソウ1点、土師器碗4点、土師器甕1点、土師器壺1点)が出土した。但し、これらの土器は7号墳に付く可能性もある(なお、7号墳出土土器については、これら供献土器以外では、土師器細片が数点出土した程度であった)。また、9号墳においては、墳丘南側の周溝で、復元・図化し得ない土師器甕と思われるものの破片が比較的まとまって出土していたが、北側の裾部では、ほぼ完形に接合できた須恵器坏身1点が出土した。上述した以外の古墳における出土土器については、5号墳では器種不明の土師器細片が数点出土した程度で、3・6号墳では出土土器がまったくないという状況であった。

以下、本節では、図化し得たF遺跡の出土土器について、1号墳より順に古墳ごとに報告していく。

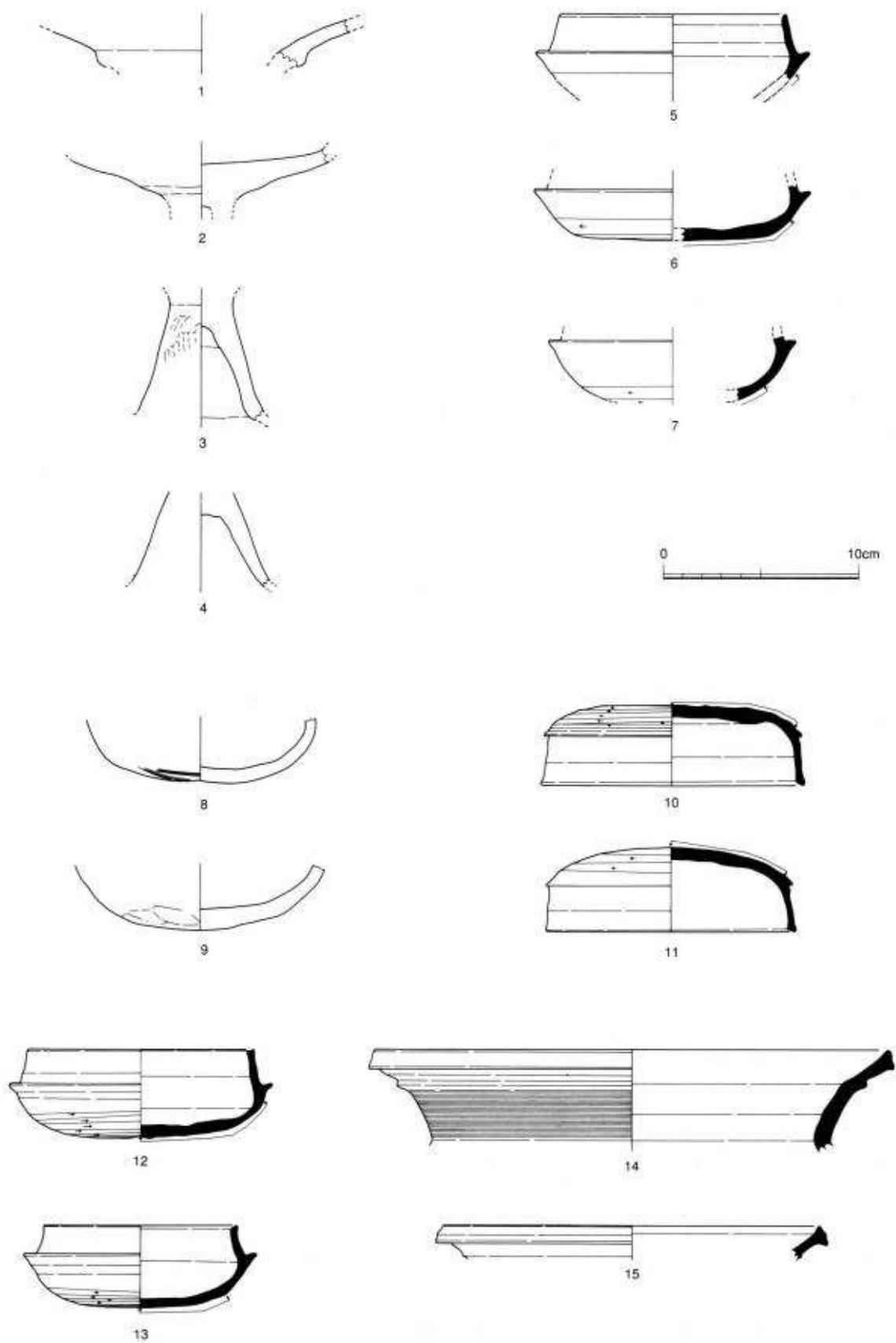
1号墳出土土器(第185図1～7)

土師器(1～4)

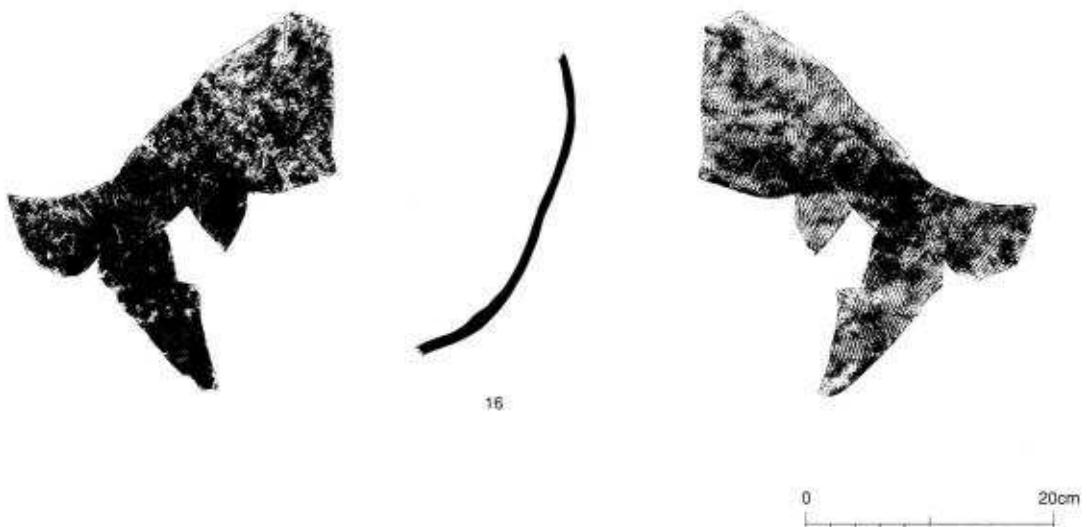
1については出土地点不明、2～4は墳丘より西へ若干離れた箇所から出土した。1は坏体部から坏底部へ至る屈曲箇所の外面に稜をもつ高坏坏部の体部片、2は屈曲箇所の外面に稜をもたないと思われる高坏坏部の底部片である。いずれの内外面も摩滅等により調整不明である。なお内外面の色調はやや赤味が強い。3・4は高坏の脚部片で、いずれも脚柱部は低く、3は脚柱部が下方へ比較的開かず、4は比較的開く。3の脚柱部外面はヘラ磨き、内面は強いヘラナデ(ヘラ削り)が施されている。4の内外面は摩滅により調整不明である。

須恵器(5～7)

5～7の坏身片は出土地点不明であるが、7は墳丘より北西へ離れた箇所から、6は墳丘よりさらに北西へ離れた箇所から同一個体と思われる破片が出土しており、6・7は墳丘から北西へ離れた箇所から出土したものと思われる。5は図上復元で口径11.4cmを測り、口縁端部は丸く作られている。7については、同一個体と思われる



第185図 F遺跡1号墳出土土器(1~7)・2号墳出土土器(8~15)(S=1/3)



第186図 F遺跡 2号墳出土土器 (S=1/6)

破片のなかに口縁端部の破片があり、その端部には内傾する段が見られる。7の底部回転ヘラ削りは、5・6に比べ施される範囲が狭く、粗い印象を受ける。また7の器面の色調は、5・6に比べて白っぽい灰色であり、さらに、5・6の胎土では比較的砂礫が目立たないのに対し、7の胎土では砂礫が目立つ。(以上の点と法量から判断して7は陶邑田辺編年のMT15型式期ごろと考えている。)

2号墳出土土器 (第185図8~15、第186図16)

8~13は墳丘北側の周溝内の一画から出土したもの、14~16は墳丘の南側ないしは南西側で出土したものである。なお、墳丘北側の周溝内の一画からは、須恵器壺蓋2点、須恵器壺身2点、土師器碗3点が出土したが、そのうちの土師器碗1点(底部のみ残存)については、非常にもろくて摩滅が著しく、本報告では図化できなかった。また、墳丘の南~南西側では須恵器壺の破片が出土していたが、接合・復元ができず、本報告では口縁部片と一部の体部片の図を掲載するのみに留めた。

土師器 (8・9)

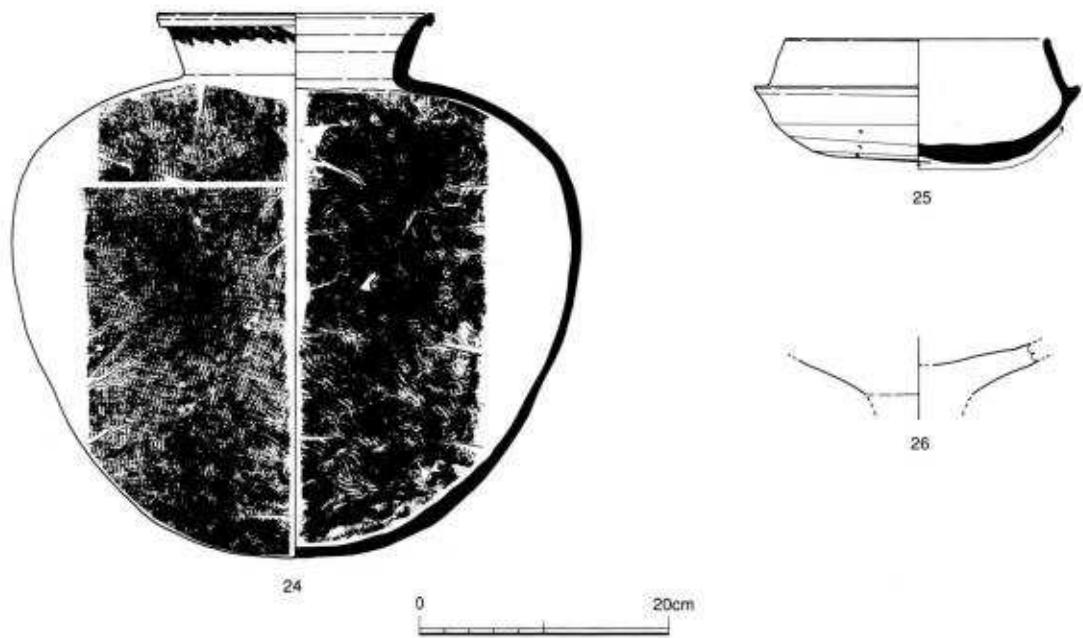
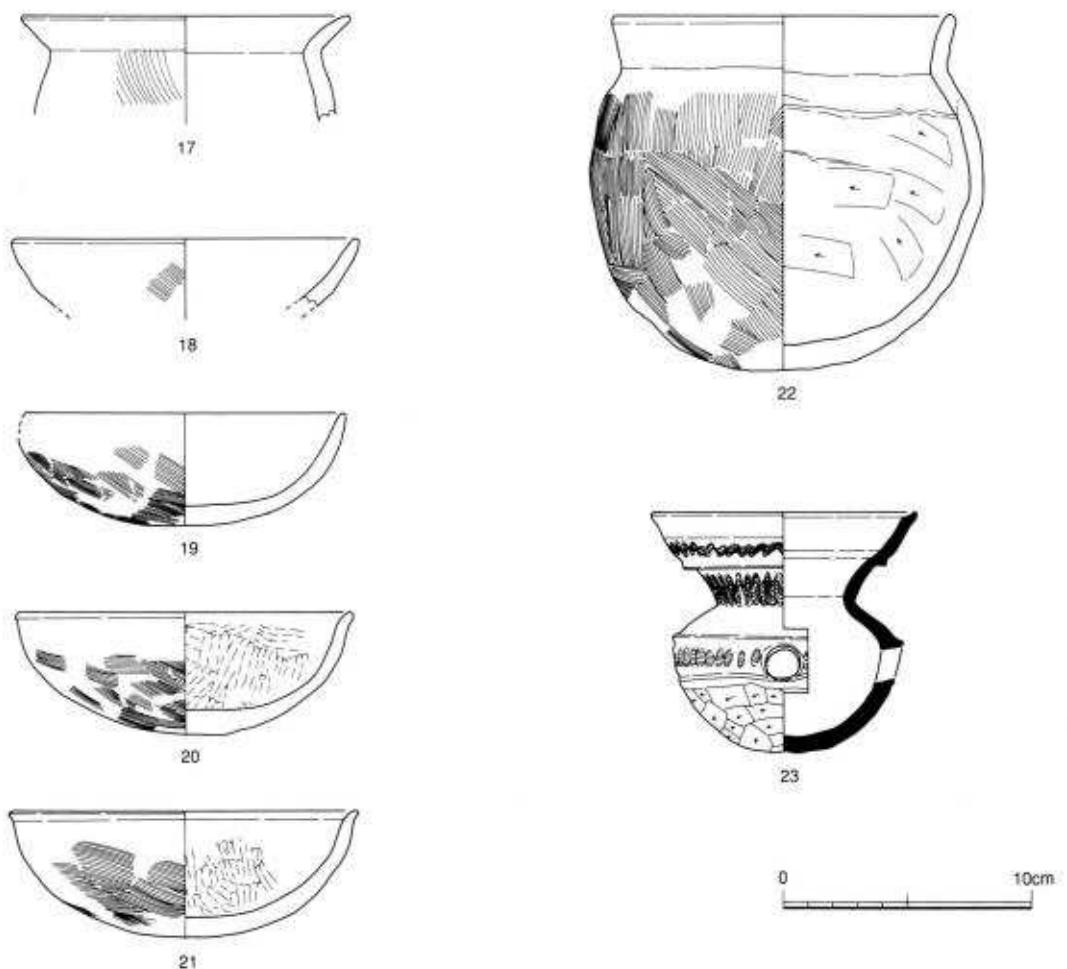
8・9は碗の底部で、概ね図化した部分の全周が残存していた。8の底部外面はハケ調整、9の底部外面は粗いヘラ削りが施されている。内面はいずれも摩滅が著しく調整不明。胎土の色調はいずれも赤味が強い(図化できなかった1点についても赤味が強い)。

須恵器 (10~16)

10・11は壺蓋で、10は破片の状態で出土したが完形に接合ができ、11は完形の状態で出土した。口径は10が13~13.3cm、11が12.4~12.6cmを測る。10の口縁端部はわずかに凹面をなして内傾しており、11の口縁端部には不明瞭ながら内傾する段が見られる。また、11の天井部内面の中央には一方向のナデ調整痕が見られる。

12・13は壺身。12は完形の状態で出土し、13は完形に接合された。口径は12が11.2~11.4cm、13が9.8cmで、13の口径は12に比べ小さい。また、13の器面の色調は、比較的青味の濃い青灰色の12さらには壺蓋の10・11に比べやや白っぽく、灰色に近い印象を受ける。なお口縁端部については、12には内傾する明瞭な段が見られるが、13の内傾する段は不明瞭である。

14・15は壺の口縁部片、16は、墳丘の南~南西側で出土した壺の体部片のうち、比較的大きく接合できた体部片である。16の外面叩き文様は、花塚信雄氏の分類(花塚1985)におけるHa類(木目が掘り込みに対して直交するもの)で、その上から横方向のカキ目が施されている。内面はナデ消しされているが、一部でかすかに当て具痕が見られる。



第187図 F遺跡4・8・9・10号墳出土土器 (24以外はS=1/3。24はS=1/6)

4号墳出土土器（第187図17）

土師器（17）

17は墳丘南側の周溝から出土した壺口縁部片。口縁部外面はヨコナデ、頭部より下の外面はハケ調整されており、内面は摩滅により調整不明である。

8号墳出土土器（第187図18～24）

18～24は墳丘北側（7号墳側）の裾部から出土したものである。なお、この箇所からは須恵器甕1点、須恵器ハソウ1点、土師器碗4点、土師器甕1点、土師器壺1点が出土していたが、そのうちの土師器壺については、非常にまろくて摩滅が著しく、また接合・復元がほとんどできなかったため、本報告では図化しなかった。

土師器（18～22）

18～21は碗で、18の口縁部片は口縁部残存率で5/16の残存、19・21はほぼ完形に接合でき、20はほぼ完形の状態で出土した。18・19は口縁端部が丸く作られている。20・21の口縁端部は外反しているが、その端部はさほどのがてない。18の体部外面、19～21の体～底部外面はハケ調整、20・21の体～底部内面はヘラ磨きが施されている。また20の口縁端部内外面はヨコナデされている。その他の部分は摩滅により調整不明である。

22は甕で、体部はすべて残存しているが、口縁部は約1/3のみの残存である。体・底部の外面はハケ調整、内面はヘラ削りされ、口縁～頸部の外面、口縁部の内面はヨコナデが施されている。外面では概ね胴部最大径のところから底部にかけてススラしき黒いものが付着している。

なお、本報告で図化できなかった土師器壺については、そのほとんどが体～底部の破片であるが、くの字状の口縁部片も数点出土している。これについては、胎土の色調が赤色土器ともいえる赤味の強いものであり、この点から、甕ではなく、くの字口縁をもつ壺と判断した。なお器面調整については摩滅により不明である。

須恵器（23・24）

23はハソウ。ほぼ完形の状態で出土した。口径10.6cm、体部最大径9.4cmで、口径が体部最大径を上回る。口縁部と口縁部の外面に波状文、胴部外面にある2条の稜の間にはハケ状具による連続刺突文が施され、底部外面はヘラ削りされている。口縁端部は比較的明瞭な内傾する段を有している。なお、外面の頸部屈曲部分から胴部の稜に至るまでの部分、口縁部内面、体部下半～底部の内面においては、降灰による釉の付着が著しく、器面の色調については、青灰色というよりも、灰色に近いという印象を受ける。

24の甕は、体部が概ね残存しているが、口縁部は約1/2の残存である。体部外面の叩き文様は花塚信雄氏の分類（花塚1985）のHa類（木目が掘り込みに対し直交するもの）で、その上から横方向のカキ目が施されている。体部内面の当具文様はDa類（木目の見られないもの）で、その上からナデ消しが施されているが、頸部下から胴部最大径あたりまでのナデ消しは縦方向の粗いものとなっている。また、口縁部外面には波状文が見られる。口縁部から胴部最大径あたりまでの外面、口縁部内面、底部内面では、降灰による釉の付着が著しい。

9号墳出土土器（第187図25）

須恵器（25）

25は墳丘北側の裾部から出土した壺身。割れた状態で出土したが、ほぼ完形に接合される。口縁端部は丸く作られ、口径は10.5～10.7cmを測る。底部内面には不整方向のナデ調整痕が見られる。器面の色調については比較的白っぽい灰色を呈している。

10号墳出土土器（第187図26）

土師器（26）

26は墳丘西側の周溝上面から出土した高壺の壺底部片である。器面調整については、摩滅等によりほとんど不明であるが、外面がヘラ磨きされている印象を受ける。また胎土の色調はやや赤味が強い。

引用参考文献

花塚信雄 1985 「叩き目文の原体同定」『辰口町湯屋古窯跡』 辰口町教育委員会

第4節 鉄製品

鉄製品の概要

八里向山F遺跡では、墳丘の存在が想定された8・11号墳を含む古墳11基の発掘調査を実施し、そのうち1・2・5・7・10・11号墳の6基から鉄製品が出土した〔第12表〕。11号墳を除く全ての鉄製品は埋葬施設内から出土しており、大部分が埋葬時の副葬位置を保っていることが推定できる。11号墳は斧1点を採集したことにより、その存在を想定したもので、墳丘規模や埋葬施設、斧の出土位置などについては不明である。

古墳群は直径10m前後的小規模円墳のみで構成されているにも係わらず、全体的に鉄製品の副葬が顕著である。そのなかでも7号墳の第1主体部からは、横矧板鉄留短甲1領とその内部に収められた状況で多数の鎌や農工具が出土しており特筆できる。また、刀剣の出土頻度が高いことも注目でき、鉄製品が出土した全ての埋葬施設で刀剣が認められる。鎌は全て束の状態で1号墳と7号墳の第1・2主体部から出土しており、刀と共に伴する頻度が高い。さらに、農具が顕著であることも指摘でき、刀剣や工具（特に刀子・斧）と共に伴する頻度が高い。これらのことから、鉄製品が出土した埋葬施設では、刀剣、工具（刀子・斧）、農具を各1点副葬する組成が基本となり、これに短甲、鎌などが加わることで鉄製品組成のバリエーションを生み出していることを推定できる。

鉄製品は100点を実測・掲載し、器種の推定が困難である鉄片や錆については実測対象から除外した。矢柄や把装具などの有機質が良好に遺存しているものも多くみられたことから、実測に際しては、旧形状の復元と付着有機質に重点を置き、断面図の位置は錆による変形が少なく、有機質が良好に遺存している箇所を選択している。しかし、実測や観察はクリーニングや樹脂含浸などの保存処理が完了した後に行っていることから、細部の形態や鉄製品に付着した有機質などの観察は困難を伴った。そのため、これらの図化に際しては、X線撮影の結果を援用するとともに、旧形状を推定して復元的に図示したものも多い。特に鉄鎌については、錆着した状態のまま図化しているため、復元的な部分が多い。また、著しく錆に覆われたものや欠損個所については破線で表現した。

鉄製品や刀剣装具などの図化・記述方法や各部名称については、刀剣（池淵1993、菊池1996）、刀剣装具（置田1985、山内1995）、鎌（杉山1988、伊藤1996）、短甲（吉村1988、滝沢1991）、農工具（松井1987、古瀬1991、川越1993、魚津2003）、全体の記述については（松永・西藤・吉村2003）を参考にした。

以下、出土古墳ごとに鉄製品の詳述を行う。なお、この報告では、鉄製品の名称から鉄を省略し、刀、鎌などのように表記を行う。

鉄製品とその出土状況

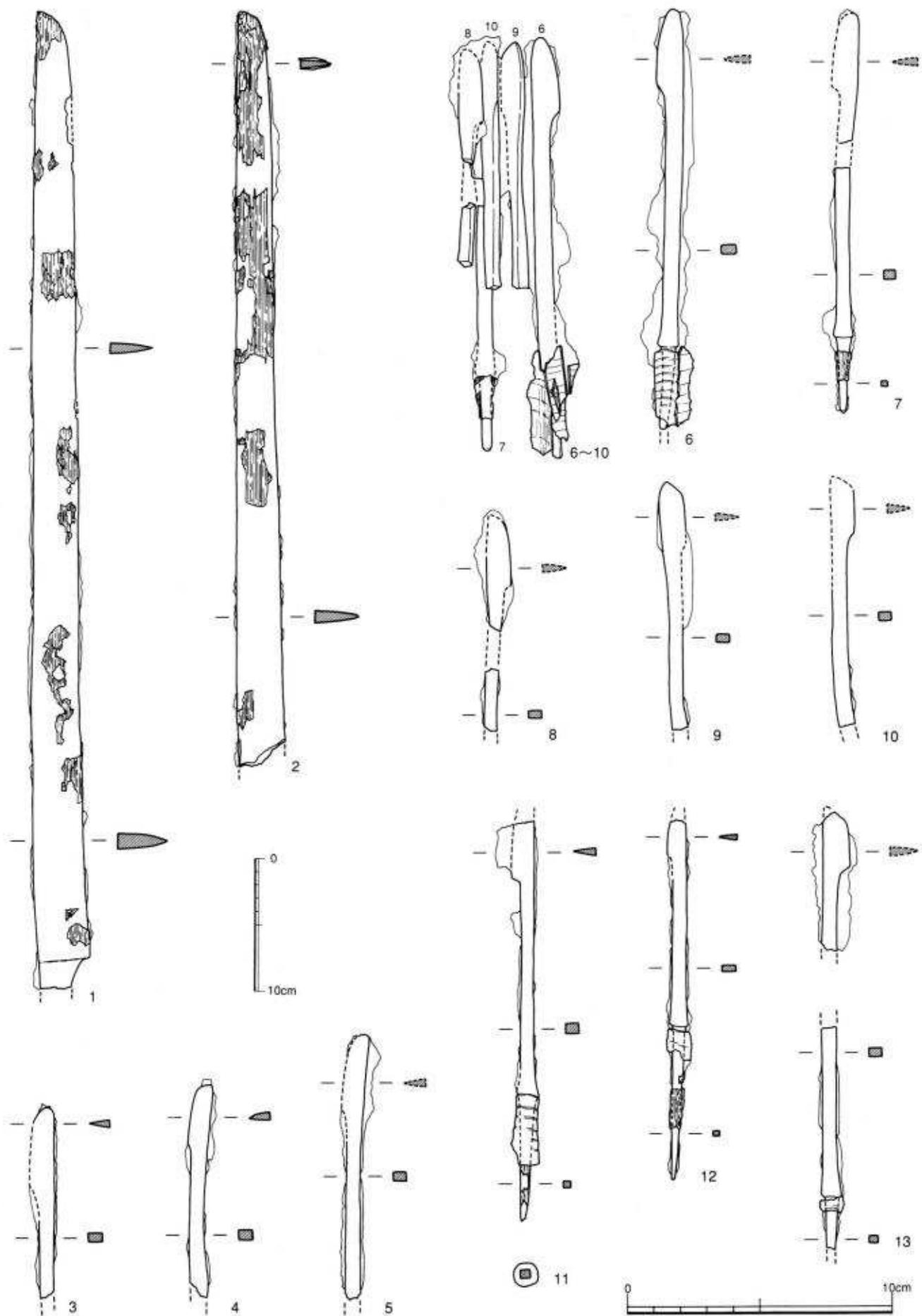
1号墳出土鉄製品〔第188～190図〕

1号墳からは、刀2口、鎌30本、斧1点、鍔・鋒先1点が出土した。

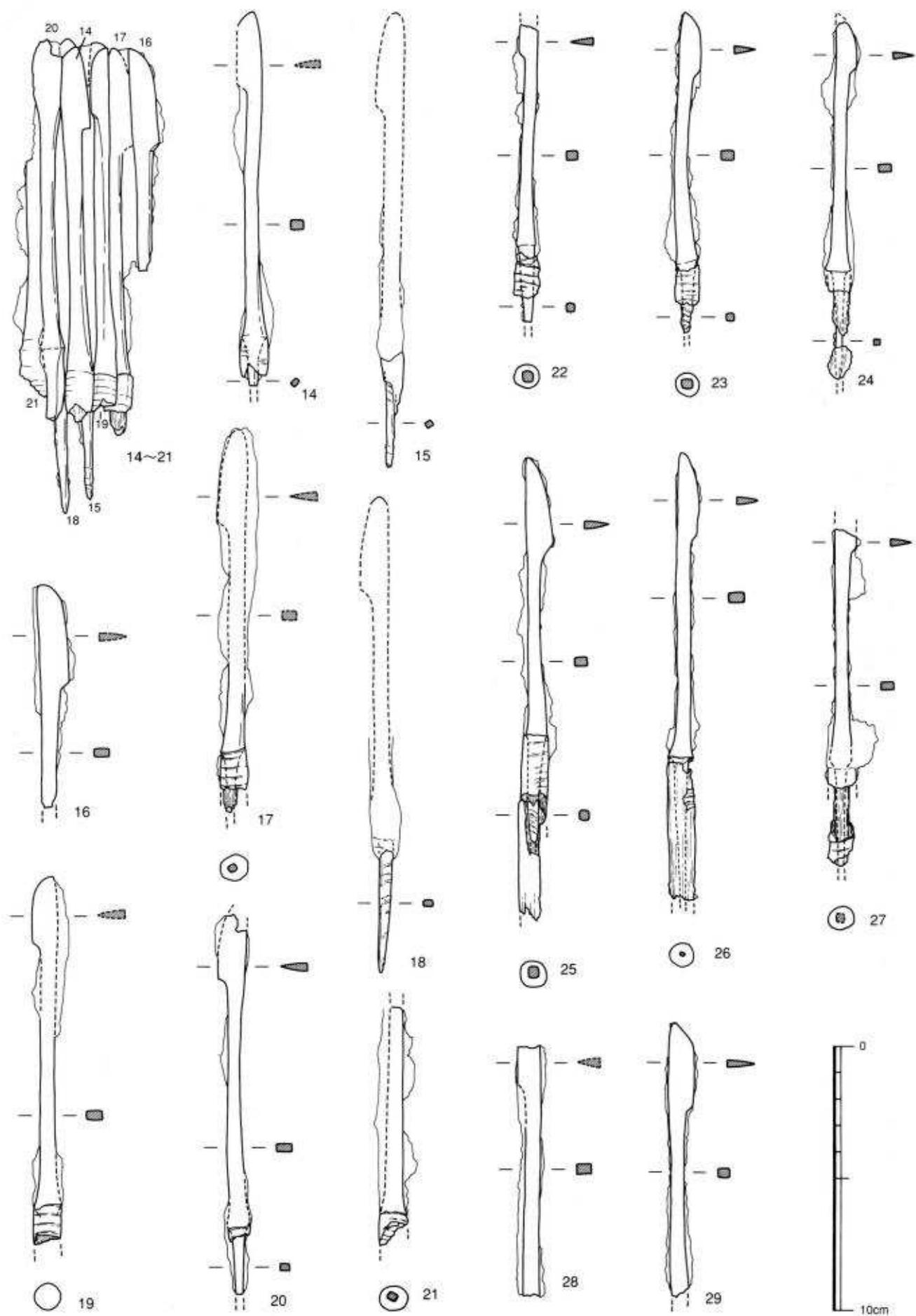
刀は棺の南北辺に沿ってどちらも鋒を西に向けて出土した。1は平造りの直刀で、茎の大半を欠損している。残存長73.4cm、刀身長71.1cmを計る。刀身幅は関部で3.8cmを計り、鋒に向かって緩やかに幅を減じている。刀身の表裏には鞘木と考えられる木質が部分的に付着している。関は直角関の片関で、鞘口端を示すラインが明瞭に認められる。2は平造りの直刀で、茎側の刀身を欠損している。残存長は55.8cmである。刀身幅は破損部分で3.4cmを計り、鋒に向かって緩やかに幅を減じている。刀身の表裏には鞘木と考えられる木質が付着しており、特に鋒付近で顕著に認められる。刀身の厚さは0.9cmを計る。

第12表 八里向山F遺跡出土鉄製品一覧表

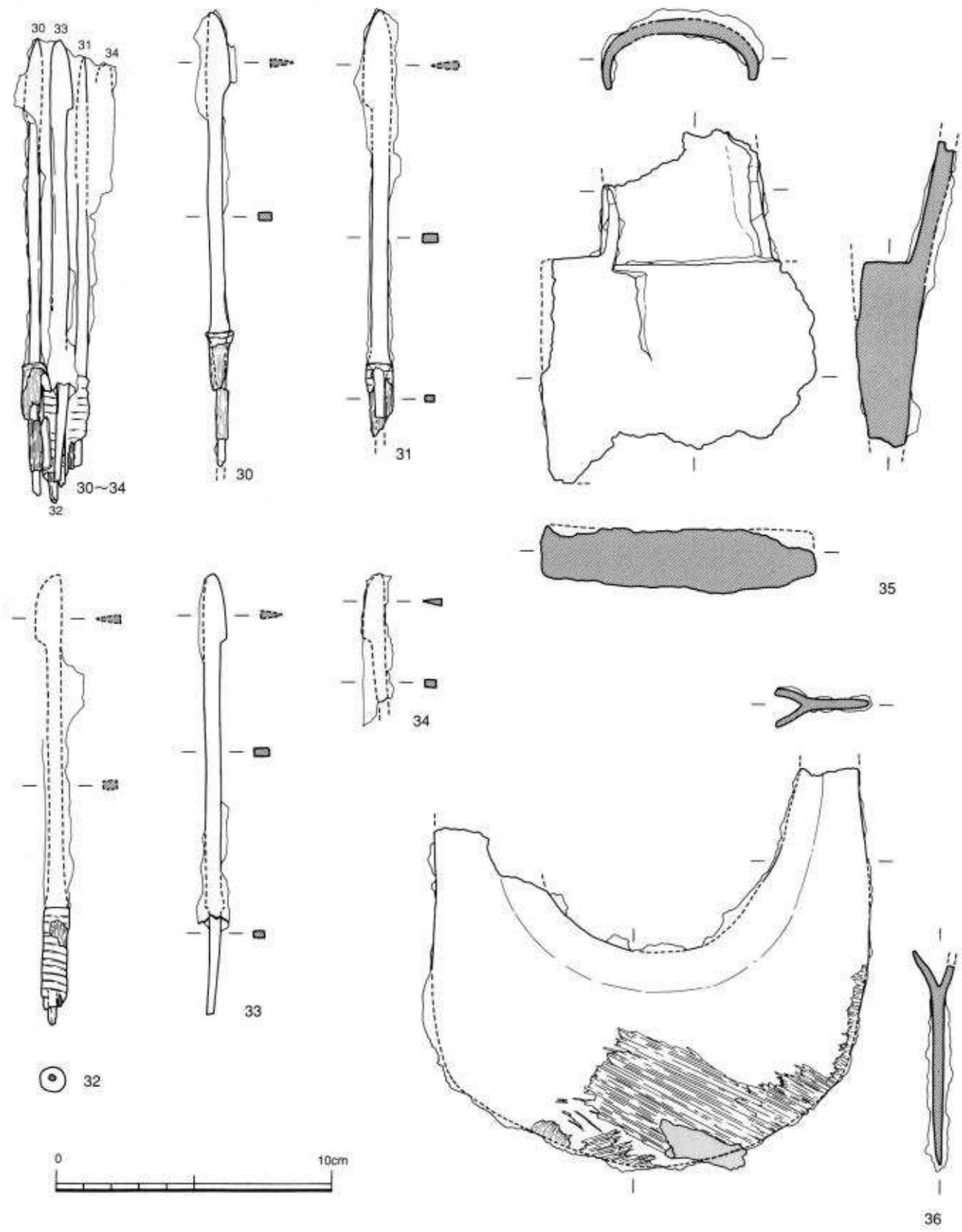
	出土遺構	刀	剣	鎌	甲	刀子	袋斧	斂	鑿	鍔先	鎌	他	共伴遺物	備考
1号墳	埋葬施設	2		32			1			1				有肩鉄斧、U字形刃先
2号墳	埋葬施設	1				1				1			勾玉1、丸玉3、ガラス小玉約20、白玉約1,300	U字形刃先
5号墳	埋葬施設		1											
7号墳	第1主体部	1	1		1	1								横矧板鉄留（漆塗り）
7号墳	短甲内			34			2	1	1	1	1	1		長頸鎌29、平根鎌5、曲刀鎌、U字形刃先
7号墳	第2主体部	1		10										
10号墳	埋葬施設		1				1			1			薺1、勾玉1、ガラス小玉1、白玉約230	曲刀鎌
11号墳							1							



第188図 1号墳出土鉄製品 (1) (1・2 : S=1/4, 6~13 : S=1/2)



第189図 1号墳出土鉄製品 (2) (S=1/2)

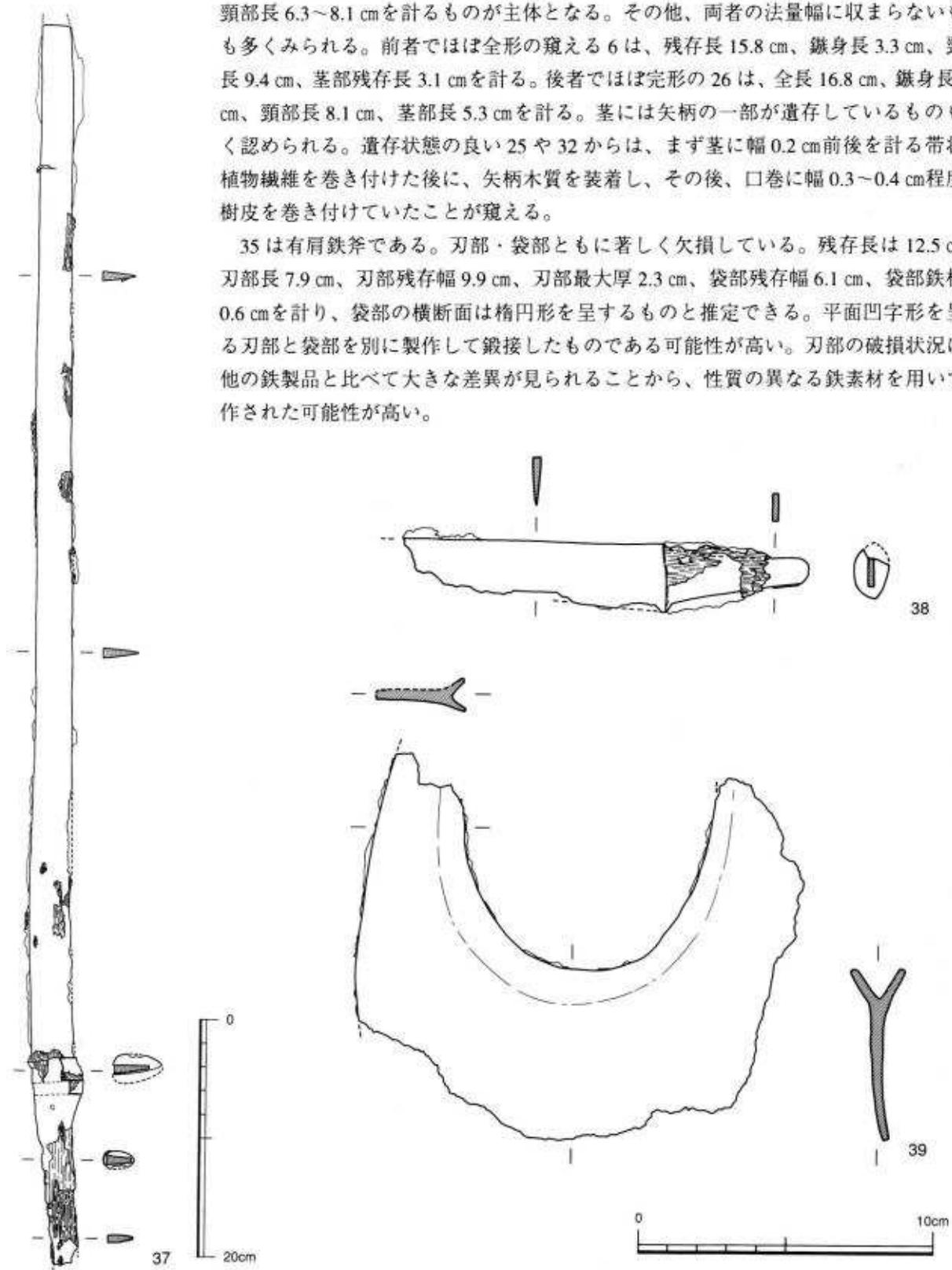


第190図 1号墳出土鉄製品（3）(S=1/2)

鎌は斧、鍔・鎌先と共に棺の西側中央でまとまって30点出土した。鎌は全て長頸鎌であり、鎌身部の形態は片刃で、範被は台形を呈する。鎌身断面も全て平片刃造で、頸部・茎部の断面は長方形や方形を呈する。関は撫関と斜関が認められる。これらの鎌は法量により、鎌身幅が広くて頸部長の長いもの(6・7・14・19・20)と、鎌身幅が狭くて頸部長の短いもの(11・12・21~24・26・27)に分けられる。前者は鎌身幅0.95~1.1cm、頸部長9.0~9.6cmを計るもののが主体で、後者と比較して厚みのある重厚なものが目立つ。後者は鎌身幅0.7~0.86cm、

頸部長6.3~8.1cmを計るもののが主体となる。その他、両者の法量幅に収まらないものも多くみられる。前者ではほぼ全形の窺える6は、残存長15.8cm、鎌身長3.3cm、頸部長9.4cm、茎部残存長3.1cmを計る。後者ではほぼ完形の26は、全長16.8cm、鎌身長3.4cm、頸部長8.1cm、茎部長5.3cmを計る。茎には矢柄の一部が遺存しているもの多く認められる。遺存状態の良い25や32からは、まず茎に幅0.2cm前後を計る帶状の植物纖維を巻き付けた後に、矢柄木質を装着し、その後、口巻に幅0.3~0.4cm程度の樹皮を巻き付けていたことが窺える。

35は有肩鉄斧である。刃部・袋部ともに著しく欠損している。残存長は12.5cm、刃部長7.9cm、刃部残存幅9.9cm、刃部最大厚2.3cm、袋部残存幅6.1cm、袋部鉄板厚0.6cmを計り、袋部の横断面は楕円形を呈するものと推定できる。平面凹字形を呈する刃部と袋部を別に製作して鍛接したものである可能性が高い。刃部の破損状況は、他の鉄製品と比べて大きな差異が見られることから、性質の異なる鉄素材を用いて製作された可能性が高い。



第191図 2号墳出土鉄製品 (37:S=1/5, 38・39:S=1/2)

36は刃先がU字形を呈する鍔・鋤先である。両耳部ともに欠損している。残存長は14.5cm、刃幅15.7cm、刃部長7.7cm、刃先部長6.3cm、刃部厚0.4cmを計る。刃部の平面形はやや角のとれた凹字形を呈し、耳部側面は上方に向かって幅を減じながら緩やかに外反する。着柄溝は深さ1.3cmを計り、浅いV字状を呈する。刃部表面には棺材と考えられる多数の木質や有機質が付着している。

1号墳の鉄製品出土状況をまとめると、刀は鋒を西に向けて、棺の南北両側に各1口置かれていることから、被葬者はこの箇所で頭を東側に向けて埋葬されていた可能性が高い。さらに、刀の鋒側（被葬者の足元側）には鍔、斧、鍔・鋤先がまとめ置かれている。このように、被葬者の両脇に刀剣を配置し、足元に鍔や農工具をまとめ置く状況は、短甲などの有無では差異が見られるが、7号墳第1主体部の副葬品配置と共通する。

2号墳出土鉄製品〔第191図〕

2号墳からは、刀1口、刀子1口、鍔・鋤先1点が出土した。

刀（37）は棺の東側中央で鋒を南東に向けて出土した。平造りの直刀で、鋒と茎尻を欠損している。残存長は103.8cm、刀身の残存長は86.6cmを計る。刀身幅は関で3.5cmを計り、鋒に向かって緩やかに幅を減じている。厚さは0.8cmを計り、刀身の表裏には鞘木と考えられる木質が部分的に付着している。関から茎にかけては木製把装具が比較的良好に遺存しており、関の詳細な形状を伺うことは困難である。把装具は置田分類のB類に該当する形態を呈し（置田1985）、背には茎を装着するための溝が刻り込まれている。やや不明瞭ながら、把装具には広葉樹の半裁材もしくは扇形材が使用された可能性が高い。把縁は断面卵形を呈する。把縁及び把縁と把間の境には低い段が認められる。把間の背側には幅1mm程度の紐が巻き付けられた痕跡が残存している。茎は残存長16.6cm、幅2.1cm、厚さ0.7cmを計り、目釘孔は関から3.1cmと13.2cmの2箇所に認められる。

刀子（38）は棺の東側北辺沿いで鋒を西に向けて出土した。刃部の大半を欠損している。残存長は13.6cm、刀身残存長8.8cm、茎部長4.8cm、厚さ0.3cmを計る。刀身幅は関で2.3cmを計り、鋒に向かって幅を減じる。関は背側が角関、刀側が斜関の両関である。茎には木製把装具が遺存している。把装具は背側と把頭が欠損しており、断面は杏仁形を呈する。茎は関で幅1.4cm、茎尻で0.9cmを計り、茎尻に向かって幅を減じている。

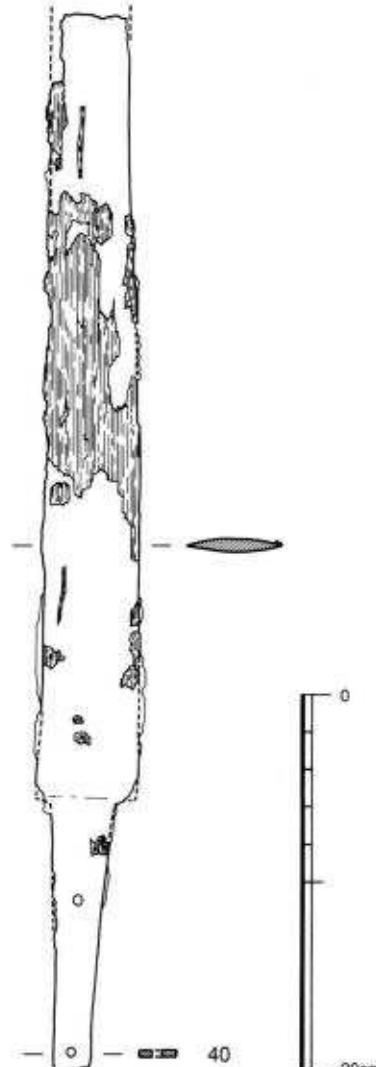
鍔・鋤先（39）は棺の西側端で刀の把部と重なって出土した。U字形刃先で、刃部先端と両耳部が欠損している。残存長13cm、刃部残存幅15.1cm、刃部残存長5.6cm、刃先部残存長4.4cm、刃部厚0.4cmを計る。着柄部分の平面形はU字形を呈し、耳部側面は耳端部に向かって幅を減じている。着柄溝は深さ1cmを計り、浅いV字状を呈する。

2号墳の鉄製品出土状況をまとめると、棺の西側中央には鋒を東に向けて刀1口、西側端には鍔・鋤先が置かれており、東側には多数の玉類共に刀子が鋒を西に向けて置かれている。このように、棺の一方に刀剣と農具、反対側に玉類と工具を置く状況は、10号墳の副葬品配置と共通する。

5号墳出土鉄製品〔第192図〕

5号墳からは、剣1本が出土した。

剣（40）は剣身先端部と関を欠損している。残存長は55.9cm、剣身残存長41.7cm、茎部長14.2cmを計る。剣身は両丸造で鍔は認められない。剣身幅は関部で5.3cmを計り、鋒に向かって幅を減じている。厚さは0.7cmを計り、剣身の表裏には鞘木の木質が付着している。関は直角関と推定でき、不明瞭ながら鞘口端を示すラインが認められる。茎は中細で、関付近で幅3.4cm、茎尻で幅2cmを計る。茎尻は一文字尻を呈し、目釘孔は茎尻から0.9cmと9cmの2箇所に認められる。部分的に木質が付着している。



第192図 5号墳出土鉄製品 (S=1/4)

7号墳出土鉄製品〔第193~201図〕

7号墳では2つの埋葬施設が認められ、第1主体部からは、刀1口、剣1本、短甲1領、刀子1口が出土し、短甲内に納められた状態で鎌34本、斧2点、鉈、鑿、鎌、鍬・鋤先各1点が認められた。

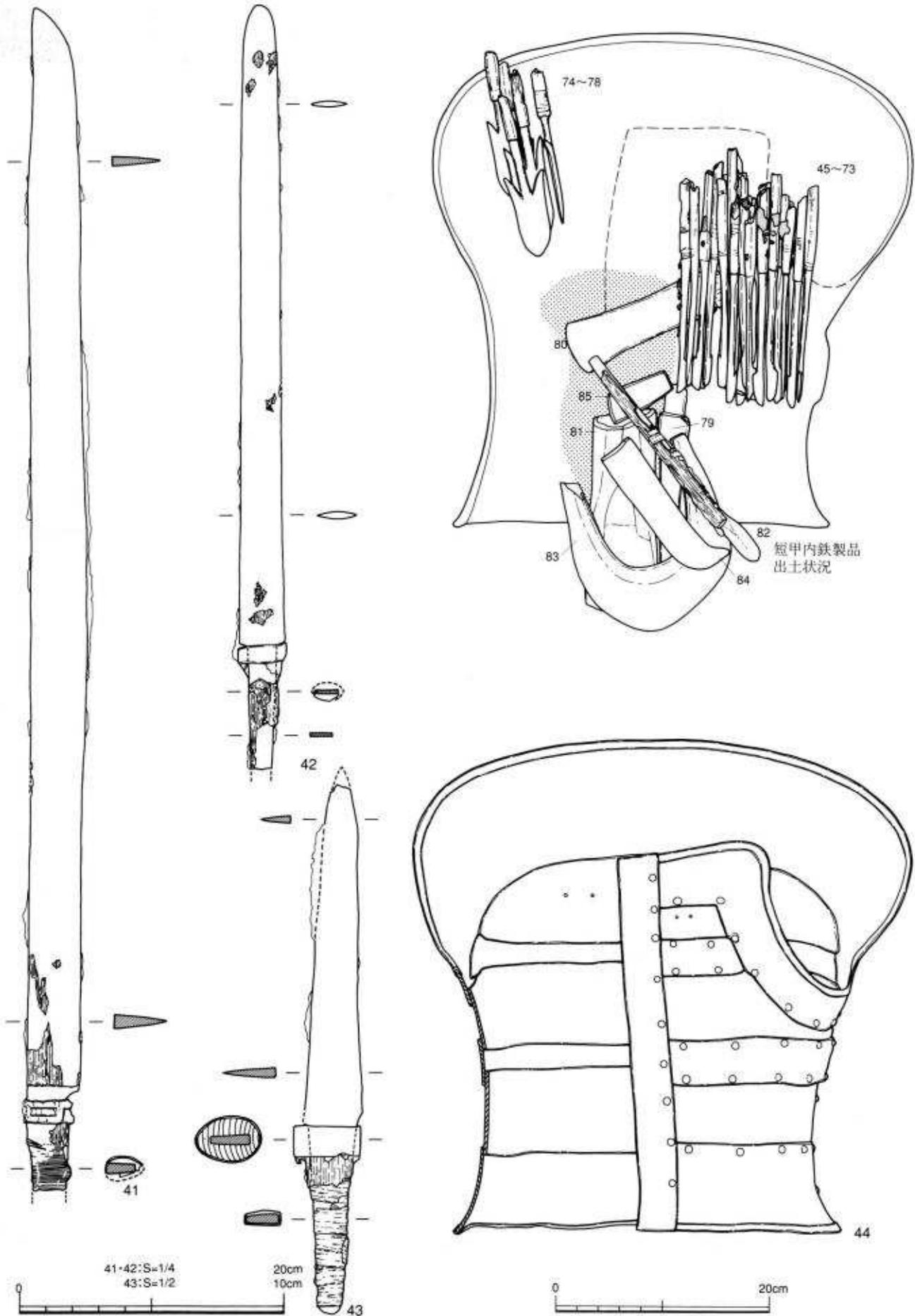
刀(41)は棺の北側西辺沿いで鋒を南に向けて出土した。平造りの直刀で、茎は中程から茎尻にかけて欠損している。残存長は88.6cm、刀身長は81.8cm、茎部残存長6.8cmを計る。刀身幅は関部で3.9cmを計り、鋒付近に至るまではほとんど変化しない。厚さは関で1cm、鋒付近で0.8cmを計る。刀身の表裏には鞘木と考えられる木質が部分的に付着している。関は斜角関の片関で、関から0.3cm鋒側で鞘口端を示すラインが明瞭に認められる。佩表側の茎には木製把装具が比較的明瞭に遺存している。把装具は残存長6.8cmを計り、そこから鞘口端まで0.9cmの部分には木質が認められない。把縁は断面卵形で、中央には帯状に浅い削り込みがみられる。把縁から把間にかけての背には茎を装着するための溝が削り込まれており、把縁と把間の境には明瞭な段が認められる。把間は把縁との境で幅3.1cmを計り、把頭に向かって緩やかに幅を減じている。木質の上には幅1mm程度の紐が巻き付けられた痕跡が明瞭に確認できる。茎は断面箇所で幅2.2cm、厚さ0.8cmを計り目釘孔が1箇所で認められる。

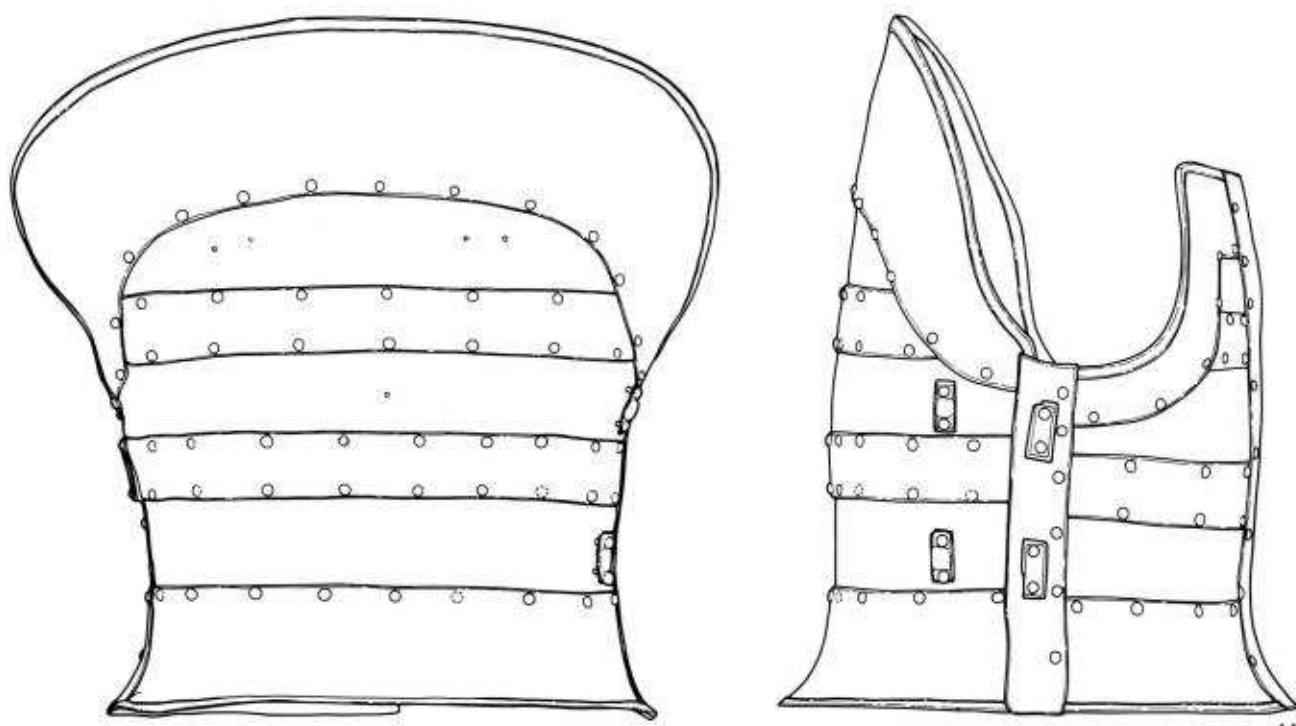
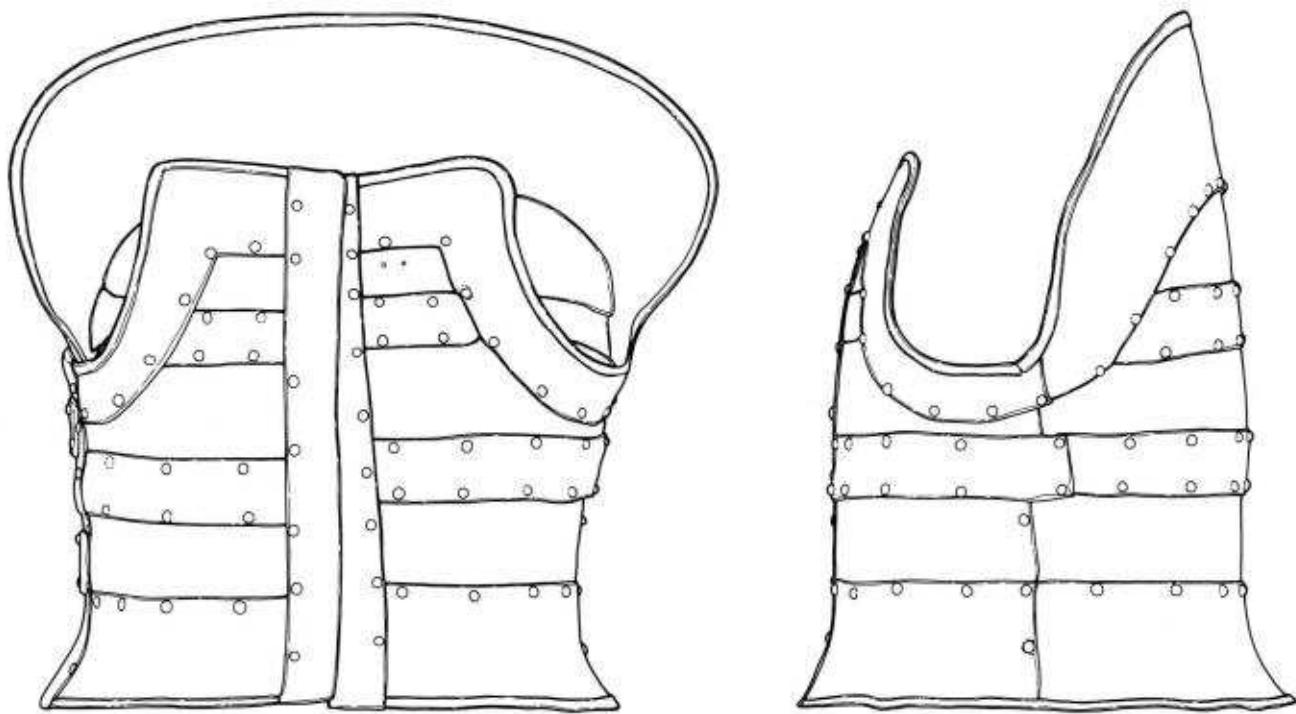
剣(42)は棺の北側東辺沿いで鋒を南に向けて出土した。茎尻を欠損しており、残存長は57.4cm、剣身長48.0cm、茎部残存長9.4cmを計る。剣身は両丸造で鐔は認められない。剣身幅は関部で3.4cmを計り、鋒に向かって緩やかに幅を減じている。厚さは0.6cmを計り、剣身の表裏には鞘木の木質が付着している。関は直角関、茎は中細で、関側の断面箇所は幅2.2cm、厚さ0.3cmを計る。茎には木製把装具が部分的に遺存しており、把縁表面には漆が塗布されている。把間断面は杏仁形を呈するものと推定できる。

刀子(43)は棺の北側東辺沿いで鋒を南に向けて出土した。鋒を欠損しており、残存長19.8cm、刀身残存長12.8cm、茎部長7cmを計る。刀身幅は関部で2.2cmを計り、鋒に向かって幅を減じている。鋒は剣先状を呈している。関は背側が撫関、刃側が斜関の両関である。茎には把装具が遺存しており、把縁金具が取りつけられている。把縁は断面橢円形を呈し、長径2.5cm、短径1.8cmを計る。把装具には広葉樹のミカン割り材が使用された可能性が高い。茎には把装具を装着する前に、幅0.6cm前後の樹皮を巻き付けている。

短甲(44)は棺の南側中央で前胴を上に向け横置した状態で出土した。右前胴開閉式の横矧板銛留短甲である。段構成は前・後胴ともに縦上3段、長側4段の7段構成である。前胴高36.5cm、後胴高45.3cmを計る。押付板、裾板、各段の地金と帶金は、右前胴・左前胴・後胴各1枚で構成され、通有である。右前胴は引合板の幅が3.5cm、帶金幅は縦上第3段で3.7cm、長側第2段で4.4cmを計る。左前胴は引合板の幅が3.7cm、帶金幅は縦上第3段で3.5cm、長側第2段で4.3cmを計る。右前胴の使用銛数は縦上第3段の上辺2銛、下辺2銛で、左前胴の縦上第3段では上辺2銛、下辺2銛、後胴の縦上第3段では上辺6銛、下辺7銛であり、使用銛数は少ない。銛頭径は0.7~0.8cmである。前胴の縦上第3段の帶金幅は4cmを超えないが、この横矧板銛留短甲は少銛式に帰属させることが妥当であろう。地板は、内面からの観察では、各辺が直線的で、頂点も角をもって裁断されており、外見と同様の形状をみせている。左脇部における左前胴と後胴の連接状態は、押付板と長側第2段がやや後胴に寄ったところ、その他は脇のほぼ中央で連接されている。なお、通有通り後胴側の鉄板は前胴側鉄板の内側に重ねられている。右脇の蝶番板は前胴側のみに取り付けられており、幅は3.9cmである。後胴側の脇には鉄包覆輪が施されている。蝶番金具は縦3.4cm、横1.3cmを計る長方形2銛で、前後胴各2箇所に取り付けられている。前胴側の蝶番金具は縦3.9cm、横1.7cmを計り、金具と同じ形状を呈する有機質の台にはめ込まれている。なお、裾側の蝶番金具周囲には帶状の有機質が遺存している可能性も考えられたが、鋳との区別が困難であるため図面に示していない。後胴側の蝶番金具には地板との間に0.5cm程度の空間が認められ、金具上の銛頭間に表面に黒漆が塗布された幅1.3~1.5cmの有機質が遺存している。覆輪は全周、鉄包覆輪である。左右引合板、蝶番板との関係では、覆輪は各板の下に潜り込んでいる。このことから、覆輪が施された後に、左右引合板や蝶番板が取り付けられたことがわかる。肉眼で確認できるワタガミ緒孔は、左前胴縦上第2段に左右1対の2孔、後胴には縦上第2段に左右1対の2孔が2箇所、長側第1段中央に1孔が確認できる。

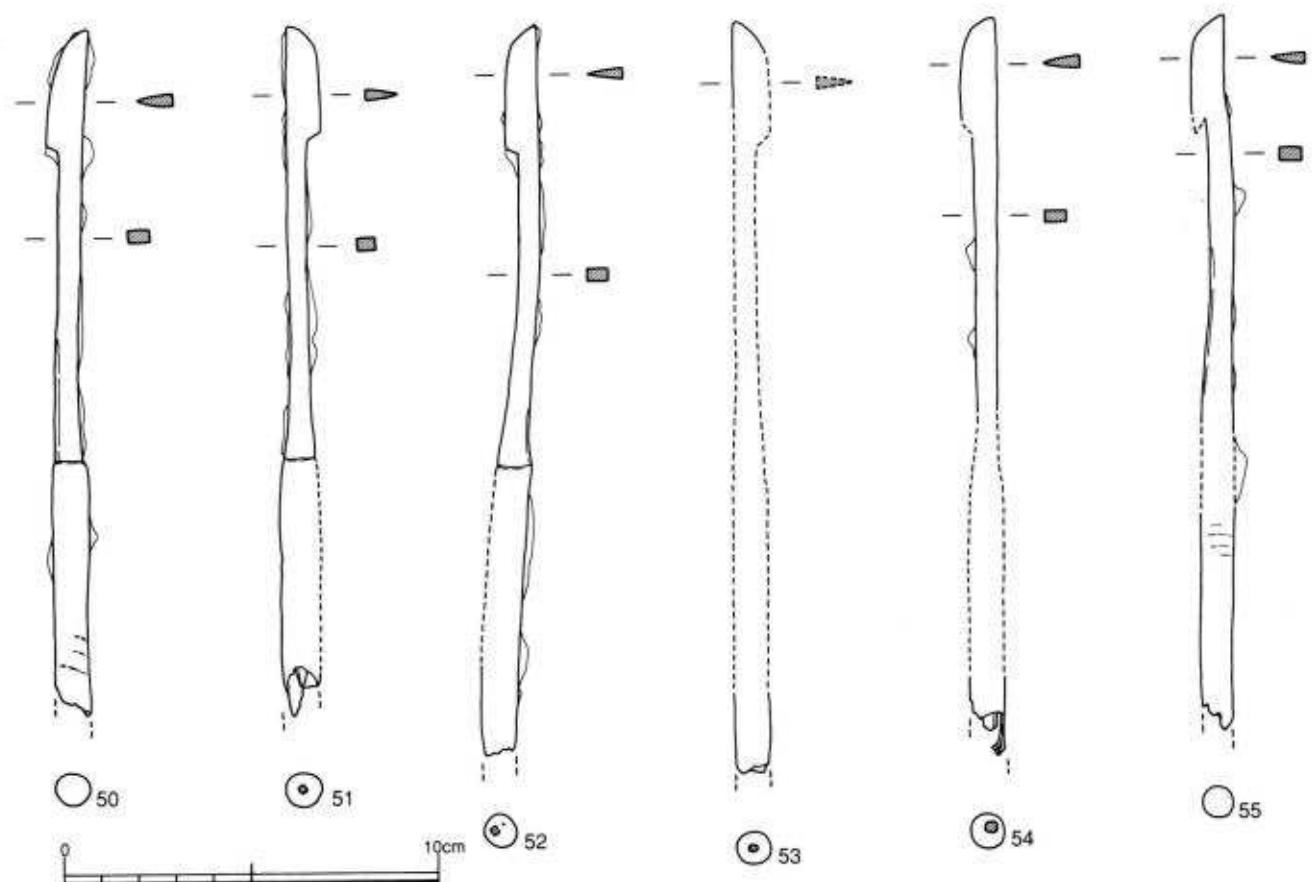
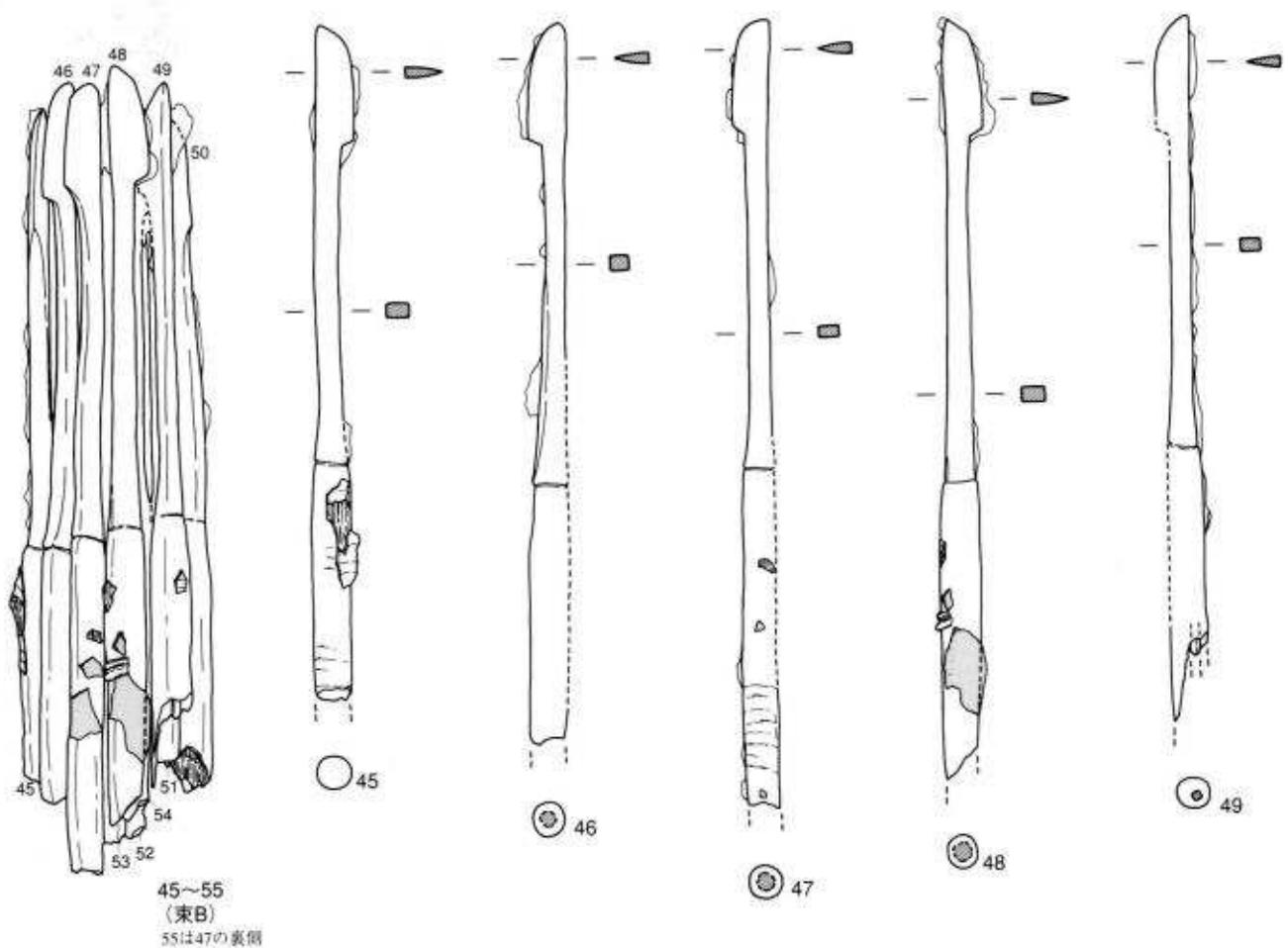
上述したとおり、短甲内には多数の鎌や農工具が認められていた〔第170図、第193図44上〕。これらの設置状況を復元すると、まず右前胴を開閉して、農工具・鎌の順番に並べ置き、その後、並べ置かれた鎌・農工具の上に覆い被せるように、右前胴を左前胴の内側に押し込んでいるものと推定できる。



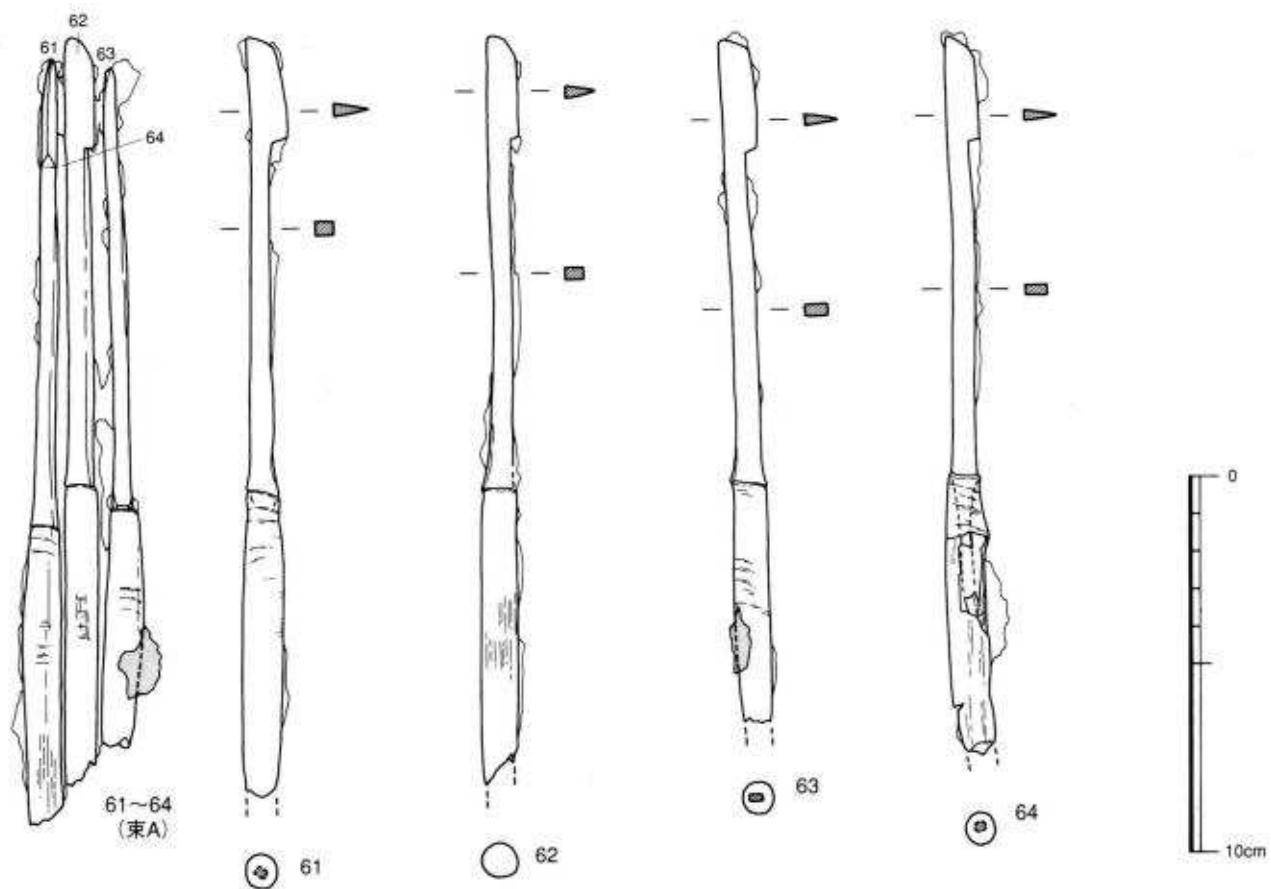
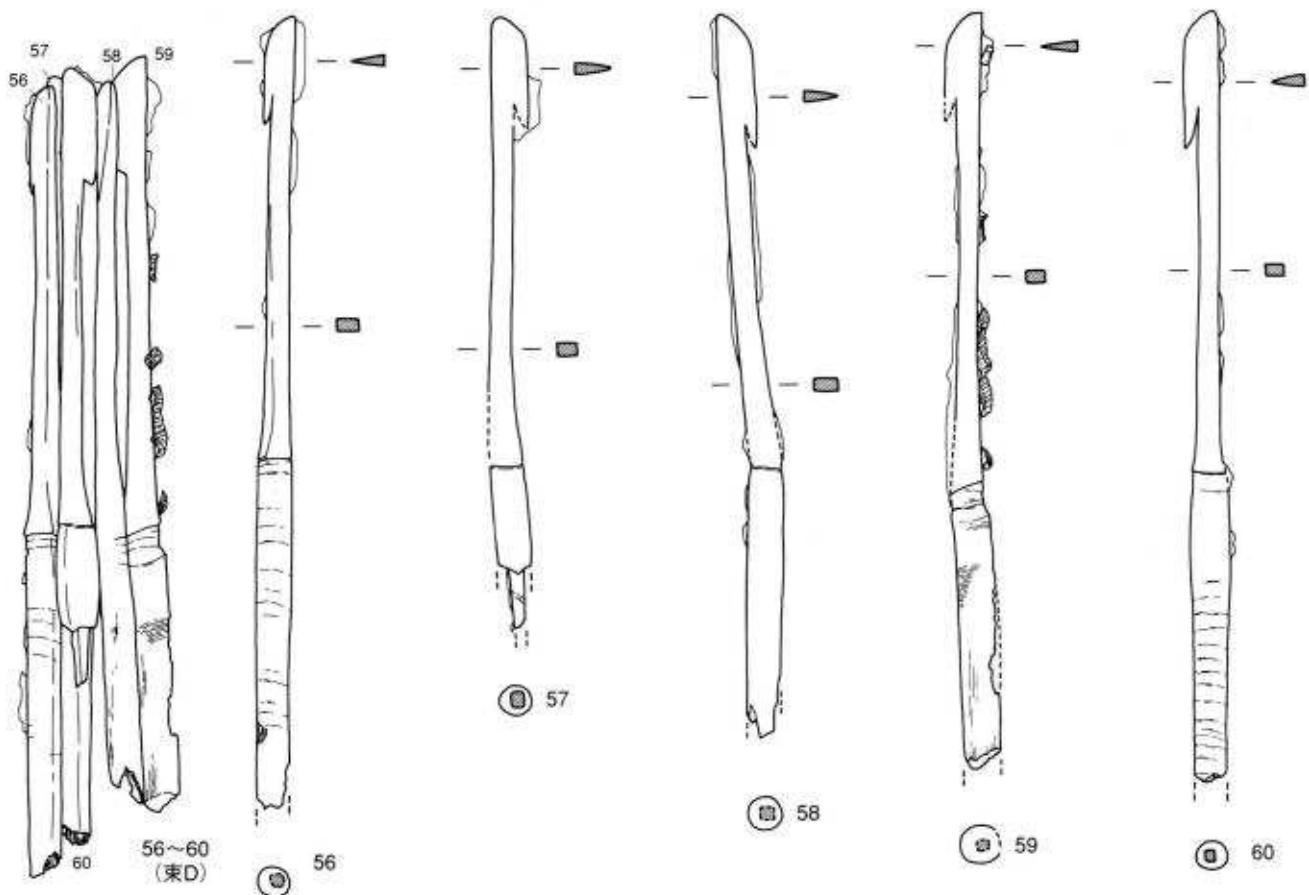


0 20cm

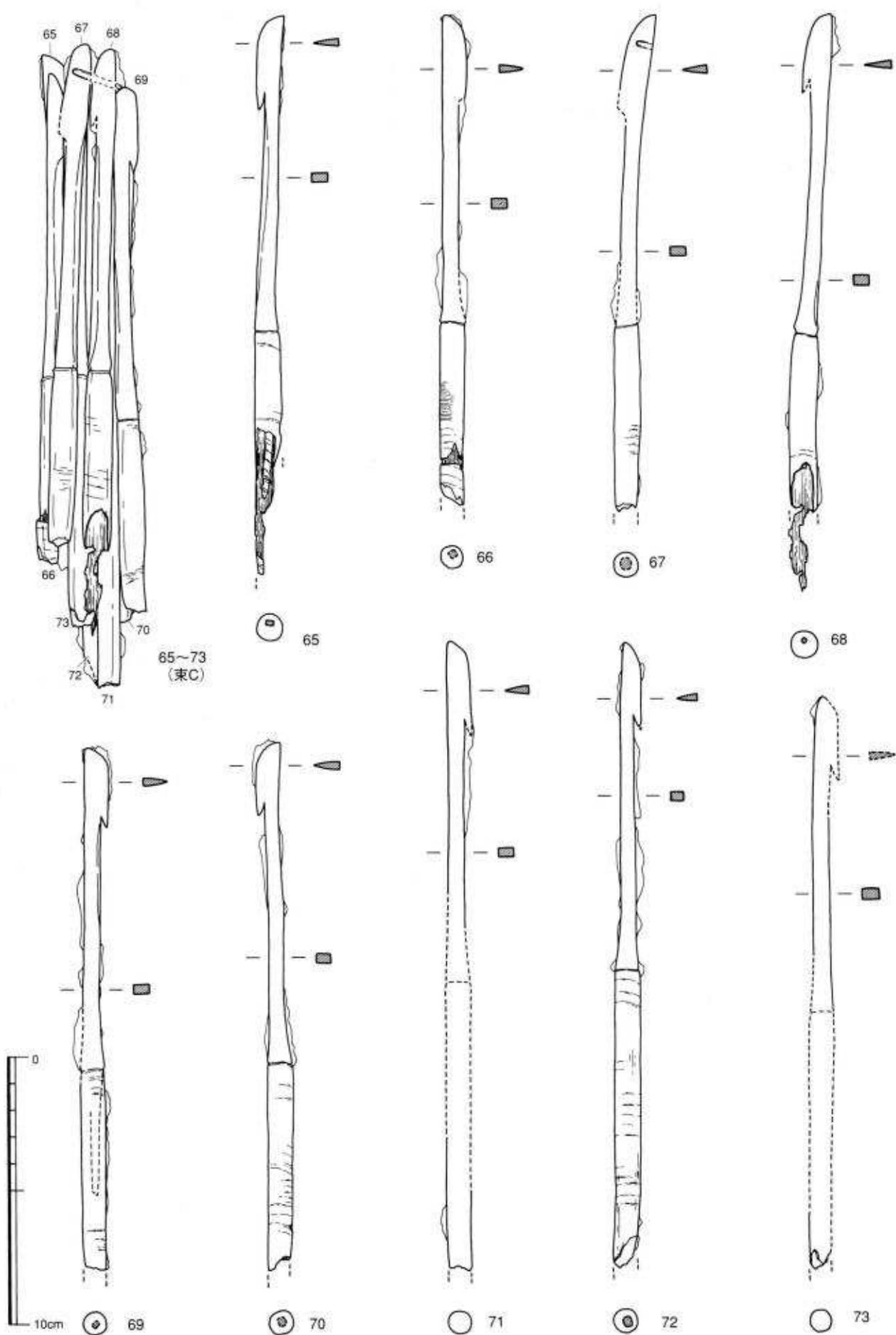
第194図 7号墳第1主体部出土鉄製品（2）（S=1/5）



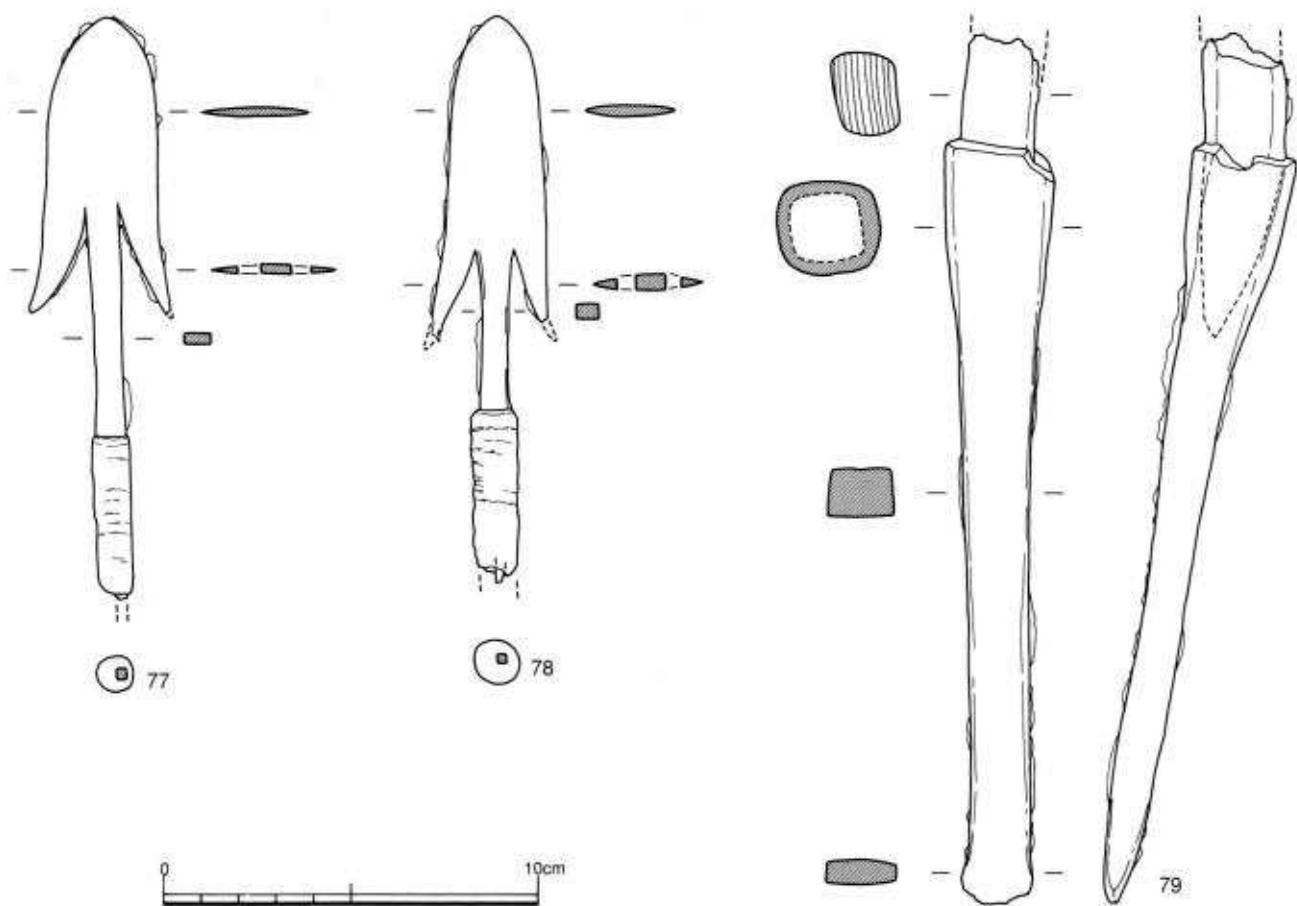
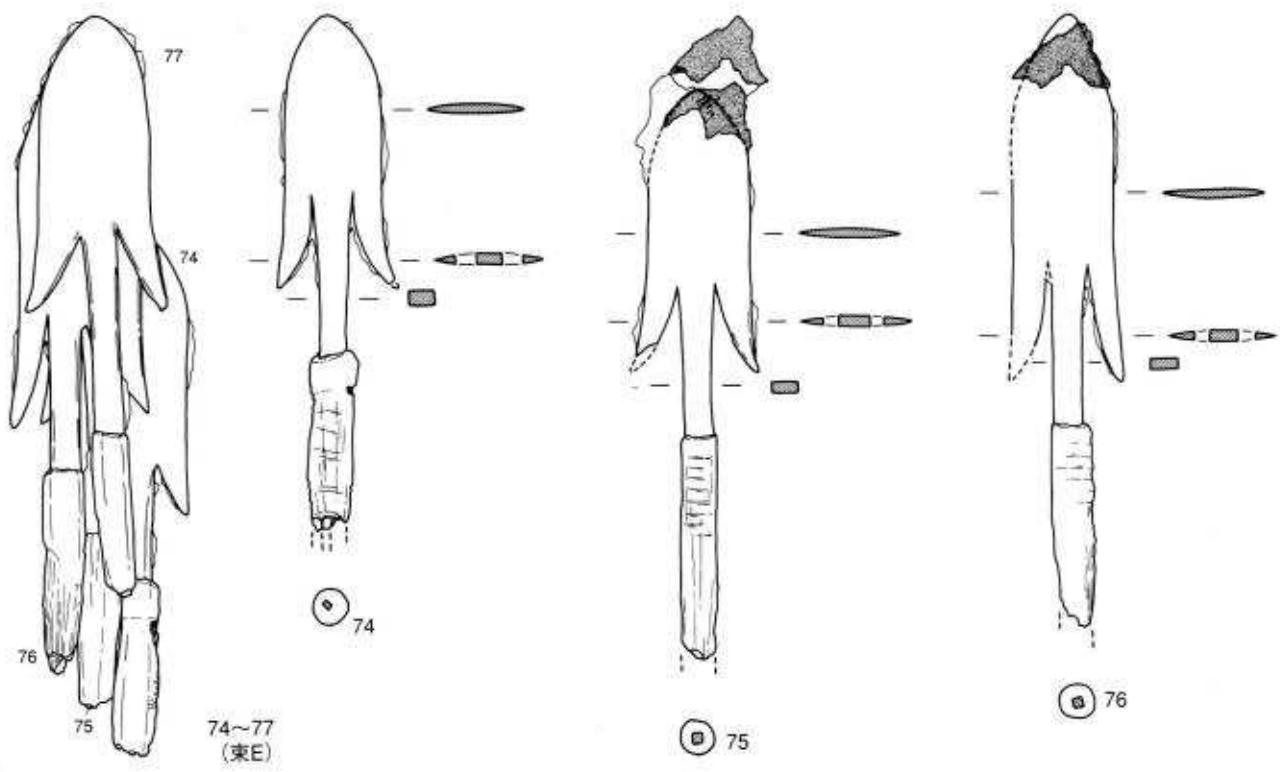
第195図 7号墳第1主体部短甲内出土鉄製品(1) (S=1/2)



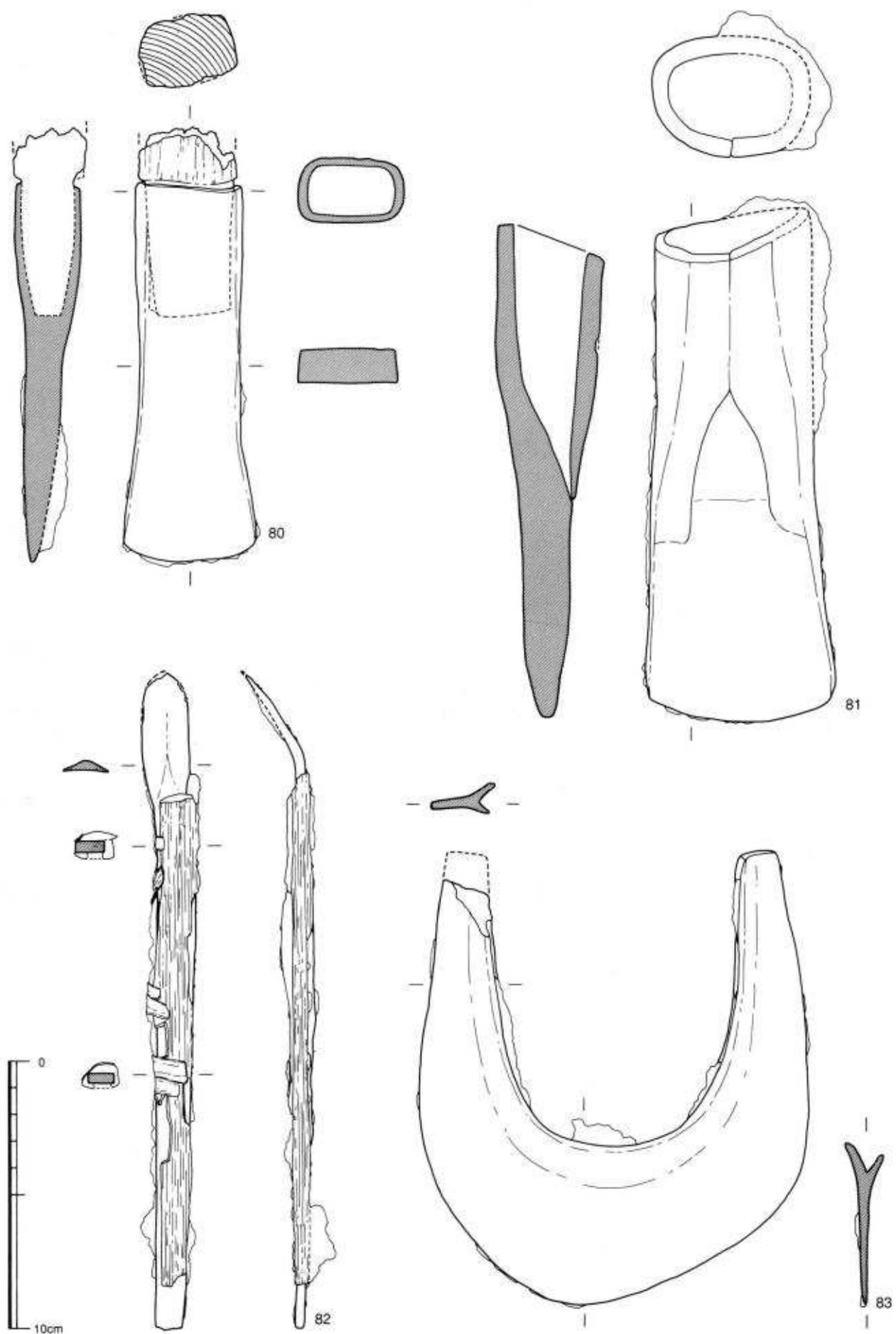
第196図 7号墳第1主体部短甲内出鉄製品（2）(S=1/2)



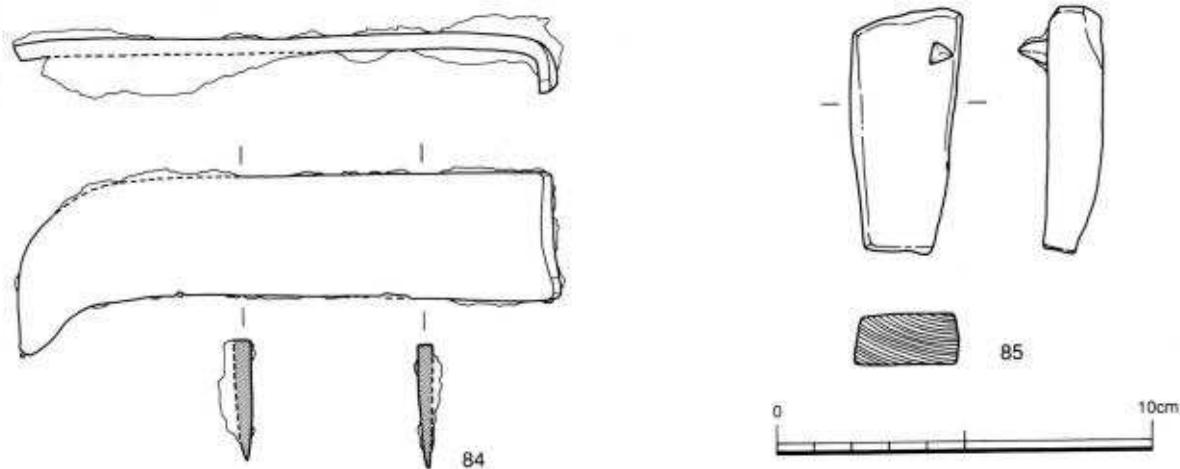
第197図 7号墳第1主体部短甲内出土鉄製品 (3) (S=1/2)



第198図 7号墳第1主体部短甲内出土鉄製品(4) (S=1/2)



第199図 7号墳第1主体部短甲内出土鉄製品（5）（S=1/2）



第200図 7号墳第1主体部短甲内出土鉄製品（6）（S=1/2）

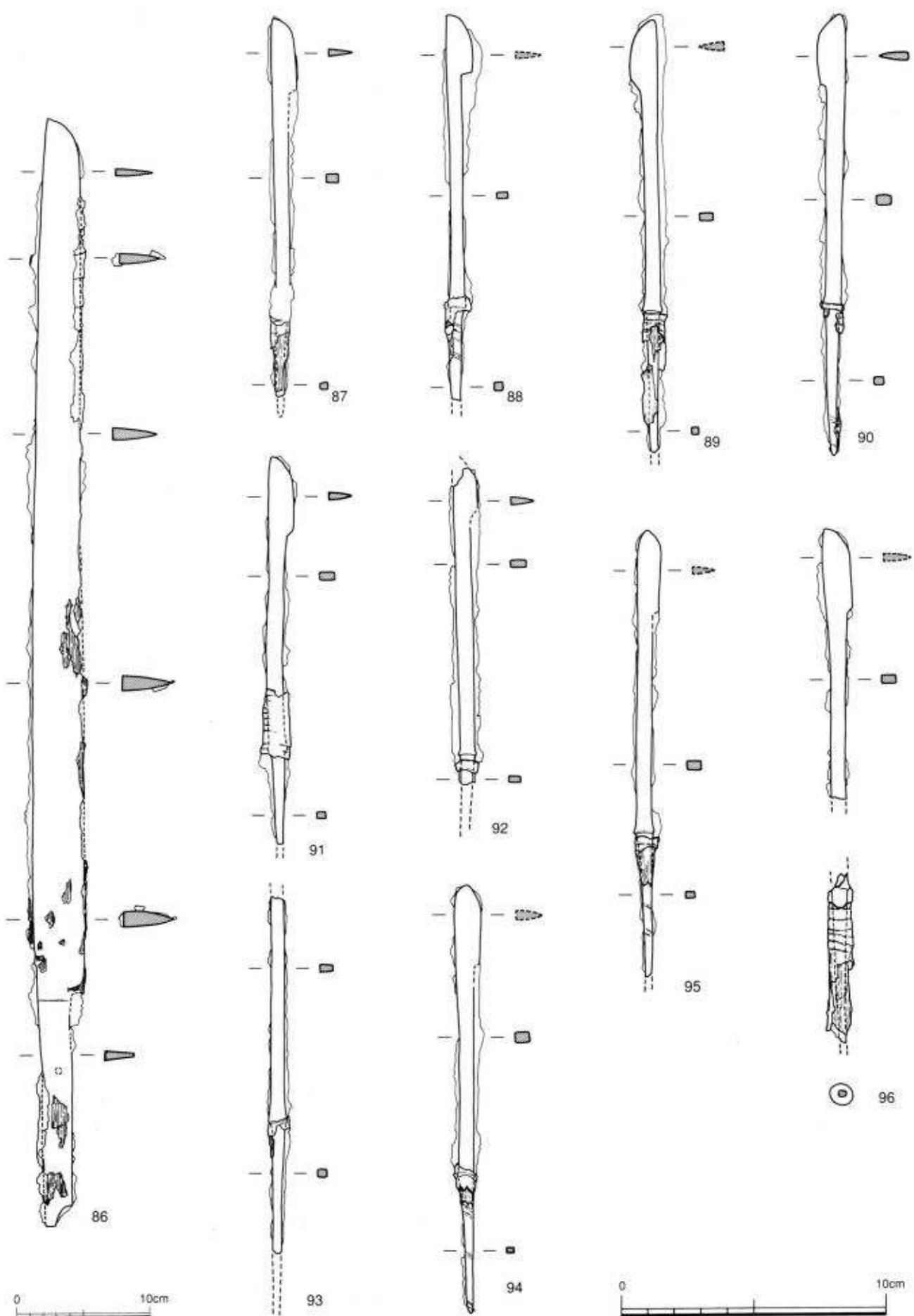
鎌は短甲内で2箇所に分かれて出土した。左前胴下には長頸鎌29本が鎌身部を南に向けて並べられていた。これらは全て鎌身部の形態が片刃で、範被は台形を呈する。鎌身断面も全て平片刃造で、頸部と茎部は断面方形ないしは長方形を呈する。茎には矢柄が良好に残存しているため、埋葬時は短甲外に矢柄の大部分がはみ出した状態であった可能性が高い。取りあげの際には、左脇部側から鉄鎌束A・B・C・Dの4束に分けて取りあげを行っている。この束は埋葬時の単位を厳密に示すものではないが、最初に束C・Dを並べ置き、その後束A・Bを並べ置いた状況が窺える。さらに、束A・Bでは斜・撫闘のもの、束C・Dでは闘に逆刺をもつものが主体を占める。のことから、両者は埋葬時から意識的に区別されて取り扱われていた可能性が高い。斜・撫闘のもの（45～48・50～52・54・61～64）と、逆刺をもつもの（55～60・65・68～73）は、頸部長の差により区分することもできる。前者は8.2～9.3cmで、後者は9.1cm～10.2cmの幅に収まる。前者ではほぼ完形の54は、全長18.8cm、鎌身推定長3.1cm、頸部推定長9.3cm、茎部長6.4cmを計る。後者ではほぼ完形の60は、残存長20.4cm、鎌身長3.6cm、頸部長9.6cm、茎部残存長8.1cmを計る。しかし、各部位法量の個体差は、1号墳出土資料と比べてばらつきが少ない。右前胴堅上第1段の下辺りには平根系鎌5本が鎌身を南に向けて並べられていた。全て闘に逆刺をもつ三角形鎌で、頭は茎に向かって緩やかに幅を減じている。範被の形状は不明瞭である。鎌身断面は両丸造で、頸部断面は長方形、茎部断面は方形を呈する。茎には矢柄が良好に遺存している。75・76の鎌身部先端には有機質が付着している。77で残存長15.4cm、鎌身長7.8cm、頸部長6.2cm、茎部残存長4.3cmを計る。茎には矢柄の一部が残存しているものが多く、装着方法は1号墳のものと同様である。

農工具は短甲内中央から裾部にまとまって出土した。鉄製品の重なりからは、まず鎌や斧などの重厚な工具を置き、鍔・鋤先・鎗と鎌の順に並び置いたことが窺える。大部分がやや裾方向に滑り落ちている可能性が高い。

79は袋状鉄鎌である。全長20cmを計り、袋部には柄が残存している。袋部断面は隅丸方形で、最大幅2.9cm、最大厚2.8cmを計る。閉じ合わせは密着しており肉眼では確認できない。柄は身部に対して角度を付けて装着されている。柄断面に図示したラインは放射組織である可能性が高く、広葉樹の扇形材が使用された可能性が高い。身部断面は幅1.8cm、厚さ1.3cmの台形を呈し、刃部は幅1.7cmを計り、先端で小さくバチ形に広がる。

斧は無肩の袋状鉄斧2点が出土している。80は全長14.1cmを計り、袋部には柄が残存している。袋部断面は隅丸長方形で、最大幅4cm、最大厚2.4cmを計る。閉じ合わせは密着しており肉眼では確認できない。袋部から刃部の平面形は刃先に向かって緩やかに幅を減じており、側面形は細身で楔形を呈する。刃部は幅4.9cmを計り、刃先に向かってバチ形に広がる。81は完形の伐採斧で、全長19.6cmを計る。袋部断面は不整楕円形で、最大幅5.9cm、最大厚4.5cmを計る。閉じ合わせは密着している。平面形は袋部から刃部に向かって緩やかに幅が増し、刃部でややバチ形に広がる。刃部は幅7.1cmを計る。

82は鎗で、刃部先端をわずかに欠損している。残存長24.4cmを計り、茎には柄が良好に残存している。茎部断面は長方形で、幅1.1cm、厚さ0.45cmを計る。茎幅は茎尻から刃部に至るまでほとんど変化しない。刃部形状は茎と比較して幅広く鎧状で、断面は三角形を呈する。刃部表面には鎧が認められ、裏面にはわずかに裏すきを作り出している。刃部残存長は4.9cm、最大幅1.7cmを計る。柄の木質は刃部先端から3.7cm、茎尻から1.7cmの

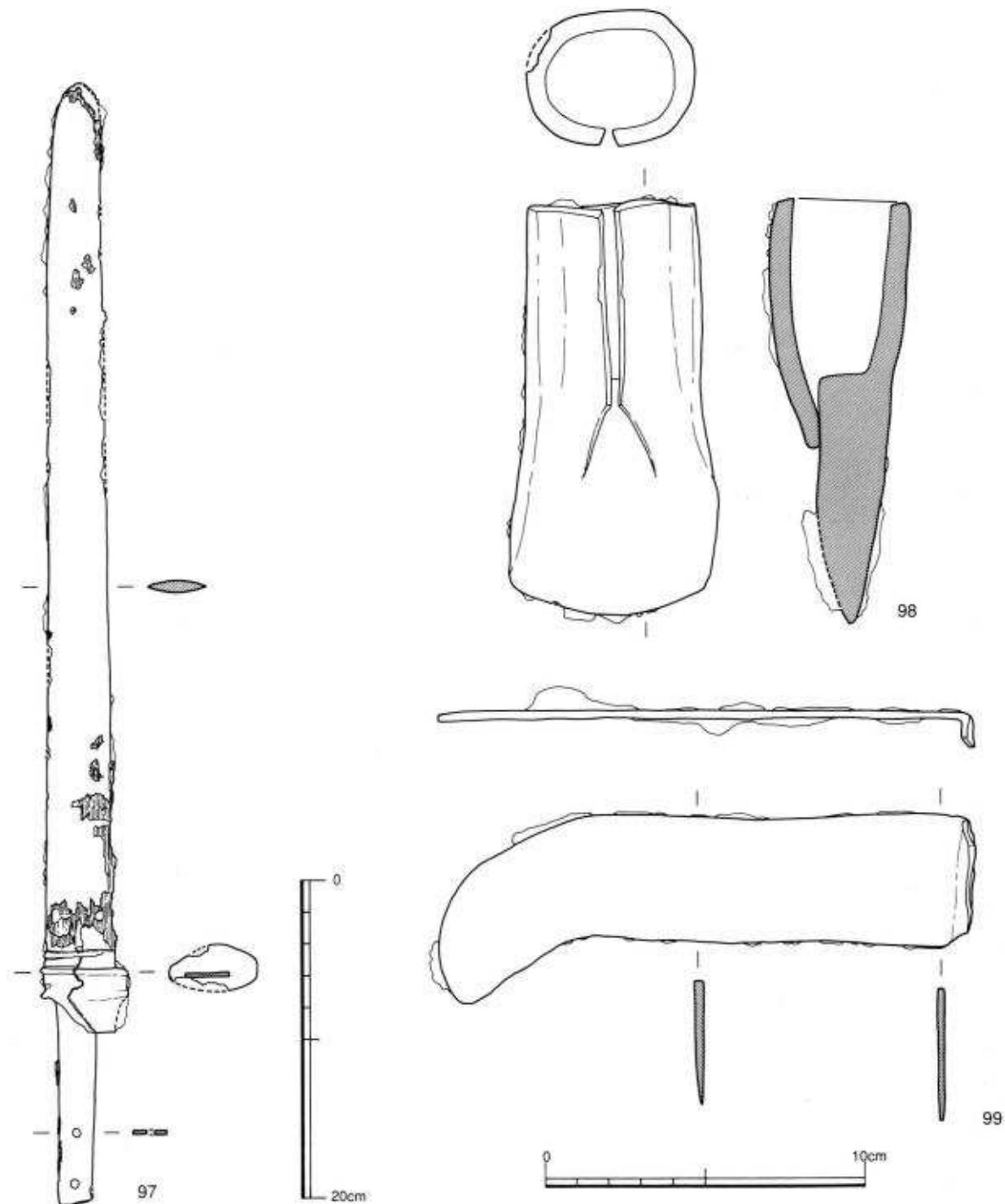


第201図 7号墳第2主体部出土鉄製品 (86: S=1/4, 87~96: S=1/2)

部分を除く全面に認められる。断面は隅丸方形または蒲鉾形を呈し、茎を落とし込むための溝が削り込まれた身と、これを表側から組み合わせるための蓋に分かれている可能性が高い。表面には幅0.5~0.8mm程度の樹皮が部分的に巻き付けられている。

83は刃先がU字形を呈する鍔・鋤先で、左耳端部が欠損している。全長は16.8cm、刃幅14.4cm、刃部長6cm、刃先部長4.4cm、刃部厚0.4cmを計る。刃部の平面形は不整U字形を呈し、耳部側面は上方に向かって幅を減じている。着柄溝は深さ1.1cmを計り、浅いV字状を呈する。

84は曲刀鎌である。全長は14.4cm、刃幅は3.2cm、背厚は0.4cmを計る。刃弦長は銹のため不明瞭であるが11.2cm程度と推定できる。基部は長さ1.2cmで、約90°の角度で折り返されている。折り返しの方向は、刃部を手前にし、折り返し部を右に置いた場合に上を向く。刃部先端は下方に向かって嘴状に屈曲する。



第202図 10号墳第出土鉄製品 (97:S=1/4, 98・99:S=1/2)

85は平面が不整台形を呈する不明品である。磁性が無く、表面や小口に木目状の痕跡が見られることから、本体は木製品である可能性が高い。表面には幅0.6cm、高さ0.8cmを計る三角錐形の鉄片が認められる。

7号墳第2主体部からは、刀1口、鎌10本が出土した〔第201図〕。

刀(86)は棺の西辺沿いで鋒を南に向けて出土した。平造の直刀で完形である。全長は83.4cm、刀身長65.7cm、茎部長17.7cmを計る。刀身幅は関で3.5cmを計り、鋒に向かって緩やかに幅を減じている。刀身の表裏には鞘木が部分的に付着しており、さらに先端刃側には幅2cm前後の帯状有機質が鞘木の上に巻き付けられている。関はX線撮影によって直角関の片関と推定できる。茎幅は断面箇所で2.2cmを計り、茎尻まではほとんど変化しない。茎尻は隅抉尻で、目釘孔は1箇所のみ観察可能である。茎の表裏には把木と考えられる木質が部分的に付着しており、関から0.6cm茎尻側で柄縁端を示すラインが認められる。茎背側には、不明瞭ながら木質の上から紐状の有機質を巻き付けた痕跡が認められる。

鎌は棺の南側東辺沿いで鎌身部を南に向けて10点出土した。鎌は全て長頸鎌であり、鎌身部の形態は片刃で、範被は台形を呈する。鎌身断面も全て平片刃造で、頸部・茎部の断面は長方形を呈する。関は撫関と斜関が認められ、頸部長は8~8.8cmの幅に収まる。完形の90は、全長16.6cm、頸部長8.1cm、茎部長5.5cmを計る。

10号墳〔第202図〕

10号墳からは、剣1本、斧1点、鎌1点、不明刃器片が出土した。

剣(97)は棺の北側東辺沿いで鋒を北に向けて出土した。完形で、全長70.2cm、剣身長54.3cm、茎部長15.9cmを計る。剣身は両丸造で鎬は認められない。剣身幅は関で4cmを計り、鋒に向かって幅を減じている。剣身の表裏には鞘木が部分的に付着している。関は直角関で、茎は中細である。茎には把装具が遺存している。鎌のため不明瞭であるが、把縁形態は置田分類のA類に類似する。把縁の側面形は逆台形で、断面形は長楕円形を呈し、鞘側には突出部分が認められる。材質は不明で、把縁と柄間は別材を組み合わせていた可能性が高い。茎は断面箇所で幅2.1cm、厚さ0.3cmを計り、目釘孔は2箇所に認められる。茎尻は一字文字尻である。

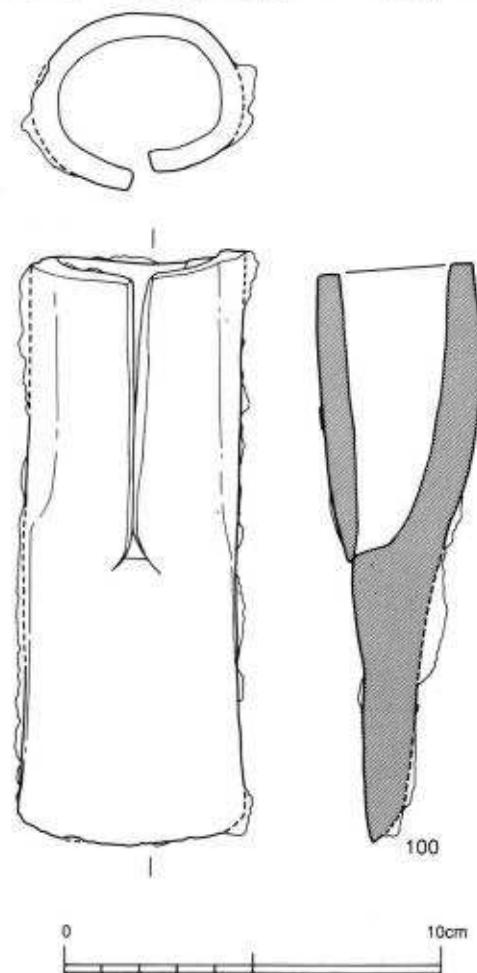
斧(98)は棺の南側中央で袋部閉じ合わせを上に向けて出土した。全長13.3cmを計る完形の袋状鉄斧である。袋部断面は楕円形で、最大幅5.5cm、最大厚4.3cmを計る。袋部最大幅に対して全長が短い形態を呈する。閉じ合わせはわずかに間隔が空いているが、製作当時は密着していたことが窺える。袋部から刃部に向かって緩やかに幅が増し、刃部でややバチ形に広がる。刃部は幅6.1cmを計る。袋部内面と刃部の境には、急激に立ち上がる段が認められる。刃部裏面には木質の付着が認められる。

99は完形の曲刃鎌である。全長16.8cm、刃幅3.9cm、刃弦長12.9cm、背厚0.3cmを計る。基部は長さ1.1cmで、約90°の角度で折り返されている。折り返しの方向は、7号墳出土資料と同様である〔第200図84〕。刃部先端は下方に向かって鈍く屈曲する。裏面に棺材と考えられる木質が付着している。

11号墳〔第203図〕

11号墳からは斧1点が出土した。

100は全長15.7cmを計る袋状鉄斧である。袋部断面は楕円形で、最大幅5.6cm、最大厚4.3cmを計る。閉じ合わせには0.4cm程度の間隔がみられる。平面形は短冊形で、袋部から刃部に向かって緩やかに幅が増加する。刃部は幅6.1cmを計る。袋部内面と刃部の境には、緩やかに厚みを増して立ち上がる段が認められる。



第203図 11号墳出土鉄製品 (S=1/2)

鉄製品からみた古墳群の位置付けについて

八里向山F遺跡は、小規模な円墳のみで構成される古墳群にも係わらず多数の鉄製品が出土し、能美丘陵周辺の古墳時代像を理解するうえで重要な資料を提供した。ここでは、鉄製品からみた各古墳の時期的な位置付けや古墳群の変遷、周辺地域の古墳との比較から導きだせる八里向山F遺跡の特色について検討してみたい。

刀剣

刀は1号墳から2口、2号墳、7号墳第1・2主体部から各1口出土している。

茎を欠損しているものが多く詳細な検討は困難であるが、関は直角関・撫関で、直茎のものが多いようである。86は茎部長が17.7cmを計り、直茎で茎尻は隅抉尻を呈する。池淵俊一の研究を参照すると、このような特徴をもつ刀は古墳時代中期に主体を占めるようである（池淵1993.p68～70）。また、37には置田分類のB類に該当する把装具が残存している。類似する形態の把装具は奈良県天理市の布留遺跡三島（里中）地区（山内ほか1995）などで認められることから、37の把装具も古墳時代中期に属する可能性が高い。さらに、41には把縁に帯状に浅い割り込みが施され、類似する把装具は布留遺跡三島（里中）地区（同1995.p307）などで認められる。これらのことから、刀で時期の検討が可能なものは、ほぼ古墳時代中期に属するものと考えられる。

劍は5号墳、7号墳第1主体部、10号墳から各1口出土している。

関は比較的浅い直角関で、茎は中細茎のもので占められる。茎長は40で14.2cm、97で15.9cmを計り、両者とも茎尻は一字文字尻を呈する。池淵氏の研究を参考すると、このような特徴の劍は5世紀中葉以降に主体を占め、5世紀後葉にはこの特徴の劍ではほぼ統一され、6世紀初頭になると長劍自体がほとんどみられなくなるようである（池淵1993.p52）。このことから、劍は5世紀中葉から末（中期中葉～末）頃に比定できる。

鎌

鎌は1号墳から32本、7号墳第1主体部から34本、7号墳第2主体部から10本出土している。

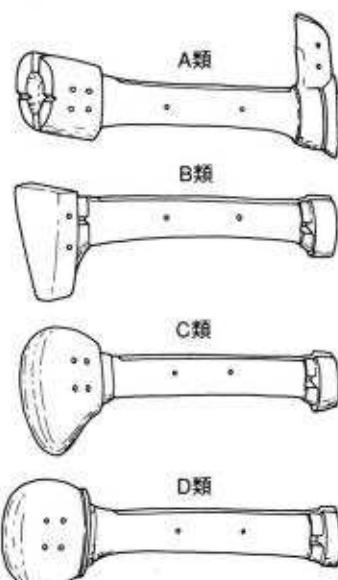
7号墳第1主体部で出土した平根系鎌5本以外は、全て鎌身が片刃で、範被が台形を呈する長頸鎌に限られる。関に逆刺を有するものは7号墳第1主体部のみで認められ、杉山秀宏はこの片刃で逆刺をもつ長頸鎌について、「短甲出土古墳との共伴例も多く、当時の畿内政権の動向を知るうえで鍵となるものである（杉山1988.p611。）」と述べている。この形態の鎌が、短甲の出土した7号墳第1主体部からのみ出土し、さらに短甲内に納められた状態で出土したことは、杉山氏の見解を補強するものと考えられる。これらの長頸鎌は、各部位の形態や矢柄の装着方法が似通っており、頸部長も1号墳のなかで長さが短い一群がみられる以外、ほぼ8～10cm程度の幅におさまっている。このことから、各埋葬施設から出土した長頸鎌はほぼ似通った時期に属するものと考えられる。一方、平根系鎌は腸抉三角形鎌で、逆刺の外反度は弱い。以上の鎌について杉山の研究を参考すると、長頸鎌は古墳時代中期中葉～後葉（TK208～23型式併行期）、平根系鎌は中期後半（TK23型式併行期）頃に比定できる。

刀子

刀子は2号墳、7号墳第1主体部で各1口出土している。

両者とも刀部幅が鋒に向かって狭くなる形態を呈し、関は両関、茎尻は栗尻である。石川県内における刀子の変遷を参考すると、中期中葉に両関のものが出現し、中期後葉以降は両関で刀部と茎部幅が狭く、茎尻が栗尻のものが主体を占めるようである。また、43には柄縁金具が認められるが、類似する事例として、大阪府柏原市高井田山古墳出土の銀製把縁金具（安村・桑野1996.p122）、奈良県橿原市新沢230号墳出土の鉄製把縁金具（伊達ほか1981.p492）などがあげられ、どちらも中期後半（TK23型式併行期）頃に比定できる。

なお、7号墳第1主体部では、他の鉄製農工具が一括して短甲内に納められているにも係わらず、刀子は被葬者の脇と考えられる箇所で剣と並べ置かれている。また、後述するように、北陸地域における甲冑出土古墳では鉄製農工具の共伴例が少ないので対して、刀子と斧だけは高い頻度で共伴する〔第13表〕。これらのことから、比較的大型の刀子には、副葬時に武器として取り扱われていたものも存在した可能性が高い。



第204図 把装具の分類[山内1995]

短甲

短甲は7号墳第1主体部から出土している。この短甲の特徴をまとめると、右前胴開閉式の横矧板鉢留短甲で、段構成は前・後胴ともに豊上3段、長側4段の7段構成である。後胴豊上第3段の鉢留数は上辺6、下辺7箇所で、鉢頭径は0.7~0.8cmを計る。帶金幅は右前胴の豊上第3段で3.7cm、長側第2段で4.4cmを計り、引合板・押付板の鉢留位置はC類とD類がみられる。蝶番金具は長方形2鉢で、覆輪は鉄包覆輪である。滝沢誠の研究を参考すると、このような特徴の短甲はIIb式に該当するものと考えられ、時期は5世紀後葉（TK23型式併行期）に比定できる（滝沢1991）。

この短甲で特筆すべきは、短甲内に多数の鎌や農工具が納められていた点にあるだろう。管見では、短甲内に他の副葬品を納める事例は31基の古墳で確認できる。これらを分類すると以下の4類型に分類できる。

A類：冑や付属具を納めるもの（大阪府豊中市御獅子塚古墳など）。革綴短甲で多くみられるが、畿内地域では中期後葉～末にも確認できる。奈良県奈良市のベンショ塚古墳では斧や鑿も共伴する。

B類：豊櫛や玉類などの装身具を納めるもの（東京都世田谷区野毛大塚古墳など）。革綴短甲で認められ、現状では関東・北陸地域に分布する。刀剣・鎌との共伴例も認められる。

C類：武器のみを納めるもの（宮崎県えびの市島内62号地下式横穴墓など）。類例が少なく不明瞭である。

D類：農工具を納めるもの（奈良県大字陀町後出2号墳など）。鉢留短甲で多く認められ、矛や鎌との共伴例も存在する。石川県寺井町の和田山2号墳では馬具との共伴も確認できる。

八里向山F7号墳の事例はD類に該当するが、全事例の半数以上はA類で占められ、それ以外の類型は各々で数例程度認められるのみである。ここで詳述することはできないが、D類の出現については中期後葉以降にみられる甲冑配布形態の格差と、鉄製農工具副葬の減少が関連している可能性が高い。

ここで北陸地域における古墳時代の甲冑を集成すると、29基の埋葬施設から甲冑や付属具の出土が認められる〔第13表〕。そのうち甲は27基の埋葬施設から29領が確認でき、その他に福井県福井市の法土寺22号墳からは頸甲と肩甲のみが出土している（櫛部1998.p24）。型式の判明するものは28領あり、方形板革綴短甲は埋葬施設1基から1領、長方板革綴短甲は埋葬施設4基から4領、三角板革綴短甲は埋葬施設4基から5領、三角板鉢留短甲は埋葬施設5基から5領、横矧板鉢留短甲は埋葬施設7基から8領、挂甲は埋葬施設5基から5領が確認できる。このことから、北陸地域の甲は長方板・三角板革綴短甲という定型化した甲が普及する時期（中期前葉）に急増し、その後、横矧板鉢留短甲が主体を占める時期（中期後葉）に最も出土数が多くなる傾向が窺える。

冑との共伴については、長方板・三角板革綴短甲には共伴例が少なく、石川県辰口町の下開発茶臼山9号墳と福井県福井市の天神山7号墳で豊矧細板革綴衝角付冑、石川県小松市の後山無常道古墳で豊矧細板鉢留眉庇付冑の共伴が見られるのみである。一方、三角板鉢留短甲ではほとんどに冑が共伴するが、横矧板鉢留短甲では前方後円墳である石川県加賀市の狐山古墳と福井県上中町の西塚古墳、円墳では石川県辰口町の西山3号墳で冑や付属具の共伴が認められ、その他の円墳では短甲のみの出土に留まる。三角板鉢留短甲が出土した古墳は、規模や外部施設、副葬品などから地域の首長墓と考えられる古墳には限定でき、横矧板鉢留短甲で冑や付属具が共伴した古墳も同様の理解が可能である。甲冑が畿内中枢地域から配布されたことを前提にすれば、三角板鉢留短甲が主体を占める時期（中期中葉）には、北陸地域の有力首長に限定的な配布が行われ、中期後葉には有力首長に甲冑や付属具の配布、より下位の有力者には短甲のみの配布が行われた可能性が高い。

続いて甲冑の分布をみてみると、中期前葉には旧国単位で1・2例程度の点在的な分布を示す。点在的な分布の傾向は中期中葉まで続くが、中期中葉には南加賀・越前・若狭地域に分布が限定される。また、石川県寺井町和田山5号墳を含む能美古墳群、福井県松岡町二本松山古墳を含む松岡古墳群など、北陸地域を代表する古墳群に分布がみされることも特徴的である。中期後葉になると、能美古墳群周辺に分布が集中する傾向が認められる。その他の地域では前時期と同様に点在的な分布を示すが、これらの地域では狐山古墳と二ツ梨窯跡や勅使遺跡、富山県氷見市イヨダノヤマ3号墳と園カンデ窯跡など、古墳築造前後の時期に隣接した箇所で須恵器・埴輪窯や鍛冶関連遺跡が認められることが多く、古墳の被葬者と各種手工業生産の密接な関連が窺える（権田1999.p325・林1999.p151）。中期末以降は挂甲が主体となり、若狭地域に分布が集中する傾向が認められる。

以上のことから、八里向山F7号墳の短甲は5世紀後葉（TK23型式併行期）に比定でき、その被葬者はこの時期に短甲の分布が集中する能美古墳群の有力首長や畿内中枢地域と関連の深い有力者と推定することができる。



第205図 北陸地域における甲冑出土古墳の分布図

第13表 北陸地域の甲冑出土古墳一覧表

道 路	墳形	径	所在地	遺構	時期	甲	胄	付属品	刀子	劍	鎧	鏡	鏡	馬具	備 考
1 飯綱山10号墳	円	40	新潟県南魚沼郡六日町	東石室 (鑿穴式石室)	中期後葉	横矧板新留2				1					□
2 谷内21号墳	円	30	富山県小矢部市	解竹形木棺	中期前葉	長方板革縫1, 三角板革縫1		鎧甲、肩甲。 革草摺							黒漆塗り
3 イヨダメノケマツ号墳	円	20.5	富山県永見市	解竹形木棺	中期中葉	横矧板新留1						1			
4 前の宮1号墳	前方後方	64	石川県鹿島町	解竹形木棺	前期後半	方形板革縫1			3	-2	3		1	1	鏡1
5 鶴岡円山1号墳	円	22	石川県鶴岡市	箱形石棺	中期前葉	長方板革縫1			1						井石、埴輪
6 下関発茶山1号墳	円	16	石川県能美郡 (粘土壁)	A型 (粘土壁) B型 (粘土壁)	第2.主室 (粘土壁)	中期前葉	三角板革縫1	堅強織革縫 垂角1		2					
7 西山3号墳	円		石川県能美郡 (粘土壁)	木棺直葬	中期後半	横矧板新留1	小札新留直角1	鎧甲							
8 和田山2号墳	円	19	石川県能美郡 (粘土壁)	木棺直葬	中期末	横矧板新留1			2	1					○ 砥石製作
9 和田山5号墳	前方後円	43	石川県能美郡 (粘土壁)	A型 (粘土壁) B型 (粘土壁)	中期中葉	三角板新留1	小札新留直角1	鎧甲、肩甲。 羃手、手甲	2	3			2		
10 八星向山1号墳	円		石川県小松市	第1生移葬 (解竹形木棺)	中期後半	横矧板新留1			1	-2	3	1	1	1	
11 後山無堂堂古墳	円	24	石川県小松市	木棺直葬	中期前葉	三角板革縫1	堅強織革縫 直角1		2						
12 後山明神2号墳	円		石川県小松市	木棺直葬?	中期末?	○	○								
13 梓山古墳	前方後円	54	石川県加賀市	箱形石棺	中期後半	横矧板新留1, 挂甲1									銚形剣
14 鶴坂丸山5号墳	円	15	石川県加賀市	木棺直葬	中期末		小札新留直角1	挂甲	1						円筒埴輪、共箱
15 稲奈瀬山古墳	前方後円	59	福井県福井市 金津町	横穴式石室	後期前半	挂甲1			3						○ 井石
16 二本松山古墳	前方後円	90	福井県吉田郡 敦賀町	2号石棺	中期中葉	三角板新留1	小札新留直角1	鎧甲、騎士							円筒埴輪。
17 天神山7号墳	円	52	福井県福井市	1号理葬施設 (粘土壁)	中期中葉	長方板革縫1	堅強織革縫 垂角1	鎧甲、肩甲。 革草摺		1					家形、円筒埴輪、 弓3
18 西谷山2号墳	円	24	福井県福井市	2号石棺	中期中葉	三角板新留1	新留直角1		2	2					埴輪片
19 法土寺22号墳	円	18	福井県福井市		中期後半										
20 向出山1号墳	円	60	福井県敦賀市	1号石室 (横穴式石室) 2号石室 (横穴式石室)	中期後半	挂甲1	堅底1	全鋼装鎧甲	1				1		素環頭大刀
21 前の山2号墳	円		福井県三方郡 (三方町)	横穴式石室	後期前半	挂甲1									○
22 大谷古墳	円	22	福井県越前郡 (上中町)	横穴式石室	後期前半	挂甲1									○
23 向山1号墳	前方後円	48.6	福井県越前郡 (上中町)	横穴式石室	中期中葉	三角板革縫2			4						2段造成、埴輪
24 西塙古墳	前方後円	48.6	福井県越前郡 (上中町)	木棺直葬	中期中葉	長方板革縫1									前方部無
25 丸山塙古墳	円	50	福井県越前郡 (上中町)	横穴式石室	中期末	横矧板新留1	小札新留直角1, 挂甲1	鎧甲、肩甲		2					○ 井石、盾形透溝、 埴輪、2段造成
						横矧板新留1	羃手								○ 2段造成、環頭大刀

鍬・鋤先

鍬・鋤先は1号墳、2号墳、7号墳第1主体部から各1点出土している。

これらの鍬・鋤先の特徴をまとめると、全てがU字形刃先で着柄溝は浅いもので占められる。平面形は1号墳から出土した36は角のとれた凹字形、7号墳第1主体部から出土した83はU字形を呈する。2号墳から出土した39も著しく破損しているが、平面形はU字形を呈することが推測できる。刃部長は比較的長く、36で7.7cm、83は6cm、39の刃部残存長は5.6cmを計る。松井和幸や魚津知克の研究を参照すると、36のように平面形が凹字形やそれに似た形態で、刃部長が長いものは、古墳時代前期末から中期初頭にかけて北部九州に出現し、中期中葉には西日本を中心とした本州域にも普及する。その後中期後葉になると出土例が減少し、中期末には消滅する。一方、平面形がU字形を呈するものは中期初頭に北部九州で出現し、中期中葉には本州域にも普及し、中期後葉以降になると主体を占めるようになる（松井1987.p44・魚津2003.p30～32・35・36）。また、これまで石川県内で出土したU字形刃先と比較すると、36は中期中葉に属する和田山5号墳B櫛出土資料（吉岡・河村ほか1997.p151）と類似しているが、着柄溝が深い点で和田山5号墳B櫛出土資料と異なる。県内における中期後葉以降の出土例は全て着柄溝が深いことから（楠ほか1999.p49～53）、36は和田山5号墳B櫛出土資料より時期が後続するものと推定できる。39・83は中期後葉に属する石川県志賀町北吉田フルワ4号墳出土資料（楠ほか1999.50・53）と類似する。これらのことから、この古墳群から出土したU字形刃先は中期後半（TK23型式併行期）頃に比定できるが、1号墳出土の36は他の2資料より時期的に先行する可能性が高い[第207図参照]。

鎌

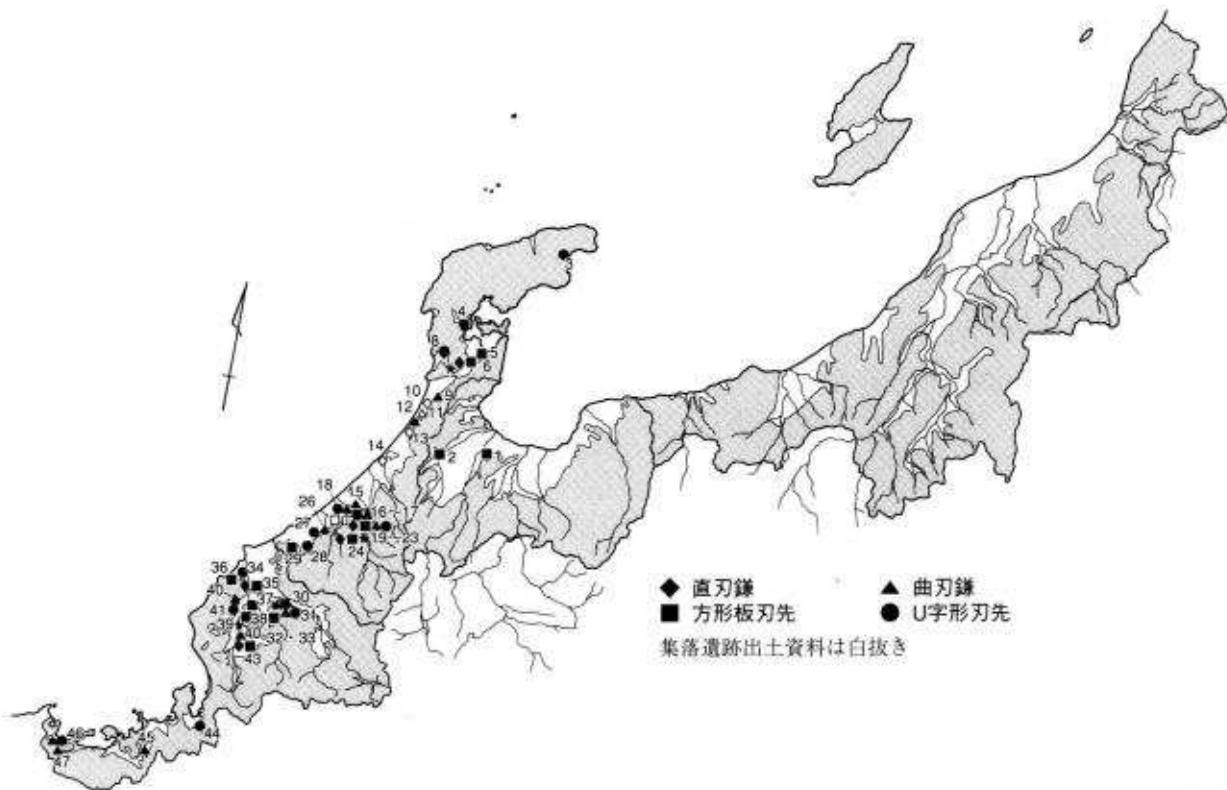
鎌は7号墳第1主体部、10号墳から各1点出土している。

両者とも曲刀鎌である。7号墳第1主体部から出土した84は、背がほぼ一直線で、刃部先端は下方に向かってほぼ垂直に屈曲する。10号墳から出土した99は、背がやや湾曲し、刃部先端は下方に向かって鈍く屈曲する。魚津の研究を参考すると、このような特徴をもつ曲刀鎌は中期中葉から後葉に主体を占めるようである。その後、中期後葉から末には刃幅が比較的細身で、刃部先端は前時期よりも基部に近い箇所から緩やかに湾曲するものが多くなるようである（魚津2003.p34）。これらのことから、この古墳群から出土した曲刀鎌は中期中葉から後葉に比定でき、99は84と比較して時期的に後続する可能性が高い[第207図参照]。

ここで北陸地域における古墳時代の鉄製農具を集成すると、47遺跡からの出土が認められる[第206図・第14表]。古墳出土例が大半を占め、集落出土例は5遺跡に限定される。鉄製農具の分布をみてみると、前期初頭から中葉には古墳出土例が旧国ごとに1・2例程度の点在的な分布を示し、集落出土例は加賀・能登地域のみに確認できる。古墳出土例は方形板刃先、集落出土例は直刀鎌が主体を占め、集落出土例はこの時期以降に急激に減少する傾向が認められる。前期後葉から中期前葉も点在的な分布傾向は続き、能登・南加賀・越前地域に各1・2例の分布が認められる。この時期には方形板刃先と直刀鎌の両者が共伴する事例が多く認められる。中期中葉から後葉になると、能美丘陵周辺と福井平野に分布が集中する傾向が認められる。中期中葉には方形板刃先からU字形刃先、直刀鎌から曲刀鎌の転換が行われ、この時期以降は方形板刃先と直刀鎌の出土がほとんどみられなくなる。また中期後半には、能登・越中・越前地域など能美丘陵周辺以外の地域にも点在的な分布が拡大する反面、この時期以降には鉄製農具の出土例が減少するようである。中期末には前時期とは重なる分布を示すが、後期に至ると分布域は拡大し、これまで鉄製農具が認められなかった奥能登・若狭地域にも分布がみられるようになる。

これら鉄製農具の分布や時期的変遷は甲冑と類似する点も多くみられるが、甲冑と鉄製農工具の共伴例をみてみると（第13表）、古墳時代全時期を通じて、甲冑出土古墳には刀子と斧を除く鉄製農工具の共伴例が少ないと窺える。また両者が共伴する古墳は、前期末の石川県鹿西町雨の宮1号墳（前方後方墳、全長64m）や中期中葉の和田山5号墳（前方後円墳、全長63m）など、北陸地域を代表する有力首長墓が多く、八里向山F7号墳のような小型円墳での共伴例は他に認められない。

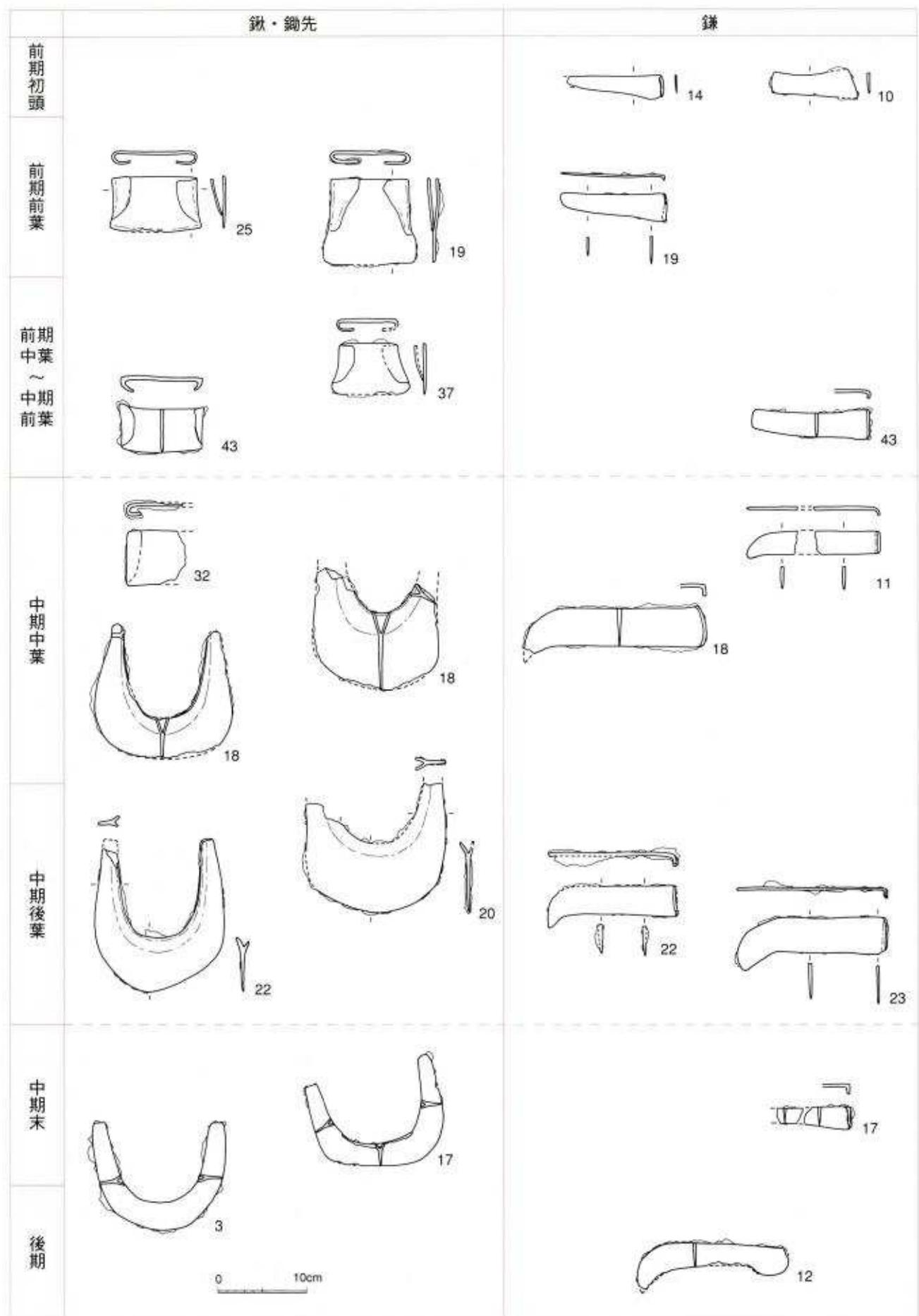
以上のことから、八里向山F遺跡の古墳群から出土した鉄製農具は中期後葉（TK23型式併行期）を前後する時期に比定でき、型式的な成果では1号墳→2号墳・7号墳第1主体部→10号墳の順に組列することが可能である。また、鉄製農具の分布や時期的変遷からは、この古墳群出土の鉄製農具は能美丘陵周辺に分布が集中する時期に該当するが、小型円墳のみで構成される古墳群としては鉄製農具の出土量が多く、特に7号墳第1主体部で甲冑と各種鉄製農工具が共伴する事例は、北陸地域のなかでも極めて例外的な事例として捉えることが可能である。



第206図 北陸地域における古墳時代の鉄製農具出土遺跡の分布図

第14表 北陸地域における古墳時代の鉄製農具出土遺跡一覧表

遺跡	所在地	遺構	時期	直刃	曲刃	方形	U字	その他	遺跡	所在地	遺構	時期	直刃	曲刃	方形	U字	その他
1 小糸袋田原7号墳	富山県大門町		中期中葉～後葉				1		23 小堀向山	石川県小松市	削竹形木棺	中期後半		1			
2 管内16号墳	富山県小矢部市	削竹形木棺	前期前半						24 沢田山10号墳	石川県小松市	削竹形木棺	前期後半	○	○			
3 水神寺2号墳	石川県珠洲市	削竹形木棺	中期後葉～後期初頭				1		25 手代・能美遺跡	石川県小松市	天溝	前期前半		1			
4 中島山岸1号墳	石川県中島町	横穴式石室	後葉				1		26 花輪坂古墳	石川県小松市	木心貼土棺	後期		1			
5 国分尼塚1号墳	石川県七尾市	削竹形木棺	前期前半				1		27 志贺林古墳	石川県加賀市	木心貼土棺	後期後半		1			
6 間谷宮1号墳	石川県鹿島町	削竹形木棺	前期後半	1	1				28 二子風森1号墳	石川県加賀市	削竹形木棺	後期後半		1			
7 アンジウタイ7号墳	石川県鹿島町	第2主体(削竹形木棺)	前葉				手連1		29 墓坂丸山2号墳	石川県加賀市	削竹形木棺	前期前半		1			
8 北吉田3番7号墳	石川県志賀町	椎巻古墳	中期後半				1		30 奈良5号墳	福井県尾崎市	第2主体(木棺直葬)	中期		1			
9 小谷寺14号墳	石川県志賀町	椎巻古墳	後期後半	1					31 佐野谷2号墳	福井県福井市	削竹形木棺	中期中葉		1			
10 須別山遺跡	石川県志賀町	1号土坑	前期初期	1					32 天神山5号墳	福井県福井市	墳丘走廊	中期中葉		1			
11 兼田一本松遺跡	石川県志賀町	第26号堅穴	中期中葉						33 天神山13号墳	福井県福井市	第1埋葬	中期		1			
12 中治C1号墳	石川県高松町	木棺直葬	後期中葉						34 佐土寺10号墳	福井県福井市	削竹形木棺	中期		1			
13 高松のカド遺跡	石川県高松町	SH00-2	前期初期	1					35 法王寺23号墳	福井県福井市	第2主体(削竹形木棺)	中期		1			
14 畠田遺跡	石川県金沢市	SD06-9中層	前期初期	1					36 中山2号墳	福井県福井市	墓土中	前期後半		1			
15 園山1号墳	石川県金沢市	横穴式石室	後期後葉						37 横荷山古墳	福井県福井市	木棺直葬	前期中葉		1			
16 下園榮茶臼山2号墳	石川県金沢市	周溝	中期後半				1		38 雅ノ同古墳	福井県福井市	密形石棺	前期末	1	1			
17 下園榮茶臼山14号墳	石川県金沢市	第1主体部(削竹形木棺)	中期末	1	1				39 三尾野7号墳	福井県福井市	削竹形木棺	前期			三又脚		
18 和田山5号墳	石川県金沢市	A様(船玉模)	中期中葉			2			40 安庭古墳	福井県福井市	後期	1					
		B様(桔上模)	中期中葉	1	1				41 小豆山4号墳	福井県高浜町	削竹形木棺	中期末		1			
19 八尾山D1号墳	石川県小松市	第1主体部(削竹形木棺)	前期前半			1			42 高山1号墳	福井県越前町	削竹形木棺	中期		1			
		第2主体部(削竹形木棺)	前期前半	1					43 玉山31号墳	福井県鶴来町	第1土塁(木棺直葬)	前期後葉	1	1			
20 八尾山E1号墳	石川県小松市	削竹形木棺	中期後半				1		44 向出山1号墳	福井県敦賀市	1号石室(堅穴式石室)	中期中葉～後葉			1		
21 八尾山E2号墳	石川県小松市		中期後半				1		45 さよしの3号墳	福井県三方郡	横穴式石室	後期中葉～後葉		1			
22 八尾山F1号墳	石川県小松市	第1主体部(削竹形木棺)	中期後半	1	1				46 行跡古墳	福井県高浜町	横穴式石室	後期中葉	2	1			
									47 二子山1号墳	福井県高浜町	横穴式石室	後期前葉	1				



第207図 北陸地域における古墳時代の鉄製農具変遷図 (S=1/6)

古墳群の変遷

これまで、鉄製品の特徴により、その所属時期を推定してきたが、統いてこれらの成果を検討して、各古墳の時期的位置づけや古墳群の変遷などについて考えることで本節のまとめとしたい。

古墳群の立地について櫻田誠は、「高低差をもってT字に連結する尾根筋上にあり、高い方をA尾根、低い方をB尾根と呼んでいる（櫻田 1997.p127。）」と述べている。A尾根にはF1～F4号墳、B尾根にはF5～F11号墳が認められ、それぞれが列状の支群を構成している。ここでは各尾根上の古墳をA支群、B支群と設定する。また、F7号墳とF8号墳は墳丘の識別が困難であるため、F8号墳は分析対象から除外することとする。

まず鉄製品の組成や副葬配置の検討を行う。冒頭でも述べたように、この古墳群では刀剣、工具（刀子・斧）、農具を各1点副葬することが鉄製品の基本組成となる可能性が高い。この組成は短甲や鎌などが加わることや、基本組成の一部分や全体が欠如することで、いくつかのバリエーションを生み出している。これらの鉄製品組成や副葬配置を分類すると以下の4類型に分けることができる。

I類：被葬者の両脇に刀剣、刀剣の鋒側に鎌の束や農工具を配置するもの（1号墳、7号墳第1主体部）。削平のため不明だが、把側にも副葬品が配置されていた可能性が高い。7号墳第1主体部では鋒側に農工具を納めた短甲が加わる。7号墳第2主体部の副葬配置はI類の簡略化したものと捉えることができる。

II類：被葬者の脇に刀剣、近接した小口側に農具を配置し、反対側の小口付近に工具と多数の玉類を配置するもの（2号墳、10号墳）。両者とも2体の被葬者が埋葬されていた可能性がある。

III類：被葬者の脇に刀剣1口を配置するもの（5号墳）。把側にも副葬品が配置されていた可能性がある。

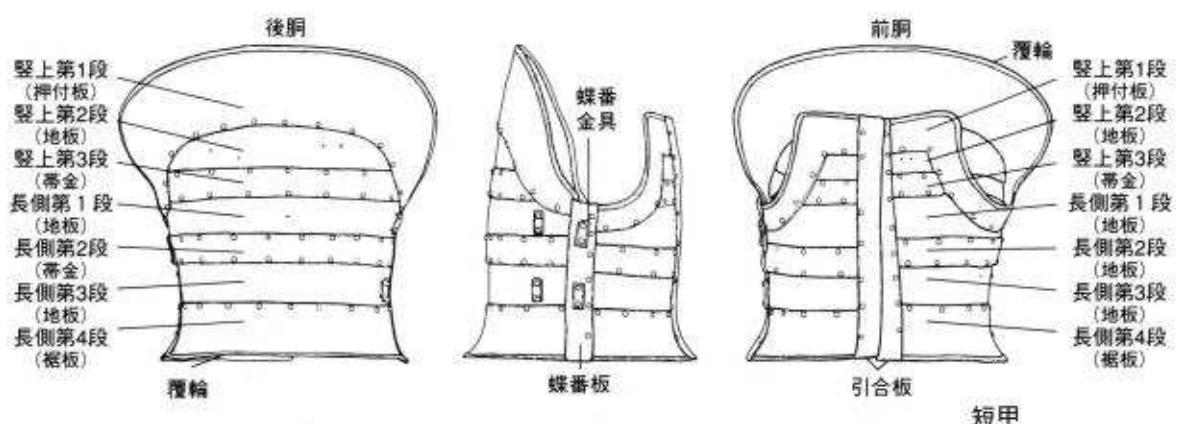
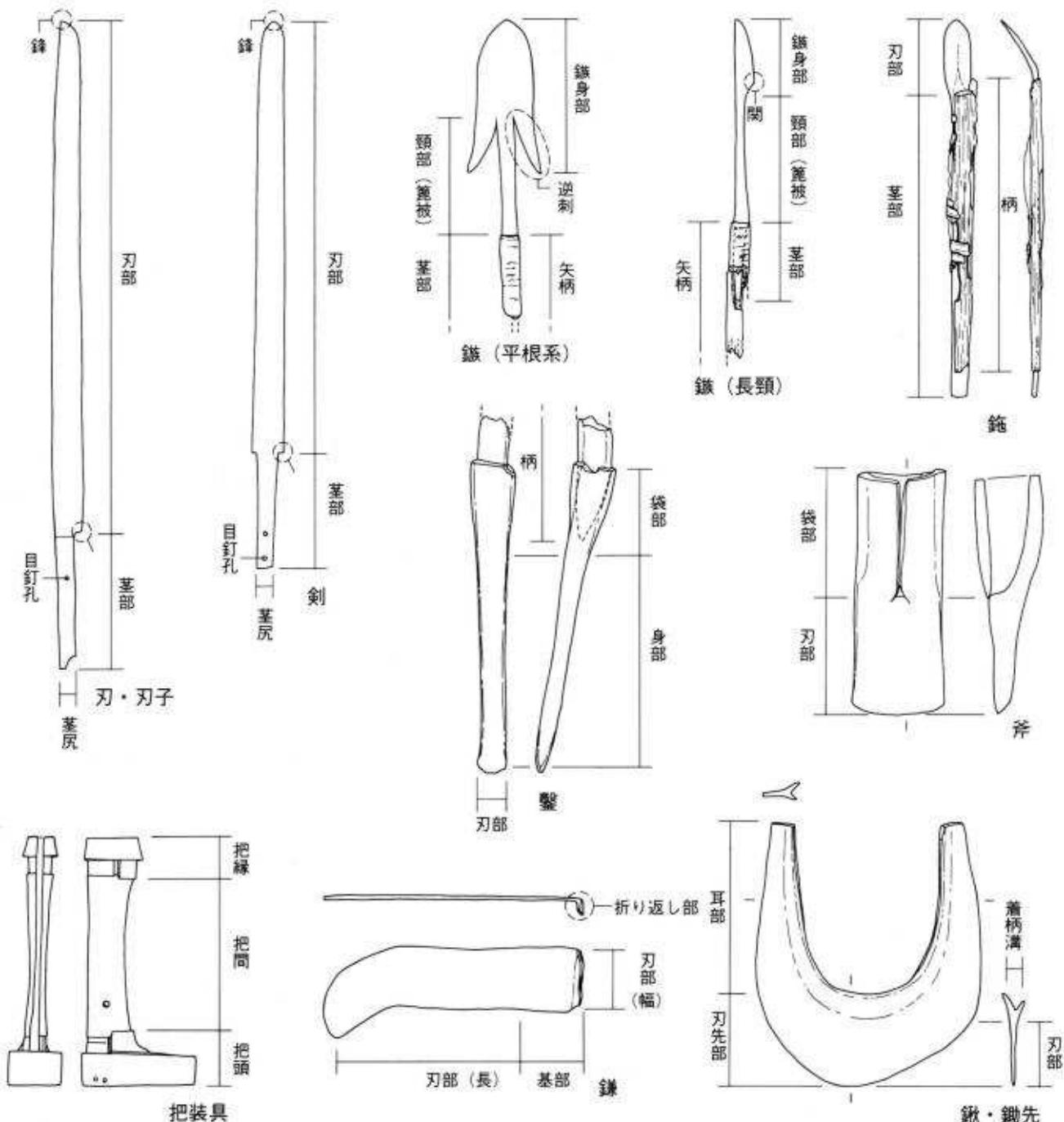
IV類：鉄製品の副葬を行わないもの（3号墳、4号墳、6号墳、9号墳）。

これらの類型は、寺沢知子が奈良県橿原市の新沢千塚古墳を分析する際に設定した類型と類似している（寺沢 1982.p256）。また、伊藤雅文の研究を参考すると、八里向山F遺跡古墳群のように小規模古墳が尾根上に群集し、木棺直葬などの竪穴系埋葬施設を内部主体とする古墳群では、群形成初期の古墳は比較的優れた副葬品をもつが、時期が新しくなるにつれて副葬品は質・量ともに低下する傾向がみられる（伊藤 1988）。すなわち、この古墳群ではI類が最も古い時期、IV類が最も新しい時期に築かれた可能性が高い。なお、北陸地域における鉄留短甲を出土する粘土櫛や木棺直葬墳の副葬配置をみると、農工具の有無に差異が認められる以外は、ほぼ全てがI類の配置であることが窺える。また、三角板鉄留短甲は被葬者の脇に置かれた刀剣の把側、横矧板鉄留短甲は鋒側に配置される傾向が認められる。畿内及びその周辺地域でも同様の配置が多くみられることから、短甲やその他の鉄製品だけではなく、その副葬規範も畿内中枢地域から伝達された可能性がある。

統いて鉄製品から推定できた各古墳の時期をまとめると、1号墳、7号墳第1・2主体部から出土した長頸鎌は中期中葉～後葉（TK208～23型式併行期）、7号墳第1主体部から出土した平根系鎌は中期後葉（TK23型式併行期）に比定できる。短甲は中期後葉に比定でき、短甲内に納められた鉄製工具も同時期に属するものと考えられる。鎌は7号墳第1主体部→10号墳、鍔・鍔先は1号墳→2号墳・7号墳第1主体部の順に組列することが可能で、7号墳第1主体部出土資料が中期後葉に比定できる。刀剣は詳細な時期推定が困難であるが、おおよそ中期中葉～末頃に比定できる。なかでも5号墳から出土した剣は剣身幅が広く、中期末に属する辰口町西山3号墳出土例（吉岡・河村ほか 1997.p273）と類似することから、これと同時期頃に属すると考えられる。これらのことから、各古墳の時期は、1号墳が中期中葉～後葉（TK208～23型式併行期）、2号墳と7号墳第1・2主体部が中期後葉（TK23型式併行期）、10号墳が中期後葉の新段階、5号墳が中期末（TK47型式併行期）頃に位置づけられる。

古墳群の変遷をまとめると、八里向山F遺跡の古墳群は中期中葉～後葉に群形成が始まり、中期末まで造営が継続する。古墳群は地形からA支群とB支群に区分でき、まずA支群で1号墳が中期中葉～後葉に造営され、以後A支群では2号墳→3・4号墳の順で群が形成されたことが窺える。一方、B支群では7号墳が中期後葉に造営され、第1主体部→第2主体部の順で埋葬が行われた可能性が高い。以後6・10号墳→5・9号墳（11号墳）の順で群が形成されたものと思われる。

以上、八里向山F遺跡古墳群の出土鉄製品について述べてきたが、この古墳群の大きな特徴としては、小規模円墳にも係わらず多量の鉄製品を保有すること、特に多数の鎌・農工具を納めた短甲の存在を大きな特徴としてあげることができる。北陸地域のなかで例外的なこの特徴は、畿内地域の初期群集墳に類似する例が認められ、この古墳群の被葬者と畿内中枢地域との密接な関係を推測させるに充分な材料となりうるのではないだろうか。



第208図 鉄製品の各部名称

第15表 刀計測表

辨別	番号	墳墓名	出土遺物	闊	厚	基部	全長	刀身部			茎部			備考
								長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
188	1	1号墳	埋葬施設	直角開	中縫		(73.4)	71.1	3.8	1.2				楠木残存
*	2	1号墳	埋葬施設				(55.8)		3.4	0.9				楠木残存
191	37	2号墳	埋葬施設		直		(103.8)	(86.6)	3.5	0.8	(16.6)	2.1	0.70	楠木・把装具残存
193	41	2号墳	第1主体部	直角開			(83.6)	81.8	3.0	1.0	(6.0)	2.2	0.80	楠木・把装具残存
201	86	7号墳	第2主体部		直	隔板底	83.4	65.7	3.5	1.2	17.7	2.2	0.78	楠木・把装具残存

第16表 剣計測表

辨別	番号	墳墓名	出土遺物	闊	厚	基部	全長	劍身部			茎部			備考
								長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
192	40	5号墳	埋葬施設	直角	中縫	文字尻	(55.9)	(41.7)	5.3	0.70	14.2	3.4	0.35	楠木・把装具残存
193	42	7号墳	第1主体部	直角	中縫	一文字尻	(57.4)	48.0	5.4	0.60	(9.4)	2.2	0.3	楠木・把装具残存
202	97	10号墳	埋葬施設	直角	中縫	一文字尻	70.2	54.3	4.0	0.75	15.9	2.1	0.3	楠木・把装具残存

第17表 刀子計測表

辨別	番号	墳墓名	出土遺物	闊		基部	全長	刀身部			茎部			備考	
				刃開	背開			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
191	38	2号墳	埋葬施設	斜開	背開	中縫	聚尻	(13.6)	(8.8)	2.3	0.3	4.8	1.4	0.3	銅頭・銅皮卷残存
193	43	7号墳	第1主体部	斜開	背開	中縫	聚尻	(19.8)	(12.8)	2.2	0.4	7.0	1.5	0.4	銅頭・銅皮卷残存

第18表 刀子計測表

辨別	番号	器種	墳墓名	出土遺物	全長	刃長	刃幅	刃部厚	茎部幅	茎部厚	重量	備考		
												長さ	幅	厚さ
190	35	袋状鉄斧	1号墳	埋葬施設	(12.5)	(7.9)	(9.9)	2.5	(6.1)	0.6	1770.80	有肩鉄斧		
199	80	袋状鉄斧	7号墳	第1主体部	14.1	9.2	4.9	1.3	4.0	0.3	221.30	明の一部残存		
*	81	袋状鉄斧	7号墳	第1主体部	19.6	8.3	7.1	2.1	5.9	0.6	872.84			
202	98	袋状鉄斧	10号墳	埋葬施設	13.3	7.8	6.1	2.2	5.5	0.6	509.25			
203	100	袋状鉄斧	11号墳		15.7	7.6	6.0	2.2	5.6	0.6	712.15	採集品		

第19表 鋏計測表

辨別	番号	器種	墳墓名	出土遺物	全長	刃長	刃幅	刃部厚	茎部幅	茎部厚	重量	備考
199	82	鉗	7号墳	第1主体部	(24.4)	(4.9)	1.7	0.35	1.1	0.45	61.03	柄が良好に残存

第20表 鑿計測表

辨別	番号	器種	墳墓名	出土遺物	全長	刃幅	刃部厚	身部幅	身部厚	抜部幅	重量	備考
198	79	袋状鉄鑿	7号墳	第1主体部	20.0	1.7	0.7	1.8	1.3	2.9	156.21	柄の一部残存

第21表 1号墳出土鐵鎌計測表

辨別	番号		鎌身	闊	全長	鎌身部			茎部			備考
						長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
188	3	長頭	片刃		(7.2)	(2.9)	(0.90)	0.30	(14.3)	0.55	0.35	
*	4	長頭	片刃	彎開	(7.9)	2.4	0.75	0.30	(15.5)	0.57	0.40	
*	5	長頭	片刃	彎開	(9.9)	3.3	(0.80)	0.30	(16.8)	0.53	0.35	
*	6	長頭	片刃	彎開	(15.8)	3.3	1.00	0.30	9.4	0.65	0.37	(3.1) 0.46
*	7	長頭	片刃		(15.1)	(1.1)	(1.00)	0.30	(9.1)	0.50	0.35	(2.9) 0.50
*	8	長頭	片刃		(8.0)	(2.8)	0.91	0.30	(8.2)	0.50	0.30	
*	9	長頭	片刃		(9.3)	(2.7)	0.93	0.30	(6.6)	0.51	0.30	
*	10	長頭	片刃	彎開	(9.2)	(2.5)	(0.90)	0.31	(6.7)	0.50	0.34	
*	11	長頭	片刃	斜開	(15.0)	(2.3)	0.86	0.28	8.1	0.50	0.40	(4.6) 0.40
*	12	長頭	片刃	彎開	(15.4)	(1.4)	0.70	0.20	6.3	0.53	0.25	5.7 0.40
*	13	長頭	片刃	斜開	(15.6)	(2.3)	1.00	0.30	(9.3)	0.51	0.32	(2.0) 0.45
189	14	長頭	片刃	彎開	(14.5)	5.0	0.95	0.30	9.2	0.51	0.35	(2.3) 0.47
*	15	長頭	片刃		(17.2)	(3.8)	(1.05)	0.37	(8.7)	0.65	0.40	0.25
*	16	長頭	片刃	斜開	(8.4)	3.4	1.00	0.30	(5.0)	0.60	0.30	
*	17	長頭	片刃		(14.4)	(3.6)	(1.05)	0.30	(8.3)	0.60	0.35	(2.3) 0.40
*	18	長頭	片刃		(17.9)	(3.8)	(1.05)	0.37	(8.2)	0.55	0.39	(5.9) 0.45
*	19	長頭	片刃	斜開	(15.9)	2.7	1.00	0.31	9.6	0.59	0.36	(1.6) 0.40
*	20	長頭	片刃	彎開	(14.3)	(2.6)	1.05	0.30	9.0	0.60	0.30	(2.7) 0.45
*	21	長頭			(9.0)				(7.7)	(0.60)	(1.3)	0.37
*	22	長頭	片刃	斜開	(11.2)	(1.5)	0.72	0.29	7.0	0.47	0.35	(2.9) 0.36
*	23	長頭	片刃	斜開	(12.1)	2.5	0.81	0.30	6.9	0.50	0.39	(2.7) 0.41
*	24	長頭	片刃	斜開	(13.4)	(1.9)	0.82	0.28	7.4	0.50	0.29	(4.1) 0.40
*	25	長頭	片刃	彎開	(14.5)	4.0	1.00	0.30	6.5	0.50	0.32	(4.0) 0.45
*	26	長頭	片刃	彎開	(16.8)	3.4	0.80	0.30	8.1	0.55	0.40	5.3 0.50
*	27	長頭	片刃	斜開	(12.7)	(0.9)	0.80	0.30	(7.9)	0.50	0.31	(3.9) 0.40
*	28	長頭	片刃		(9.5)	(1.8)	0.89	0.36	(7.7)	0.58	0.40	
*	29	長頭	片刃		(10.3)	3.3	0.98	0.28	(7.0)	0.50	0.34	
190	30	長頭	片刃	彎開	(16.5)	2.9	0.88	0.30	8.6	0.52	0.30	(4.8) 0.42
*	31	長頭	片刃		(14.6)	(3.5)	(1.00)	0.30	(9.1)	0.60	0.32	(2.0) 0.40
*	32	長頭	片刃		(15.2)	(2.6)	(0.99)	0.30	(9.3)	0.50	0.31	(3.4) 0.31
*	33	長頭	片刃	斜開	(15.9)	2.5	0.85	0.29	9.5	0.53	0.30	(3.9) 0.40
*	34	長頭	片刃		(4.7)	(2.5)	(0.79)	0.25	(2.2)	0.42	0.30	

第22表 7号墳第1主体部出土鐵鎌計測表

番号	番号	基準	開	全長	頭身幅		頭部		茎部		根部		備考	
					長さ	幅	厚さ	幅	厚さ	幅	厚さ	幅		
195	45	長頭	片刃	頭闊	3.2	1.00	0.30	8.5	0.62	0.39			尖端。頭皮卷残る	
+	46	長頭	片刃	頭闊	3.2	1.07	0.29	9.1	0.51	0.40			尖端残る	
+	47	長頭	片刃	頭闊	3.0	0.95	0.30	8.9	0.57	0.30			尖端。頭皮卷残る	
+	48	長頭	片刃	頭闊	3.1	1.01	0.30	9.2	0.65	0.40			尖端残る	
+	49	長頭	片刃	頭闊	3.1	1.02	0.30	8.3	0.55	0.36	2.6	0.23	0.23	
+	50	長頭	片刃	頭闊	3.2	0.95	0.31	8.2	0.60	0.32			尖端。頭皮卷残る	
+	51	長頭	片刃	頭闊	3.0	0.90	0.30	8.4	0.50	0.37	6.1	0.21	0.21	
+	52	長頭	片刃	頭闊	3.3	0.90	0.30	8.3	0.51	0.32			尖端残る	
+	53	長頭	片刃	頭闊	3.0	0.95	0.30	8.8	0.55				尖端残る	
+	54	長頭	片刃	頭闊	3.0	0.95	0.30	9.3	0.59	0.30	6.4	0.31	0.30	
+	55	長頭	片刃	頭闊	3.1	0.95	0.30	8.0	0.60	0.35			尖端残る	
196	56	長頭	片刃	頭闊	2.9	0.80	0.30	9.6	0.60	0.25			尖端。頭皮卷残る	
+	57	長頭	片刃	頭闊	3.0	0.99	0.30	9.6	0.56	0.36	-4.3	0.40	0.41	
+	58	長頭	片刃	頭闊	3.5	0.92	0.30	9.1	0.60	0.34			尖端残る	
+	59	長頭	片刃	頭闊	3.0	0.92	0.29	10.2	0.50	0.32	-5.5	0.31	0.25	
+	60	長頭	片刃	頭闊	3.6	0.94	0.30	9.6	0.50	0.30			尖端。頭皮卷残る	
+	61	長頭	片刃	頭闊	2.8	0.99	0.36	9.2	0.50	0.30			尖端。頭皮卷残る	
+	62	長頭	片刃	頭闊	2.7	0.80	0.30	9.2	0.50	0.18			尖端残る	
+	63	長頭	片刃	頭闊	3.0	0.90	0.30	8.7	0.60	0.33	-6.3	0.38	0.20	
+	64	長頭	片刃	頭闊	3.5	0.83	0.30	8.8	0.59	0.30	-5.9	0.32	0.28	
197	65	長頭	片刃	頭闊	3.0	0.90	0.30	8.9	0.55	0.28	6.2	0.30	0.19	
+	66	長頭	片刃	頭闊	3.2	0.89	0.30	8.2	0.60	0.39			尖端。頭皮卷残る	
+	67	長頭	片刃	頭闊	3.8	1.00	0.31	7.8	0.60	0.33			尖端。頭皮卷残る	
+	68	長頭	片刃	頭闊	2.9	0.99	0.30	9.5	0.56	0.40	-4.9			
+	69	長頭	片刃	頭闊	3.0	0.90	0.30	9.4	0.60	0.38	-4.7	0.38		
+	70	長頭	片刃	頭闊	2.7	0.90	0.30	9.7	0.53	0.28			尖端。頭皮卷残る	
+	71	長頭	片刃	頭闊	3.5	0.89	0.30	9.7	0.60	0.34			尖端残る	
+	72	長頭	片刃	頭闊	3.2	0.78	0.28	9.8	0.50	0.38			尖端。頭皮卷残る	
+	73	長頭	片刃	頭闊	3.1	0.95	0.30	9.2	0.61	0.40			尖端残る	
198	74	平頭	三角	逆刺	12.7	7.2	3.20	0.31	4.3	0.70	0.39	-4.6	0.39	0.20
+	75	平頭	三角	逆刺	13.0	7.4	3.40	0.30	4.0	0.72	0.30	-5.4	0.30	0.30
+	76	平頭	三角	逆刺	15.9	9.7	3.00	0.30	4.2	0.75	0.30	-5.1	0.28	0.30
+	77	平頭	三角	逆刺	15.4	7.8	3.80	0.25	6.2	0.70	0.31	-4.3	0.29	0.31
+	78	平頭	三角	逆刺	14.9	9.6	3.50	0.40	4.2	0.70	0.40	-4.8	0.25	0.28

第23表 7号墳第2主体部出土鐵鎌計測表

番号	番号	基準	開	全長	頭身幅		頭部		茎部		根部		備考	
					長さ	幅	厚さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
201	87	長頭	片刃	15.0	12.6	0.91	0.29	(8.3)	0.53	0.33	(3.9)	0.42	0.30	尖端本質残る
+	88	長頭	片刃	14.5	12.2	0.98	0.26	8.8	0.49	0.23	(3.5)	0.43	0.32	
+	89	長頭	片刃	16.5	13.2	1.04	0.32	8.2	0.55	0.30	(5.1)	0.41	0.30	
+	90	長頭	片刃	16.0	13.2	1.05	0.30	7.7	0.62	0.38	5.7	0.40	0.30	尖端。頭皮卷残る
+	91	長頭	片刃	14.6	13.0	0.94	0.30	9.0	0.58	0.30	(3.6)	0.41	0.25	尖端。頭皮卷残る
+	92	長頭	片刃	13.7	13.9	0.90	0.30	(8.3)	0.58	0.28	(3.0)	0.40	0.24	尖端。頭皮卷残る
+	93	長頭	片刃	15.0				(8.3)	0.49	0.29	(7.3)	0.40	0.30	尖端本質残る
+	94	長頭	片刃	16.0	13.1	1.00	0.35	(7.8)	0.52	0.40	5.1	0.39	0.21	尖端。頭皮卷残る
+	95	長頭	片刃	16.8	13.2	0.98	0.29	(8.1)	0.58	0.36	8.8	0.40	0.26	尖端本質残る
+	96	長頭	片刃	16.6	13.2	1.05	0.30	9.0	0.53	0.20	(3.8)	0.47	0.26	尖端。頭皮卷残る

第24表 鎌計測表

番号	番号	器種	遺物名	出土施設	全長	刃幅	刃部長	折刃長	折刃角度	折刃溝上挿法	厚さ	重量	類別
200	84	衝方頭	7号墳	第1主体部	14.4	3.2			90	理	0.4	73.25	
202	99	衝方頭	10号墳	埋葬施設	16.8	3.9	12.9	90		甲	0.3	67.62	武田山木質付着(棺材?)

第25表 鎌・鋸先計測表

番号	番号	器種	遺物名	出土施設	全長	刃幅	刃部長	折刃長	厚さ	重量	類別	
190	36	U字形刃先	1号墳	埋葬施設	(4.5)	15.7	7.7	6.3	2.2	0.4	119.86	表面に木質付着(棺材?)
191	39	U字形刃先	2号墳	埋葬施設	(3.0)	(15.1)	(5.6)	(4.4)		0.4	(151.74)	
199	85	U字形刃先	7号墳	第1主体部	16.8	14.4	6.0	4.4	1.5	0.4	163.05	

本節をまとめるにあたり、以下の方々にお世話になりました。文末ながら記して御札を申し上げます。

赤澤徳明、河合 忍、伊藤雅文、中屋克彦、信里芳紀、橋本達也

また、望月精司氏、樺田 誠氏、津田隆志氏、下濱貴子氏をはじめとする小松市教育委員会のみなさまには、鉄製品実測や報告書執筆の機会を与えていただきました。記して感謝申し上げます。

失礼ながら、文章中の敬称は省略させていただきました。

【参考文献】

- 青木豊昭 1986 「西谷山古墳群」『福井県史』資料編 13 考古 福井県
- 網谷克彦 1991 「躍動する若狭の王者たち—前方後円墳の時代—」 福井県立若狭歴史民俗資料館
- 池淵俊一 1993 「鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀剣類を中心として—」『古代文化研究』第 1 号 島根県古代文化センター
- 伊藤雅文 1988 「初期群集墳論再考」『櫻原考古学研究所論集』第八 吉川弘文館
- 伊藤雅文 1993 「北陸地方の古墳出土武器武具」「甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷」 埋蔵文化財研究会
- 伊藤雅文 1996 「鉄鎌」「武器・武具・馬具 I」石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会
- 伊藤雅文 2001 「東京国立博物館藏加賀市狐山古墳出土品」「補遺編」石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会
- 伊藤隆三 1992 「谷内 21 号墳」 小矢部市教育委員会
- 入江文敏 1986 「丸山塚古墳」『福井県史』資料編 13 考古 福井県
- 入江文敏 1986 「大谷古墳」『福井県史』資料編 13 考古 福井県
- 岡林孝作 1993 「後出古墳群—18 号墳—」 奈良県立櫻原考古学研究所
- 魚津知克 2000 「鉄製農工具副葬についての試論」「表象としての鉄器副葬」第 7 回鉄器文化研究集会 鉄器文化研究会
- 魚津知克 2003 「曲刀鎌と U 字形鍔鋸先—「農具の画期」の再検討—」「研究報告」第 11 集 帝京大学山梨文化財研究所
- 置田雅昭 1985 「古墳時代の木製刀把装具」「天理大学学報」第 145 輯 天理大学学術研究会
- 樺田 誠 1997 「八里向山遺跡群」「発掘された北陸の古墳報告会資料集」 まつおか古代フェスティバル実行委員会
- 樺田 誠 1999 「北陸における古墳時代中・後期の様相—南加賀地域における事例を中心として—」「渡来文化の受容と展開—5 世紀における政治的・社会的变化の具体相(2) ー」第 46 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会
- 櫛部正典 1998 「法土寺遺跡」「第 13 回発掘調査報告会資料」 福井県教育庁埋蔵文化財センター
- 楠 正勝ほか 1999 「農工具」石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会
- 川越哲志 1993 「弥生時代の鉄器文化」 雄山閣出版
- 菊池芳郎 1996 「前期古墳出土刀剣の系譜」「雪野山古墳の研究」考察篇 雪野山古墳発掘調査団
- 小林謙一 1974 「甲冑製作技術の変遷と工人の系統(上)」「考古学研究」第 20 卷第 4 号 考古学研究会
- 小林謙一 1974 「甲冑製作技術の変遷と工人の系統(下)」「考古学研究」第 21 卷第 2 号 考古学研究会
- 斎藤 優 1986 「二本松山古墳」『福井県史』資料編 13 考古 福井県
- 坂口英毅 2000 「古墳時代中期における甲冑副葬の意義—「表象」をキーワードとして—」「表象としての鉄器副葬」第 7 回鉄器文化研究集会 鉄器文化研究会
- 白崎一夫・白崎裕司 2003 「福井市河合寄安遺跡の調査」「鉄器研究の方向性を探る」第 9 回鉄器文化研究集会 鉄器文化研究会・大手前大学史学研究会
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鎌について」「櫻原考古学研究所論集」第八 吉川弘文館
- 高村幸江ほか 1988 「副葬品の組み合わせについて」「谷内 16 号古墳」 小矢部市教育委員会・小矢部市古墳 発掘調査団
- 滝沢 誠 1991 「鉄留短甲の編年」「考古学雑誌」第 76 卷第 3 号 日本考古学会
- 田中晋作 2003 「鉄製甲冑の変遷」「考古資料大観」7 鉄・金銅製品 小学館
- 田中晋作 2003 「古墳に副葬された武器の組成変化について」「日本考古学」第 15 号 日本考古学協会
- 伊達宗泰 1981 ほか 「新潟千塚古墳群」 奈良県立櫻原考古学研究所
- 都出北呂志 1967 「農具鉄器化の二つの画期」「考古学研究」第 13 卷第 3 号 考古学研究会
- 寺沢知子 1982 「初期群集墳の一様相」「考古学と古代史」 同志社大学考古学シリーズ刊行会

- 寺田良喜・三浦淑子ほか 1999 「野毛大塚古墳」 世田谷区教育委員会・野毛大塚古墳調査会
- 豊島直博 1999 「古墳時代における軍事組織の形成—由良川中流域を例に—」『国家形成期の考古学』
大阪大学考古学研究室 10周年記念論集 大阪大学考古学研究室
- 豊島直博 2000 「古墳時代中期の畿内における軍事組織の変革」『考古学雑誌』第 85 卷第 2 号 日本考古学会
- 豊中市教育委員会編 1990 「御獅子塚古墳」 豊中市教育委員会
- 中司照世 1986 「神奈備山古墳」『福井県史』資料編 13 考古 福井県
- 中司照世・山口充 1977 「付編向出山古墳群出土の副葬品」「立洞 2 号墳 山の上 1 号墳」
北陸自動車道関係遺跡調査報告書第 13 集 福井県教育委員会
- 中野和浩 2001 「島内地下式横穴墓」 宮崎県えびの市教育委員会
- 西井龍儀ほか 2002 「水見市史」 7 資料編五考古 水見市
- 橋本博文ほか 1998 「一新潟県南魚沼郡六日町一飯綱山 10 号墳発掘調査報告（1996 年度）」
「新潟大学考古学研究室調査研究報告」1 新潟大学人文学部
- 橋本澄夫・中屋克彦 1998 「石川県鹿島郡鹿西町雨の宮古墳群」「日本考古学年報」48 日本考古学協会
- 林 大智 1999 「石川県における農具の鉄器化と手工業生産の導入について」「農工具」石川県考古資料調査・集成事業報告
石川考古学研究会
- 古瀬清秀 1991 「農工具」「古墳時代の研究」3 古墳Ⅱ副葬品 雄山閣出版
- 古谷 級 1996 「古墳時代甲冑研究の方法と課題」『考古学雑誌』第 81 卷第 4 号 日本考古学会
- 松井和幸 1987 「日本古代の鉄製鍔先、鋸先について」『考古学雑誌』第 72 卷第 3 号 日本考古学会
- 松永博明・西藤清秀・吉村和昭 2003 「後出古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 61 冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 森下浩行 1991 「ベンショ塚古墳の調査」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書」平成 2 年度 奈良市教育委員会
- 柳澤一宏 1994 「鉄製農工具副葬からみた古墳の画期—宇陀地域の事例を中心として—」「橿原考古学研究所論集」第八
吉川弘文館
- 山内紀嗣ほか 1995 「布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書」 埋蔵文化財天理教調査団
- 山内紀嗣 1995 「古墳時代の木製刀剣装具について」「布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書」 埋蔵文化財天理教調査団
- 安村俊史・桑野一幸 1996 「高井田山古墳〔本文編〕」 柏原市教育委員会
- 吉岡康暢 1973 「柴垣古墳群」「羽咋市史」原始・古代編 羽咋市役所
- 吉岡康暢・河村好光ほか 1997 「加賀能美古墳群」 石川県寺井町・寺井町教育委員会
- 吉村和昭 1988 「短甲系譜試論—鉢留技法導入以後を中心として—」「考古學論叢」第 13 冊 奈良県立橿原考古学研究所

【第 207 図出典】

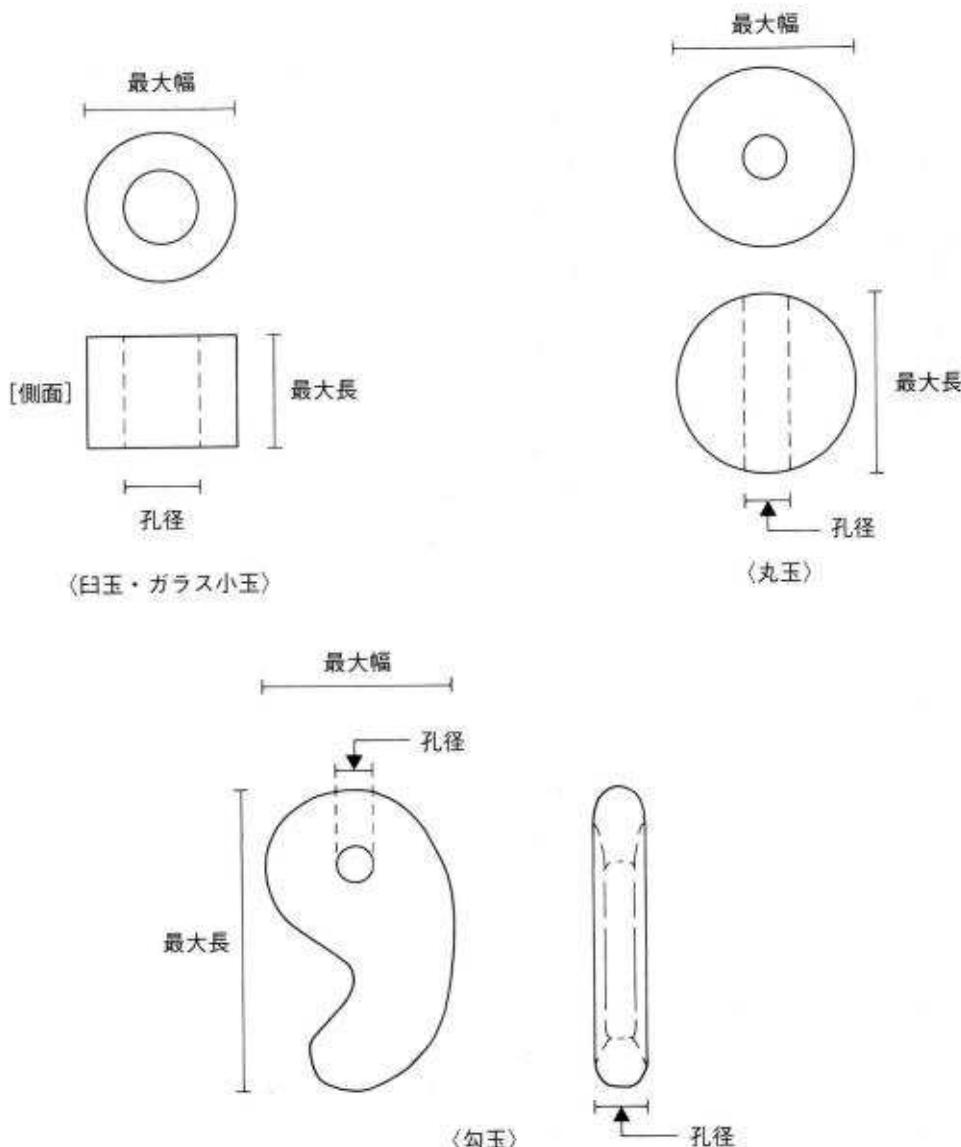
- 25 津田隆志 2003 「千代・能美遺跡」 石川県小松市教育委員会、p67. 第 47 図 131。
- 14 伊藤雅文ほか 1991 「畝田遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター、p155. 第 115 図 1。
- 10 藤田邦夫ほか 1987 「宿向山遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター、p18. 第 8 図 13。
- 43 斎藤 優・梶山林繼・武藤正典 1966 「王山・長泉寺山古墳群」 福井県教育委員会、p96. 第 48 図 9・10。
- 37 斎藤 優 1986 「足羽山古墳群」「福井県史」資料編 13 考古（図版編） 福井県、p367. 図版 361.2。
- 32 沼 弘・白崎卓・渡辺貴美 1990 「天神山古墳群」「福井市史」資料編 1 考古 p311. 図版 166.17。
- 18 河村好光・福島正実 1997 「和田山 5 号墳」「加賀能美古墳群」 石川県寺井町・寺井町教育委員会、
p145. 第 69 図 36, p151. 第 74 図 4・5。
- 11 西野秀和ほか 1991 「押水町冬野遺跡群」 石川県立埋蔵文化財センター、p232. 第 182 図 968。
- 17 西野秀和 1982 「辰口町下開発茶臼山古墳群」 石川県辰口町教育委員会、p85. 第 71 図 T1・2。
- 3 吉岡康暢 1976 「高塚古墳」「珠洲市史」第 1 卷 石川県珠洲市史役所、p652. 第 7 図。
- 12 折戸靖幸 1987 「高松町中沼 C 遺跡」 石川県高松町教育委員会、p74. 第 47 図 9。

第5節 玉類

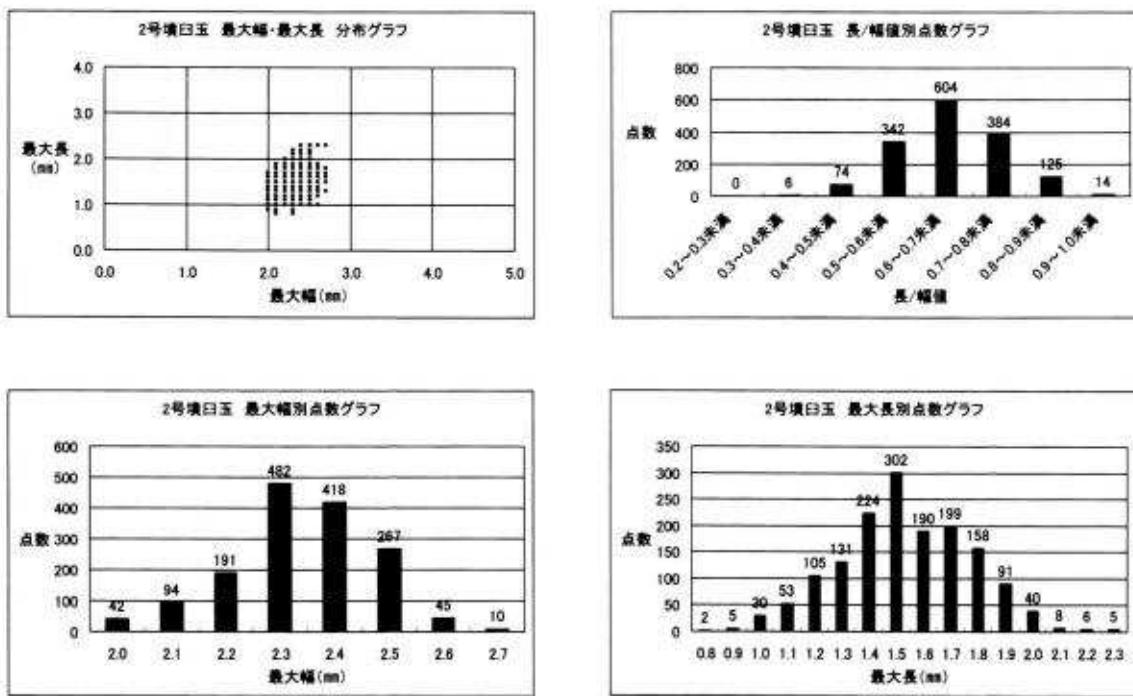
F遺跡では2号墳と10号墳の主体部から玉類が出土している。2号墳では、勾玉1点、丸玉3点、ガラス小玉17点、白玉約1550点が、10号墳では、勾玉1点、ガラス小玉1点、白玉約230点が確認された。ただし、この点数は、土壤洗浄等により採取された玉類の点数ではなく、調査時に肉眼によって採取された玉類の点数である。よって、実際に出土している玉類の点数、とくに白玉・ガラス小玉の出土点数は、上記の点数より多いものと予想される。

以下、本節では2号墳・10号墳から出土した玉類について報告していくこととするが、紙幅等の都合により、2号墳出土の白玉については図の掲載を行わなかった。また、10号墳出土の白玉についても、一部は図を掲載したが、残りのものについては図の掲載を行わなかった。しかし、今回の調査で採取された白玉のうち、完形・略完形のものを対象として、大きさ・重量等についての計測は行った。そこでまず、その白玉の計測結果について述べていくこととし、その後、図の掲載を行った玉類について見ていくこととする。

なお、本節における玉類の計測箇所等の名称については、下図（第209図）に示したとおりとする。



第209図 玉類の計測箇所等の名称



第210図 F遺跡 2号墳出土臼玉計測結果グラフ

2号墳・10号墳出土臼玉の計測結果

2号墳主体部からは約1550点、10号墳主体部からは約230点の臼玉が確認されており、これらはすべて緑色凝灰岩製のものである。今回はそれら臼玉のうち、完形・略完形のもの計1781点（2号墳1549点、10号墳232点）を対象に、最大幅・最大長・孔径・重量について計測を行ったのであるが、10号墳出土のはほとんどすべては2号墳出土のものに比べて大きいということが計測前の肉眼観察から明らかであった。そこで、その点を数値で示すこと、そして、2号墳・10号墳それぞれの臼玉に何らかの特徴を見出すことを目的として、今回の計測を行った。以下、2号墳出土臼玉、10号墳出土臼玉の順で計測結果を見ていく。

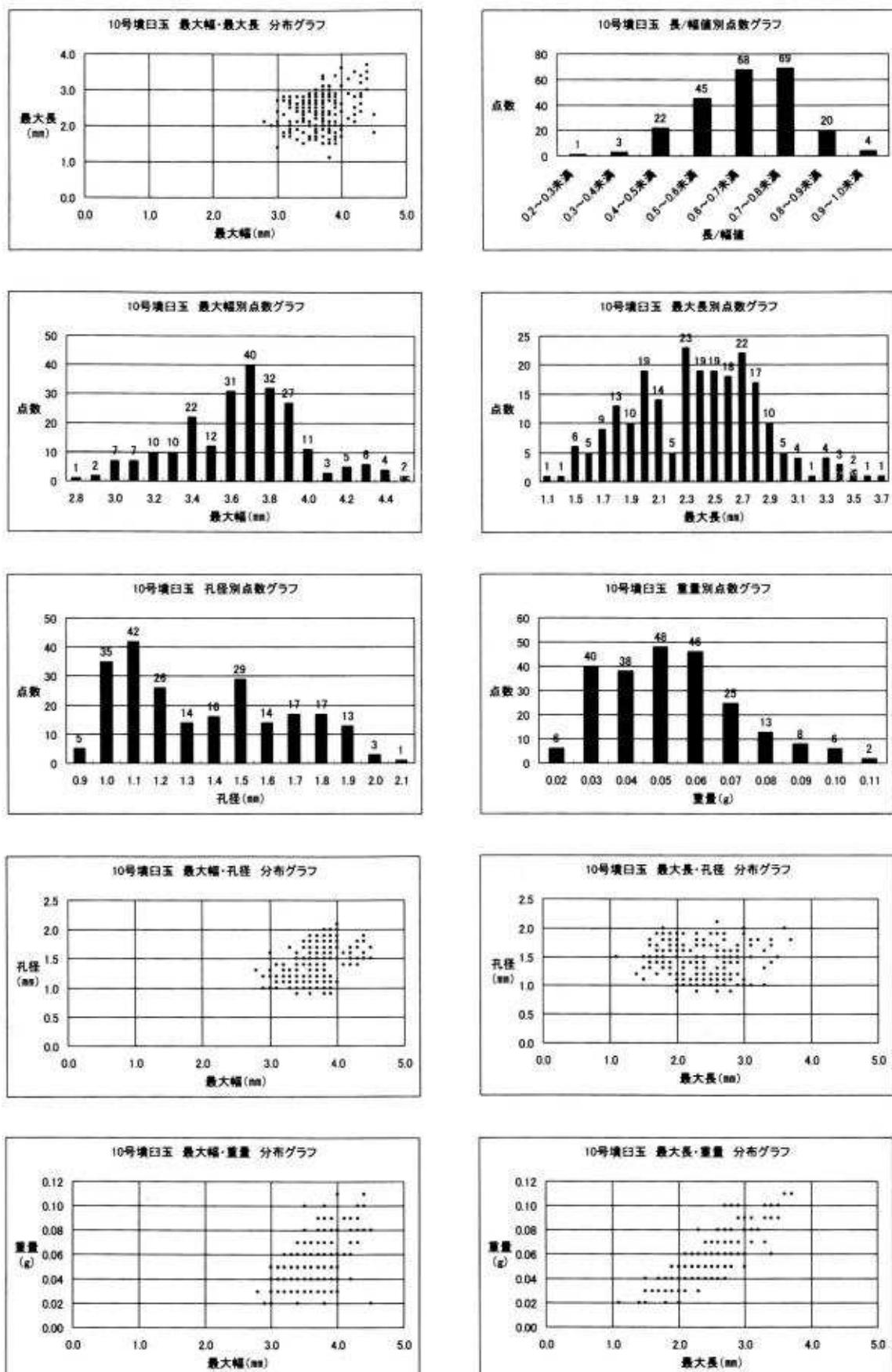
2号墳出土臼玉（第210図）

まず、2号墳出土臼玉の最大幅・最大長について見ると、第210図上段左の「最大幅・最大長分布グラフ」にあるように、最大幅が2.0～2.7mm、最大長が1.8～2.3mmの間に分布する。そして、その分布グラフに示されているように、最大幅・最大長の分布は概ね1箇所にまとまっている。大きなバラツキは見られない。

次に、最大幅別の臼玉の点数を見ると、2.3mmが482点（全体比31.1%）と最も多く、次いで2.4mm（418点・27.0%）、2.5mm（267点・17.2%）、2.2mm（191点・12.3%）とつづき、第210図下段左の「最大幅別点数グラフ」は2.3mmを頂点とした1つの山となっている。最大長別の点数についても、その点数グラフ（第210図下段右「最大長別点数グラフ」）は概ね1つの山となっており、1.5mmが302点（全体比19.5%）と最も多い。そして、最大幅別・最大長別のそれぞれで最も多い点数を示した最大幅2.3mm・最大長1.5mmという組み合わせの臼玉は、2号墳出土の臼玉のなかで最も点数が多い（101点・全体比6.5%）。また、その組み合わせの数値は「最大幅・最大長分布グラフ」においてドットが分布する箇所のほぼ中央に位置する。

以上の最大幅・最大長についてまとめると、分布グラフが概ね1箇所にまとまっている。最大幅・最大長に大きなバラツキが見られない。最大幅別・最大長別の各点数においては、点数グラフがある数値を頂点とした1つの山となっており、最大幅・最大長の違いで臼玉をいくつかのグループに分類できるような複数の山は見られない。総じて、最大幅・最大長については、比較的大きい・小さいものがあったとしても、それは全体から見ればごく少量であり、ほとんどのものは、ある程度の大きさにまとまっているといえよう。

なお、孔径について見ると、0.8mmが86点（全体比5.6%）、0.9mmが916点（59.1%）、1.0mmが547点（35.3%）で、ほとんどは0.9mmないしは1.0mmでまとまり、大きなバラツキは見られない。重量については、軽すぎて計測不能が27点（全体比1.7%）、0.01gが963点（62.2%）、0.02gが559点（36.1%）で、0.02g以内でまとまっている。これは、最大幅・最大長・孔径がある程度の大きさにまとまっているため、当然といえよう。



第211図 F遺跡10号埴出土臼玉計測結果グラフ

次に、白玉の形にバラツキがあるか否か、即ち、側面の形が正方形に近いものと、横に長い長方形のものとがあり、その形で白玉をいくつかのグループに分類できるか否かについて見ていく。これについては、最大幅に対する最大長の比率（最大長を最大幅で除した数値。1に近くなれば側面の形が正方形に近くなり、少なくなるに従い横長になっていく。以下「長／幅値」と表記。）によって見ていくが、その長／幅値別の白玉点数を示したもののが第210図上段右の「長／幅値別点数グラフ」である。この点数グラフを見ると、0.6~0.7未満が604点（全体比39.0%）と最も多く、次いで0.7~0.8未満（384点・24.8%）、0.5~0.6未満（342点・22.1%）とつづく。そして、点数グラフは0.6~0.7未満を頂点とする1つの山となっており、分類できるような複数の山は見られない。0.5未満・0.8以上のものも見られ、分類可能という感もあるが、それらは全体から見れば少量であり（0.5未満と0.8以上の合計点数は219点・全体比14.1%）、ほとんどのものは0.5~0.8未満にまとまっている。つまり、2号墳出土白玉の形については、あまりバラツキは見られないといえる。

以上、2号墳出土白玉の計測結果を見てきたが、これらは、大きさ・孔径・重量、さらに形において概ねまとまっているものといえよう。なお2号墳出土白玉の平均値は、最大幅2.34mm、最大長1.54mm、孔径0.93mm、重量0.013g、長／幅値0.66である。

10号墳出土白玉（第211図・第26表）

まず、最大幅・最大長について見ると、第211図1段目左の「最大幅・最大長分布グラフ」にあるように、2号墳の分布グラフに比べて右上の方にドットが分布している。冒頭で述べたように、10号墳の白玉のはほとんどすべてが2号墳のものに比べて大きいということが、この分布グラフからも窺える。最大幅は2.8~4.5mmの間、最大長は1.1~3.7mmの間に分布し、2号墳のものに比べて広い範囲に分布する。つまり、2号墳のものに比べて最大幅・最大長にバラツキが見られるのである。ただし、バラツキが見られるものの、この分布グラフからは最大幅・最大長による白玉の分類は難しい。

そこで、最大幅別・最大長別の白玉の点数について見てみる。最大幅別の白玉点数については、第211図2段目左に「最大幅別点数グラフ」を掲載してある。それを見ると、最大幅3.7mmで40点（全体比17.2%）と最も多いのであるが、点数グラフがその最大値を頂点とした1つの山になっていない。即ち、概ね3つの山に分けることができ、最大幅2.8~3.5mm、3.6~4.0mm、4.1~4.5mmの各グループに分類することができるといえよう。また、最大長についても、第211図2段目右の「最大長別点数グラフ」を概ね3つの山に分けることができ、最大長1.1~2.2mm、2.3~3.1mm、3.2~3.7mmの各グループに分類することができる。

次に、孔径について見ると、第211図3段目左の「孔径別点数グラフ」にあるように、0.9~2.1mmのものがあり、そのほとんどは2号墳のものに比べて大きく、またバラツキが見られる。そして、1.4mm以上についてはさらに分けることができるかも知れないが、概ね、0.9~1.3mm、1.4~2.1mmの2つのグループに分類することができると思われる。孔径と最大幅・最大長との関係については、第211図4段目左の「最大幅・孔径分布グラフ」、同じく右の「最大長・孔径分布グラフ」を見ていただきたい。まず、最大長との関係については、ほとんど傾向性というものが見られない。なお、重量との関係についても見てみたが、ほとんど傾向性が見られなかった。一方、最大幅との関係については傾向性が見られた。即ち、「最大幅・孔径分布グラフ」にあるように、孔径が0.9~1.3mmの場合は、最大幅が2.8~4.0mmに分布して、最大幅4.1mm以上は見られず、孔径が1.4~2.1mmの場合は、最大幅が3.0~4.5mmに分布して、最大幅4.1mm以上が見られるようになる。前述した孔径の2つグループのうち、1.4~2.1mmのグループにのみ、最大幅で分類した4.1~4.5mmのグループが見られるのである。

重量については、第211図3段目右の「重量別点数グラフ」にあるとおり、0.02~0.11gのものがあり、そのほとんどは2号墳のものに比べて重い。0.03~0.06gという比較的広い範囲で点数が多くなっており、ある1つの数値に点数が集中することではなく、重量にバラツキがあるといえよう。最大幅・最大長・孔径にバラツキがあるため、こうした結果になるのは当然ともいえよう。なお、重量と最大幅・最大長との関係については、第211図5段目に「最大幅・重量分布グラフ」「最大長・重量分布グラフ」を掲載してあるが、概ね、最大幅・最大長が大きくなれば、重量が重くなるという傾向が見られるのみとなっている。

さて、側面の形についてであるが、第211図1段目右に「長／幅値別点数グラフ」を掲載してある。2号墳の白玉と同様、0.5~0.8未満のものが多いのであるが、0.7~0.8未満の比率が最も高くなっている。2号墳の白玉に比べ、1に近いもの（側面の形が正方形に近いもの）が目立つようになっている。また、2号墳の白玉で最も

多かった0.6~0.7未満の比率も高く、さらに、1点だけではあるが、2号墳では見られなかった0.2~0.3未満のものも見られる。2号墳の白玉に比べれば、側面の形にバラツキが目立つといえよう。

以上の10号墳出土白玉の計測結果をまとめると、まず10号墳の白玉のほとんどは、2号墳のものに比べて、最大幅・最大長・孔径・重量のいずれの計測値も大きいということが見られた。そして、その最大幅・最大長・孔径・重量は2号墳のものに比べてバラツキがあり、側面の形についても、2号墳のものに比較してバラツキが目立ち、さらに側面の形がやや正方形に近いものの比率が目立つようになっていた。また、最大幅・最大長についてはそれぞれ3つのグループ、孔径については2つのグループに分類することができた。それをまとめて、各分類における白玉の点数を示すと、次のとおりとなる。

<最大幅> A: 2.8~3.5 mm (71点) B: 3.6~4.0 mm (141点) C: 4.1~4.5 mm (20点)

<最大長> 1: 1.1~2.2 mm (83点) 2: 2.3~3.1 mm (137点) 3: 3.2~3.7 mm (12点)

<孔 径> X: 0.9~1.3 mm (122点) Y: 1.4~2.1 mm (110点)

上記の各分類を組み合わせた白玉の点数については、下表（第26表）を見ていただきたい。なお、最大幅・最大長・孔径それぞれの計測値を組み合わせた分類も試みたが、その分類には至らなかった。また、10号墳出土白玉の平均値は、最大幅 3.66 mm、最大長 2.38 mm、孔径 1.36 mm、重量 0.053g、長／幅値 0.65 であった。

白玉の計測結果から

2号墳・10号墳出土白玉の計測結果を見てきたが、2号墳のものについては、比較的まとまりをもった計測値が見られた。一方、10号墳のものについては、2号墳のものに比べて計測値が大きく、また計測値に比較的バラツキが見られた。問題はこの違いが何に起因しているのかということである。2号墳・10号墳の時期については、土器・鉄製品から見てさほどの時期差はない。よって、時期差による違いということは考え難い。被葬者の性格、白玉の用途の違いなど、その他の要因によるものなのであろうか。それとも単なる偶然なのであろうか。この点については、力量不足で筆者なりの答えを出すには至っていないというのが実状である。ただ、2号墳主体部における白玉の出土状況（第154図参照）、10号墳主体部における白玉の出土状況（第184図参照）を見ると、2号墳主体部においては比較的広い範囲（概ね 80×50 cm の範囲）に白玉が分布しているのに対し、10号墳主体部においては比較的狭い範囲（概ね 24×26 cm の範囲）に白玉が分布している。このあたりに問題を解く鍵があるので知れない。厳しいご指摘・ご指導を賜れば幸いである。

第26表 10号墳出土白玉 最大幅・最大長・孔径分類別点数表

最大幅分類	最大長分類	孔径分類	幅・長・孔径 分類別点数	全体比 (%)
A	1	X	20	8.6
		Y	9	3.9
	2	X	35	15.1
		Y	7	3.0
	3	X	0	0
		Y	0	0
B	1	X	11	4.7
		Y	40	17.2
	2	X	54	23.3
		Y	31	13.4
	3	X	2	0.9
		Y	3	1.3
C	1	X	0	0
		Y	3	1.3
	2	X	0	0
		Y	10	4.3
	3	X	0	0
		Y	7	3.0

図掲載の玉類

以下、本報告で図を掲載した玉類について、2号墳出土玉類、10号墳出土玉類の順で見ていくこととする。なお、計測値については、第27表の観察表を参照していただきたい。

2号墳出土玉類（第212図）

勾玉（1）

メノウ製のものである。色調は非常に透明感のある褐色を呈する。なお、右側の図の面にある孔は、いわば2段掘りのようになっていて、段のところのみ透明感がなく濁っている。

丸玉（2~4）

2号墳主体部から3点確認された。いずれも緑色凝灰岩製のものである。3点とも、孔があいている上下の箇所には平坦な面があり、最大幅の箇所には緩やかながらも若干の角が見られる。いわば上下に長いソロバン玉というような形を呈する。

ガラス小玉（5~21）

2号墳主体部から17点を確認した。いずれも濃紺色に近い色を呈する。計測値については観察表に掲載してあるが、最大幅・最大長の計測値をグラフ化したものが、第212図左下に掲載した「最大幅・最大長分布グラフ」である。それを見ると、次のとおりに3つにグルーピングできる。

<A類> 最大幅：2.9~3.0mm 最大長：1.7~2.0mm

<B類> 最大幅：3.1~3.4mm 最大長：2.4~3.0mm

<C類> 最大幅：3.3mm 最大長：1.9mm

第212図に掲載した5~9がA類、10~20がB類、21がC類であり、分類別のガラス小玉の点数は、A類5点、B類11点、C類1点となる。これらガラス小玉については、最大幅・最大長のはかに、孔径・重量についても計測を行ったのであるが、分類別の孔径について見ると、A類が1.0~1.2mm、B類が1.0~1.3mm、C類が1.6mmである。A類とB類の孔径はほぼ同じであるが、C類の孔径のみが大きくなっている（C類は1点のみであるが）。重量については、A類が0.02ないしは0.03g、B類が0.04g、C類が0.02gとなっており、A類とC類がほぼ同じで、B類が比較的重くなるという結果であった。また、側面から見た形、即ち、最大幅に対する最大長の比率（最大長を最大幅で除した数値。観察表では「長／幅値」と表記）を分類別に見ると、A類が0.56~0.67未満、B類が0.75~0.94未満、C類が0.57~0.58未満となっており、A・C類とB類との間に違いが見られた。ちなみに、透明感について見ると、上記の分類別に透明感が異なっているという感じであり、A類はやや透明感が見られる、B類は不透明ないしは若干透明感が見られる、C類は非常に透明感が強いという印象を受けた。

参考までに、これらガラス小玉の「最大幅・最大長分布グラフ」と2号墳出土白玉の「最大長・最大幅分布グラフ」（第210図上段左）とを比較すると、ガラス小玉のドットは、2号墳出土白玉のドットに比べて、右上方に分布している。つまり、これらのガラス小玉は、2号墳出土白玉に比較すると大きいのである。

10号墳出土玉類（第213図）

勾玉（22）

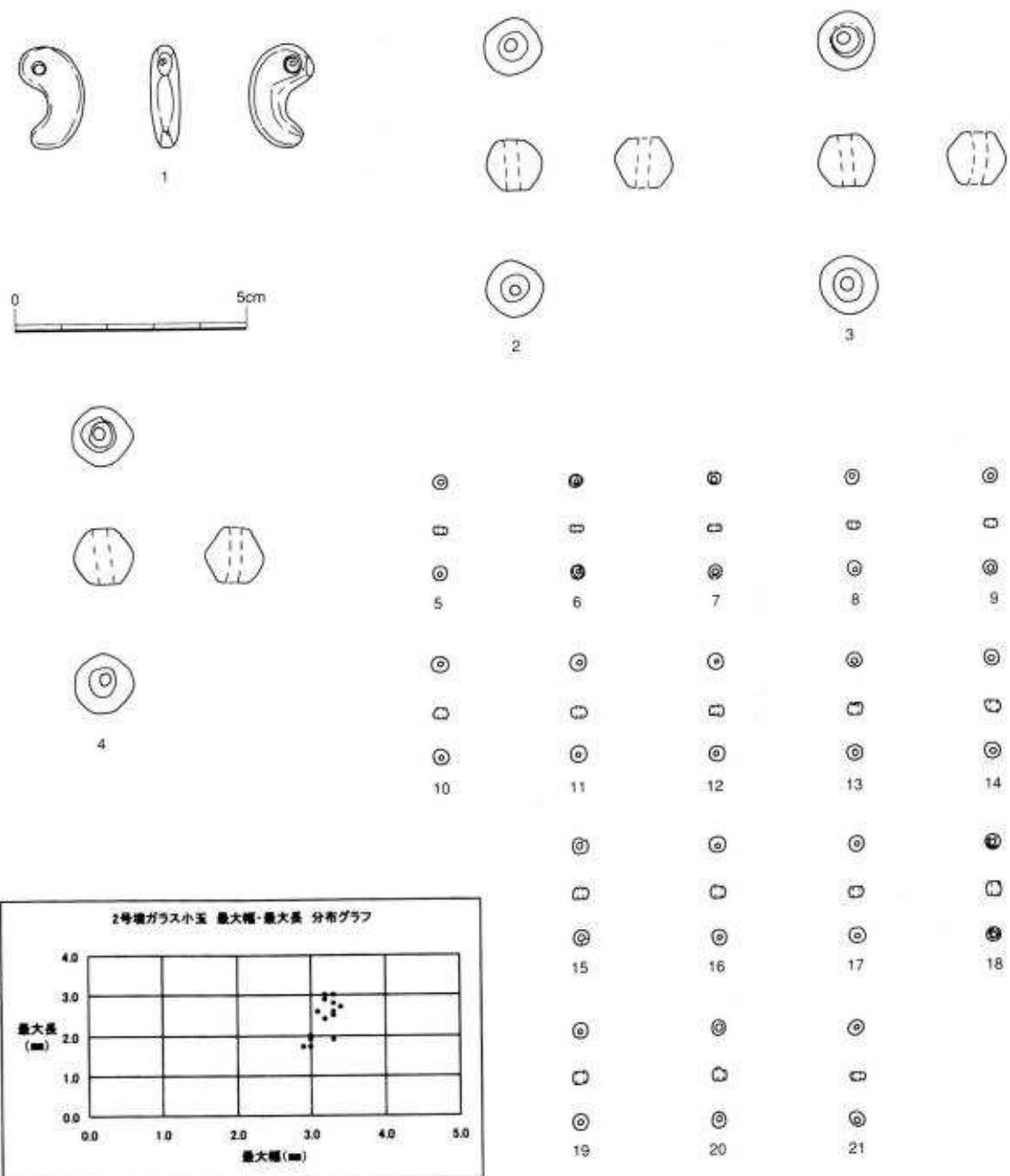
蛇紋岩製のものである。色調は、白色に近いのであるが、若干黄色味をおびた灰白色を呈する。

ガラス小玉（23）

色調はやや明るい濃緑色を呈し、やや透明感が見られる。孔があいた面の形は、1辺5mm程度の隅丸三角形状を呈して不整な形である。最大幅5.4mm、最大長3.7mm、孔径2.1mm、重量0.13gを測り、いずれの計測値も2号墳出土のガラス小玉に比べて非常に大きい（なお、10号墳出土白玉と比較すると、最大幅・重量が大きく、最大長・孔径については、10号墳出土白玉の最大値に匹敵する）。

臼玉（24~88）

10号墳主体部から約230点の白玉が確認されたが、紙幅等の都合により、そのうちの65点のみの図を掲載するに留めた。なお、10号墳出土の臼玉はすべて緑色凝灰岩製である（2号墳出土の臼玉もすべて緑色凝灰岩製である）。24~88のそれぞれが、前述の10号墳出土臼玉の計測結果における分類（最大幅・最大長・孔径の分類）のどれに当てはまるかについては、第27表にある観察表の備考欄に、その分類で用いたアルファベット・数字を示してあるので、それを参照していただきたい。



第212図 F遺跡 2号墳出土玉類 (S=2/3)

第27表 F遺跡出土玉類観察表

<2号墳 勾玉>

番号	最大幅 (mm)	最大長 (mm)	最大厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
1	14.0	22.1	6.0	3.5	2.25	メノウ製

<2号墳 丸玉>

番号	最大幅 (mm)	最大長 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
2	12.4	11.2	2.3	2.36	緑色凝灰岩製
3	12.6	11.2	2.6	2.58	緑色凝灰岩製
4	12.6	12.0	2.4	2.54	緑色凝灰岩製

22	23	24	25	26	27
28	29	30	31	32	
33	34	35	36	37	40
41	42	43	44	45	48
49	50	51	52	53	56
57	58	59	60	61	64
65	66	67	68	69	72
73	74	75	76	77	80
81	82	83	84	85	88

第213図 F遺跡10号墳出土玉類 (S=2/3)

<2号墳 ガラス小玉>

番号	最大幅 (mm)	最大長 (mm)	長／幅値	孔径 (mm)	重量 (g)	備 考
5	2.9	1.7	0.586	1.2	0.03	A類
6	3.0	1.7	0.567	1.1	0.02	A類
7	3.0	1.7	0.567	1.1	0.02	A類
8	3.0	1.9	0.633	1.2	0.03	A類
9	3.0	2.0	0.667	1.0	0.02	A類
10	3.2	2.4	0.750	1.2	0.04	B類
11	3.3	2.5	0.758	1.3	0.04	B類
12	3.1	2.6	0.839	1.0	0.04	B類
13	3.3	2.6	0.788	1.3	0.04	B類
14	3.4	2.7	0.794	1.3	0.04	B類
15	3.3	2.8	0.848	1.1	0.04	B類
16	3.3	2.8	0.848	1.2	0.04	B類
17	3.2	2.9	0.906	1.2	0.04	B類
18	3.2	3.0	0.938	1.3	0.04	B類
19	3.2	3.0	0.938	1.2	0.04	B類
20	3.3	3.0	0.909	1.1	0.04	B類
21	3.3	1.9	0.576	1.6	0.02	C類

<10号墳 勾玉>

番号	最大幅 (mm)	最大長 (mm)	最大厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備 考
22	15.5	23.9	6.8	2.0	2.98	蛇紋岩製

<10号墳 ガラス小玉>

番号	最大幅 (mm)	最大長 (mm)	長／幅値	孔径 (mm)	重量 (g)	備 考
23	5.4	3.7	0.685	2.1	0.13	

<10号墳 眄玉>

番号	最大幅 (mm)	最大長 (mm)	長／幅値	孔径 (mm)	重量 (g)	備 考
24	3.3	1.9	0.576	1.3	0.04	A1X類
25	3.4	2.1	0.618	1.1	0.04	A1X類
26	3.0	2.1	0.700	1.6	0.05	A1Y類
27	3.5	1.7	0.486	1.4	0.03	A1Y類
28	3.1	2.7	0.871	1.0	0.05	A2X類
29	3.2	2.6	0.813	1.3	0.05	A2X類
30	3.3	2.5	0.758	1.1	0.04	A2X類
31	3.4	2.3	0.676	0.9	0.04	A2X類
32	3.4	2.5	0.735	1.0	0.04	A2X類
33	3.4	2.6	0.765	1.1	0.07	A2X類
34	3.5	2.6	0.743	1.1	0.08	A2X類
35	3.5	2.9	0.829	1.0	0.10	A2X類
36	3.3	2.4	0.727	1.7	0.05	A2Y類
37	3.4	2.7	0.794	1.5	0.05	A2Y類
38	3.6	2.2	0.611	1.1	0.05	B1X類
39	3.7	2.0	0.541	1.1	0.05	B1X類
40	3.7	2.2	0.595	1.0	0.06	B1X類
41	3.8	2.0	0.526	0.9	0.03	B1X類
42	3.8	1.1	0.289	1.5	0.02	B1Y類
43	3.6	1.6	0.444	1.4	0.03	B1Y類
44	3.7	1.7	0.459	1.9	0.03	B1Y類
45	4.0	1.7	0.425	1.7	0.03	B1Y類
46	3.9	1.8	0.462	1.8	0.03	B1Y類
47	4.0	1.9	0.475	1.9	0.05	B1Y類
48	3.8	2.0	0.526	1.6	0.05	B1Y類
49	3.7	2.1	0.568	1.7	0.03	B1Y類
50	3.6	2.3	0.639	0.9	0.05	B2X類
51	3.8	2.3	0.605	1.1	0.05	B2X類
52	3.9	2.5	0.641	1.0	0.07	B2X類

番号	最大幅 (mm)	最大長 (mm)	長/幅値	孔径 (mm)	重量 (g)	備 考
53	3.6	2.6	0.722	1.3	0.06	B2X 類
54	3.8	2.7	0.711	1.0	0.10	B2X 類
55	3.6	2.8	0.778	1.1	0.07	B2X 類
56	3.8	2.8	0.737	1.2	0.07	B2X 類
57	3.7	2.9	0.784	1.2	0.06	B2X 類
58	3.6	3.0	0.833	1.0	0.06	B2X 類
59	3.6	2.4	0.667	1.4	0.05	B2Y 類
60	3.6	2.7	0.750	1.9	0.04	B2Y 類
61	3.7	3.1	0.838	1.8	0.07	B2Y 類
62	3.8	2.3	0.605	1.9	0.05	B2Y 類
63	3.8	3.0	0.789	2.0	0.05	B2Y 類
64	3.9	2.5	0.641	1.9	0.06	B2Y 類
65	3.9	2.9	0.744	1.6	0.07	B2Y 類
66	4.0	2.6	0.650	2.1	0.04	B2Y 類
67	4.0	3.1	0.775	1.7	0.08	B2Y 類
68	3.7	3.3	0.892	1.0	0.07	B3X 類
69	3.7	3.3	0.892	1.3	0.09	B3X 類
70	3.9	3.4	0.872	1.7	0.09	B3Y 類
71	4.0	3.6	0.900	2.0	0.11	B3Y 類
72	4.1	2.2	0.537	1.6	0.06	C1Y 類
73	4.2	2.1	0.500	1.4	0.04	C1Y 類
74	4.5	1.8	0.400	1.5	0.02	C1Y 類
75	4.2	2.5	0.595	1.7	0.07	C2Y 類
76	4.2	2.8	0.667	1.6	0.08	C2Y 類
77	4.3	2.4	0.558	1.8	0.07	C2Y 類
78	4.3	2.6	0.605	1.5	0.08	C2Y 類
79	4.3	2.8	0.651	1.5	0.08	C2Y 類
80	4.4	3.0	0.682	1.9	0.08	C2Y 類
81	4.5	2.3	0.511	1.7	0.08	C2Y 類
82	4.1	3.3	0.805	1.6	0.09	C3Y 類
83	4.2	3.5	0.833	1.5	0.09	C3Y 類
84	4.3	3.2	0.744	1.8	0.08	C3Y 類
85	4.3	3.4	0.791	1.4	0.10	C3Y 類
86	4.4	3.3	0.750	1.6	0.10	C3Y 類
87	4.4	3.5	0.795	1.5	0.10	C3Y 類
88	4.4	3.7	0.841	1.8	0.11	C3Y 類

以上で本章を終わることとするが、F 遺跡古墳群に関する筆者（津田）なりの評価については、紙幅の都合、筆者の力量不足などにより、ここでは触れることができなかった。調査担当者である樋田誠氏が、下記の参考文献のなかで、この F 遺跡古墳群（能美地域における甲冑類副葬の古墳群）の性格について触れているところがあるので、それを参照していただきたい。

本章を執筆するにあたり、いろいろとご協力していただいた方々には、この場を借りて感謝申し上げる。とくに、ご多忙のなか第4節「鉄製品」を担当していただいた林大智氏には心から感謝申し上げる。

また、私（津田）が担当した第1～3節・第5節において検討不足の点など多々あると思われる。7・8号墳の墳域の想定、林氏が鉄製品から想定したF 遺跡古墳群の変遷と9号墳北側裾部から出土した須恵器の時期との矛盾、2号墳出土の白玉と10号墳出土の白玉との違いの問題など、保留のままで終わっている点もある。厳しいご指摘・ご指導を賜れば幸いに存じる。

引用・参考文献

- 樋田 誠 1999 「北陸における古墳時代中・後期の様相」『渡来文化の受容と展開 発表要旨集』(P.320～321)
第46回埋蔵文化財研究集会実行委員会



写真1 F遺跡B尾根完掘全景（南方からの航空写真）



写真2 F遺跡A尾根全景（東方からの航空写真）



写真3 7号墳主体部検出状況（南東から：手前から第1主体部、第2主体部）

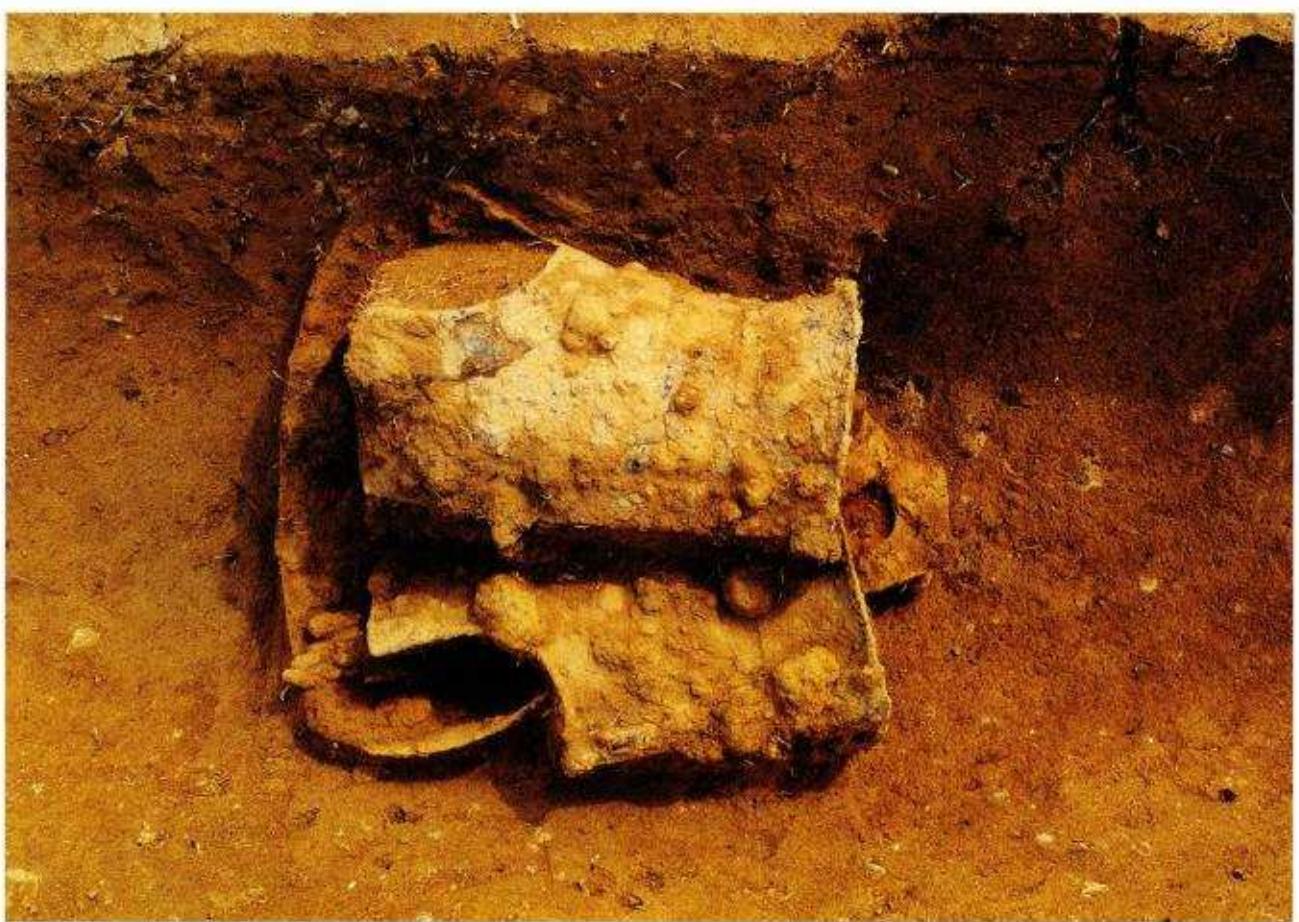


写真4 7号墳第1主体部内短甲検出状況（西から）

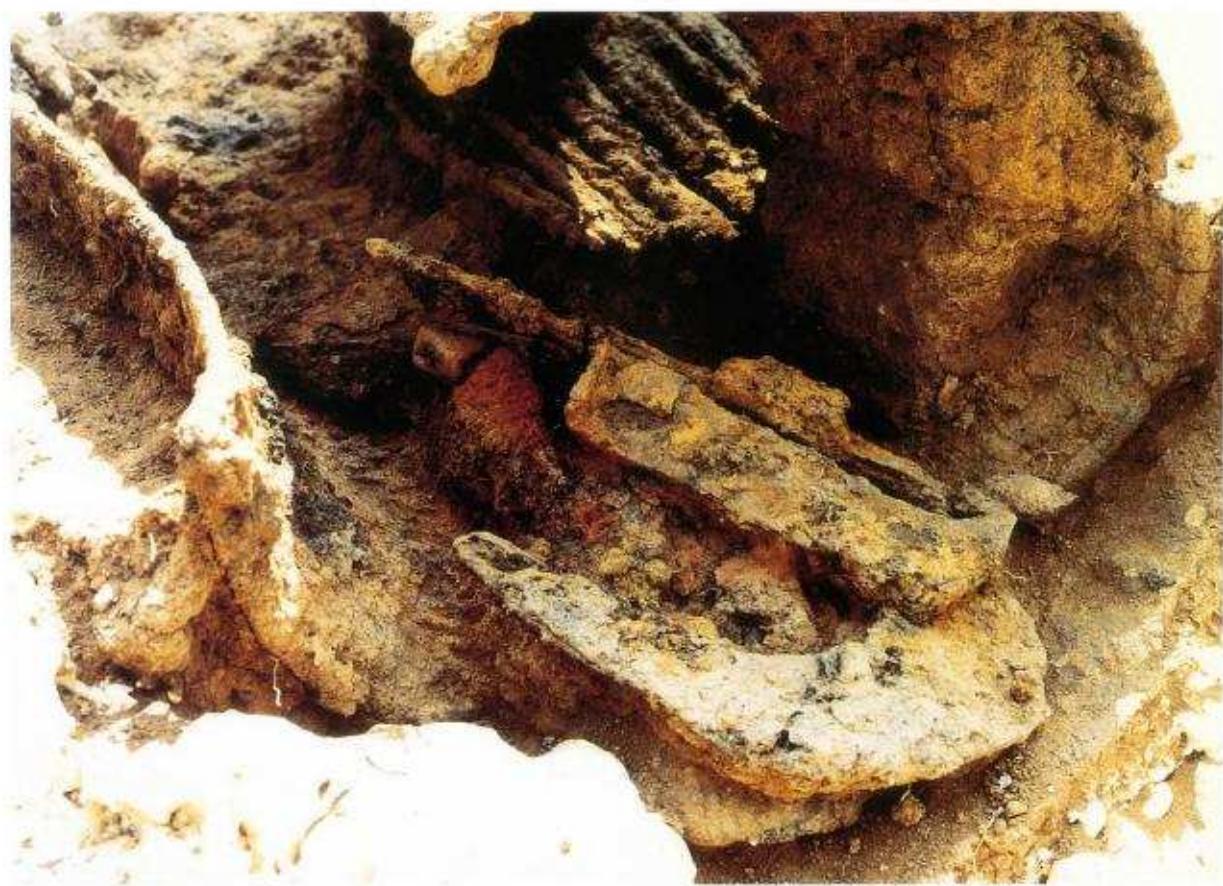


写真5 7号墳第1主体部出土短甲内遺物検出状況



写真6 7号墳出土鉄製品



写真7 2号墳出土土器



写真8 8号墳出土土器



写真9 2号墳出土玉類



写真10 10号墳出土玉類



写真 11 1号墳全景（西から）



写真 12 1号墳主体部（東から）



写真 13 2号墳全景（南東から）



写真 14 2号墳 北側周溝内 土器出土状況（南から）



写真 15 2号墳主体部（南西から）



写真 16 3号墳全景（東から）



写真 17 3号墳主体部（北から）



写真 18 4号墳全景（東から）



写真 19 4号墳主体部（東から）



写真 20 5号墳全景（北から）



写真 21 5号墳主体部（西から）



写真 22 7号墳全景（北から 手前が7号墳・奥が8号墳）



写真 23 7号墳第1（左）・第2（右）主体部（北から）

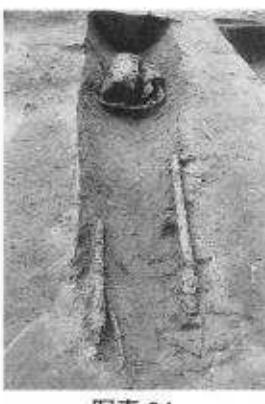


写真 24
7号墳第1主体部



写真 25
7号墳第2主体部



写真 26 8号墳全景（南から）



写真 27 8号墳 北側裾部 須恵器甕・ハソウ出土状況



写真 28 8号墳 北側裾部 須恵器壺出土状況（北から）

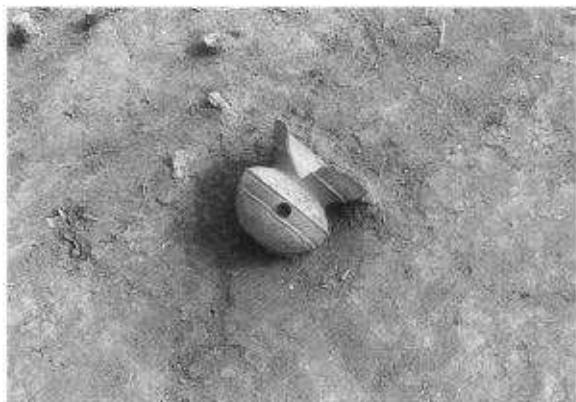


写真 29 8号墳 北側裾部 須恵器ハソウ出土状況



写真 30 8号墳 北側裾部 土師器出土状況（北から）



写真 31 8号墳 北側裾部 土師器出土状況（東から）



写真 32 9号墳全景（北から）



写真 33 9号墳 北側裾部 須恵器壺出土状況（東から）



写真 34 10号墳全景（南から）



写真 35 10号墳主体部（南から）



写真 36 2号墳土師器碗(185図8)



写真 37 2号墳須恵器蓋(185図10)



写真 38 2号墳須恵器蓋(185図11)



写真 39 2号墳須恵器坏(185図12)



写真 40 2号墳須恵器坏(185図13)



写真 41 8号墳土師器碗(187図19)



写真 42 8号墳土師器碗(187図20)



写真 43 8号墳土師器碗(187図21)



写真 44 9号墳須恵器坏(187図25)



写真 45 8号墳土師器甕(187図22)



写真 47 8号墳須恵器甕(187図24)



写真 46 8号墳須恵器ハソウ(187図23)

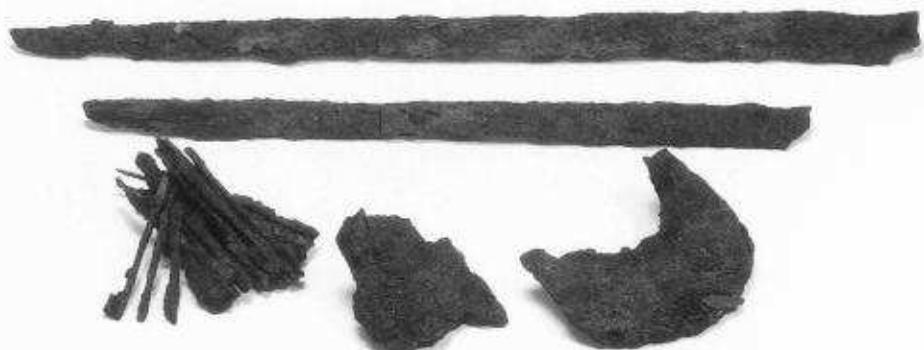


写真 48 1号墳出土鉄製品



写真 49 2号墳出土鉄製品



写真 50 5号墳出土鉄製品



写真 51 10号墳出土鉄剣



写真 52 1号墳出土鉄鋤・鋤先



写真 53 11号墳出土鉄斧



写真 54 10号墳出土鉄鋤



写真 55 10号墳出土鉄斧